

第三部 有島武郎の童話の特徴

—— ユング心理学の立場からみる ——

ここで、ユング心理学の立場からみた有島童話の特徴を整理しておこう。結局次の二点である。

第一特徴Ⅱ「影の発散」という創作動機上の共通点がある。

第二特徴Ⅱ太陽神話類型^{タイプ}に属している。

第一特徴である「影の発散」のその影を、生活童話六編の中から指摘すると次の点である。

1 「葡萄」泥捧の罪意識

2 「兄妹」エゴイズム

3 「碁石」死の恐怖

4 「火事」命の恩犬ボチへの負目

5 「帽子」大切なものへの心配

6 「片輪者」有産階級有島に搾取の罪意識

以上の六編は蓄積されたリビドーの放射、影の発散として創作された作品であると見做せるのである。

第二特徴である「太陽神話類型に属している」ことを有島童話全八編について説明するならば次のように要約でき
る。

1 「葡萄」へ明日は、どんなことがあつても學校に來なければいけませんよと先生。行くか否かその夜、悩む。翌朝、
ジムが飛んで来て握手。葡萄は愛の象徴。

2 「兄妹」溺死しそうな妹、若者に助けられる。

3 「碁石」死ぬほど苦しむが、夜中にお通じがあつたので、翌朝は元氣。

4 「火事」ポチは火傷で夜中に苦しむが、朝には「蘇生の感じにまで救はれてゐる」(坂本浩、角川)。

5 「帽子」夜中に「大變にうなされ」るが、朝になり夢でよかった。

6 「片輪者」夜中に山に登って、朝には守本尊を町に戻すと、片輪者が癒ってしまふ。

7 「眞夏の夢」(翻訳)海岸の高い崖の間にあって地理的にも暗い處に住む母と娘。へ村に行つて太陽が見たいといふ欲求にかりたてられ、苦難を祈りで克服して「日の村」に近づく。

8 「燕と王子」(翻案)雪ちらつく冬、泣く泣く燕はナイル河へ。翌年夏、ライン河に再来すると、王子は寺の鐘になつて澄んだ音を響かせ悪者追放。

9 「幸福な王子」(オスカー・ワイルド)寒い冬、燕は王子の足許で死ぬ。神の永遠の祝福が鉛の心臓と燕へ。

有島童話はすべて暗から明、夜の苦悩から朝の歓喜へと進転する太陽神話類型に属していることが分る。また有島が翻案したオスカー・ワイルドの「幸福な王子」の例は、有島童話だけでなくすべての童話が太陽神話類型に属するのではないかとの推測を可能ならしめるのである。以上の論述がユング心理学の立場からみて有島童話の特徴を整理したものである。

1 「一房の葡萄」

2 「溺れかけた兄妹」

3 「碁石を呑んだ八つちゃん」

4 「火事とポチ」

5 「僕の帽子のお話」

- 6 「片輪者」
- 7 「眞夏の夢」(J・A・ストリントベルヒ)
- 8 「燕へ田子」

The Characteristics of Takeo Arishima's Juvenile Stories

—From the viewpoint of Jung's Psychology

If I sum up the characteristics of Arishima's Juvenile Stories from the viewpoint of Jung's psychology, they are as follows.

1. They have a creative motive "Shadow Diffusion" in common.
2. They belong to the category of "Solar Myths."

Let me give some examples of the first characteristic "Shadow Diffusion" from the six juvenile stories from life.

1. "Grapes" —the thief's guilty conscience
2. "Brother and Sister" —Egoism
3. "Go Pieces" —Fear of Death
4. "A Fire" —Indebtedness to the dog which saved a man's life
5. "The Cap" —Anxiety for something precious
6. "The Disabled person" —Guilty Conscience of Exploitation on the part of Arishima in the

Bourgeoise

These six works can be regarded as written in the form of shadow diffusion, diffusion of libido.

Of the eight juvenile stories by Arishima, it can be summed up as follows that the second characteristic is related to the category of Solar Myths.

1. "Grapes" —— 'You have to come to school by any means tomorrow,' says the teacher. *That night it ails him. The next morning* Jim hurries up to him and *shakes hands*. Grapes are the symbol of love.
2. "Brother and Sister" —— The sister is *rescued* from *drowning* by a Young man.
3. "Go Pieces" —— He withes in *agony*, but *the next morning* he *recovers* after having a motion at *midnight*.
4. "A Fire" —— *At midnight* Pochi is in great *pain* because of a burn, but *in the morning*, if I quote by Hiroshi Sakamoto the words (Kadokawa Books), he is *saved* well enough to be restored to life again.
5. "The Cap" —— *At midnight* he has a nightmare, but *in the morning* he feels *relieved* to find it a dream.
6. "The Disabled person" —— *At midnight* people of Toolon climbed up the mountain and *in the morning* the disabled person gets well as they return the guardian deity to the town.
7. "A Dream in Midsummer" (Translation) —— The mother and her daughter who live between

the dark cliffs near the seashore out of their desire to go to the village and see the sun, overcome hardships by giving their prayer and approach the village of the sun.

8. "The Swallow and the prince" (Adapted) —On a *snowy winter* day the swallow flies to the Nile *in tears*. *Next summer* when it revisits the Rhine, the prince, who has turned into a bell, tolls *clearly and beautifully* and expels the rogues.

9. "The Happy Prince" (by Oscar Wilde) —In cold winter, the swallow *dies* at the foot of the prince. *Eternal divine blessing* goes to the lead heart and the swallow.

It can easily be understood that all of Arishima's juvenile stories belong to the category of Solar Myths that develops from darkness into lightness, from agony at night into delight in the morning. What is more, "The Happy Prince" adapted by Arishima suggests a bare possibility that not only Arishima's but all juvenile stories belong to the genre of Solar Myths. This is the summary of Arishima's juvenile stories viewed from the point of Jung's Psychology.

1. "A Cluster of Grapes"
2. "Drowning Brother and Sister"
3. "Yatchan Who Swallowed Go Pieces"
4. "A Fire and Pochi"
5. "The Story of My Cap"
6. "The Disabled Person"

7. "Midsummer's Dream" by Johan August Strindberg
8. "The Swallow and the prince"

第四部

「片輪者」の原典

「片輪者」の原典という少々おおげさになるが、この童話の元となった話を、パウル・サバティエ著『アッシジの聖フランチェスコ』（中山昌樹譯、洛陽堂、大正四年）第三章「千二百九年前後の教會」を読んでゐる時に発見したのである。

有島は「片輪者」（自殺一年前の大正十一年一月、『良婦之友』）を発表する十九年前、明治三十六年一月四日、二十五歳の時、内村より借りしやつ「Life of St. Francis of Assisi」 by Paul Sabatier を英文で読んでゐる。へ肉躍り骨動く。我も Francis と共に emotion によりて震へぬ。……感激の涙思はず胸に逼る。（明治三十六年一月六日）といふわけで、三年後の明治三十九年十月二十一日、アッシジの聖フランチェスコの古跡訪問を実現した。（嘗て Sabatier の St. Francis 傳を讀みて、我は此聖者の最も基督に近き人なりしを思ひぬ。（明治三十九年十月二十一日））といふ感動は、十六年後の大正十一年頃においてさえ、心の奥にわずかながら生きていたからこそ「片輪者」創作の契機になり得たわけである。

さて第三章「千二百九年前後の教會」では、教會が墮落し異端がはびこる時代にあつて、インノセント三世によって放逐された「小さき貧しき人」アッシジのフランチェスコが、当時のキリスト教を救つたという注目すべき事実が論じられている。墮落したカトリック教界に流行していた事実を知るための物語には、聖物による奇蹟物語、迷信による呪符物語などがある。そしてこれらの物語は「無智な信心家」によって伝えられているのではなく、「當時の最も學識ある修道僧の一人によつて、我々に傳へられ」ているのである。「片輪者」の話も聖物による奇蹟物語の一つであるが、有島が創作の契機としたところの話は次のようなところである。

その時代には聖物は、呪符と少しも異なることがなかつた。それは只に何等信仰または敬虔の、特別な状態にゐない人々の上に、奇蹟を顯した許りでなく、その人物如何に關らず、人々の間に大なる力を示した。Tours の聖マル

ティンの遺骸が、丁抹の侵入を恐れて、ある遠い陰匿處へと、竊かに運び移されたことを、一編年史家が述べてゐる。再びそれを本國に持ち歸るやうになつたが、その時 Touraine に、おのれの疾病が却つて身の仕合せになり、乞食をして多大の金額を獲得してゐた、二人の癱疾者があつた。この聖物が持ち歸へられると云ふ報知を聞いて、彼等は非常に懼れた。聖マルティンは確かに彼等を癒して、彼等の生計の資本を奪ひ去るであらう。彼等の恐怖は方しく根據あるものであつた。彼等は逃亡を企てた。しかし跛足のために疾く走ることができず、まだトゥレーヌの國境を横切らない間に、この聖徒が到着して、彼等を癒したと云ふのである。(七四頁)

これだけの話に肉を付けて有島は「片輪者」を創作したのである。一編年史家が述べている登場人物や場所を、有島は次に示すような用語で置き替えている。

「Tours, Touraine」→「トゥロン」

「聖マルティンの遺骸」→「聖マルティンの木像」

「丁抹人」→「海賊」

「遠い陰匿處」→「五六里も離れた高い山の中」

「二人の癱疾者」→「盲人ジャン、跛者ピエール」

「原典」では「二人の癱疾者」は共に「跛足」(びっこ)であるが、有島は「盲目」(めくら)と「跛者」(ちんば)とし、二人に名前を付けている。そして「聖マルティンの尊像」が近づいて来る時、悪者同志が互いに助け合い、ピエールがジャンにおぶさり指圖しつつ逃げるというところは、有島の創作であり面白いところである。

「片輪者」創作動機については、発展途上にある当時の資本主義社会の精神的墮落(独占資本と労働者搾取)批判などを既に論じてあるが、有島の無意識層を推測すると次のような動機も考えられる。既に教会を脱会し背教者と見

倣されているとは云え、否、見倣されているからこそ、その反動としてまだ心にくすぶるキリスト教界批判（それまでの日本の教界や留学中のアメリカに対する）が、十九年前の感激の読書体験を回想することで「千二百九年前後の教會」墮落への批判に共鳴し、その共鳴が契機となって「片輪者」創作に進んで行った、という推測である。

明治三十六年一月六日、サバティエ著“Life of St. Francis of Assisi”を読んで感激した有島が奇蹟物語にヒントを得て最初に創作したのは戯曲「奇蹟の詛ひ」（「奇蹟の咀」）である。大正六年九月二十日の日記に「奇蹟の詛ひ」の原稿を東方時論社に送る」とある。五年後の大正十一年一月、戯曲のAをジャン、Bをピエール、甲を話者として童話に変えたのが「片輪者」である。

〔付記〕「片輪者」初め、本書で使われている用語には、今日では不適切なものがあるが、本文の引用に限りそのまま使用したことを御諒承いただきたい。

Ⅲ

その他の作品

「迷路」について

——有島武郎の棄教への一考察——

1

有島武郎の作品の中で、長篇小説「迷路」には今だに正当な評価がされていない。米国遊学時代の経験を（一九〇三年—一九〇六年〔明治三十六年—三十九年〕、二十五歳—二十八歳）後で回想し、日記などを素材にした自伝的小説である。序編「首途」（大正4・3『白樺』）、中編「迷路」（大正6・11『中央公論』）、後編「曉闇」（大正7・1『新小説』）の三部作を、大正七年六月、新潮社から有島武郎著作集第五輯として刊行された時に、その全部を「迷路」とまとめて標題にした。昭和四年四月、新潮社から有島武郎全集第一巻として刊行された時には、標題はまとめて「迷路」であるが二部に分けてある。「首途」を序編としてそのままにし、中編「迷路」と後編「曉闇」とを一緒に「迷路」とし一章から十九章に区分してある。本稿は昭和四年刊行の全集によっている。

この「迷路」を評してまず本多秋五は、「日本の普通の小説鑑賞眼からいえば、箸にも棒にもかからぬ駄作ということになり、ことに終りの三分の一は、逐字的に讀むにたえぬ上ずった悪文ということになりそうである。だが、観念小説家としての有島の特徴はこの一篇、とくにその末尾三分の一にもっとも明らかである。」（『白樺』派の文学、新潮社）と述べている。藤村の「新生」は告白小説であるが、「迷路」は主人公であるキリスト教信者の青年が姦通を犯した場合どうなるかという体験のない作者の観念小説でもある。次に山田昭夫は、「先に失敗作と斷ずる理由をいっ

てしまえば、P夫人の懷妊が青年Aを欺瞞する虚妄に過ぎなかったとする設定のにえ切らなさにある。あくまで懷妊を事實としなかったために、Aの苦惱は半ば滑稽な一人相撲になり」（『有島武郎』明治書院）といっている。「P夫人の懷妊が虚妄であつても、それを青年が知らされず、に悩み抜くという設定の方が」作品に現実的な重みを加えていたかも知れない。事実、KからP夫人の懷妊など虚であると知らされたその時のAの態度と心理描写がいかにもうそうしく浅薄になっている。豊島与志雄は、総体的に場面構成が絵画的で彫刻的立体的でないこと、またP夫人の懷妊の誤信から覚めたAの心理、Kの死に対するAの心理について「如何にさういふことがわけもなく片附けられてゐることぞ！」（『新年の創作を評す』、大正7・2『文章世界』）と大いに不満を述べている。江口渙は、「有島武郎論」（大正7・4『文章世界』）で、主人公そのものがよく描けておらぬといひ、「作全体が余りにちぐはぐな余りに寄せ集めのもの」と酷評している。どうやらこの「迷路」は不評のようである。ただ有島と個人的にも親しかった石坂義平だけは、その「有島武郎論」（大正8・10『帝国文学』）で「『迷路』を讀んだ時私の愛着は絶頂に達しました」と絶賛している（豊島・江口・石坂の評は、山田昭夫『有島武郎』明治書院 98頁と99頁から引用）。その主人公Aに悩める青年有島を発見し正直な有島を思い、この作品に愛着しているのであらう。自伝小説に愛着を感じるのはその作者と個人的に親しい場合に多い。

さて「迷路」は、その話にも無理があり有島の他の作品と比較して必ずしも秀れた小説とはいえない。だが有島がどのようにして棄教に至ったかを知るには重要な作品である。棄教の原因を知るには明治三十一年から四十四年頃までの日記を読む必要がある。札幌時代、欧米遊學時代、結婚そして独立教会を去るに至るまでの過程が分る。更に『リビングストン傳』の序「ホキットマンに就いて」などをあわせて読むと棄教の原因が少しずつ分ってくる。

作全体としてその話の筋がちぐはぐでまとまっていないこの長篇「迷路」ではあるが、後述の便宜上、あら筋を説明して略記して置く。まず序論「首途」であるが、最初から日記なのか評論なのかそれとも小説なのか区別に苦しむ文章が続いている。

某年八月十四日、日本から米国へ留学して来ているキリスト教信者である青年Aはどうしてか祈れないでいる。Aは亡くなった祖母から信仰の大切なことを幼少の頃から説かれていた。人々もAを真面目なクリスチャンとして慕っていた。そのAが、一旦神を信じたと信じた者が何時の間にか神から離れて自分は本当に神を知ってはいなかったのだ、女を愛す代りに神を信じていたのだ、などと自分の不信仰の状態を嘆く。青年として肉情の誘惑に悩む。よし悪人であれ善人であれ僕は僕の生活、自分自身に帰ろうと思うようになる。ダンテの地獄篇を読んでいると、精神病院の副院長ラドラム博士から声を掛けられる。Aは夏期休暇中いやなことだが愛の実践として精神病院の看護人として働いていた。ラドラム博士から紹介された人は悞鬱症に犯されたスコット博士であった。P医大の助教授でもあった人だが開業医として働き過ぎて病気になるた。

八月十七日、P府で神学校を訪問した時知り合ったロバーツもこの病院に働いていた。彼からリリーという少女を紹介される。フレンド宗のホール氏の娘である。ホール氏は病院の理事である。リリーのような美しい童女に対して病的なほど執着心の強いAである。

八月二十三日、いつものように夕方博士と散歩する。Aは自分を聖者にするには余りに人間の欲情を持ち過ぎるし、凡人になるには余りに潔癖過ぎると思う。Aは自分を徹底的に分解し掘り下げてそこで個性を見失うか又は不壊の金剛土を発見するかやってみようと決心する。白か黒か明確にしないでおけない性質がAにはある。

八月二十四日。二十一日夜などは博士の妻と三人の娘の見舞を知らないほど発狂した。今夜は博士は神から呪われ

ていると悩んでいる。監督教会の若い牧師から予定説の説教を聞いたのが原因らしい。

八月二十九日、Aは人間の意志の自由を主張したが、博士は運命の決定されていることを強調しつつ健康は悪化していた。Aの弟は画家になると手紙をくれた。

八月三十一日、H大へ秋の新学期から行く。その用意のためP市の図書館に入る。入口で以前勉強を邪魔した男が乞食になっているのを見て恐るべき実有の世だと思う。ロバーツは患者と喧嘩して今日病院を去った。来年六月神学校卒業して副牧師になるらしい。

九月二日、昨夜、夢の中でもリリイを愛した。副院長ラドラム博士に暇乞いをし、ホール氏にも別れの挨拶に行った。リリイは快く手を伸べてくれた。夜中に日記を書いているとスコット博士が不気味に立っていた。「お前の生涯に意識していささかの悪でも犯してはならない」と別れの言葉を残した。Aは恐ろしくなる。

九月五日、列車は白樺の中を走っていた。P市で買った夕刊に精神病院の患者スコット博士自殺とある。そのシヨックでAは活を入れられたようになる。癲癲病院での二ヶ月は殉情的な夢の二ヶ月だった。

以上が序編「首途」の主要な期日の概略である。要するに夏休み二ヶ月間、精神病院で看護人として働いた結果、自分の精神状態も異常になり信仰もますますぐらついて来たということである。ここで某年とは日露戦争の前年という事になっている。次に中編と後編とが一緒になり一章から十九章に区分された「迷路」本編とでもいふべきところのあら筋を略記して置く。

二ヶ月間、狂癲病院でのアルバイトの後、九月、学生生活に戻った。しかしAの信仰は戻らなかった。性欲に悩む一青年になった。自由と若さだけがある二十四歳のAである。Aは四十男の弁護士Pと共同生活をする。Pは妻と別

居してる。マサチューセツ州では三年別居生活が継続すれば離婚できる規則があるからである。Pは毎週火曜日の晩に友達と称して婦人を古めかしい木造の平家につれて来る。二人はベッドでたわむれる。その声が廊下一つを隔てて童貞のAを悩ませる。

図書館でウェブの本を探していて、図書係の乙女フロラはM教授の令嬢であることを知った。社会主義者のKに呼ばれ外に出た。今夜ボストンで宴会があると誘われる。

聴衆の前にKは労働について演説する。しかしAはKの虚偽を見抜き憎む。Kは三十二歳。二人で酒を飲んだ後、Aはボストンの夜道を帰途につく。途中夜の女につきまとわれ不愉快な気持になる。

冬の日曜日の夕方、AはPの家から別居している夫人の家へ娘マーグレット（マァギィ）を送り返しに行く。童女マァギィを土、日とPの家に泊ることしか夫人は許さない。三ヶ月も前からである。そこで夫人と不倫な関係を結んでしまう。その行為には愛がなかった。その夜九時、Pの家である下宿に帰るとホイットマン会の会員であるボストンの老医師が来ていた。老人とPとは不倫な男女間の話をしていた。老人が帰った後、AはPに夫人と「友達以上の関係」であると告げる。「どっちから始めた事だ」とのPの言葉に対してAは「僕だ」と答える。未経験者なるAには夫人のかけた誘惑に気付かなかった。PにピストルをつきつけられAはPの家を去りKのいるB教授の家へ行く。五弗支払ってお願いをもらう。AはKから「馬鹿正直」と云われる。Pに二人の関係を告白したという手紙を夫人へ書いた。

日本の雑誌に発表した論文が日本の家族に恐慌を起し学費は絶たれた。自活のためAはM教授の研究室の助手になる。米国で自由にジャーナリズムに論文を発表した結果、出版業者さえAを警戒した。KはAに「若いサン・シモン」と諱名あだなをつけた。研究室で十三世紀独立市と寺院建築との関係をAは研究している。その側でM教授の令嬢でフロラの姉であるジュリアが彫刻物の縮写図を作っていた。正月休みにM教授、ジュリア、フロラと四人で馬車でコンコードに遊んだ。Aはジュリアから「フロラは心からあなたを愛しているのですよ」と云われる。そしてAの笑顔を常に

要求する。「世間では貴男を敬遠していますが家の父は貴男の素質を認めています」とジュリアから涙顔で云われてAは幸に思う。有頂天になってM教授の家から帰ってKに会うと、P夫人からの手紙を渡される。P夫人は懷妊した。歎業から絶望へ。その赤ん坊を殺す幻に悩まされた。

翌日、研究室でジュリアと堅い握手。同時に清純なおとなしいフロラをも愛していた。KとAとは疎みあうようになつた。Aは少女のようにやさしい心と野獸のような烈しい気分とが交錯した。ジュリアに対してもP夫人の胎の子供に対しても愛は育っていた。P夫人との件をジュリアには知られまいとした。

春になつた。気持の良い夕方、M教授と他の助手達は外に出た。Aはジュリアと二人になつた。彼女はフロラの日記をAに見せた。Aの名前がいたところにあつた。フロラを憐れと思うかと問われ「自分の愛を占領している人がいなければ、フロラが僕にしたよりも先にフロラに対して愛を感じていたでしょう」とAは答える。愛を占領している相手がジュリアのつもりで云つたのを、彼女は自分以外と解して立服する。「あなたは東洋の方です」と逃げられる。Aはジュリアにただ異邦人として弄ばれたと知る。ジュリアがフロラに会う先に、フロラに会っておきたいと図書館へ急ぐがそこにはもうフロラはいなかった。

その夜、酒に酔つてP夫人の床へ。夫人は最初AをWと間違えた。夫人から偽善者・野獸とののしられ追い出されそうになる。しかしAは父親となるべき権利を要求する。翌日の夕方、Kのところに戻る。昨日のジュリアやフロラのこと、赤ん坊のこと等をKに話す。KはP夫人の胎から子をおろせと云う。AはP夫人との愛のない肉交を憎んだが、P夫人を強迫した自分の心に戦慄し、自分のエゴイズムにあきれた。

Kと激しい口論をした翌日、ボストンから汽車で五十分のところにある大地主の家へ行く。そこで家事の仕事をすることになる。午前五時三十分から午後七時三十分まで働く。Aの少年のような快活な顔は皆に親しまれた。素朴な農家では万事心安かつた。夜の床ではジュリアよりフロラが思い出された。その処女の肉体を空想して眠れず、つい

に夜道を三町あまり先にある池まで歩く。そこでAはP夫人の胎の中にいる自分の血に執着する。誰にともなく祈りたいような淋しさがこみ上げて来る。

翌日の夜、ボストン行きの列車に乗る。車中の乗客は日露戦争の仲裁を試みようとしているルーズベルト大統領の話で持ち切っていた。車中の老人に日本人がいると近づかれて握手される。ペリ提督以来、米国と日本とは親友関係と政治狂の老人は云う。しかしAは国籍のない浮浪人のようにになっているのに気付き淋しい気持になる。Aには階級さえなく真裸な人間としてどこの人にも接する。Aの敵は老人の云うロシアでもなく、唯物主義のKという有産階級でもなく生活そのものである。馬鹿正直のAである。

AがP夫人の家に着いたのは九時過ぎていた。三十歳を少し越したP夫人には男を引きつける雰囲気があった。Aは夫人に生れる子供は自分のものだ主張する。その日は土曜日なのでマァギイもないが、Wという男がいた。十二時近く農場に着く頃、あのWという男の名を、P夫人の家へ酔って行った時夫人が呼んだ名であったと、Aは思い出した。「子供は私に返せ」と夫人に手紙を書く。

それから三日目に夫人の返信。夫人の胎児に対する愛がないのを読み取りその返信を焼き捨てる。どうしても生れ来る自分の子供を思い切れない。

小麦と燕麦かむすとの収穫時には労働者が沢山集まった。彼等は日露戦争のため故国を離れて米国に漂浪して来たポーランド人であった。Aは台所から畠仕事に変わって彼等と一緒に大地を踏んだ。楽しい仕事だったが体力的に弱いAは疲れた。彼等は戦争には無関心で本国の民謡を素朴な調子で合唱した。Aはその合唱を聞きながら涙を流した。Aは本来の若い自分に戻る気もした。そしてなんとなくKを思い出した。以前はKを憎んだりした。しかし今は素質のあるKが不運にも傷ついていることに同情しているAであった。

七月も終る頃、Aは労働のため脳貧血を起した。その時AはKの顔を見た。翌日、Kから看護婦に書かせたらしい

手紙が来た。肺患が悪化してポストンのC慈恵病院に入院していた。すぐAは市の郊外にある貧民窟に近いバラックのC病院へ行く。「大革命家も生産の掠奪者との通り妥協したよ」とKは皮肉に笑った。P夫人の産のことでKは「彼女は妊娠なんかしていなかった。どうも君を自分に引きつけて醜交を続けるための手だったんだ。それがWが出来て見ると君なんか要らなくなったんだ」と云った。Aは信じられなかった。

その次の日、Kは「フロラも一度来たよ。あれはいい女だ。人間は……」と謎めいたことを云いかけて他界した。思えばAに新しい刺戟を与えたのはKであった。P夫人の胎に宿ったはずの子はKの一言で迹形あとかたもなくなった。Aの心は解放された瞬間から生傷が出来た。Kを悲しむのか自分を憐むのか熱い涙が流れ出ようとした。

以上が「迷路」一章から十九章までのあら筋である。次に作品のモデルを日記や年譜などで調べ、更に背教を急がせた原因が作品のどのようなところに出ているかを調べそして何故「迷路」という題名が付けられたかを考察してみたい。

3

まず主人公のAであるが、瀬沼茂樹の調査によれば、Aは有島の友人阿部三四とのことで、Aは阿部と有島とがミックスされた人物であるらしい（『留学前後の有島武郎』下、昭和39・12『文学』。明治三十八年六月十一日、ポストンを去ってニューハンプシャー州のグリーンランドにある農家でE・S・ダニエルという人の下で阿部三四と共に働いている。一ヶ月程である。七月二十四日、両親宛書簡に「共に働きつゝありし友の一方ならず衰弱し、殊に厭はしき事、其家との間に起り候爲め」とある。友人の阿部三四の厭はしき事、誼が「迷路」のAとP夫人との情交に移し替えられてあるらしい（山田昭夫『有島武郎』明治書院）。しかしAの大部分を占めるのは有島武郎である。Aが有島であること

III その他の作品

は明治三十七年（一九〇四年）七月十九日から明治三十九年（一九〇六年）九月一日までの日記によっても理解される。そこには「迷路」の登場人物のモデルがおり、そして同じような事件が出ている。次に小説の人物・事件を日記・年譜等の調査の結果と対照してみよう。

瘋癲病院〈フランクフォード精神病院〉

P市〈ペンシルバニア州、費府、Philadelphia〉

H大〈ハヴァヴァフォード大学院、ハヴァフォード大〉

夏休み二カ月〈一九〇四年七月十九日から九月十六日まで、病院で働く、看護夫として〉
副院長ラドラム〈Dr. Lundum ランドム〉

スコット博士〈Dr. Scott スコット氏、醫師にして精勤の結果遂に精神異常を來せし人〉

ホール〈Mr. Hall ホール氏、此院の管理者〉

リリイ〈Lily リリイ、美しき乙女十五なる可し。ホール氏の娘〉

ロバーツ〈ロバート attendants の中に Mr. Roberts あり〉

M教授〈モリア博士〉

弁護士P〈Mr. Peabody を訪ふ。Lawyer なりと云ふ。其處に行きて働くことに定めたり。朝と夜とcookをなす事によりて室と食料とを獲る事を得可し。P氏素性の知れぬ女性を携へて来る。彼女は一泊せり。二少女を擁してボストンに住める彼の妻は果して之れを知れるや〉

Pの娘マーグレット〈土曜より日曜にかけて泊り掛けに來る二少女 Mary Helen 共にあり〉

K〈金子喜一、夜、金子君と共にボストンなる社會主義者の集會に到る〉

ボストンから汽車で五十分かかる大地主へボストンを去つてニューハンプシャー州グリーンランドなるダニエルなる人

十三世紀寺院建築へ中世建築史に深い研究心を起す

Pに夫人の件でビストルで脅かされるへ友人の戀愛事件に座し短銃で命を脅かされた

ボストン市図書館へワシントン市國會附屬圖書館へ

スコット博士は教会での予定説が原因で神から呪われていると悩むへ余に一人の弟あり、突然彼が自殺の悲報に接し時、神余を罰し給へる。教會へ到りぬ。歸途余が心中に何人にも言明し難き恐る可き思想來りぬ

日露戦争を米國で耳にしたAは国籍のない浮浪人のようにになっているへトルストイの日露戦争觀を讀む毎に、眞理此中にありと思はざる事なし。余は眞に基督教信者として單純明白なる立場に立ちつゝありや。余が非國家的思想はいよいよ堅く……

フロラ〈Fanny ファニー〉モア博士の娘ではないがフロラのモデルとしてはファニーが最も近い。一九〇六年九月一日、有島が米國を去る最後の時でさえへいといふファニー、此國での最後の日が來た。君は我が魂。人生の泉なのだ。君なしには、生きて居られないのだ。と日記にある。

以上が「迷路」の登場人物・事件と實際の人物・事件と思われるものとの關係である。実名で小説に登場しているか頭文字の音が記号で現われている人物もいる。P、M、Kなどである。スコット、ホール、リライ、ロバーツなどは実名である。ここでフロラのモデルと思われるのがファニーであるが少し無理もある。一九〇六年九月四日の日記に「ファニー、あの路と一緒にさ迷つた十一月の星月夜だった。あなたが握る強さが、私の手にぎゅつと感じて來た。」とある。小説の中で清純なる乙女フロラはAを慕いつつも恥じらいながら常に一定の距離にいる。フロラの姉ジュリ

ヤとは堅い握手もしている。しかし内攻的なフロラのモデルはファニーが最も近い。同年九月九日にへいといしファニー、純な心の優しい處女を見る度に、直ぐに君を想起する。とある。このように米国を離れても有島にはファニーが忘れられなかった。ファニーとフロラのムードが非常に似ている。ちょうど、有島とAのムードが似ているように。モデルや素材についてはこれまでにして次に有島が米国留学中に信仰から離れて行く過程を小説の中のAなる人物を通して考察してみたい。順序として「迷路」に入る前、つまり渡米以前の札幌農学校時代の日記を調べてみる。

祖母からの信仰の尊さを教えられ「一心」と云う思想を注入されていた有島は札幌に来て新渡戸稲造宅に下宿した。一八九六年、十八歳の時、彼はあこがれの北海道に來た。新渡戸教授のバイブル講義にも出席していたが、一八九七年五月三日以後、約六ヶ月間、熱心に中央寺に参禅していた。しかし「私はこゝから行けばといふ道の緒口さへ見出す事が出来なかつた」(『リビングストン傳』の序)のように自力の仏教に失望して行つた。その頃、クリスチャンで親友の森本厚吉に聖書の宗教を紹介された。森本自身もまた罪の問題に悩んでいた。有島は死に直面して神を知ろうとした。へ死に臨んで考へて果して神の存在を心の中に知る事を得ば之れを以て君に遺品となさん。若し神の存在を否定せば、嗚呼此世は暗黒なり。(一八九九年二月十五日) というように親友森本を救うにはまず自分が神を知らなくてはならないことである。その神を知る方法として自殺がある。そのために二月十九日、雪の定山溪に行く。森本も死ぬと云つて同行する。

二月二十日、へ我等が心の中にありし良心は漸次頭を擡げ來り、二人とも再び覺悟をし直し斷然身を神に捧げて今一度浮世の荒波を凄ぐ可く略々決したり。▽

二月二十一日へ我が身を殺して森本君の爲にせんと云ひし時は余の心は決してきたなきものには非らざりし。されども二人相死せんと決せし時はこよなく逸りたるきたなき心なりしなり。今は唯何をか云はん。我等は死すべからず。意を決して生きざる可からず。我が人生觀は我が死を決してより一大變化を受けたり。我は神と人と惡魔

との區別と權能を稍々判知せるが如き心地するなり。神は萬物に life を與ふるものなり。人は其 life を受けて之を廣むる可き天職あるものなり。惡魔は我が知る所にあらず。されども彼は確かに death を世に來たさんが爲めには善をも惡をも共になすものなり。否善と見ゆるものを爲して人を death に導かんとはするものなり。我等は確かに死に面して神を求めたり、神は未だ眞に我に來らずとするも少くとも既に惡魔を退けつゝあるものなり。我等は先づ世と相去り専心神を求め又我が良心を赤裸々となすに必要な知識を得るに努め、後初めて世と相接して何處までも世と相闘はざる可からず。我は先づ決心を示すがために我が家に斷然基督教信者となるのを許し乞ひ、又二三の友人、そは我が有益を受けたる之等の友人に心を決して絶交の書を送りぬ。嗚呼、今は心安し。今我が事ふるものは神、交はるものは森本君、敬するものは父母弟妹、減す可きものは惡魔なり。神よ、我は今全く我が身も心も君に委せ奉りぬ。』

二月二十三日へ彼の月を見よ、彼の水を見よ、嗚呼我に何をか教へんとはするぞ。彼等の中には力あり、確かに之れあり。我が眼月を見るの限り我が手水に觸るゝの限り我は斷じて世俗と相混ぜじ、月に力あり、水に力あり、而して月と水とは我が畢世の同伴なればなり。定山溪に我がなしたる決心は、此に再び確かめられたるが如き感なくんば非ず。嗚呼、神は仁惠なるかな。不肖我の如きに施すに又此の自然の絶美を見得るの眼を以てす……』

二月二十日から二十三日頃が有島の回心の日であつたようだ。バイブル講座にも出席してただけであつて惡魔の理解も求道者にしては深い。死に面して神を求めし事なき人は假令神を信ぜりと稱するも之れ惡魔が彼を great death に到らしめんとしつゝ little life を與へたるのみ。(二十一日)と云えるには可成り新約聖書は読んでいたことになる。一年前の一八九八年十二月二十九日には内村鑑三の『求安錄』を読んで「此の夜默想の時、初めて森本君の前に(否、人の前に)余が祈禱を發聲したり。」とキリスト教に感激しつつある。

二月二十日から二十三日頃、定山溪にて有島はキリスト教を信じたことになっている。しかし日記を何度調べてみ

ても聖靈の働によりイエスこそキリストであるという信仰告白がない。へ神は未だ眞に我に來らず……」と云っているように神と直接出会ったという決定的な神との人格的交りの信仰体験がない。キリスト教的環境の中に生話し、雪の定山溪で大自然の美に接して感激し、感情的に神がいるなどと思ひ込むことは青年にありそうなことである。

二月二十三日、へ歸鳥夕を告ぐる頃石山に到る。かくて又立ちて林藪の間を行くに空は藍を湛へて限りなく晴れたり。雪は滿地に布きて到る處に白し。樹間には十三夜の月淋しき許り靜かに差上りたり。遙かに耳を傾ければ谿底には水聲潺湲として不斷の天樂を弄びつゝ、罪なく見ゆる小禽の歌に和す。森本君と我と唯二人酔へるが如くなりて歩々次第に緩く無限の情に堪へず。Carlye が云ひけん “O Nature! or What is Nature? Ha! Why do I not name thee God? Art not thou the ‘Living Garment of God?’”

と云へる句など思ひ出されて此大觀に向うて言なきもの幾度もありき。今日の如く自然より慰安を受けたる事はあらず。自然は我を呪はず、我を怒らず。」

と云うように大自然の美に恍惚 (Ecstasy) となっている。このような体験を宗教的エクスタシーと云つてよい。大自然に接した場合だけでなく、立派な堂々たる教会堂の中で讚美歌などを耳にして、悩める青年が感激し、聖靈が働かずとも宗教的エクスタシーによって神を信ずるというような場合もある。共にエクスタシーである以上、時期が過ぎその場を離れることによって信仰のような感情は薄れてしまうものである。確固たる信仰体験がなく、このようななる感情であつたため教会から離れて行く過去の卒業信者が今日でも多いと聞く。残念ながら有島もこの例外ではなかつた。このことこそ有島が背教して悲運な道を歩んで行つた根本的で最大の原因となつてゐる。

有島がともあれ神を信じ、さてその次に洗礼を受けているか否かは現在の日記を調べている以上判明出来ない。日記の重要な所に三頁もの落丁があるからでもある。

三月一日、へ今朝見れば我が枕の上にも涕の跡はあり。あれは昨日までは人の上とのみ思ひしものを。(以下三頁落丁) 苦しさに夢はハタと覺める。嗚呼、何たる惡夢ぞ。我が父上も母君も最も安らかに今日の日を樂しみ給ふて睦ましくあり給ふに何とてかゝる夢に遇ひけん。とあるが、ここで今日の日は正式に受洗を受ける日と解せないでもない。ただ三頁も落丁してあるので惡夢がどういふ夢であつたか理解出来ない。三月三日、キリスト教徒になる許しを求めた家族への通信の返信が、へ父上は我が基督教に入るの學を一時に激せられたる妄動となし、母上は我が良心を失ひ不忠不孝の罪を犯して邪教に入りたるものとなし、祖母は何とも消息なく唯安否を問はれたる紙裏に一片の紙幣を惠與せられぬ。……失望悲痛極まる所を知らず、食を廢し室に籠り潜然として何が故に世に在るやを歎ぜらるゝと來ていることから考へて、惡夢は正式にキリスト者となるべく洗礼に對する家族の猛反対か祖母の死であるとも推察される。

ともあれ札幌獨立教会は有島にとって最初の思い出深い教会であり米國留學中も懷しんで、へ此頃頻りに札幌獨立教會の事が想起される。自分の造つた其歴史を繰返して涙を垂れて祈る事が度々である。彼女の健全ならん事は實に我が衷心の願である。故郷を持たぬ僕は實に彼處が故郷の氣がする。僕は彼處の子等の一人として其名簿の中に姓名を記さるゝ事を以て云ふ可からざる感謝を感じる。(一九〇三年、明治三十六年、二月二十三日)と記述している。ここで「其名簿」とは札幌獨立教会で洗礼を受けた會員名簿を指すのか、又はまだ受洗していない求道者名簿を指すのかはつきりしていない。

一八九九年、明治三十二年三月一日という定山溪で曲りなりにも神を信じた直後の日記に三頁もの落丁があつたり、米國留學中でも教会を懷しんで「其名簿」などと記述していることから推察して、あるいは受洗していたかも知れないと解する説もある(『国文学』昭39・8、学燈社・桑島昌一)。一方、佐古純一郎は、「少なくとも私の今日まで調査したところでは有島武郎は洗礼を受けていない」(佐古純一郎著作集7、春秋社)と記述している。

ともあれ翌年明治三十三年（一九〇〇年）には独立教会に入った。その六月十二日には「余は靜坐して内村氏の『基督信徒の慰め』中なる「愛するものゝ失せし時」なる一章を涙と共に默讀し」と日記に書いてあるように内村鑑三の影響を強く受けている。有島が二十三歳の頃である。当時、札幌独立教会では洗礼と聖餐の礼典を廃止していなかった。その後有島が独立教会に入って翌年、明治三十四年三月七日の総会において、礼典を廃止することが決定された。有島も礼典廃止の賛成者の一人であった。そのことは有島が『札幌獨立基督教會沿革』（一九〇八年）で論じてある。W・S・クラーク先生が播かれた一粒の辛子種^{からう}がやがてこの教会の大なる親石となりその信仰は札幌農学校の学生達によって受け継がれて来た。当時の札幌には礼拝堂を有する教会は英国監督教会（聖公会）と米国メソジスト教会の二つであった。この二派は互いに自己の教派の拡張を計画していたようである。礼拝堂をいかにして設立するかを相談する農学校の基督者達に米国メソジスト教会は直ちに金七百円を寄贈して来た。彼等はやがてこの金が裏面のあるものであることを知った。そして次の四ヶ条の理由の下に独立を宣言した。

- 一、同窓の學生其の宗教上の意見の殆ど相同じきに係らず分離するの不可なる事。
- 二、札幌の如き狹隘なる市街に二派の集會所を設けて競争するの愚策なる事。
- 三、嚴酷なる信仰箇條と煩雜なる禮拜儀式の束縛を厭ひたる事。
- 四、外國人の扶助を借らずして我國に福音を傳播するは我が國人の義務なりと知りたる事。

このような宣言をもって彼らは礼典を廃止した。内村鑑三も彼らの決議に賛成した。

さて内村鑑三のように確固たる信仰体験のあった者ならば、表面的儀式的な礼典など信仰の本質に無関係であるとする無教会主義で信仰生活を続けて行くことが出来るのかも知れない。しかし有島の場合、彼が神を信じたと思った時の日記を調べた結果、彼は神との直接な交りがなく自然の悠大さ美しさに恍惚となった時に神はいると思ひ込んだ。観念的に神はいると思ひ込んだ。佐古純一郎も云うように「彼の信仰告白には、人間の側からの主観的な裏づけはあ

ったが、聖霊の客観的な裏づけがなかった」ということになる。有島に確固たる信仰体験がなかったことを明らかにする文章の一例として彼らの独立教会が礼典を廃止した直後の明治三十四年三月十八日の日記に「一言にして云へば我は未だ全く神に我の持てる總てを捧ぐる能はざるなり。而して人は我を、一個の基督信者となし、一個の善人なりとす。是れ我が憂ひなり、悲しみなり。」とある。

日本のプロテスタント教会、特に米国の清教徒ピエリタジの流れを受けた教会には一般に道徳的にも潔癖であることを重要視する傾向がある。元來、日本人は宗教と道徳とを同一視する傾向があった。それで今日でもキリスト者を善人聖人視している。

親鸞は自分を悪人と認めた。使徒パウロは自分を罪人の頭と云った。どんなに全き人間になるためイエスの僕にふさわしい人間になるため精進努力を続けていても自分は悪人であるという大謙虚な心がキリスト者の心であろう。確固たる信仰体験のある者ならば、世の人たちがキリスト信者を善人視しようと全然気にならないはずである。信仰体験のない有島は神を信じた者は善人であらねばならないと思い込んでしまった。それでは憂ひとなり悲しみとなるのは当然であろう。

このような有島が独立教会の指導的立場にいて礼典廃止に賛成した。聖霊は礼典を通じても信ずる者には働く。教会の交わりを全うするために礼典の儀式がいかに大切であるかを当時の札幌独立教会の会員は知らなかったのである。ロシア正教会とカトリック教会を除き、明治時代の日本にはまだキリスト教会の伝統がなかった。独立教会の会員たちが宗派セクトについても悩んでいたが、今日やっと教会合同運動 (the Ecumenical Movement) が実現化している。日本でも最近、キリスト教信仰の土着化の問題が起っている。独立教会の会員たちが礼典を廃止したことによって彼らの多くの者が信仰を觀念として受け入れていたことが分る。

明治三十四年（一九〇一年）七月、有島は札幌農学校を卒業した。その十二月、一年志願兵として第一師団歩兵第三

連隊に入營している。除隊して在營回想録を日記に残している。その十一月十五日に

「虚榮心と利己心とに満ちたる太古以來の習慣によりて成立せる所謂國家なるものは、今も尙恐怖すべき權威の管を握れるなり。……國家に對する義務とは、此國家が命ずる所のものを爲すを云ふ。換言すれば「無」の命ずる所のものを爲すを云ふなり。我は「無」によりて命ぜられたる大日本帝國の名譽ある二等卒となりぬ。」と皮肉を云いながら國家を批判している。國家は無であるというのである。彼が晩年に無政府主義者となった要因の一つがこの軍隊生活にあったとも云える。

明治三十六年八月二十五日、彼は渡米した。へその事を決行する動機の最大な原因は、これまで私の身邊に絡まつてゐた凡ての情實から離れて、本當に自分自身の考へで自分をまとめたいといふ心願だつた。〔『リビングストン傳』の序〕

明治三十六年（一九〇三年）九月八日、米国上陸。最初の一年間はクエーカー宗の学校で学んだ。そしてへお前は本當の信仰上の變身を経験してはゐない。』という結論が出た。本當に自分自身の考へで自分をまとめてみたら自分は確固たる信仰體驗を経てなかつたという悲しい結果となつた。

学校が終ると自分をもつと孤独な処に連れ込む爲めに、夏の間或る癲癲病院の看護夫となつた。〔『リビングストン傳』の序〕

明治三十七年（一九〇四年）七月十九日の日記に「何が故に余は此の如き所に來れる？ 余自らさへ其深き意義を知らず。……神は余を茲に導き給へり。此頑なる僕を鞭ち給はんが爲めに、將此無智なる僕を教へ給はんが爲めに、將又此意志弱き僕を鍛ひ給はんが爲めに。」とある。

同年七月二十三日、フランクフォード精神病院から家庭宛の書簡に、
へ費府を去る約十九哩なるフランクフォード精神病院の三階であり升。アボンデールの田舎から費府に歸りまして

から、費府に歸ると市街の雜鬧は再び絶間なく私の神經を刺戟しまして、……何處か閑靜な處で讀書の暇があつて、併せて何か觀察の出来る處に行きたいものであると、ハーバーフォード大學の協議員の一人に相談をしました處が、紹介狀を此病院に宛てゝ書いて呉れました。……私がこんな處を撰びました理由は、米國に於ける慈善事業の一斑を觀察したい爲め、且つは己れよりも弱きものに幾分の助力を與へて餓ゑたる心を満足せしめんと、申さば利己的の考もあつたのであります。』とある。

信仰がぐらついている頃、以上のような理由で有島は精神病院で働くことになった。これまで渡米以前の有島の信仰について考察して来た。これから「迷路」に戻ることにしよう。

4

クエーカー宗の學校で一年間學んだ後で「信仰上の變身を経験してはあない」という結論を出した有島自身はそのことを「迷路」では「一旦神を信じた」と信じた者が、純一な自分の心の導きに從つて歩いて行く中に、何時の間にか神から離れて、自分は畢竟本當に神を知つてはゐなかつたのだと氣が附いた時ほど、孤獨を感じるものが外にあらうか。『「迷路」と云っている。確固たる信仰體驗のなかつたことを後で認めて「基督の言行が生み出された其の力の源に私も冥合するのでなければ畢竟凡ての事は徒事だ。此の自覺は私に取つては恐ろしい打撃だつた。』と『リビングストーン傳』の序で回想して記述している。

「迷路」のAなる人物つまり有島が米國遊学中（一九〇三年九月八日から一九〇六年九月一日まで）次の六つの事を體驗して考えをまとめた。まさに「自分自身の考へで自分をまとめた」のである。

一、私は宇宙の本體なる人格的の神と直接の交換をした事の絶無なのを知つた。

二、基督教の罪といふ觀念及び之に附隨する贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知つた。

三、未來觀に對して疑問を抱き出した。

四、日露戰爭によつて基督教國民の裏面を見せられた。(一から四までは『リビングストン傳』の序)

五、資本主義の矛盾から社會主義へ傾倒。

六、密かに藝術の道へ進むことを決意。

第一については雪の定山溪という自然の中で宗教的有頂天ユウテイテンを體驗したことを當時の日記で調べた通りである。へ第一は、私自身の經驗を容赦なく檢察した結果で理窟も何もない」と有島は云っている。確固たる信仰體驗がなかったことはもう決定した事実となった。これでは「僕は祈りたい。然し祈れない」(「迷路」)となるのは当然であらう。聖靈の働きによつて新しい永遠の生命が与えられていないことはキリスト者となつたことではない。聖書が強調する人格の神との直接の交わりがないとは祈りが出来ないことであり、神との對話によつて神の声を聞くことが出来ないことでもあらう。

へ總ては若い情熱の仕業しわざだつたのだ。僕は女を戀する代りに神を信じたのだ。(「迷路」)と云う有島はここで本来の自分に戻ることになる。基督者氣取りを止めて、へ惡人であれ善人であれ、僕は僕の生活を生きよう。先づ自分に歸らう。而して僕は悔悟した放蕩息子ほうたうしのやうに、幻だつた總ての榮華を後に見て、僕自身といふ見る影もないあばら家を唯一つの隠れ家と目指して歸つたのだ。(「迷路」)と云うように自分自身から出發しようと思えるようになる。この決意は「惜みなく愛は奪ふ」(一九二〇年)の中で「私は私のもの、私のたゞ一つのもの。私は私自身を何物にも代へ難く愛することから始めねばならない。……神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生めばえはじめた。その動亂の中を私はそろ／＼と自分の方へと歸つて行つた。」と云うように続いている。自分の思想を誠実に実行して生きる有島の正直な性格がこんなところにも出て來ている。とは云うものの

この生き方は自己中心の生き方でありその根底には虚無思想が潜んでいた。

この第一の点について久山康は広く現在の教会人に警告するかのように次のように述べている。「第一の点は、神から遠く離れ去っている近代人の嘆きを深く示していて、信仰に入ってから表面上の生活の変化が、結局その人の倫理的努力の結果で、超自然的な力による支配から生じたものでないという疑惑は、現代の私達の教会生活についても、一つの根本問題をなしているものだと思われす。」(『近代日本とキリスト教』創文社) この中で超自然的な力による支配から生じたものでないということは確固たる信仰体験がないということであり、そしてそのことは人格的な神と直接の対話をした事の絶無なることに帰着していることになる。

有島が米国に上陸したのは一九〇三年九月八日である。そして九月十四日の日記に既に信仰体験のなかったことを告白している。

へ凡てのものの進むに余獨り退く。凡てのものの既に神の懷に入れるに、余獨り尙 outer darkness にあり。嗚呼此孤獨の感を如何せんや。唯信仰。唯信仰。信ぜしめられたる信仰。忘るゝ事能はざる信仰。此の如き信仰の余が行爲の基礎を造る可き時は果して何時なる可きぞや。余の眞の信仰と思ひて堅く頼みたりしもの、須臾にして一片の感情に過ぎざりし事あり。一片の反抗心よりなりし事あり。單に不思議なる vanity なりし事あり。空中に畫きし樓閣なりし事あり。猿の如く所謂他人の眞似をなしたるに過ぎざりし事あり。心の深く響く眞底より我信ずと云ひ得んは何日なる可きぞ。奇怪なるは余が心狀なり。ゝ

自分の信仰が一片の感情に過ぎなかったということは、彼の信仰体験が神との直接の対話によるものではないという結果となっている。

第二の問題は第一である信仰体験のない者の抱く当然の結論である。法律的罪 (crime) のみ意識され原罪 (original

(註)の意義を理解出来ないことである。基督者として神第一に生きるのでなく自分第一に生きることつまり自己中心の生き方に既に原罪がある。人間は自分の意志で動く。同時に神の摂理の中で定められて生きている。物心のついた人間がこの世に生れることを親に依頼していたからではないことからも神の摂理の意義が少しは理解されよう。人間は単なる神のあやつり人形ではない。この点を理解出来なかった有島はへ人間に意志の自由が許されてゐない以上は罪の自覺に對する責任感も生じては來ない筈だ。責任感を持たせられる以上は、人間には神の力から全然獨立した働きがある筈だ。そんな事はあるべきではない。ないとすれば人間が所謂罪といはるべき行ひをした場合、その責任は……神になければならない。と云うようになる。キリストの十字架の意義を否定した者の言葉となっている。十字架の意義を否定することによって贖罪論が理解出来なくなる。神の愛による許しがなくなり怒りによる罰のみが意識されるようになる。そのような意識のある時、予定説は神の呪を強調する結果になりやすい。

「迷路」の主人公Aは精神病院で悒鬱症に犯されたスコット博士を看護した。スコット博士には悩みがあった。この悩みは事実であつて日記の文と「迷路」の文とはほとんど變つていない。スコット博士の言葉を有島の日記から聞いてみよう。

一九〇四年八月十七日、へ余に一人の弟あり、南方に農場を有し道程遠きが故に、互に相思ひながら遇はざる事既に二十三年に及びぬ。又此間彼は親切にも余が窮乏を救はんが爲めに金を送り越せし事あり。然るに約三ヶ月前彼の一友余に書を致して、彼の事業失敗し、彼は困難と戦ひつゝありと報じ來りぬ。余は此時適當の處置を彼の爲めになすべかりしなり。されども彼自身の書には左程までに事逼れる様子は報ぜられざりしが故に、余は其儘に打捨て置きぬ。而して一日突然彼が自殺の悲報に接せし時の余が驚駭と苦痛とを察し給へ。かくて後、神余を罰し給へるならん」とある。日記ではへ金を送り越せし事あり」とあるが「迷路」ではへ弟は親切にも豐作の秋には必ず私にその喜びを分けてよこした。弟は本當に心のまゝな勉強家だった。ととなっている。日記のへ彼の事業失敗を小説ではへT州一

帶は電害^{へうがい}の爲めに麥の收穫が皆無^{みな}だつた爲めに、非常な經濟界の恐慌が起つて、弟の關係してゐる銀行は破産の憂目^{うれめ}に遇ひ、弟は農場と銀行との整理に夜の眼も合はさず奔走をしてはゐるが、迎^{むか}ひも見込みはなさうだ、と云つてゐる。弟が不幸になつた時、その弟に親切にされていたくせに兄として何一つの慰めの言葉をも与えずに過ぎしてしまつたスコット博士は良心の呵責に耐えられなくなる。罪深い自分は神に罰せられまいかと不安がつゐる。この不安を決定的にしたのが教会へ出席したことであつた。弟の自殺以後を小説によると

「私はそれから神に呪はれた身であることを知るやうになつたのだ。あまりの苦悶に堪へかねて、或る日教會に出席して見る氣になつた。その教會は監督教會だつた。まだ年若な鋭い眼を持つた牧師は、カルヴィンを思はせるやうな妙に浸滲的な熱のこもつた低い聲で、諄々^{じゅん}と豫定説を説いた。而して歸りがけに一人で或る一本の櫻の樹の下まで來ると、Aよ、私はその樹の上から惡魔の囁く聲^{ささや}を確かに聞いたのだ。「貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた靈魂だぞ」。私はその瞬間から絶えず惡魔の聲に脅かされるやうになり、従つて正義の神の嚴存をしかと心の底に感ずるやうになつたのだ。神は愛だ。それが畏ろしい事なのだ。愛のみが義しいのだ。義しきが故に、世の最初^{いんぎ}から最終^{さいご}に亙つて据ゑられた運命の道を塵ほども扞^かげようとはし給はぬのだ。Aよ、お前は自分の力で運命を變へる事が出來ると思ふのか。」となつてゐる。

弟の自殺以後を、一九〇四年八月十七日の日記によると

「一日余は妻の留むるをも聞き入らずして教會に到りぬ。而して其歸途余が心中に何人にも言明し難き恐る可き思想來りぬ。余は此思想より脱逸する事能はず、自殺の念——余が弟の爲したる如き——は常に常に余の頭を犯し來るなり。余は是れを如何にすべきや」となつてゐる。有島の日記にあるこのスコット博士の言葉で「恐る可き思想」とは予定説を指示している。この予定説が「神に呪はれた身であることを」決定づけている。

八月十六日の日記にもスコット博士の言葉が引用されている。「余には今一個の思想徂徠して抜き難し。余は余の

心に反して神に對し汚濁の思を懷く。かくの如きものは救はれざる可し……罪を犯す事一度なるものは救はれざる可し」とある。

ここで「罪を犯す事一度なるものは救はれざる可し」とあるが、小説の中で博士が別れの言葉としてAに云った「お前の生涯に、意識して些かの悪でも犯してはならない」ということと意味が同じであることが分る。このような厳しい罪惡意識は普通の人間には考えられないであらう。神に呪われていると自分を決めつける精神病患者・スコット博士の意識である。このようにしてスコット博士は自殺へと近づくことになる。

神は正義の神となつて惡に對しては敵しい存在としてのみ博士の心に留まつてしまつた。博士の精神をますます異常にさせたのが教会での予定説である。これは誤解されると、博士のような不信仰者には絶望的罪惡意識を生じさせ信仰者には樂天的怠惰の念を生じさせやすいと云われている。現在でもこの予定説はプロテスタント諸教会で教義学の難題になつてゐる。

有島の日記にあるスコット博士の言葉と「迷路」にある博士の言葉とはその意味が大体同じであることが擧めたことになる。

Aが病院でのアルバイトを止めて新学期を迎える頃、スコット博士はついに自殺してしまふ。Aにはショックであつた。悩めるスコット氏を救えずむしろ自殺を早めさせた教会にAはますます不信の念を抱く。

神から呪はれてゐると思つてゐたスコット氏がたまたま予定説の説教を聞いてしまつたことが悲劇であつたのか。いづれにせよスコット氏を自殺させたのは教会であるとAは思つた。このスコット博士の自殺によつてAの背教は決定的となつたと云へよう。Aは人間の意志の絶対自由を信じ、スコット氏の運命予定説を否定した。そしてAは既に心の中で自分第一の人生を歩むことを決意してゐたことになる。

スコット氏の罪意識又は良心の呵責とは親切な弟に對して良い言動をしなかつたという自分の行為おとないによる罪意識で

ある。このスコット氏に同情したAは、ヘキリスト者は思いにおいて行爲において常に正しく善良でなければならぬ」という日本人らしい先入観を持っていた。そして若いAは自分の性欲に常に罪意識を抱いていた。

Aが渡米する前、キリスト教を曲りなりにも信じて程なく祖母が他界した。その臨終も近い頃附き添う看護婦を心の中で犯して一人悩んでいた。へ夕に命の逼つた祖母を看護しながら、私の心は祖母に附添ふ看護婦に牽かれてゐた。ある夜中に、その看護婦がふしだらな寝衣のまゝで、私の寝室に或る事を訴へに來た時には、心の中では十分にその女の人を辱かしめてゐた。》（『リビングストン傳』の序）婦人を心の中で姦淫した者は既に姦淫をしたのであるという聖書の言葉によれば（マタ5・28）、Aはこの時姦淫という罪を犯したことになる。

有島の罪意識を明治三十六年九月一日の日記から彼の言葉として聞いてみよう。

「罪人は何故に罪を犯すや。罪を犯すとは、犯せるものゝ罪か。然らずして他に之れを犯さしむるの力あるにあらざるか。換言すれば人には free will なものもありと云ふ。而して free will を分解すれば神意に従順なる力と、之れに逆行する力との二つに分たるべし。罪を犯すとは所謂第二の力が第一の力を壓するなり。苟も第一の力第二の力より勝りて誰か好んで罪を犯すものあらんや。不幸にして第二の力第一のそれに勝るが故に、罪人なるものは寧ろ勢罪を犯すに至るにあらずや。是を以て彼を罪人となし、彼を惡み彼を呪ひ彼を擬するに永遠の地獄に逆落しすべきものとなすの理由何れにあるや。是れ罪なるものを客觀的に見たる時の謂なり。是れを主觀的に見る時は然らず。少くとも余自身は罪を犯したる時、嚴しくも罪を犯せりとの conviction を生ず。これ云ふ可からざる苦痛なり。」

この言葉は実に全ての人の心を代弁している言葉として味わい深い。第一の力とは神意に従順な力であり良心の意味であらう。第二の力とは神意に従順な力であるから惡魔の力ということになる。有島だけでなく人間にはこの二つの心が共存している。そして「第一の力第二の力より勝りて誰か好んで罪を犯すものあらんや」というように矛盾した存在が人間であるらしい。主觀的には人間は自分の罪深い行為を惡と痛感するが、客觀的には第二の力に負ける

第一の力つまり創造主なる神にこそ人間が罪深い行為をしてしまうことへの責任があるということになる。ここで罪とは悪い行為による法律的罪と解している。

このように矛盾した人間存在に悩んでいるのは有島やスコット博士だけではない。内村鑑三も使徒パウロも同じく悩んでいた。内村鑑三の『求安録』には、

「我が願ふ所のもの我これを行さず、我が惡む所のもの我これを行し、我は二個の我より成立するものにして、一個の我は他の我と常に戦ひつつあるものなり、誠に實に此一生は戦争の一世なり。」と冒頭にある。

使徒パウロも「ロマ書」七章十九節以後で、「わたしの欲している善はしないで、欲していない惡は、これを行っている。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。」と云っている。

人間は何故このような自己矛盾に悩むのだろうか。それは原罪にあると教会は説き続けている。創世記三章にあるように人類の祖先は不信仰という罪を犯した。それ以後人間は神第一の生き方をせず自分第一の自己中心の生き方をするようになった。人の世に争いは絶えなくなった。人間から不信仰という罪つまり原罪を取り除くにはイエスの十字架の死を罪人の身代りであると信ずる以外にない。ここに贖罪論も生じてくる、と以上のように教会は聖書によって説いている。確固たる信仰体験つまりイエスを救い主と信じた者だけが原罪を理解出来ると教会は云う。するとスコット博士もAも法律的罪のみ意識され原罪を理解出来なかったことになる。

有島が「基督教の罪といふ觀念及び之に附隨する贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知った。」と云ったことは、以上のような考察の結果、当然であつたと推測され得る。

第三の問題は、聖書による終末論を正しく理解しないことからの結果である。神との人格的な交わりがなく、十字架の贖罪が信じられなければ復活信仰など全然意味のない妄想であるという結論になる。

有島は幼少の頃から信仰の大切であることを祖母から教えられていた。女丈夫だった祖母は御岳教の信者であったが、一人息子が死んでから一切の自力を捨てて真宗に帰依していた。

明治二十九年（一八九六年、十八歳）七月、学習院中等全科卒業し、八月、札幌農学校へ入学するため札幌の新渡戸宅に下宿した。そこで熱心に禅寺へ修業に行っている。祖母（有島の母・幸の母である山内静子）から信仰の必要を説かれていたのでその言葉を文字通りに実行するためであった。二十歳まで有島の宗教的素養は仏教によって養われていた。有島が札幌でキリスト教へ入信したと知って家族の皆が反対し、特に祖母の悲しみは大きかった。

「僕が信仰を屈まげようとしなかった爲めに、父母からは勘當同様な言葉を浴びせられた。而して僕を自分の眼程に愛してくれた祖母は、悲しみの餘り死病に罹かかつて、來世で僕を佛弟子にする外はないと云ひながら亡くなつた。」（「迷路」の序篇「首途」）

これ程までに祖母を悲しませたということは、有島の仏道修業に対する期待がいかに大きかったかを意味しているとも取れよう。

明治四十四年、三十三歳の時、有島が札幌独立教会を去り正式に基督教信仰を捨てた時、内村鑑三の嘆きは大きかった。

これらのことから有島が才能豊かで人望のある人であることが察しられる。とにかく、有島は仏教の影響を強く受けていたことになる。

現世の苦しみは前世の因縁による、故に來世で楽になるためには現世で善行を積まねばならぬという因果応報の考えが仏教にはある。このような仏教的來世思想に影響されたためか有島は次のようにキリスト教の未來觀を誤解している。〈現世の生活は未來世の生活の階梯に過ぎない。謂はゞ學校時代である。地上生活の尊さは未來世の生活に繋がれてゐるという自覺によつて始めて意味があるのだ。かう基督教の教理は教へる。〉（『リビングストーン傳』の序）

「自分が来世で他に優れ神に慈まらるべき境遇に到り得んが爲めに、現世でどれ程善根を積んでくれたとて、そんな他愛と稱する假面の下に隠れた利己主義に誰が感謝しようぞ。そんな方便的な材料に使はれる人生こそいゝ迷惑と云ふものだ。」(同上)

神の国を求める終末論的信仰は、キリスト教の中でも特に新教では重要な教理の一つと云われている。現世で善根を積むのもただ来世のみの平安のためであると現世を厭世的に否定する教理はキリスト教にはない。むしろ神の国は来世ではなく今信ずる者の心の中にあると説く。現世にて積極的に働き、現実の自己と社会とを改善すべく努力する過程にこそ再臨の時実現する神の国が望まれるようになる」と説く。

キリスト教の未来観を誤解した有島が、来世で神に慈まれたいため現世で善根をどれほど積もうとそれは利己主義である、と云うのも当然であろう。このようにしてキリスト教の未来観に疑問を抱き出したのである。この疑問は聖書による終末論そして復活信仰を理解していないことから起る。その結果、人間の生命と死を理解出来ないということになる。

米留学時代の日記に、
 「生命とは何ぞ。我を知らず。汝何故に生くるや、我またを知らず。更に汝何故に死せざるか。知らず、我「死」をすら知らざれば。我は生命も死をも知らず。」(一九〇六年四月十八日)とある。
 有島がこのように記述することも、第一の問題である確固たる信仰体験のないことに原因するのであろう。

第四の問題は、キリスト教国民そしてキリスト者は思いにおいて行為において常に正しく善良であり戦争絶対反対の平和主義者であるはずであるという日本人らしい先入観が現実には米国民の中で生活することによって覆された結果である。

「迷路」十四章にルーズベルトが日露両交戦国のために仲裁を試みようとした噂で車中の集団の話題は持ち切つて

いる様子がある。

「一匹の蛇だつて大きな馬を悩ます事が出来る。と云つてそれは蛇が馬より強いという證據にはならない」

「然し東郷のあの見事な勝はどうだ。もつとやらせておくがいゝよ。どうせ亞米利加の不利益になるんぢやないから」

「何しろ小ぼけな Jap は素晴らし」

.....

「露西亞や日本まで持つて行つてモンロー主義の破壊を企てないでもよささうなものだ」

この会話の中でモンロー主義とは他國に干渉しない主義のことである。米国の不利益になるのでなければ、日露戦争は面白い、もっとやらせておけばいいという利己的な米国民の一部の考えはこの会話の中に認められる。

車中、主人公の A は日本人であると気づかれ、その集団の一人から次のように云われる。

「私の國とお前の國とは提督ペルリ以來の親友だ。支那を膺^{うけ}らしたやうに露西亞もしたゝか膺^{うけ}らしてやるがいゝ。しつかりやれ。私の國は義侠心が強い。いつまでも小さいものに加勢するのを忘れやしない。ローズベルトは何んといつても世界一だ。心配せずに私の國に任せておきな。」

政治狂の老人がからかい半分に云つたこの言葉ではあるが、大国が小國を加勢する気持は分る。

一九〇四年二月二十八日、ハーバーフォードから家族宛の書簡によると米國が日本に同情する理由は三つある。

一、露國が猶太人に對し大迫害をなせし事。

二、フィン人に對する露政府の大壓制。

三、日本の小。

米國の新聞は日露戦争の記事でその第一面を占められた。米國民一般の人氣はもちろん日本の方にあつた。しかし

米国が露国に同情する理由も三つある。

一、歴史的に露國は米國に友愛あり。

二、所謂恐黃病。

三、基督教と他教との衝突なりと云ふ事。

その二は米国が黄色人種より白色人種に身方するというのである。有島はキリスト教国民がこのように人種差別をしているのに失望する。現在でも黒人問題に悩む米国である。

その三は仏教国日本又は神道日本よりも同じキリスト教国の露国に身方すると解してもいい。また、家族宛の書簡によると或る米国人は次のように論じている。へ露國の基督教なるものは眞正の基督教を去ること極めて遠し、又日本は基督教國の新文明を輸入することに於て確かに露國の上にあり、さらば日本若し勝たばそれは間接に新基督教的文明の勝利を意味するものなり。宗教改革を経ない東方正教会（ギリシア正教会）のキリスト教よりもプロテスタント・キリスト教の方が眞正であるというのである。確かに日本にも開国後、新キリスト教が入って来た。それでも日本を新教国と定めるのは輕卒過ぎる。米国の我田引水の考による。

この米国人の言葉から同じキリスト教でありながら宗派の対立・争い（セクト）が感じられる。これも有島を失望させた。このようにして日露戦争に対するキリスト教国民の態度に失望する。

ただキリスト者として一人トルストイのみを尊敬した。フィラデルフィアからの帰途、車中で、*Collier's Weekly* を読み、へTolstoyが其熱烈の筆を揮うて、己が國民と、戦を良しとする人々とを攻撃せる文を見る。豫言者の老いて益々盛なる意氣稱すべきかな（一九〇四年七月二六日）と感激している。更に森本厚吉から送られた日本の『朝日新聞』などに出たトルストイの全訳を読んで感嘆している『文学』昭和39・12。へ彼の好意を謝しつつ椅子によりつつ熱讀して、今更に深き *impression* に打たれぬ。余は眞に基督教信者として單純明白なる立場に立ちつつありや。余は

世の神學と功利主義とに迷はされつゝあらざるや。常に凡てに勝りて神意を奉ぜん事を勉めつゝありや。余は Tolstoy の文を讀む毎に、眞理此中にありと思はざる事なし。』（九日七日）この日記の文中で神學とはスコット博士を自殺に追いこんだ予定説を指し、功利主義とは米国のモンロー主義を具體的には指していると解してもいい。

有島が米国民に失望したのは、「迷路」以前になるが、米国に上陸（一九〇三年九月八日）して間もない。九月十四日、森本と大西部鉄道でシカゴにいる旧友森広に会いに行く。沿線の住民が余りに下品、極劣、醜惡なので「若し此地方の住民が合衆國全體の大部分を占むるものなりとすれば、余は最も米國なる國を厭ふ」と云って失望する。

（昭和四十一年八月記す）

「卑怯者」

——有島武郎の性格の一面——

島崎藤村が私小説の大家なら、有島武郎は思想小説の大家と云えよう。「カインの末裔」「生れ出ずる悩み」「星座」「或る女」「大洪水の前」等、武郎の代表作は作者以外のモデルが主人公となっているものが多い。そしてその主人公を通して作者の観念、文学思潮、時代の社会情勢を論ずる思想小説が多い。「卑怯者」は「小やき者」[An Incident]と共に私小説に属する短編である。大正九年十月二十三日、狩太農場視察中に書いている。自殺三年前の四十二歳の時で創作力が低下している頃である。

秋の夕方。山の手の路上に仲間はずれにされたような六歳ぐらいの子供が牛乳配達車によりかかっている。折り悪しく牛乳箱の前扉がはずれピンは地面に転がり落ちた。牛乳だらけになった子供は怖さで泣くことも出来ない。一伍一什の目撃者である〈彼〉はこの可哀相な子供に同情し弁解してやろうと思う。しかし彼は人々から好奇的な眼でなぶられるのも損だと思って逃げる。〈許してくれ〉と子供に詫びながら自分を〈卑怯者〉と罵る。

以上が荒筋である。新潮社全集には大正九年の日記がない。大正九年の年譜に『卑怯者』に就いては別にいふべきものを持ちません』という作者の言葉がある。十月一日、東京から吹田順助宛書簡に〈北海道には十一、十二日に發ちたい〉とある。作品の創作動機となった言葉がない。この途上での見聞は〈山の手〉とあるので東京か横浜かも知れない。北海道であるかも知れない。ただ分っていることは作品の〈彼〉の気持がそのまま作者の気持であるという

ことであろう。本多秋五氏は「寓意小説であつたのかも知れない」と推察されている（『白樺派の文学』）。この作品は文学的に秀れているとは云えない。しかし子供の動作・心理描写には秀れている。「卑怯者」が消極的であるなら、志賀直哉の「正義派」は積極的である（瀬沼茂樹）。志賀の「小僧の神様」は両者の中間にあるが、主人公Aが同情すべき仙吉に鯨を思い切り御馳走したという事実があるのでやはり志賀の行動的性格を理解出来る作品である。これに對して「卑怯者」の彼つまり武郎は優柔不断な性格であり意気地なし、臆病者である（本多秋五）。この作品と横光利一の「御身」とはてれ屋・内気という点で共通している。

武郎は内に熱狂的情熱を秘めていた。一方、優しく感傷的で内気な性格でもあつた。この極端な二元分裂に悩んだ人である。本稿は彼の臆病について論ずることにする。

一、明治十七年、六歳。横浜英和学校で自由なキリスト教的人間教育を受ける。同時に儒教的倫理による厳格な文武両道の家庭教育を受ける。長男である武郎は示現流の立木打、馬術、体罰などで厳父・武から鍛えられる。この非人間的スパルタ教育によつていじけた性格となる。（「私の父と母」、瀬沼茂樹・集英社）

二、明治政府は薩長政府と云われた。特に薩摩出身の人物は他から嫉妬された。明治十年、西郷隆盛が自刃し、一年、大久保利通が暗殺され、二十二年武郎十一歳の時、文部大臣森有礼も暗殺された。祖父は島津家の陪臣、父も純粹の薩摩人であつた。薩摩出身の有島家の長男として武郎の心に宿命的な危機意識が宿つた。（薩摩では男尊女卑の風習が特に強かつた。フェミニストになつた武郎はやがて「或る女」を創作することになる。）

三、明治二十年、美少年の武郎が九歳の時、学習院予備科時代。寄宿舎で上級生から男色の圧迫を受け臆病になつた。（瀬沼・集英社）

四、小説「半日」の中で有島のモデル相島は「心のどん底が臆病なんです」と云っている。童話「一房の葡萄」に

は横浜英和学校時代に友人の西洋絵具を盗んだ話がある。その中に「體も心も弱い子でした。その上臆病者で……」とある。明治四十二年三月四日、三十一歳の誕生日の日記で自分を卑怯者と云っている。童話「溺れかけた兄妹」、小説「An Incident」にも気の小さい武郎の性格が出ている。『リビングストン傳』の序にも「人前で怯れ勝ちだった私の性情が……」とある。その他の作品にも彼の性格の弱さが出ていいるところが多くある。

この臆病が彼の生涯で重要な事件に必ず顔を出している。

一、棄教（省略）

二、農場解放（省略）

三、自殺（省略）

有島文学の魅力の一つは思想の実践にある。誠実な人であるだけに時代の犠牲者であるとも云える。臆病・卑怯者意識は武郎だけでなく大正時代の作家・知識人に共通してあったと云われる。

維新後、初期の明治人にはともかくも日本を近代国家にしたという自負がある。若き昭和人には自己主張、行動力、将来性がある。両者の間にある明治後期から大正の人々には戦争犠牲者意識と明治人に対する劣等感がある。明治四十三年大逆事件以後、言論の自由の危機と国家権力に対する臆病意識が生じた。大正デモクラシーの一つとして社会主義労働思想の普及による底辺からの盛り上がり運動がある。当時の作家・知識人は有産階級に属する人々が多かった。たので彼らは卑怯・臆病者意識を持った。

第二次大戦後、生き残った大正人が各界で活躍して来ていることは再評価されるべきであろう。

参考文献

『「白樺」派の文学』本多秋五、新潮社、昭和35年

『有島武郎集』、日本文学全集25、集英社、昭和43年

本稿は昭和四十三年六月一日、青山学院大学における「キリスト教と文学」学会で研究発表した内容の一部である。

「老船長の幻覺」 試論

1

武郎の創作活動は明治四十三年「白樺」創刊と共に始まったといえる。次の順で掲載されている。

4月号「西方古傳」

5月号「二つの道」

7月号「老船長の幻覺」

8月号「もう一度「二つの道」に就いて」

10月号「かんくゝ蟲」(改稿)

11月号「叛逆者」——ロダン記念號

小説の処女作は明治三十九年留学時代の「かんくゝ蟲」である。戯曲の処女作はこの「老船長の幻覺」という一幕物である。三十二歳の時である。処女作にはその作家のあらゆる可能性が含まれていると云われる。確かにこの作品にも注意すべき異常な点がある。まず戯曲の荒筋を紹介しておく。

老船長は船長室の病床で愛する医師の娘の写真を眺め黙想に耽る。それから幻覺となる。幻覺の中には過去のA（老人）、B（若き商人）、C（中年婦人）と医師の娘、現在近くにいる水夫長と老船長の孫娘との六人が入り混って登場する。暴風で鳥島噴火の時、難破船があった。その船からA、B、Cを老船長は救った。その時船長は医師の娘の夫である若い軍人をピストルで殺した。医師の娘を軍人から奪おうという執念は実った。娘も船長を男らしく強いと愛した。医師の娘の声と姿は、老船長にのみ聞こえ見える。同様にA、B、Cの声と姿は、老船長にのみ聞こえ見える。海は再び暴風模様。病身では出航中止した方がよいと、A、B、C、水夫長、孫娘達が老船長に迫る。しかし医師の娘は老船長を自分の魅力で引きつけ二人で逃げようと出航を迫る。今度は水夫長が医師の娘の悪口を恐ろしげに船長に語る。その医師の娘は同じ船の三十歳ぐらいのボーイを上陸して三日目に殺した。ボーイは船長の写真を持っていたが、死後その写真がなくなっていた。以上のように語った水夫長はこんな話をする時は縁起が悪いから出航中止して欲しいと願う。医師の娘は老船長以外の人達には気付かれない。魔の如く再び近寄って出航決心を促す。A、B、C、水夫長が懸命に引き止める。しかし娘の魅力に負けてついに出航決意。一緒につれて行けと泣く孫娘を水夫長にあずける。老船長と医師の娘はやっと二人だけになれる。すると暗くなる。突然、電燈の灯をもって幻覺はなくなる。老船長は病床で医師の娘の写真を眺めているのに気付く。

以上のような話である。有島の戯曲は聖書（『三部曲』）、体験・現実（『死と其の前後』、『斷橋』、『ドモ又の死』、『御柱』）、幻想の三つに大別される。「小さい夢」、「奇蹟の詛ひ」、「老船長の幻覺」は幻想的なものに属する。幻想的な三つの中で前者二つは西欧の夢物語と寓話めいたものである。「小さい夢」はゴールズワージーの“The little dream”の翻訳である。「奇蹟の詛ひ」は童話「片輪者」の元となっている。いずれも気楽に鑑賞出来る作品だ。しかし「老船長の幻覺」はただの幻覺では済まされない。この幻覺の中には武郎の異常心理と将来の可能性が既に語ら

れているからである。瀬沼茂樹はこの戯曲について語っている。「さらに、私は「かんかん蟲」に着手した当時、武郎が友人の恋愛事件（むしろ姦通事件というべきである）にまきこまれて、ピストルで脅迫されたことを想起したい。コキューの復讐は、立場をかえれば彼の想像力の産物たる可能性が立証される。さらにまた戯曲「老船長の幻覚」にも通ずるのではないか。老船長の昔の人妻への執念は、早くいえば姦通への意志である。そればかりではなく、彼が告白するように、「愛する妻を持つ身でありながら、或る人妻に思いを寄せるような乱雑な心になった」（『リビングストン傳』の序）という錯乱が彼の心に巣くっていた当時に、「老船長の幻覚」が発表され、「かんかん蟲」が公表された。ここには二重に心理的連関があることは、もはや疑うことができない。彼の心理的放縦が、そのころに決断された棄教にも関係があった。」（角川書店。日本近代文学大系³³）以上の瀬沼説を参考にすれば、この戯曲は鬱憤発散作品であるといえる。鬱憤発散には三つ考えられる。第一はピストル事件、第二は自由恋愛、第三は信仰への反逆、である。

2

第一 ピストル事件。明治三十九年四月末、二十八歳。米国にてある友人（阿部三四らしい）の恋愛事件にまきこまれ短銃で生命を脅かされている。極度の神経衰弱に陥っている。気の弱い武郎には大変な心の痛手である。この痛手・鬱憤を何らかの方法で晴らそうという心理作用が当然働く。ピストルで逆襲するのではない。芸術家は創作活動にその作用が出る。「かん／＼蟲」（同じ明治三十九年三、四月頃執筆していた。四十三年十月、改稿して『白樺』掲載）ではイフヒムの復讐となり、弱者・鎚落し労務者が強者・雇用主側の会計書記に打ち勝つ話になってこの作用が出ている。「老船長の幻覚」では老船長が愛する人妻・医師の娘をものにするためその夫である若い軍人をピストルで殺すことによってこの作用が出ている。

第二 自由恋愛。武郎は自由恋愛による自由結婚が出来なくされた。この心の癪しこりは何かの形で発散するであろうというのが第二の鬱憤発散である。明治四十年四月帰国。九月から予備見習士官として三ヶ月歩兵第三聯隊に入隊した。この間、初恋の河野信子との結婚問題で家柄がつり合わないとい父に反対され心の痛手を受けた。前年三十九年四月のピストル事件に続く度重なる心の痛手である。翌年四十一年五月三日。日曜の礼拝で竹崎牧師の説教は平凡だと批難している。そして当日の日記に「今朝、ピストルを買った。余の魂は余から離れて行く」という物騒がせな記述がある。突飛なことであるが失恋、信仰への懷疑といふこの時期には自殺の可能性もあったことになる。五月五日の日記に「朝日新聞所載の藤村の『春』を讀んでいる。青木（北村透谷）が自殺しようとしてゐる。自分には、讀むに堪へぬ程切實に、その心持がわかつた。」といふ同情の記述がある。同じ明治四十一年九月一日。陸軍大将・男爵神尾光臣の二女安子と日比谷公園の松本楼でお見合いする。清純な安子が氣に入つて婚約。四十二年三月結婚。武郎三十一歳、安子十九歳。結婚生活は婚約時代のように甘いだけではなかつた。新婚二ヶ月の五月十五日の日記に「安子は何時にも似ず、元氣になりさうもない。たしかに心中何か考へているにちがひないのだが、うちあけて話してくれない。」といふ記述が既にある。二年前まで夫に好きな女性がいたことを安子は女の直感で氣付いたからだらうか。それから六年後、大正四年。安子は結核で平塚の杏雲堂病院に入院。そして大正五年八月二日、「最愛の妻逝く。」この妻の死を扱った戯曲「死と其の前後」第二場に夫婦の對話がある。

妻——あの方かたさへあなたの奥様になつてゐらつしやれば、あなたもこんなにお淋しくはないでせうのにね。……それにしてあなたは何故あの方と結婚なさらなかつたの。

夫——俺は始めからあの方と結婚する心持なんぞはなかつたんだ。

妻——でもあなたはお父様に、結婚する位ならあの方としたいと仰しやつたのね。

夫——それは全く見もしないものを俺にあてがはうとなさるからさ。そんな結婚をする位なら氣心を知つて

るだけでもあの女と結婚する方がましだと云つたわけなんだ。

この対話の中で「あの方へあの方」とは武郎の初恋の女性・河野信子を指すとして間違いない⁽¹⁾。武郎は安子の清純さに引かれて結婚している。だからといって河野信子を忘れ去ってはいない。婚約後一ヶ月、四十一年十月一日の日記に病気の河野信子を心配して「神よ！ 彼女の生命を延ばし給へ。あゝ！ 何と彼女は勇敢であつたらう。もう一度、少しの間でいゝから、彼女に會ふことが出来れば！ 結局、余の爲すべき最良のものは死ぬことである。余は飛躍することが出来ない。匍^{はら}つて行くのみである。恥多き人生よ！」という記述がある。河野信子に対する未練と自責の念が読み取れよう。信子との自由恋愛を実現せ得なかつた鬱憤は後々まで尾を引くことになる。その発散の一つが「愛する妻を持つ身でありながら、或る人妻に思ひを寄せる」ことである。「幸にして私は纔^{ちやうど}かに踏み止まつた」（『リビングストーン傳』の序）がこの乱雑な心になつていたのは明治四十三年頃として容易に考えられる。更に発散のもう一つが人妻を奪うという「老船長の幻覺」を創作することである。

体験を元とした戯曲「死と其の前後」の第二場に有夫姦の話がある。

高等刑事——それに失禮ですがあなたは或る有夫の女と通じてゐらつしやるさうですな。

学生二——言行不一致ですか。それは明らさまに云へば先生と或る婦人との關係が日頃のお言葉とちがふと云ふんです。

学生は社会主義研究会のメンバーの一人である。刑事は道庁から危険人物としてにらまれた武郎を監視に来た（四十三年十一月頃）役人であろう。

明治四十三年十一月頃、結婚後一年八ヶ月にして結婚生活の危機がきた。夫婦ともに真剣に離婚を考えるようになった（年譜）この原因は以上のような「彼の心理的不貞」（瀬沼）にもよるわけである。老船長も「或る女」の早月葉子も人の妻、人の夫を奪つても自己の愛を貫いている。老船長も葉子も「姦通への意志」という点でまぎれもなく

武郎の分身である。

第三 信仰への反逆。「老船長の幻覺」発表の二ヶ月前、明治四十三年五月には札幌独立教会を退会している。三十二年二月、定山溪で入信決意したことになる。そして三十七年米國留學中へお前は本當の信仰上の變身を経験してはゐない（『迷路』、『リビングストン傳』の序）という結論となつた。四十年四月帰國後も信仰の篤いクリスチャンとして社会的にも尊敬されていた。四十一年一月には教会の日曜学校長にもなっている。しかし信仰に対する懷疑は決定的になつていた。へ余は生れてより今に至るまで、嘗て中心の要求の爲めに動きたる事なかりき。余は世間體の爲めに動きたり。若しくは人によく思はれんが爲めに動きたり。（四十一年四月十八日の日記。河野信子との失恋の痛みを癒すために赤岩温泉へ。）という嘆きの告白記述もある。

米國留學時代、弁護士ピイボディーに紹介されワルトホイットマンの詩を読んでいた（『迷路』）。自由奔放な自然児に心から傾倒していた。四十二年三月結婚。神聖な靈的交わりではなく単なる肉の交わりである夫婦生活に失望。いよいよ偽善者であることに耐えられなくなり四十三年五月、退會届を提出した。第三の鬱憤である信仰への反逆から自己の個性に従順、たれと云う心の聲に従つて創作を始めた。「生きることの眞の意味は、たとえ常識的、習俗的な道徳や世間の掟とぶつかり、自己破壊の危険に陥ろうとも、それにたじろぐことなく自己の衷心からの要求に従つて生きぬくことにあるのではないか」（安川定男、明治書院）という思想が當時の武郎にあったわけである。瀬沼茂樹はこの戯曲を次のように評している。「老船長が孫娘や水夫長の諫止をふりきつてまでも人妻である医師の娘を良人の手から奪おうというのは「胸の奥の奥底」からの執念に動かされたこと、つまり生命的要求に誠実なのであり敢て危険な無目的な航海にのぼる冒険をいとはない。これは老船長の「幻覺」であるにせよ人間の生存の意義は、かような苦難を通じて、あくまで自己の個性の確立と發展とにあると解することができる。」（『文学』昭和41年11月）

この戯曲が三つの鬱憤発散が要因になって創作されたことを述べてきた。これからこの戯曲処女作が他の作品とどんな関係にあるか考えてみたい。

武郎は明治三十年代の留学体験者である。横浜や神戸の港、船内部の構造、航海上の技術なども普通の人よりは知っている。この戯曲でも船長室の描写に船旅体験が生かされている。特にこの体験が生かされているのは翌年明治四十四年一月からの「或る女のグリンブス」(大正二年三月、二十一章まで)である。前篇は純創作と云うより私小説的事実が多い。小坂晋は「或る女」という船を建造するために作ってみた模型が「石にひしがれた雑草」であると云っている(角川文庫「生まれ出づる悩み」昭44)。この説を更に詳細に考察すると「老船長の幻覺」(四十三年七月)は「或る女」前篇の模型と云える。男女愛最強本能という主題が共通している。後篇(大正八年五月)の模型が「石にひしがれた雑草」(大正七年四月)であろう。「正しい愛に育まれなかった多淫な女の悲劇」という主題が共通している。武郎が横浜港を知っているのは明治十五年、四歳の時、横浜月岡町(現、西区老松町)の官舎に住んでいたことにもよる。父が関税局長兼横浜税関長になったからである。二十年九月、学習院予備科第三年級に編入学するまで月岡町の官舎にいた。老船長を恋の虜にした医師の娘という多淫な女は早月葉子に似ている。二人共かつては人妻である。医師の娘の夫である若い軍人をピストルで殺した老船長は、港で葉子が見知らぬ若者に抱きすくめられた時その若者を簡単に引き離した巨人・倉地事務長に似ている。船長も事務長もその凶暴な豪快さによってその時から医師の娘、葉子に真の男と思われている。葉子、倉地の前身が医師の娘、老船長となっていると考えてよい。実際に作品で比較してみよう。

医師の娘——(Aの言葉をおつかふせ)けれどもあなたが、見事にあの人の脳天を撃貫^{うくぬ}いて、びくともなさらずにいらつしやるのを見ると、私は始めて男の力といふものを知りました。而してあなたと二人ぎりで、この船で、

人の知らない遠い所に行かうと思つたのに、あなたは急に港に船を着けて、――じれつたいたらない――私の手一つ握らずに上陸させてしまつて、……

以上の医師の娘の言葉は「或る女」では次のようなところに反映している。

「さ、お放し下さい、さ」と極めて冷刻に云つて、葉子は助けを求めるやうにあたりを見廻した。田川博士の側にある何か話をしてゐた一人の大兵^{だいひょう}な船員がゐるが、葉子の當惑し切つた様子を見ると、いきなり大膽^{おほまた}に近づいて來て、「どれ私^{わたし}が下までお連れしませう」と云ふや否や、葉子の返事も待たずに若者を事もなく抱きすくめた。若者はこの亂暴にかつとなつて怒り狂つたが、その船員は小さな荷物でも扱ふやうに、若者の胴のあたりを右脇にかいこんで、易々と舷梯を降りて行つた（9章）。

始めてアダムを見たイヴのやうに葉子はまじ／＼と珍らしくもない筈の一人の男を見やつた。……胸の下の所に不思議な肉體的な衝動をかすかに感じながら（10章）。

あの無頓着さうな肩のゆすりの蔭にすさまじい *desire* の火が激しく燃えてゐる筈である。葉子は禁斷の木の實を始めて喰いかいだ原人のやうな渴慾を我れにもなく煽^{あふ}りたてゝ、事務長の心の裏を引つ繰り返して縫目^{ぬいひめ}を見窮めようとばかりしてゐた（13章）。

医師の娘も葉子も多淫、妖艶であり激しい氣質である。老船長も事務長の倉地三吉も野性的豪快さという点で「カインの末裔」の廣岡仁右衛門に似ている。「自己を描出したに外ならない」「カインの末裔」（大正八年一月、新潮）という感想文があることから分るやうに、凶暴な廣岡仁右衛門は武郎の分身である。葉子は武郎が女になつた場合であると考えられる程、武郎の同情を全身に受けて書かれている。情熱的な点、基督教信仰に背を向け自己の聲に従つて

生きそして行きづまった点、信仰へのわずかな憧憬を最後までいだいていた点、容貌にすぐれた才能もある点など武郎と葉子とは共通点が多い。つまり葉子は武郎の分身である。ここまで考えてくると、老船長、医師の娘、倉地三吉、早月葉子、廣岡仁右衛門と皆が多少の差はあれ武郎の分身であることになる。

武郎の息のかかった人物の中で、医師の娘と葉子には先輩格の女が既に西欧にいた。ヘダ・ガブラーとアンナ・カレーニナである。武郎は五年間の留学中に、イブセン、トルストイ、クロボトキン、ツルゲエネフ、ドストエフスキ、ゴリキー等、北欧やロシア系の思想的文学書を愛読した。特にイブセンとトルストイに最も傾倒していたことが日記からも分る。米国でピストル事件に遭遇した明治三十九年四月に「イブセン雜感」を書いている。その中でヘダ・ガブラーを讀め。三讀して讀者の感ずる所は個性發展てふ新しき精神の犠牲となりし一女性が其の缺陷と弱點とを以て尙苦悶し奮激し遂に起たざりし痛慘なる悲劇なり」と云つて感嘆している。美と才能を武器として生き、行きづまってピストル自殺した個性の強い女ヘダを幾分なりとも医師の娘が引き継いでいる。ヘダ、アンナ、葉子との関係はここでは略す。

戯曲処女作「老船長の幻覺」は「或る女のグリンプス」の習作である。この習作に「惜みなく愛は奪う」が強調する理論の片鱗が既にあったと考えてよい。根元的生命をただ生物学的に生きる本能を除けば、この戯曲で強調したい主題は男女愛最強本能説であると云えまいか。もしそうならばこの主題は「石にひしがれた雜草」「宣言」「或る女」「斷橋」などで具体化されているということになる。

4

明治四十三年、模範的紳士で通っていた三十二歳の武郎は「老船長の幻覺」のような戯曲を書いた。ここで少し彼の体質と性格について知っておきたい。本多秋五は次のように云っている。「彼は日本人としてもっとも強壯な肉体

をもち、したがって諸欲旺盛な、ひと口にいつて濃厚な血液の持主であった。うすい血液をもった人間ならば、それほど煮えたぎることもない内面の矛盾が、ときに爆発的に沸騰する種類の人間であった。日常生活では申し分のない紳士として身を処していただけに、彼には強い抑圧があった。その鬱積した抑圧が、灯をもとめて無謀に乱舞し、ついに身を焼く蛾のような、本能一閃の男女を空想して、そのなかに自己を投入することに補償を求めたのだ。『日本の文学』27、中央公論)

不可解な武郎の内部を明確に言及してある。他には武郎の二元対立の原因をフロイト精神分析学によって究明した安川定男の秀れた論文がある(明治書院、『有島武郎論』)。小坂晋が「武郎の性格―精神病理学的考察―」(『国語と国文学』62・2)と題してクレンツメル体質類型学によって武郎を躁鬱病質の人としていることを本多秋五の解説文(日本文学全集19 新潮社)で知った。まだその論文を読んでいないが私なりに少し考えてみた。

明治三十年五月一日、農学校本科一年、十九歳の日記に体格検査の記録がある。

身長五、二八。體重一二二、五斤。

胸八二ミリメートル。肺量三八〇〇。

視力聴力完全。齶齒九本。體格強健。

一尺は三〇・三cm、一斤は六〇〇gであるから身長一五九、九cm。胸囲八二cm。体重七三、五kgとなる。日本人の年次別体格の推移(文部省保健課資料『高等保健体育』大修館)の表には明治三十年はないが三十五年のはある、これによると、身長一五九、四cm。胸囲八〇、六cm。体重五二、二kg とある。

武郎の身長、胸囲は三十年当時は標準である。しかし体重七三、五kgはおかしい。日記の体重一二二、五斤が間違いでないとすれば肥満型になるから小坂晋が指摘する躁鬱氣質説は肯定できる。しかし他の人々と一緒にの写真(二十八年、赤十字社で学習院の友人たちとの写真。三十六年、渡米記念して下六番町自宅にて家族との写真など)を見

でも武郎が肥満型とは思えない。日記の体重は間違いであらう。つまり肥満型ではなく体格は標準であつて躁鬱氣質、體質は粘り強く強健と判断したい。子供の頃は心身共に弱かった（「一房の葡萄」）。しかし青年期になつて健康な体になつた。精力家である父・武の子である。一般に有島は氣が弱いと云われている。確かにその通りである。しかし体は健康であることは知っておくべきだろう。その健康な体こそ強い性欲と彼独得の女好きの原因でもある。冷静な北方の血と濃い南方の血（「私の父と母」）とを受け継いでいる武郎を内、向、型、熱、血、漢、とみたい。矛盾多い内向型熱血漢であるから「老船長の幻覺」を始め「石にひしがれた雑草」「或る女」、そしてその男性版「カインの末裔」（本多説）などの作品を創作できるということになる。

5

もう一度この戯曲について検討してみよう。若さに魅せられる老人の悲哀が甘い幻覺と病床の老船長という現実との対比で表れている。幻覺からさめて娘の写真を眺めつつある船長。すると甲板で水夫等の声が元氣に響き渡る。両替商シンハリス人が出てきて船長に話す。

両——旦那さん金替へないか。高く替へるよ。

老——（憤怒の色さかきじく）You damn'd son of bitch！ Get out there！

兩替商平然として老船長より醫師の娘の寫眞を取り上げ、打眺め、ぼんと卓上に投げ出し、老船長を見入りつゝ白き齒を現はして皮肉に笑ふ。

錨綱を巻く音、風の吹きしまる音。

——幕——

この最後の場面が哀れな老船長の姿と非情な商人との対照として上手に演技されねばならない。舞台は幻覺の場面

は全体が薄暗く、登場人物だけ照明する配慮が当然必要であらう。この劇の山場は船長が皆の反対を押し切って出航決意するところである。

醫——（魔の如く再び近寄りて）よ、決心！

A——いらつしやつちやいけません。

B——あなたには魔がさしてゐますぜ。

醫——よ、決心！

C——どうぞ／＼お思ひなほしになつて……（涙聲になる）

醫——よ、決心！……よ！

老船長の眼、異様に輝く。その眼の光はさながら醫師の娘の眸の中に吸ひ込まれるが如し。

老——（決然として）行く！

A、B、C、驚きて後しざりす。醫師の娘は凝然として石立。

水——いらつしやる？

A——（水夫長と同時に）ほんとうに？

老——行く！

C——いらつしやる？

醫——いらつしやる！

老——うむ行く！

水——そりや然し。

A——（水夫長と同時に）いけません。

B——（Aと同時に）そんな亂暴をなさつて。

醫——いらつしやる！

老——うむ、行く。俺は行くと決めたんだ。

醫——はゝゝゝ、

A、B、C、忽然として影をかくす。

孫娘入り来る。

老船長の躊躇から決断へ。この劇の見せ場のところである。医師の娘が妖艶な魔女らしく演技することになる。性的魅力を發揮しながら船長に迫る魔女にふさわしい台詞の例として次の對話がある。

醫——決心の出来るやうに思ひ出して御覽なさい、そら、あの時の事を。（身をすり寄せて）……あなたの血を若くしてあげたのは誰（老船長の額に手をあてて）で御座います。……丁度今日のやうな暴風日でした。

C——どん／＼暴れまさつて参りますよ。

老——さうだ。

醫——あなたの胸の奥の奥底に、私の良人の手から私を奪はうといふ執念が、陶物竈すえものかまの火のやうに燃えてゐたのを私はよく知つてゐますよ。私はあなたをさうやつて焼いてゐながら、仕舞にはその火の色に見とれてしまひました。

医師の娘のこの台詞を読むと「或る女」の葉子、「石にひしがれた雑草」のM子、「大洪水の前」のナアマ、「カインの末裔」の佐藤與十の妻を想起させられるであらう。そして逆のタイプとして「星座」のおぬい、「クララの出家」のクララ、「お末の死」のお末、「フランセスの顔」のファニー、「迷路」のフロラが浮んでくることになる。「宣言」のY子は両者の中間よりも後者に近い。後者は清純な乙女である。感傷的で内気な童貞時代の武郎好みの乙女達

である。前者の肉感的情熱的な女も武郎は大好きであった。『三部曲』の中の「聖餐」を創作する動機がマグダラのマリヤの性格を愛したことからも理解出来るだろう。以上のように武郎の女性観も二元的である。女好きで動揺する心の持主である武郎を評して本多秋五は「こういう人物の恋人となり妻となつて、相手を満足させるのは、まことに至難な業である。御本人自身が、何を求めているのか、はつきりしてないからである。」（『白樺派の作家と作品』、未来社）と云っている。的を得ている評である。

医師の娘は前者タイプのトップバッターである。そして医師の娘チームの不動の4番打者こそ葉子になっている。

有島の戯曲は三つに大別されることを最初に述べた。その中で上演される戯曲は体験・現実ものが多い。幻想ものに属する「老船長の幻覺」も有島文学が再評価されている今日では上演されることが望まれる。

尚、「老船長の幻覺」（初出）との異同考察は次の機会にしたい。

補足 明治三十一年四月二十八日の日記にも体格検査の記録があった。二十歳二ヶ月。身長五尺二寸九分（一六〇、五cm）。

体重一四貫九百七五匁（五六、三kg）。胸巾常時八二、五cm。以上であるので明治三十五年の男子の平均体格（一五九、四cm）。

五二、二kg。八〇、六cm）と比較して体重四、一kg、身長一、一cm、胸巾〇、九cmだけ多い。この結果、三十一年の男子として有島の体格は標準よりやや大きいと言うよりむしろ標準的体格であつたと言えよう。先に体重七三、五kgは何かの誤りであつて写真から判断しても標準体格であると論じたことが正しいことになった。

（1）志賀直哉の「過去」という作品の中でTという人物がいる。武郎をモデルにしている。「実際は他に好きな人があり結婚したいと思いつつ父の不賛成から、父の選んで呉れた人と結婚しようとしていた。親孝行な性質からモノメニアックな父の心を攪乱するのに忍びないらしかつた。」ここでも信子と安子がモデルとなつて登場している。

（昭和四十六年六月十二日）

有島武郎の「實驗室」について

作者も認める失敗作となった「實驗室」で、注意すべき二つの点を取り上げたい。

第一点 初出文の中に有島の潜在信仰が吐露してしまったと思われる文章があることである。即ち妻の死因究明を解剖によって実証した後、空しさに襲われた三谷の突然の火の洗礼による新生物語である。本文の文脈に沿って内容を把握してみよう。〈死よりも淋しい失望の淵に沈みはてゝ彼れは時のたつのを忘れてゐた。突然……突然、彼れは言葉通りに火の洗禮を受けた。空虚のどん底に火焰の燃え立つのを見た。彼れは生れかはつて椅子からおどり上つた。〉この文章は、信仰、体験が瞬間の体験であることを語っている、と私は読んでいる。とすると次の〈大きな人〉が神又はキリストを指しているのと見るのが自然であろう。〈そこには自分の生命と血の通ひ合ふ人類の生活があつた。涙ぐましいまでになつかしい大きな人が彼れを抱きつゝんでゐた。彼れを失望のどん底に投げ込んだものが、又彼れをこの甦生に導いてくれたのだ。〉初出作本文中、。印が付いてゐるのはここだけであり、有島が最重要視している〈人〉であつたことを意味している。印と解せよう。かくして生れかわつた三谷が晴々とあたりを見廻すという文章が続くわけである。〈彼れは小兒のやうな鮮やかな心であたりを見廻した。何物を見ても彼れの心にはありのまゝの暖い愛が湧き上つた。〉以上は教会脱会七年後の文章である。世間体を気にする有島は、背教を宣言していた以上、それらしい著述と言動を続けようという心理も働いて、改稿作では早速この初出文を削除した、と考えられる。

第二点 主人公・三谷医師は有島が教授の道を進んだ場合の仮想自己である。

（『キリスト教と文学』会報第7号、昭和五十一年九月十日）

「實驗室」

1

教科書で「生れ出づる悩み」を学んだ人は多い。代表作「或る女」「カインの末裔」「惜みなく愛は奪ふ」「星座」等
は知られている。更に有島の実生活を知る人は、熱心な基督者であったが霊肉二元対立の矛盾からやがて教会脱会、
第一次大戦後に盛り上って来た労働運動激化時代に「宣言一つ」を発表し、狩太有島農場を小作人に開放、夫のある
婦人記者・波多野秋子と軽井沢で心中自殺等の事実を想起するであろう。

非常に複雑な性格であるため分りにくく、又、不名誉な情死の反響もあってか、第二次大戦前までは充分に研究さ
れていなかった。それでも広汎な読者がいて戦前に全集は三度出版されていた。有島研究が盛んになったのは戦後で
ある。まず本多秋五、瀬沼茂樹、安川定男、山田昭夫の諸氏をはじめ、最近では全国に新進気鋭の士が続々と研究を
発表している。次第に新資料も発見され、より充実した作品論や作家論が展開されている。しかし依然として主要作
品中心の研究が続いている。そこで私は、非主要作品を検討し、その中から今、目的にして普遍的意義を引き出し、そ
れを論究したい。次の作品を検討する予定である。

1 「實驗室」(6・8)

- 2 「聖餐」(大8・10)
 - 3 「運命の訴へ」(大9春)
 - 4 「動かぬ時計」(大7・1)
 - 5 「死」を畏れぬ男」(大7・3)
 - 6 「凱旋」(大6・9)
 - 7 「或る施療患者」(大12・2)
- 1は、医師三谷が生活より學術を尊いとする信条で妻を解剖し粟粒結核を実証したが、その空虚な三十年の科学者としての心を描いた作品。
- 2は、姦淫罪により石で打ち殺されるべきところをイエスに救われたマгдаラのマリヤが、主の死を予感してナルドの香油で葬りの準備をし、弟子達皆が裏切っても一人キリストの信仰をこの世につなぎ止めた、という意図の戯曲。
- 3は、封建的閉鎖的農村の階級性と迷信と野獸性とが絡まる地獄社会を暴露した「飢餓の文学」。
- 4は、榮譽榮達のため国家の御用学説を選び、參議の娘と結婚したR教授の敗北人生は、動かぬ時計のように冷い、という悲劇作品。

5は、死をも畏れず金儲道に徹する逞しい相場師の話を、「私」は羨望の思いで聞く、という短編小説。

6は、日露戦争で大手柄を立てた凱旋老馬が若い御者に鞭打たれながら乗合馬車を引き甲州信濃路をとぼとぼ走る、その老馬とそれに同情する凱旋老將軍との淋しい末路を諷刺した客観小説。

7は、——町會議員に成り上った叔父の冷酷な仕打ちに耐えられず、十七歳の無害な平凡な原亀吉は東京へ出る。転々して結核で咯血し五年ぶり叔父の家へ。叔父と対立していた父と同様に土蔵前の三疊で死ぬのを避け公立療養所へ。——「尊い悟り」即ち、「この世は人を踏み倒して生きる外には生きやうがない」ことを悟った、という絶望人

間苦小説。

「實驗室」は大正六年九月、『中央公論』に発表された。前年の妻と父の死が転機となり、堰を切ったように文学活動に打ちこんだ「嘗てない多作をした年」が大正六年である。四十歳の有島は「惜みなく愛は奪ふ」「カインの末裔」「クララの出家」等を次々に発表し一躍文名をあげた。それでは作品の内容を紹介しよう。

主人公三谷、三十歳、内科副医長。彼は高い額と、高く長い鼻と、せばまった眉の下でじっと物を見入る大きな隻眼^めを持っていた。八月一日、朝七時、彼の妻三谷Y子、二十歳は多量の咯血にて死亡。院長や医員達は急激な乾酪性の結果だと云う。彼は粟粒結核だと信じ、その真相を解剖によって明らかにしよう^めと決心する。家族の者皆、反対。兄から「お前は自分の生活と學術とどちらが尊いと思つてゐるんだ」と問われ、「僕は學術を生活してゐるんです」と答える。八月二日、朝九時、同僚と助手との六人、兄も立ち合う。彼は自分の感情を見学の人達に気取られるのを厭^{いと}つた。メスを死体の喉^{のど}許にあてがうと、まっすぐに引きおろした。二人の看護婦は両手を顔にあてて下を向いた。著しく拡大した脾臓を割いて見ると粟粒狀の結節を到る所に発見した。彼は心の内で飛び上るような勇みを感じた。顔をメスで支離滅裂にするのは忍び難いことだった。しかし豊かな黒髪を眺めた時、サディスティクな欲望^{えき}が燃えた。メスで右の耳の下の髪分け目の所をつき刺した。ふと妻のこわばった手が力強く彼の無謀を遮^{さへぎ}るように思えた。兄は「氣でも狂つたのか」と云って氣絶して倒れた。彼もさすがに疲れ、解剖を交替した。助手の関口君に脳膜を注意して剝離するよう伝え、窓から樹々や芝草を眺めた。二人の乙女の看護婦が日影に現われた。初々しい語り合い、互いに手紙を読み合っているのを彼はしみじみ眺めた。「出來ました」助手の声に黙想は破れた。脳の中には咯痰様の色をした粟粒^{かた}がうさうさと現われた。院長はじめ多くの医員の所見を圧倒して勝利を得たのだ。胃壁には凝着した血

液が多量に黒々として現われ出た。「咯血を嚥下したんだ」と同僚の一人が叫んだ。彼はその時、妻の断末魔の光景が、學術の權威等その外總ての障礙物を爆彈のようにたたき破って彼の胸にまざまざと思い浮べられた。彼は武士が武器を捨てて遁世するような心持でゴムの手袋を脱ぎ捨て室を出た。死因が粟粒結核であるのを確かめた喜びも跡方もなく消えた。實驗室——彼の城と思って六年間立籠っていた實驗室を彼はいまいまいしげに見まわした。そこには一つとして命のあるものはなかった。自己偽瞞の世界が彼の眼の前で壊れた。身も魂も投げ込んだ積りで努力して來た三十年の生活は根こそぎにされた。重大な研究結果を発表する喜びに際会した時でも、よく考えてみるとそこには一味の物足らなさが附きまつわっていた。そういえば、つと過去に遡って、科學の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかかる覚悟をした苦痛の覚えがあった。六年間彼は心の底のこの不平に優しい耳を傾けてはやらなかった。窓から外の並木を眺めた。珍らしい樹の姿だ。一つの葉も光に向っていないのはない。世界の何億の人間の中から互いに夫婦になったその妻の肉片は寸断されアルコール漬け。昨日まで生きていた妻の形見。科學を生活する——何んというおそれた空言を彼は恥かしげもなくほざいたものだ。へ深い絶望に沈んだ彼はすがるやうな心になつてその瓶を四つとも取上げて自分の額にあてた。妻が死んでから今まで彼の強い意志でせきとめてゐた涙が、燃えるやうに、盲^めひた眼からもはら／＼と流れ落ちた。ゝ

以上が「實驗室」の内容である。

2

私が昭和四十二年九月、「實驗室」（有島武郎全集、新潮社、昭和四年）を読んだ時、「正直に生きろ。抒情という心の声を無視して、唯物的科學のみに生き甲斐を感じるはずがない。医者に文學好きが多いのも無理ない。三谷は有島の

想像上の分身だ。」というのが最初の感想であった。有島が「自作を読み直して、末尾の描寫の急噪に失するのを氣にしないではゐられ」なかつたため、《著作集に移す時に、結末の方の描寫を全然新たに書きかへ》たことを「予に對する公開狀の答」(大6・10『新潮』で知つた。それで私が讀んだ全集のは改稿作であるから、『中央公論』大正六年九月号の初出作を採そうと思つた。未見のままでいたが、山田昭夫『有島武郎・姿勢と軌跡』(右文書院、昭48)に所収された「実験室」覚え書」なる論文中に、削除された初出文を見つけた。初出作を自分で確認するまでの間、まず山田論文からそれを引用し、有島が削除した理由を作品の出来映に關連させて推測した山田説を要約紹介した後、私なりの推測も補足したい。原稿用紙四十五枚程度の短篇であるが、削除改稿部分は三ヶ所ある。

(1) 改稿作の中頃に、へたゞ瞬間の奇怪な妄想ではある。然しこの時彼の眼に映つた兄は兄のやうには見えなかつた。妻の死靈に乗り移られた不思議な野獸が、牙をむいて逼りかゝつて來たやうに思はれた。』という文章がある。初出文は「然し」以下は次のようである。「然し彼れは兄が彼れの妻と道ならぬ關係があつたのを直覺したと思つた。」

(2) 改稿作の末尾近くに、アルコール漬けの妻の肉片を見つめてゐる場面がある。「妻の——昨日までは兎も角も生きてゐて、彼と同じに人間であつたその妻の形見といつては、これだけになつてしまつたのだ。……如何にして二人は十億の人間の中から互々を選び出して夫婦になつたのだ。……如何してこの偶然のやうな不思議が彼の心をいつまでもくすゝり泣かせるのだ。」この部分の前後で削除された初出文は次のようである。「それを見てゐると昨日から今日にかけての、彼れと妻との不思議な交渉がつぎ／＼に頭に浮んで來た。彼れを殺さうとしたのも彼女だつた。彼れを生かしたのも彼女だつた。彼女の眞實が、今まで虐たげに虐たげてゐた彼れの眞實をとう／＼勝たしてゐたのだ。凡ての眞實が人を本統に生かすのではない。眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。彼れはこの

事實を妻によつて知らされたのだ。彼れは妻を徒死むだじにさせまいと思つた。ゝ

(3) (2)の「アルコール漬け」改稿文に直結して、「科學を生活する——何んといふおほそれた空言そらごとを彼は恥かしげもなくほざいたものだ。彼はどう考へてゐるか判らなかつた。然し彼は考へ直して見るより外に道を知らなかつた。ゝ」という文章が続いている。この部分の前後で有島が削除した初出文は次のようである。へ死よりも淋しい失望の淵に沈みはてゝ彼れは時のたつのを忘れてゐた。突然……突然、彼れは言葉通りに火の洗禮を受けた。あの時から何分を過ぎたのか、何時間を過ぎたのか……。何んにもない空虚のどん底に彼れは言葉通りに眼もくらむやうな火焰の燃え立つのを見た。彼れは生れかはつて椅子からおどり上つた。彼れの前には院長はゐなかつた。院長に調子を合せる醫員はゐなかつた。科學の強權もなかつた。研究に對する好奇心もなかつた。自己の力量に對する矜恃もなかつた。意地も張りもなかつた。／そこには自分の生命と血の通ひ合ふ人類の生活があつた。涙ぐましいまでになつかしい大きな人が彼れを抱きつゝんでゐた。彼れを失望のどん底に投げ込んだものが、又彼れをこの甦生に導いてくれたのだ。彼れは空虚な言葉で學術を生活するのだと傲語してゐた。今、彼れは本統に學術を生活する事を知つた。彼れの實驗室は再び生命を回復した。ゝ

以上の三ヶ所が、削除改稿部分である。ここで初出作発表当時の批評を紹介しておこう。当時の批評に共通するところは次のようである。——死因の真相を解剖で実証するまでの緊迫した描写は、確かに読者を魅了する。しかし科學者としての成功を頂上として、後半の主人公の内面的苦悶描写が余りに空疎な感を与え、特に作者の觀念的言葉が、突然、取つて付けたように散見しているところは理解できない。——これが同時代評にある共通するところである。

III その他の作品

それでは山田昭夫氏の著書に所収されてある同時代評を抜粋紹介しよう。

(1) 中村孤月「九月の文壇」三（『読売新聞』大正6・9・18）死体を解剖する時の状態が如何にも良く描かれて居る。そして其執刀する者の心の描写も良く描かれて居る。主人公は（人間は生活を其れ程局限して為なくてはならぬ理由はない）といふ正しい考へに達して居る。此考へに到達し得る性質を持つて居る主人公、もっと複雑した、深い混乱した考へが頭脳の中に起らなくてはならぬ。

(2) 西川勉「新秋の文壇」『文章世界』大正6・10）學術を生活してゐるのだと傲語してゐた虚榮を棄て、自分の生命と血の通ひ合ふ人類の生活が更に尊いのだといふ自負を得るに至ることを描いたものである。覚醒の力が割合に弱いのは何うしたことだ？「真実が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。」といふ自覚は出発点である。吾々の知りたいのは、彼の茲に達するまでの生活よりは、彼がこれから先何う生活して行くかといふことである。

(3) 江口渙「九月の小説と戯曲」『帝國文学』大正6・10）解剖の途中で不図兄との貞操を疑ふ主人公の幻想は全然無用のものである。其上科学者の片眼と云ふ事が作全体に少しも利いてゐない。

(4) 江口渙「有島武郎論」『文章世界』大正7・4）傑出してゐるのは重要ならざる前半、即ち医学博士が愛妻の死屍に対し純客観的態度を取つて肉を裂き骨を削るところは、しつとりと力の籠つた筆致に依つて申分なく描かれてゐる、然るに一度心境が回転して反省悔恨が生起して来るや作者の筆力は不思議に鈍つて全然空疎なものしか描けてゐない。殊に最後に「人間は唯愛に依つてのみ生き得る」と高唱してそれに依つて凡ての救済（くさい）をチャステイファイしようとする点に於いて、作者の心が少しも赤熱されてゐないためか、それは余りに空弱である。

(5) 堀木克三「有島武郎氏と芥川竜之介氏」『青年文壇』大正7・4）成程新らしみのある文章技巧であると感じた。私が訳の解らなく思つたことは最後の方に極く少し書かれた思想であつた。それは何のことか遂に解らなかつた。ただ一篇の立体的な作者の描写の中に、作者の緊張せる主観をいふと思つた。

(6) 志賀匠平「致命的な矛盾」(『新潮』大正7・9「有島武郎氏に対する公開状」) 息をつく暇もなく引入れられた読者は、突然辿りつた道を見失ふであらう。そして作者のぶしつけな——経験は無である、愛が全部である——といふ言葉を聞くであらう。この言葉はまったく作の持った言葉ではない。突然飛び出した作者の言葉である。あなたのやうな自己に誠実な方にとつては作の破綻はそのまま人格の破綻でなければならぬ。ここに於て吾々は、吾々が求めてゐた作の蹉跎の第一原因はあなた御自身の人格の分裂にあることを知る。即ちあなたのうちには絶えず善と悪とが戦つてゐる。愛と虚無とが戦つてゐる。二元は遂に二元に終つてゐる。あなたの昂奮した誠実な心は、誠実なるが故に苦しむ心は其の戦ひを回避しようとする。「實驗室」の破綻はそのためである。

以上が初出作発表当時の批評である。これら一般の批評と要望に答えて改稿し、「予に對する公開状の答」(『新潮』大正7・10)を發表したのである。公開状の中で、作品の欠点と有島の矛盾を最も的確に突いた批評は、大分県佐伯町の一読者・志賀匠平氏のものである。有島武郎は素直に次のように答えた。へ志賀氏が私の内部には明かに二元が働いてゐるのに早計にもそれに一元的の解決を求めようとあせる所に致命的な破綻があると論ぜられたのは、私の急所に觸れられたものとして容認します。「實驗室」が公けにされた時、私は自作を読み直して、末尾の描寫の急噪に失するのを氣にしないではゐられませんでした。隻眼の醫師が遂に到達すべき點はあそこに置かれた通りである事は、今も私は疑つてはゐません。然しあゝ手取り早くあの結論に達すると云ふ事はその場合の彼の心としてはあり得ない事であるのを痛切に感じました。それ故私はあれを著作集に移す時に、今一度あの主人公の心になつて考へました。而して結末の方の描寫を全然新たに書きかへました。へ

そして「二つの道」(明43・5)、「も一度「二つの道」に就て」(明43・8)を経て、二元分裂争闘に煩悶しながらも、一元觀を確立しつつあることを次のように述べている。

へ私は實際今でも心の中には苦しい二元的争闘を意識してゐます。唯私には二元がいつまでも二元であつてはならぬと云ふ要求と、おぼろげながら一元的境地の何者であらうかと云ふ解決を持つやうになつたのです。それを私は「惜みなく愛は奪ふ」「草の葉」等に於て表現しようと試みてゐます。然し作物の中に私の一元觀を絕對肯定的に表現したものではありません。又實際あり得ないので。ある人は私が煩悶ばかりを描いて解決を與へてゐないのを非常にもどかしがつて責めてくれました。然し私は煩悶を描いてかすかな解決の暗示を提供する、その外に出るのは自分を偽るものだと思つてゐます。》

即ち、「惜みなく愛は奪ふ」は自己個性第一を、「草の葉」は自己魂第一を宣言する一元觀である。「草の葉」同様、ホイットマンの影響を受けて「内部生活の現象」(大正3・7)でも自己魂第一を強調し、二元対立を脱却しつつあった。

さてどの程度読者の要望に答えた改稿作であるかを見ておこう。削除改稿部分三ヶ所について。

- (1)は、江口氏の要望に答え、へ道ならぬ關係があつたのを直覺した」という近親相姦を思はず文を削除してある。
- (2)は、同時代評の五氏皆の要望に答え、自己の思想を觀念的に挿入していることに気付いてその部分を削除し、へ主人公の心になつてゝ改稿を加えているところである。尚、削除したへ眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。……という部分は、へ自己の本質は愛だ。だから愛のみが藝術を生む胎^はなのだ。愛があつて甫めて眞は生れるのだ。》(「藝術を生む胎」大正6・10)、へ私共の内部に愛の働く場合には、その生活それ自身が藝術なのであります。》(講演「内部生活の現象」大正9・1)という有島の愛の思想が思はず吐露している部分である。吐露というより自分の思想を忠実なまでに作品に反映させている一例とも云えよう。

(3)は、皆の要望に答え全面的に削除した部分になつてゐる。最も批判の集中した部分であつたからである。ここで削除改稿理由に関する山田昭夫氏の見解を要約紹介しておこう。

(1) 〈道ならぬ關係〉が三谷の〈瞬間の妄想〉であっても、改稿しなければ、兄が解剖阻止者であり三谷批判者であるという有島の所期の意図は瓦解してしまし、主題が分裂してしまからである。

(2) 改稿文の方が初出文の説教調をとりさげ、三谷の心理説明に修正してあるのでよくなっている。〈實驗のみしてゐて經驗をしない私を見出した時、私はなんともいへない空虚を感じ始めた。〉(「惜みなく愛は奪ふ」5) 〈經驗とは要するに私の生活の殘滓である。〉(同11) という考え方を導入すれば、その唐突な初出文も少しは納得できるが、どう見ても有島の持論の一端を吹聴しているに等しい。

(3) 〈涙ぐましいまでになつかしい大きな人〉とは誰のことなのか、あまりに唐突であろう。この部分の前半と後半には大きな飛躍があり、心理的必然性は全くないといわなければならない。字義どりの〈突然〉きまるゝ火の洗禮〉であり〈甦生〉であるにすぎない。

以上が山田昭夫氏の見解である。その中で(1)と(2)については私も同感である。しかし(3)については私の意見を後述べたい。

昭和五十一年二月、『中央公論』大正六年九月号掲載の初出作を入手した。そこで問題の後半部であるが、改稿作との相違を見よう。まず有島は初出作に対する酷評に答え、観念的な思想を述べた部分を削除している。また、科学者として勝利の絶頂にあつても自己偽瞞があつたという三谷の悔恨心理についての描写は、推敲され丁寧で分りやすい表現になっている。語句の変更に際しても細かい注意が払われている。一例を挙げると、〈自己瞞着〉を〈自己偽瞞〉と用語を替え、副詞へやがてへ、読点へ、をを加え、〈小さくなつてゐた〉を〈小さくなつてひしやげてゐた〉と文節を加えたりしている。先に山田氏の著書から初出作と改稿作との主な相違点三ヶ所を引用しておいたが、検証した結果、大体その通りである。ただ私の間違いで(2)と(3)の順序が逆であつたこと、(3)に続く四つの削除文があ

ったことを訂正追加しておきたい。その削除文は〈誕生〉体験に直結する文章である故、以後、(3)に含めることにする。次のような文章である。

へ彼れは小兒のやうな鮮やかな心であたりを見廻した。是れまで堅く硬く見えてゐた金屬やガラスの機械が、有機物のやうなしなやかさと親しさをもつて眺めやられた。何物を見ても彼れの心には大きな、氣取らない、ありのままの暖い愛が湧き上つた。彼れは物珍しげに机の上の顯微鏡を見た。

前に、削除改稿理由に関する山田昭夫氏の見解を紹介した。その中で(3)については氏の見解に賛成できなかったのだ、ここで私見を述べることにする。結論を先に述べると、(3)は突然の火の洗礼による新生物語を意図した文章であると私は認識している。即ち、潜在信仰が思わず吐露してしまつた文章であるとも云える。それでは本文解釈に沿つて私の認識を論述してみよう。

へ死よりも淋しい失望の淵に沈みはてゝ彼れは時のたつのを忘れてゐた。突然……突然、彼れは言葉通りに火の洗礼を受けた。あの時から何分を過ぎたのか、何時間を過ぎたのか……。何んにもない空虚のどん底に彼れは言葉通りに眼もくらむやうな火焰の燃え立つのを見た。彼れは生れかはつて椅子からおどり上つた。以上の文章は信仰体験が瞬間の体験であることを語っている、と私は読んでゐる。とすると次の〈大きな人〉が神、又はキリストを指しているところと見るのが自然であろう。へそこには自分の生命と血の通ひ合ふ人類の生活があつた。涙ぐましいまでになつかしい大きな人が彼れを抱きつゝゐた。彼れを失望のどん底に投げ込んだものが、又彼れをこの誕生に導いてくれたのだ。初出作を実見して、〈大きな人〉と〇印が敢て付けてあるのに氣付いた。(山田氏の引用文には付いていなかった。)初出作本文中、〇印が付いてゐるのは〈大きな人〉だけであり、有島が最重要視している〈人〉であつたことを意味している。〇印と解せよう。かくして生れわかつた三谷が晴々とあたりを見廻すという文章が続くわけである。

へ今、彼れは本統に學術を生活する事を知つた。彼れの實驗室は再び生命を回復した。彼れは小兒のやうな鮮やかな心であたりを見廻した。何物を見ても彼れの心には大きな、氣取らない、ありのまゝの暖い愛が湧き上つた。〳

このように読み取つて来れば、削除された文章(2)の最終部分にある「眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。」という文も理解できるようになる。即ち、この「愛」が、妻の犠牲を契機としたキリスト教的愛であることは明白であるからである。

削除改稿部分(3)が突然の火の洗礼による新生物語を意図した文章であると認識したのは、今述べたように本文の文脈に沿つて内容を把握した結果である。決して私の思いつきではない。そして教会脱会(明治43・5)、七年後(大正6・8・17、輕井沢)の時期にこのような文章を書くこと自体、まだわずかながら信仰が残つていたと推測させよう。事実、改稿作では早速この信仰体験の文章を削除している。即ち削除した理由の一つに、世間体を気にする、有島に、背教を宣言していた以上、それらしい著述と言動を続けようという心理が働いたからである、という理由が考えられる。(他の理由には、彼自身が「ああ手取り早くあの結論に達すると云ふ事はあり得ない」と云っている通り「末尾の描寫の急噪」が挙げられる。)であるから先に私は「潜在信仰が思はず吐露してしまつた文章である。」と述べたのである。そして私は、教会脱会后、有島に潜在信仰ありとする根拠の第八番目の資料として、(3)を挙げることにしている。(第七までの資料は第一編 第二部「裏切者意識と潜在信仰」を参照されたい。)

それでは作品をもう一度読み、氣付いた点を順に整理しておこう。テキストは昭和四年の新潮社の全集を使用している。

第一段 解剖開始まで(二九六頁15行まで)。妻の死因に関する院長派の乾酪性肺炎説と三谷の粟粒結核説との意見対立。そして三谷が解剖決意するという最初の部分から、「實驗室」は正に、実験的、作品の印象を与えながら読者を引

き込む。

第二段 解剖成功まで（三〇三頁7行まで）。ヘメスを死體の喉許にあてがつたと思ふと、覚えのある腕の冴えを見せて、まっすぐに引きおろした。緊張感漂う雰囲気が続く。果物のような内臓。粟粒状の結節発見!!（彼は心の内で飛上るやうな勇みを感じた。）メスで頭蓋骨を貫通したいという三谷のサディスティクなどす黒い衝動は、この作品の一つの謎であると山田昭夫氏は指摘する。

私はこの点を次のように考えている。攻撃的性交、即ち女性を犯したいという欲望の表われ方の一つ、愛する者を完全に占有する行為、惜みなく奪う行為、と見ている。（熱狂的な有島内部の一面をかいまみる思いである。）兄、失神して倒れた後、疲れた三谷は助手の関口君に脳の扶出を命じて、窓の外を眺める。真夏の光の中で若い看護婦たちの語らいを眺めている背後から、自分の妻の頭蓋骨が鋸でこしこしかれる音が聞えてくるという極端な明暗描写は悲惨さを深める効果がある。次に兄の（學術よりも生活の方が尊い）という意見を容認し始める心理描写が続く。（生活を生きて見る事ではない。経験する事だ。實驗する事ではない。……自分は生活をそれほど局限して學術に奉事する満足と覺悟とをほんとに持つてゐるのか。）やがて助手の（出来ました。）という声。三谷はづぶりと刃先を肺臓に入れた。（略啖様の色をした粟粒がうさうさする程現はれ出た。）三谷説の完全な勝利。

第三段 限らない後悔

（彼の目的が達せられると、彼の熱心は急に衰へて一時も早く悲しい孤獨に歸りたかつた。彼は心の底にすゝり泣きのやうな痛みを感じた。）そして略血を嚥下した胃壁に黒々と凝固している血を見た瞬間、（妻の斷末魔の光景が、彼の考へてゐた學術の權威、その外總ての障礙物を爆彈のやうにたゞき破つて、いきなり彼の胸にまぎ／＼と思ひ浮べられたからだ。）と続いている。この回想場面設定について山田昭夫氏は、便宜的である、記憶映像の方が現実の経験よりも劇烈であるかのようなのである、と批判している。しかし私は、斷末魔の場面設定を、その直後に続く次のよ

うな文章がごく自然に読み取れることから便宜的であるとは思えない。へ胃を鉄で開いて見た瞬間に、是れだけの記憶が、同時に、その癖正確な順序を取つてはつきり、と彼の心を襲つたのだ。最後の絶叫を彼はもう一度たしかに聞いたと思つた。三日も不眠不休でゐた彼の脳は軽度の貧血を起して、胸許に嘔氣をさへ覺えた。むしろ断末魔の描写を挿入した方が、作品の現実性と写実性を深める効果があると考ええる。

へたつた先刻心ゆくまで味つた近頃でない喜び——その喜びは跡方もなく消えてしまつた。「稚氣、衝氣！ 恥ぢて死ね」と限らない後悔の念に打たれている三谷は、既に兄の意見を容認しているはずである。それであるのにへ小使が来て、兄が書き残したといふ封書を「開こうとしていない。この点について山田氏は、封書の内容は、三谷に翻意を迫る勧告的なものか、又は義絶の宣告などが推測されるが、いずれにしても兄の封書を度忘れしたことは作品構成上の一疑点たり得る、と指摘している。確かに指摘されれば、一疑点であるとも思える。だが私は、兄の封書を度忘れする程、へ性急な彼の本心は瞬時も彼に餘裕を與へて置かなかつた。」と読む方が自然ではなからうかと思う。即ち後悔の念が深刻すぎて封書を忘れたと解釈したい。

次に、三谷の外面の様子と心理描写が続く。へ實驗室——彼の宮殿とも昨日まで思つて、この六年間立籠つてゐた實驗室を彼はいまいまいげに見まはした。へさういへばずつと過去に遡つて、科學の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかゝる覺悟をした苦痛の覺えがあつた。この心理描写は、有島の仮想自己を思わせて興味深いが、後で論じたい。

その次に、初出作では問題の部分である削除文(3)、即ちへ突然、彼れは言葉通りに火の洗禮を受けた。へという信仰体験の文章と、削除文(2)のへそれを見てゐると昨日から今日にかけての、彼れと妻との不思議な交渉がつぎ／＼に頭に浮んで來た。……。眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。へという文章が続いている。これらの文章は読者からの酷評を受けたため、有島は三谷の悔恨の心理描写に改稿している。へ妻の——昨日までは兎も角も生き

てゐて、彼と同じに人間であつたその妻の形見といつては、これだけになつてしまつたのだ。……。科學を生活する——何んといふおはそれた空言を彼は恥かしげもなくほざいたものだ。》確かに改稿作の方が、三谷の強がりの心情が後悔の念に逆転しているので、分りやすい。

作品の最後は次の文で終っている。《妻が死んでから今まで彼の強い意志でせきとめてゐた涙が、燃えるやうに、盲めくらひた眼めくらからものはら／＼と流れ落ちた。》

文中の《盲めくらひた眼めくらからものはら／＼》という連文節は、初出作では簡単に《その一つの眼から》であつた。この隻眼について、江口氏は「片眼と云ふ事が作全体に少しも利いてゐない」と評し、山田氏も「精神の不具性の象徴であるが、要らざる作為である。私は、いかにもわざとらしいので、三谷が医師になつてからの実験上の傷害で隻眼になつたとしてもしておいたら、まだしもではなかつたかと思う。」と云つて江口評にはほ同調している。しかし「少しも利いてゐない」と江口氏から批判されていながら改稿作でも、有島は三谷を隻眼ひための医師にしてある。三谷を隻眼のままにしてゐたわけは、最初はまず医師、即ち専門家は、人格的にも、《片輪者》であることを片眼で象徴し「惜みなく愛は奪ふ」6、7章、最後に《涙が盲めくらひた眼めくらからものはら／＼と流れ落ちた》(傍点は筆者)とすること、《片輪者》の悔悛と覚醒を象徴させたいという一貫した意図が有島にあつたからである、と推測しておこう。

以上までの論述が、作品をもう一度読み三段に区分けし、文脈をたどりながら考察して新たに気付いた点を順に整理したものである。(第一段「解剖開始まで」二九六頁15行まで。第二段「解剖成功まで」又は「三谷説勝利」三〇三頁7行まで。第三段「限らない後悔」三〇三頁8行から終りまで。)

ここで作品執筆前後の事情を調べておこう。まず大正六年七月、『新潮』に発表した「平凡人の手紙」に着目しよう。大正五年八月二日、安子他界後、一周忌も経ていないのに後妻の嚙をたてる世人に対する皮肉小説である。《突

然運命のやうな女が現れて來さへしなければ——戀愛關係を作る心持はまだ起つて來ない。』という平凡人・有島の心境が主題になっている。へ何處に行く。平塚に。妻の一周忌の記念に世話になつた病院の患者の所に花束を持つて行く所だ。』という文章がある。この文章が予言であつたかのように、大正六年八月二日の一周忌の日記にはへ花を杏雲堂分院に送る事。壬生馬夫婦と青山へ行く。午後から平塚へ行き、旭館に宿泊。』という実践の記述がある。続いて問題は、命日の前日の八月一日の日記である。へ朝、大學病院に行き、市川厚一氏に會つた。氏は彼の實驗室及び解剖を見せてくれた。死體は肺病でなくなつた十八の娘だつた。午後は、ひっそりした部屋で安子の事を考へつゝ過す。』山田昭夫氏の調査と見解によれば、「着稿十七日前に東大医学部の山極勝三郎教授の病理学研究室を訪れ、当時東大に派遣されていた北大農学部獣医学科出身の市川厚一氏（後・北大教授）がいた便宜で死体解剖を実見し、構想しつゝあつた作品の解剖場面の現実的裏付けを得て着稿の機が熟してきた、』ということになる。八月三日へ東京に歸着、八月五日へ輕井澤に行く。』そこで、初出作は大正六年八月十七日から三晩徹夜で一氣呵成に書き上げられ、十九日に脱稿した。へ昨日まで僕は原稿と随分激しい戦を戦ひました。三晩ほどは殆んど不眠に近い夜が過ぎました。結果は努力に對してみじめなものではありませんが、思想界に、僕相當の寄與はし得たことを自信して居ります。』（大正六年八月二十日、夜、於輕井沢）という書簡を、八木澤善次氏に送っている。八月二十七日へ輕井澤から歸り、九月六日、吹田順助氏に同内容の書簡を送った。へ「實驗室」は私の今の處では少し自信を持つてもいゝものと思つて居ます。』五日後、九月十一日の日記にへ吹田君より「實驗室」の評をなし來る。』とある。返信を九月三十日、吹田に送った。へ御批評を有難う。藥になります。無條件で感心していただくまで私も努力する積りですから』とある。

さてへ思想界に僕相當の寄與はし得た』とは何か。詳細は後述するが、寄与とは有島が以前から考へていた自然科学に對する警告である（大正二年「草の葉」）。そして吹田からの評は、想像するに、後半の觀念的文章に對する助言であつたであらう。それに氣付いた有島は九月三十日にへ藥になります』と感謝し、既に改稿の氣持が生じていたこと

を示している。

次に主人公・三谷内科副医長を描くための最初の契機を有島に与えた人物は古賀博士である。（三谷が有島の仮想自己であることは創作動機のところでも後述したい。）古賀博士が反対論者を沈黙せしめたこと、その古賀博士に神尾の父と有島との二人が安子の病状を報告していること、等の記述が大正五年四月八日の日記にあるからである。それは次のような文章である。

例年の醫會で行はれた大學派と北里派との大論戰のことを話す。新聞紙の報ずるところによれば、傳染病研究所の新所長芳賀イシオ博士は古賀博士の注射液について痛烈に攻撃して、古賀博士の液に酷似した液をモルモットに注射したが、良結果を齎^{もたら}さなかつたと述べた。古賀博士は立つてこの攻撃に答へ、實驗に使用されたモルモットの數が三つの場合に於いて違つて居たと云ふ事實は、實驗者の不正確さを明示し、その上尙芳賀博士が使用したと云はれた液が自分の發明したものに酷似してゐるとは認められないと云つた。古賀博士は附言して實驗の失敗を示すもの多々あること、即ち注射液の量は體質と病氣によつて異なるものであると答へた。古賀博士は相手の急所を突いたらしく、反對論者を沈黙せしめてしまつたさうだ。我々は一語に古賀博士を訪れ、安子の病状を報告し、注射を暫く延ばすことを辯解して置かうと約束した。（略）結核病の性質をもつとよく知りたいので、「最近結核病論」と云ふ本を買ふ。

このように有島が新聞情報で医学会の大論戰を知ったことは、「實驗室」創作の間接的契機となつたのである。そして強いて云うならば三谷の最初のモデルは古賀博士であり、次第に武郎自身の潜在意識を三谷の心理に仮託して表わして行くわけである。

次にY子の病床での咯血描写は、病床の安子と死に臨んだ父についての記憶が反映している。へ安子から手紙で、非常に澤山咯血したと云つてきた。》(大正5・6・8、日記) へ平塚へ行く。第一に長野博士に會う。一昨日の眞夜中、血をコップに一杯程吐いた。》(大正5・6・9、以後、日記と記入することを略す) Y子に安子の結核が反映している件については、鎌田研一、本多秋五、沢田昭夫の諸氏も既に指摘しているが、父の死が反映されているとは誰も指摘していない。へ二十七日の夜からの吐血と來てはすさまじいもので、カッと吐くとまはりで看護するもの是不思面を伏せて仰ぎ見る事が出来ない程であつた。》(大正5・12・14、於麴町、足助素一宛書簡) これらの記憶が、死と戦う妻Y子の断末魔の光景描写に反映されていると見てよい。

『安子の死と其の前後』(年譜解説)

大正四年二月 安子平塚杏雲堂病院

三月 札幌農科大學辭表麴町自宅

七月と十二月 「宣言」を『白樺』(BもY子も結核、書簡体小説)

九月 未定稿「サムソンとデリラ」(デリラも死ぬ。「士師記」十六章)

大正五年一月 未定稿「洪水の前」を『白樺』(ナア、剣で殺さる)

三月 「首途」を『白樺』、「フランセスの顔」を『新家庭』

八月 「潮霧」(一、二、三日『時事新報』(室蘭・函館間の汽船が奇跡的に助かる))

八月二日 安子死去二十七歳、結核、七年間の結婚生活、武郎三十八歳(「松蟲」安子遺稿集)

十二月四日 巖父・武、胃癌死去、七十三歳(長男武郎、解放さる)

大正六年五月 「死と其の前後」を『新公論』(妻の死の悲しみと愛)

六月 「惜しみなく愛は奪ふ」を『新潮』（神の愛に對抗、自己愛主張）

七月 「平凡人の手紙」を『新潮』（一周忌平塚行き予言、運命の女）「カインの末裔」を『新小説』

九月 「實驗室」を『中央公論』（Y子結核死去二十歳、安子の発音頭がY、YASUKO）

「クララの出家」を『太陽』（無意識に「安子の出家と天国行き」）

十月 「藝術を生む胎」を『新潮』（智情意は愛により三位一体）

このように年譜を見ると、安子看病している時の作品群には、ヒロインに死に影があるのに気付くであろう。「宣言」のY子の結核という病は、当時、不治の病、死に至る病であった。死は絶対的現象。デリラもナアマも死んでいる。

「創作動機」 ①安子の死、②有島の自然科学観、③仮想自己。①年譜や執筆前後の事情を調べることで、安子の死が創作動機にあずかっていた、ということが理解できた。それでは②について考察して行こう。

「自然科学観」 〈思想界に僕相當の寄與はし得た〉という自然科学に対する警告について見ておこう。そのためにまず有島の自然科学観を整理しておこう。

3

1 「草の葉」（ホイットマンに關する考察、大正二年七月『白樺』）〈私達は科學は破産といふ事を耳にする。それは科學が到底私達を救ひ得ないと訴へる斷定的な叫び聲だ。而してこの事實の根底を形造つてゐるものゝ一つ——而して唯一とも云ふべきほど大なる一つは——科學者が魂と仕事とを全く引き離して出發したその點にあると云はねばなら

ぬ。……全體科學者がその魂を没却して貢獻しようといふ科學とは何であるか。若しそれが、成就の曉に、人の魂に何等直接の交渉を要求し得ないものだとするならば、私共が日常生活に附け加へ得た色彩も便利も畢竟は大事の前の小事である。無駄事である。」

2 「藝術を生む胎」(大正六年十月『新潮』、「實驗室」一ヶ月後) (藝術を生むものは愛(活動的、著者)である。愛があつて甫めて眞(靜止不變)は生れるのだ。眞の藝術品は畢竟藝術家自身の自己表現の外であり得ない。而して自己の本質は愛だ。愛が事物を選択する、其の能力を假りに智と云ひ、選擇したものに働きかける、其の能力を假りに情と云ひ、働きかけた作用を永續する、其の能力を假りに意志と云ふのだ。智情意は畢竟愛に裏書きされて三位一體となるのだ。眞を識別するのは智力に在る事はいふ迄もない。然るに智力は愛の作用の一面にしか過ぎない。智力が獨り働く所に自己全體の働くといふ事は考へられない。)

3 「描かれた花」(大正十一年七月『改造』、「藝術と科學との關係」) (藝術家は自然の或る斷面を誇大するに過ぎない。自然をそのままに客觀するものは科學者である。……。人間の本性なる誇大的傾向から去勢されてゐなければならぬのだ。人間を裏切つて自然への降伏を敢てするものは彼だ。古人が惡魔と名づけたところのものは、即ち近代が科學者と呼ぶところのものだ。)

山田昭夫氏曰く。〈惡魔〉視された科學者は、〈愛〉不在の科學者にはかならない。この意味でも有島は三谷の兄に仮託して三谷の急所を批判し得たのである。十九世紀後半における急速調の科學の發展にとまなう科學万能思想・科學者盲拝思想に一矢を放ったという文明批評の歴史的即時性は認められねばならない。

瀬沼茂樹氏曰く。十九世紀の科學思想に人間の立場から批判を加えた思想小説(角川、近代文學大系33)。

4 「惜みなく愛は奪ふ」(初稿大正六年六月、定稿大正九年六月) (専門家となるといふことは、自分(魂、愛)を人間生活のある一部門(智)に賣り渡すことでもある。多かれ少かれ外界の要求の犠牲となることである。)(七章) (生活の

習俗性の要求にのみ耳を傾けて、自分を置きざりにして、外部（科学者としての仕事）にのみ身賣りをする専門家（この場合、自然科学者）は、既に人間ではなくして、いかに立派でも、立派な一つの機械にしか過ぎない。（六章）

本多秋五氏は「實驗室」の二つのモチーフの一つに、六章のこの文を挙げている。第二のモチーフは病床の安子夫人の記憶である。

5 「人間は誇大する動物である」（大正十一年八月『秋田魁新報』）へ前者は創造的藝術的能力と呼ばれ、後者は批評的科學精神と稱へられた。此の批評的精神は一見人間の生長に取つて悪い力の如であるが、併し良い役目がある。一體人間は屢々誇大の誇大を行ふものである。誇大の誇大は誤りである。批評的精神は此誤りを破壊するのである。」

6 「藝術を培ふ科學精神」（大正十二年五月『科學畫報』）へ科學精神は藝術のために、最も必要な肥料である。へ自然界から人間界に移るに隨ひ、……、殊に人の心的活動を觀察するに及んで、科學者は公平無私であることができぬといふ事實が、從來は見のがされて來たのであつた。」

以上の六點に集約された「有島の自然科学觀」を整理してみよう。科學精神は、芸術のために必要な肥料であるばかりでなく、人間が陥りやすい誇大し過ぎの誤りを訂正する役目もあるのだが、「科學する」とは「智」の働きであつて人間全体の活動ではない。智情意が人間の活動全体を占めている。そして人間の自己の本質は愛であり、智情意は愛に支えられ三位一体となっている。故に智か独り働く所に自己全体が働くと考える自然科学者や専門家は片輪者、機械、惡魔となりやすい。

有島はこのような自然科学觀を医師三谷に仮託して論述したのである。有島が「實驗室」をへ思想界に僕相當の寄與はし得た作品であると自賛したわけは、自然科学に対する警告的作品という意味で自信があつたからであらう。

山田昭夫氏は「實驗室」不評の理由を次のように論じている。

作品のパン種が妻・安子の死後に得られたのではないかと擬せられる点にある。というのは、たとえば「或る女」

には「私は藝術を已むにやまれぬ生の表現だと信ずるものです。私は自分の生の苦痛をあつて叫んだのです。」（書簡、大正8・10・19 石坂養平宛）という有島の言葉を額面どおり信じ得る長い間の悪戦苦闘があった。しかし「實驗室」には、それに対応するような「智的生活」否定の蓄積された「生の苦痛」が投入されておられないからである。科学者たる一医師の妻を失なった悲苦は作者の一年前の経験であったが、科学のために科学に殉じようとした医師の人間の感情の喪失苦は、有島の「生の苦痛」そのものではなく、観念的想定による消極的「生の苦痛」である。醗酵不充分的な早産気味の作品であったと思われる。

私はこの山田説の中の「實驗室」には、それに対応するような「智的生活」否定の蓄積された「生の苦痛」が投入されておらない……観念的想定による消極的「生の苦痛」である。」という見方には賛同できない。即ち私は、わずかではあるが医師三谷に有島の「生の苦痛」が反映されている、という見解を持っている。前に、六点に集約して有島の自然科学観を紹介した。その中で「實驗室」発表（大正六年九月）前後のは次の二点である。即ち「科學が到底私達を救ひ得ないと訴へる」「草の葉」（大正二年七月）と「専門家は一つの機械にしか過ぎない」と力説する「惜みなく愛は奪ふ」六章（大正九年六月、定稿）とである。そしてこの二点だけでも有島の自然科学観の要点は充分に論じられている。であるから私は、有島は自分の自然科学観を医師三谷に仮託して論述したのである、と述べたのである。となれば「智的生活」否定の蓄積された「生の苦痛」が投入されておらない」という山田説を全面的に正当視するわけにはいかなくなるであらう。

それでは「生の苦痛」体験が「實驗室」執筆時（大正六年八月、三十九歳）を現在として遠く二十年前、近くは十年前から実際にあったことを明らかにしておこう。そして同時に医師三谷が有島の仮想自己であることを次の①②事項で論じてみたいと思う。即ち創作動機③の考察に相当するわけである。

〔仮想自己〕（医師三谷——有島が教授の道を進んだ場合）

①「農学」対「文学と歴史」（明治二十九年九月、予科五年、十九歳六ヶ月、約二十年前のへ生の苦痛）本来、文学又は歴史専攻に適している武郎には、農学専攻することで、自然科学に対する心の矛盾があつたに違いない。

薩摩出身の傑物たちが、相次いで政治的陰謀の刃に倒れていった時（森有礼、西郷隆盛、大久保利通）、世間的な功名を疑い、漠然とした農業へのあこがれが少年武郎の心に芽生えていた。そして学習院にも反抗していた（瀬沼茂樹氏の解説文を参考、角川文庫、大系33）。十九歳になった明治二十九年八月末、青年の夢を抱きつつ開拓地北海道へ渡る。

クラークの名で有名な札幌農学校へ入学。長男と家からの解放である。しかし面接の新渡戸教授に「文学と歴史を勉強したい」と答え、教授を困惑させている。——青年時代は自己の可能性を過大評価しやすい。そして又、自分の資質と全然逆の方面に関心を向けている傾向もある。逆方面に進みつつ、その意識の底には潜在的希望がある。即ち、最初、自然科学を学ぶことは、将来、自分の本来の資質に適した道で精進する場合に（有島の場合は芸術）、予想もできない力の源を蓄積していることになる、という潜在的希望である。——とはいえ、本来、文学又は歴史専攻に適している武郎には、農学専攻することに、心の〈苦痛〉があつたに違いない。事実、彼の日記には農学に関する記事が少い。（例えば、明治三十年六月二十五日〈動物の試験〉、七月十日〈第三學期成績表〉、九月二十七日〈大脇教授の農業通論〉、九月二十九日〈測量〉、十一月十一日〈農業實習〉等、その他）。一方、文学、歴史、参禅、キリスト教信仰、等の記事が多い。卒業論文も「鎌倉幕府初代の農政」と題しており、自然科学的ではなく社会科学論文である。

②「学問」（大学教授）対「芸術」（創作）（明治四十年十二月五日、講師、二十九歳九ヶ月、約十年前からのへ生の苦痛）父武は、官立大学教授を望んでいた。もし父が更に長生きしていたならば（親孝行な長男武郎のこと）、芸術家、有島武郎は出現していなかったであらう。妻と父の死が転機となり堰を切ったように創作活動に打ち込んでいる事

実に着目しよう。武郎は英語、倫理、社会問題、文学史、等を講じていた。とは云つても大学は学問研究の道場である。有島本来の力を發揮し得る道は、芸術の道、創作の道、「生れ出づる悩み」の道である。——二者択一の煩悶、二律背反的苦悩。〈私「有島」〉は学究生活からついに創作活動へ。〈木本少年「木田金次郎」〉も漁師か画家か、生活か芸術かで苦悩している。二人は異体同心の感慨で結び合う。大正六年十月、木田是有島に鉛筆素描帳二冊送っている。——「生れ出づる悩み」という作品があること自体、研究家であるよりも芸術家であり、〈生の苦痛〉があつたことの証拠になっている。

以上の①②が二十年前と十年前にあつた〈生の苦痛〉である。即ち自然科学や研究家に関する生の苦痛である。次の③と④は「實驗室」発表以後の事項であるので創作動機に相当はしないが、医師三谷に仮託した有島の〈生の苦痛〉の後遺症と見做すこともできる。即ち三谷が有島の仮想自己であつたことを間接的に再確認するためにも重要な事項である。

③ 有島の作品には、自己の資質と反対である自然科学を専攻した人間、又は自然科学に憧れている人間が作品の主人公として登場している場合がある。三谷や「星座」(大正10、11年)の園がその例である。有島の息を十分に受けている二十二歳の園は童貞で清纯内攻型である。園に「科學者として立たうとしてゐる以上、今後は文學などに未練を繋ぐ姑息を自分に許すまいと決心」させている(二章)。そして動物学の野村教授の「何んのこだはりもなく研究に没頭し切つてゐるやうな後姿を見送りながら、園は何んとなく恥を覺えた」(三章)と有島は書いている。未完の太作故、園がはたして科學者になれたかどうか疑問ではある。しかしともあれ園の心境に農学校時代の有島の心境が反映していることは確かである。園が有島の息を十分に受けた分身であることは、星野勇三、伊藤整、山田昭夫の諸氏も認めている(山田昭夫著、16頁)。「實驗室」執筆から四年後、大正十年執筆の「星座」の園について考察を進めてく

ると、約二十四年前の自然科学か文学か二者択一的〈生の苦痛〉の後遺症をここでも読み取ることができるのである。

④ 医師三谷に仮託した有島の〈生の苦痛〉の後遺症[、]といえは、「實驗室」執筆から五ヶ月後の大正七年一月『新潮』に発表した「小さき者へ」の中の〈私〉の痛ましい言葉が連想される。有島が幼い自分の子供たちに直接語りかける次の文章を見ておこう。

お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいゝのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。……。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就^{じやうじゆ}してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を見出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。

この引用文の中で「一つの創作」とは「實驗室」を指していると私は考えている。私の指摘が正しいとするならば、この引用文と初出作の末尾にある次の文章とは、共に表現の背後にある作者の意図が同じ内容（妻の犠牲による夫の新生）であるのに気付くであらう。

彼れを殺さうとしたのも彼女だつた。彼れを生かしたのも彼女だつた。彼女の眞實が、今まで虐たげに虐たげてゐた彼れの眞實をとう／＼勝たしてくれたのだ。凡ての眞實が人を本統に生かすのではない。眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。彼れはこの事實を妻によつて知らされたのだ。彼れは妻を徒死^{とどしに}させまいと思つた。

このように二つの文章が同じ内容を持ちつつ同調していることを確認できれば、改稿作後半にある次の文章は、〈實驗〉を〈研究〉に〈彼〉を〈私〉に置き換えると、有島がそのまま学問の道に進んでいた場合の肉声・うめき声に聞

こえてくるであらう。

さういへば、實驗に熱中してゐた最中でも、或る重大な研究結果を發表する喜びに際會した時でも、よく考へて見るとそこには一味の物足らなさが附きまづはつてゐた。さういへば、つと過去に遡つて、科學の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかゝる覺悟をした苦痛の覺えがあつた。六年間彼は、心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかつたのだ。而して強ひてそれがあるべき事であると思ひなさうと努めてゐたのだ。白紙のやうな無益な過去を彼の眼の前の塵によごれた冷やかな壁に見た。砂の上に立てられた三十年の空しい樓閣——それは今跡方もなく一陣の嵐に頽れてしまつた。彼の隻眼は抑へ切れぬ悲痛の涙を湛へてまじく——と實驗室を見廻した。

醫師三谷は有島が教授の道を進んだ場合の「へ生の苦痛」を體現した假想自己であることを①②③④と考察を続けることで論証してきた。そして同時に「へ生の苦痛」が投入されておらない」という山田説に賛同できなかった理由も論述したことになる。

ここでその後の調査で得た資料を加えておきたい。自然科学よりも文学・史学に適していたという①の項があつた。この事実を論証するための資料の一つに明治三十年十二月二十一日の日記がある。即ち地質の落第点を嘆く次の文である。へ地質に於て五十八點なる落第點を取りし事、しかも落第點を取りしものゝ内に於て余が其魁たりし事は特筆大書してこれを永く記憶に止めざる可からず。

次に父武が、武郎が官立大学教授になることを望んでいたという②の項がある。武が長男の出世を期待していたことを示す資料の一つに、渡辺凱一氏の「再び北国へ」なる論文がある（飛鳥書房『有島武郎』所収、昭51）。その中の次

のような記述に注目しておこう。

父・武にしてみれば、有島が「東北帝国大学農科大学」に就職し、独立したことはかなり喜ばしいことであつた。息子が札幌にいれば、農場経営の上でも好都合である。なによりも父・武は「理想屋で、てんで俗世間のことには無頓着」な息子が、まがりなりにも国立大学の教師に任ぜられ、社会人としての一步を踏み出したことに満足した（二七二頁）。武郎は自分が官立大学の教師になることを父が喜ぶことを知ってか、明治四十一年一月九日、札幌からの両親宛書簡でへ小子の受持ちは豫科、土木科及森林科の第一年級に一週十一時間に候……。教授の外には小子も學長の主事として學生の徳育の方面に於て學長を補佐すべき旨學長より申渡され」というように具体的な仕事の内容を報告している。即ち教科は「英語と倫理とを教へ傍社會問題文學史等の講義致居候」（同年六月九日於札幌、母堂宛書簡）ということである。

先に山田昭夫氏の「實驗室」不評理由を紹介しておいた（へ生の苦痛）が投入されていない。そして私は山田説に賛同できないので、三谷に有島の「へ生の苦痛」が反映していることを論証して来たわけである。ここで私なりに不評理由をまとめておきたい。有島は、初出作では自然科学の限界とへ火の洗禮による新生物語を意図していた。しかし一般読者は観念的な信仰体験の文章を理解し得ず。有島も初出作後半を改稿して三谷の悔恨心理描写に力を入れた。それでもなお表現に不十分な点が残ってしまったからである。

表現不十分な一例として、三谷の悔恨心理描写と作者有島の創作意図とが混同している次の文などが挙げられる。へそれを實證したとて、それが彼の妻との悲しい關係をどうする事も出来ないではないかと云つたゞけでは説明し足りないが、何かさういふやうな不満がすぐ頭を擡（もた）げてゐたのを彼は感じないではなかった。へ

さて初出作発表当時の不評理由は肯定できるのだが、私個人としては改稿作まで同じく不作とする見方には反対で

ある。

確かに表現不十分な文も含まれているのだが、有島自身の〈生の苦痛〉が三谷に反映していること、自然科学観を創作動機の一つとしている思想小説であること、精緻な解剖描写は客観的で迫真性があること、三谷説実証勝利の絶頂から後悔のどん底に落ち込むという構成には盛り上がって来た高波が砕け落ちるような迫力があること、等の事実と長所を考慮すれば、改稿作は秀れた作品であり矛盾の多い有島を知るためにも欠かせない作品であると云わなければならない。解剖場面を読みながら、私は横光利一の「蠅」「静かなる羅列」などの唯物論的客観小説・没主観写生小説を思い出していた。

「實驗室」と比較するために手術描写のある泉鏡花の「外科室」を紹介しよう。

青年医師高峰と伯爵夫人との天国に結ぶ純愛物語である。意中の秘密を讒言（うはこと）で良人に聞かれることを心配して、魔酔せずに高峰に手術を依頼する。彼は震える看護婦から刀（メス）を取り、夫人の玉の如き胸部を搔開けたり。「責任を負つて手術します。」「何うぞ。」と一言答へたる、夫人が蒼白なる両の頬に刷けるが如き紅を潮しつ。唯見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、白衣を染むるとともに……。医学士の拳動脱兎の如く神速にして聊（いささ）か間なく、三秒にして渠が手術は、ハヤ其佳境に進みつつ、刀骨に達すと覺しき時、「あ。貴下は私を知りますまい！」と云ふや否や、夫人は高峰が手にせる刀で乳の下深く搔切りぬ。

以上のように緊迫した手術と死の描写ではあるが、「實驗室」のように医学専門用語を駆使した客観描写ではない。しかし格調高い文語調文体である。とは云え手術と解剖という医学上での違いはあるが、描写の迫真性において「實驗室」の方がはるかに秀れている。

さて最後になったが「實驗室」の主題はなんであろうか。山田昭夫氏は「科学者の目的至上主義の誤謬とそれによる内部腐蝕を自覚した者の苦悩」であると云う。確かに改稿作についてはその通りである。それでは初出作の主題は次のように云えよう。「科学者の目的至上主義の誤謬と悔恨絶望、突然の火の洗礼による新生物語」。

有島作品の中で「實驗室」をどのように位置づけたらよいのか考えてみたい。有島的主要作品は、「An Incident」「首途」「卑怯者」等の私小説系統の作品ではない。主要作品は、労働と社会制度、男女愛、自然と人間、科学、キリスト教、等を題材とするいろいろな要素が複雑に絡み合っている思想的作品である。であるから有島作品の場合には一つの系統に作品を位置づけることは難しい。でも敢えて系統別に並べてみよう。まず諸作品を読んで気付くことは、加速度のついた威勢のよい文章があること、濃厚な表現と客観的で写実的な描写が多いということである。即ち有島文学は現実写実主義文学の面をもっている。それでリアリズム文学という線上には「かんく蟲」「宣言」「實驗室」(改稿作)「カインの末裔」「生れ出づる惱み」「石にひしがれた雑草」「或る女」「星座」という作品群が並んでくる。これらはどれも客観小説であり改稿作も主要な位置を占めているのである。次に浪漫主義文学の線上には「老船長の幻覺」「かんく蟲」「フランセスの顔」「クララの出家」「實驗室」(初出作)「生れ出づる惱み」「迷路」「三部曲」「一房の葡萄」(他の七篇の童話も含む)「星座」等の作品群が考えられる。

以上のような考察をもとに「實驗室」改稿作はリアリズム文学に、新生物語を意図した初出作はロマンティズム文学に属する作品であると位置づけることができる。

IV

葛藤文学

はじめに

第一編、第三部、第一章「有島武郎とヨハネ伝」(『キリスト教学』26号、立教大学キリスト教学会、昭和59年)で、有島の聖書の読書傾向としては、ヨハネ伝が192回で一番多く、次に177回の創世記、167回のマタイ伝と続いている集計結果を発表した。⁽¹⁾ヨハネ伝で話題にする回数の上位は、26回「姦淫の女」(7・53・8・11)、18回「ザロの復活」(11・1・44)、16回「ユダの裏切り」(13・21・30)、10回「神は愛なり」(2・23・3・21)であり、34位まである。第2位「ザロの復活」は戯曲「聖餐」のみに18回台詞が出てくるだけで、日記、書簡、評論では話題になっていない。結局、有島にとって最も関心が深い聖書の中の話は「姦淫の女」と「ユダの裏切り」と言う内容的集計結果を得た。さて「姦淫」も「ユダの裏切り」も、「モーセの十戒」を破ることになり、神に対する「裏切り」である。「姦淫の女」をマグダラのマリヤと解する有島にとって、作家以前の留学中から、マリヤとユダは二人ながら聖書に於ては例を見ざる二大性格なり。(明治三十六年九月二十二日、二十五歳)と言う認識をもっていた。それでは有島の著作の中から、エゴイズムに起因する姦淫、裏切り、更に、妬み、憎しみ、恨み、などを描出した部分を見ておこう。その後で「有島武郎とトルストイ」との関係に少し触れたいと思う。

一

概観しただけでも次の二十の著作が注目される。

- 1 「老船長の幻覺」(明43・7 32歳)

- 2 「かんく蟲」(明43・10 32歳)
- 3 「或る女のグリンプス」(明44・1)大2・3 33歳、35歳)
- 4 「宣言」(大7・7)12 37歳)
- 5 「サムソンとデリラ」(未定稿 大4・9 37歳、完稿 大8・10 41歳)
- 6 「大洪水の前」(未定稿 大5・1 38歳、完稿 大8・10 41歳)
- 7 「死と其の前後」(大6・5 39歳)
- 8 「カインの末裔」(大6・7 39歳)
- 9 「石にひしがれた雑草」(大7・4 40歳)
- 10 「迷路」(大7・6 40歳)
- 11 「或る女」(大8・5 41歳)
- 12 「聖餐」(大8・10 41歳)
- 13 「惜みなく愛は奪ふ」(大9・6 42歳)
- 14 「卑怯者」(大9・11 42歳)
- 15 「運命の訴へ」(大9・12 42歳)
- 16 「溺れかけた兄妹」(大10・7 43歳)
- 17 「ワルト・ホキットマン」(大11・1 44歳)
- 18 「星座」(大11・4 44歳)
- 19 「或る施療患者」(大12・2 45歳)
- 20 「斷橋」(大12・3 45歳)

1 「老船長の幻覺」(明治四十三年七月 三十二歳)

船長は、医師の娘を奪うため、夫である若い軍人をピストルで殺す。夫を殺されておりながら、医師の娘は船長と「私は始めて男の力といふものを知りました。へあなたの血を若くしてあげたのは誰で御座います。」と言う関係になる。既にこの戯曲処女作に、姦淫、裏切り、妬み、殺人、と言う人間のエゴイズムに起因する悲劇が描出されている。

2 「かんく蟲」(明治四十三年十月 三十二歳)

「會計のグリゴリー・ペトニコフが人を入れて、カチャを圍かこひたい」と申し入れた。カチャとは、船の鉄さび落し労働者かんかん虫のグラマー娘である。カチャは恋人を裏切つて金持ちの會計の男から貢がせている。妾に圍おうとした會計の男はカチャの恋人イフヒムラから憎み恨まれ虫の制裁を受ける。姦淫心と裏切り話の根底に、やはり人間の利己心エゴイズムが読みとれる。

3 「或る女のグリンプス」(明治四十四年一月～大正二年三月 三十三歳～三十五歳)

美貌にして才媛・早月田鶴子は、婚約者木村が滞在する米国へ。繪島丸船中、田鶴子は「初めてアダムを眺めたイブの様」(十)に事務長倉地三吉を眺めた。田鶴子は、彼の妻子の写真が飾つてある室で肉体関係を結ぶ。体調が良くないのを口実に上陸もせず、純情な木村からお金を貢がせつつ帰国へと向う。田鶴子と倉地は、姦淫、裏切り、享樂の生き方を続け、次第に社会生活から追放されて行く。「或る女」後篇に続く。

4 「宣言」(大正四年七月～十二月 三十七歳)

Aは登別で見染めたY子と、一年後の一九一三年六月、東京の教会で婚約式。二十三と十五。製粉業の父が病氣になったため、結婚式は十二月に延ばし、Aは母と妹N子のいる仙台へ。同じ教会員で親友のBが小笠原から上京。BはAと牧師の勧めでY子の家に下宿。BもY子も肺炎。同病相憐れむうちに、愛し合うようになる。父の死と生活に追われ苦悩するAに対して、Y子の心は「私のいつはらざる性格は貴方を尊敬し、B様を戀させます。」(一九一四年二月二十日)となっていた。婚約者Aに対するY子の裏切り、友人の婚約者Y子を奪うBのAに対する裏切り、共に恋と言う魔力が原因である。恋とは本来男女二人だけのエゴイズムの極へと発展するのであるから、二人以外の人からは妬み、憎しみと言う悲劇の対象にもなるわけである。

5 「サムソンとデリラ」(未定稿 大正四年九月 三十七歳、完稿 大正八年十月 四十一歳)

ダゴンの神を信ずるペリシテ族の祭司、群伯支配者層にとって、エホバの神を信ずるダン族のナザレ人・サムソンは、亡きものにすべきであり、ペリシテ族の遊女デリラにとって、サムソンは「私がサムソンに溺れてゐるか、サムソンが私に溺れてゐるか」愛の対象なのである。同じペリシテ族のテムナテの娘が、サムソンとの結婚披露宴七日間で、サムソンの「隠語の心を聞き出させ」たことに嫉妬の炎を燃やす。愛なくして怪力の秘密も聞き出せない。執拗に「蠱惑的にまづはり附きながら」ついに髪の毛に怪力の秘密があることを聞き出した時、「私は勝つた、サムソンが私一人のものになる」「極度の誇りに身を震はせ、サムソンの命を私に與へて下さいまし。」と群伯に約束させる。であるから、サムソンが両眼を剣でえぐられた時、驚きと悲しみで「デリラ茫然自失したる如く頭髮と剃刀とを手より落す。」二人の最後の台詞「デリラ——私はあなたを裏切りました。」「サムソン——(暫くの間憐憫に満ちた面持ちにて佇みたる後)女よ!」この場面は、キリストとすべての人間との関係を暗示していると言えよう。人間とは所詮神を裏切る存在なのである。

6 「大洪水の前」(未定稿 大正五年一月 三十八歳、完稿 大正八年十月 四十一歳)

「神の子たちが人の娘たちのところにはいつて、娘たちに産ませた」(創6・4) 姦淫の結晶・ネビリムの一人であるナアマはヘチラと天使との間に生れゝている。チラはカイン族の首長レメクの第二の妻である(創4・19)。セツ族首長ノアの三男・理想家ヤベテとナアマとの純愛は宿命的に悲劇に終る。「主は地の上に人を造つたのを悔いて」(創6・6) いる時、生れながらに姦淫の結晶である美しいナアマと、「主の前に恵みを得た」(創6・8) ノアの息子ヤベテとの結婚は実現しなかった。神を裏切つたカインの末裔(カンイ族)に、人間の生き様が象徴されている。

7 「死と其の前後」(大正六年五月 三十九歳)

河野信子への思い、妻安子の病氣、札幌農学校教師時代、等を素材にした戯曲。(學二——先生は奥さんと結婚なさつてからも竊かに心をよせた婦人達があると云ふのです。その婦人は夫のある人だつたんださうです。……。基督の言葉の、女に對して心を動かしたものは姦淫を犯したものだ、と云ふあれをきびしく御自身の上にあてはめられたのでせう。)(マタイ5・28 著者) 有島自身の正直な氣持を学生の台詞で語らせている。

8 「カインの末裔」(大正六年七月 三十九歳)

〈六尺ゆたか〉へまだ顔はその上の方にあると云ふので、「まだか」(三)、へ自然から今切り取つたばかりのやうなこの男(七)が廣岡仁右衛門である。小作人・佐藤興十の〈女房と云ふのは體のがつしりした酒喰ひの女だつた。その顔付は割合に整つてゐて、不思議に男に逼る淫蕩な色を湛へてゐた。〉(二) 仁右衛門は農場の鎮守の社の傍の小作人集會所で女と會つた。へ有頂天になつた女は一塊の火の肉となつて(三) 姦淫を続けた。迫力のある密通で

ある。

9 「石にひしがれた雑草」(大正七年四月 四十歳)

二十二歳の主人公Aが、妖艶な二十五歳のM子と婚約し、三年間の実業実務修養のため欧米へ。その間、Aの友人・加藤とM子が仲良くなっていることを手紙で推察し、嫉妬に「煮えくりかへ」り、突然帰国して教会から出て来る二人に遭遇する(「宣言」のA、B、Y子の関係に類似)。三人は眞面目腐つて聲を忍びながら泣いて和解する。一ヶ月後、精養軒でAとM子は結婚式を挙げ幸福な生活に入った。しかしM子と加藤は密通している。〈密偵〉までやとう。〈嫉妬〉、怨念、疑心暗鬼、〈復讐〉。ついにM子は発狂する。〈僕は魂の藻抜けになったM子を君に與へる。〉加藤とAの妻M子との姦淫、加藤のAに対する友情の裏切り、M子の夫への裏切り、共に基督者でありながら神に対する裏切りである。〈M子を生殺しにした〉すさまじい内容の〈置手紙〉形式の小説である。

10 「迷路」(大正七年六月 四十歳)

アメリカ留学経験を素材にした青春小説である。序篇「首途」は日記の拡大再生産版である。最初の夏休み二ヶ月間、Aは精神病院で看護夫として働く。患者スコット博士が予定説を二重決定論と誤解して自殺したのにAはショックを受ける。基督者留学生Aが基督教国の裏面を見せつけられ、次第に背教者となつて行く。Aと共同生活中の弁護士Pが毎週火曜日の晩に女を連れ込みベッドでたわむれる。童貞であるAは悩まされるが、別居中のP夫人に同情、そして誘惑される。建築学M教授の娘ジュリヤに翻弄され、貞淑清純な妹フロラの愛に気付くが、P夫人から懷妊を知らされる。苦悩の末、ヘボストンから汽車で五十分かゝる或る大地主の(二)農場で肉体労働に従事する。夏休み中、自己を鍛えアメリカを再発見しようと努める。社会主義者KからP夫人の懷妊は〈君を自分に引きつけて置い

て醜交を續けるための（二八）虚偽だと知らされる。「背教・神への裏切りと姦淫」という迷路を彷徨する青春小説である。

11 「或る女」（大正八年五月 四十一歳）

アメリカに上陸せず、繪島丸船中では葉子に自由があつた。しかし帰国後、倉地との姦淫という甘い生活は一年と続かなかつた。田川夫人のいやがらせも効を奏し、倉地は定職もない。倉地の妻を思い嫉妬に身をやく葉子は、倉地が妻と離婚しても、正式に自分を籍に入れるとは自尊心が言い出させない。真面目な木村にはその後も送金させ、倉地と結婚するまで木村を放せないと計算する。婚約者木村を裏切り、続ける。若い岡と美しくなる妹愛子の仲を嫉妬したり、倉地を失うまいとヒステリー症が高じ健康も悪化して行く。婦人科で手術後、ついに回復の望みがなくなった時、娘定子を内田牧師（内村鑑三をモデル）に頼もうと思う。神を裏切り、人を裏切り、自己中心の姦淫生活の末、死を直前にして葉子は（内田の心の奥の奥に小さく潜んでゐる澄み透つた魂が始めて見えるやうな心持がした。）（四九）

12 「聖餐」（大正八年十月 四十一歳）

（バリサイ人乙）——この女は昨夜姦淫を行つてゐる時捕へられたものですが、モーゼの律法の中に「かくの如きものは石にて打ち殺すべし」と明らかに書いてあります。」

（群衆）——打ち殺せ！ 石で打ち殺せ！

（イエス）——待て！ あなた方の中で罪のないものが先づこの女に石を投げるがい。」

（イエス）——（静かにマリヤに向ひ）女よ。あなたを訴へた者達は何處にゐる。」

（マリヤ）——（泣きつゝ）何處にも居りません。（第一幕）

「姦淫の女」の話はヨハネ伝八章にのみあるのであるが、有島は殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。(明36・2・8)と日記に記した。この感激が「聖餐」執筆の第一の動機となっている。「モーゼの十戒」第七番「姦淫してはならない」(出エジプト20・14)も神の戒めである。神の戒めに従わないことは、やはり神への裏切りである。

13 「惜みなく愛は奪ふ」(大正九年六月 四十二歳)

「太初に道があつたか行があつたか、私はそれを知らない。」冒頭の文からしてヨハネ伝一章一節を皮肉っている。神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。その動亂の中を私はそろ／＼と自分の方へと歸つて行つた。(三三)。十字架の死をさへ敢へて堪へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼にならつて、犠牲獻身の生活を送らなければならない。私は私一個として基督が私達に遺して行つた生活をかく考へることはどうしても出来ない。(二八)この贖罪論、否定の文章は、かつては内村鑑三から後継者と目されていた有島の反キリスト教論文の一部である。若し私が愛するものを凡て奪ひ取り、愛せられるものが私を凡て奪ひ取るに至れば、その時に二人は一人だ。……殉死とか情死とかはかくの如くして極めて自然であり得ることだ。(二八)この情死肯定論を、自分の思想に忠実に後日、人妻と自から実践している。「姦淫と神への裏切り」を敢えて宣言している点で、この評論は注目される。

14 「卑怯者」(大正九年十一月 四十二歳)

一人だけ仲間はずれにされていた子どもが牛乳配達車に倚りかかつていた。へがたとかけがねの外づれるやうな音を聞いた。牛乳瓶は、思つたよりもけたゝました音を立てゝ、壊れたり砕けたりしながら山盛りになつて地面に散らばつた。逃げかけてゐた子供は、すくみ上つたやうになつて立ち停つた。へがわるいな、わるいな」と意地

悪げにまわりの子どもたちははやし立てる。やがて配達夫が来た。様子をへ一伍一什目撃していた彼は飛び込んで配達夫をなだめなければならない。しかし彼は「許してくれ許してくれ」と言いながら逃げ行く。子どもを見殺しにする消極的エゴイスト。良心の声を裏切っている彼の臆病を卑怯者ととらえているのである。

15 「運命の訴へ」(大正九年十二月 四十二歳)

上總國の宿屋に残された佐間田信次と言う青年の見聞記。四章。明治三十九年二月、彌助が日露戦争から上等兵で谷部落に帰って来た。妻お照は美人だが貞節な女であつたのに、九ヶ月で子が生まれたという事で谷の人達の噂が拡まり、噂が悲劇を生み出した、噂の種を蒔く毒々しいお松婆も惨めなのたれ死にをしたが。噂の犠牲になつた彌助は裏切られたと誤解し嫉妬に狂い、お照を大刀で斬りつけ、母屋の牢で狂死する。九死に一生を得た貞節なお照は淫乱な女になる。閉鎖的な農村での中傷と噂もエゴイズムが原因であり、裏切り、嫉妬、狂死へと続いている。

16 「溺れかけた兄妹」(大正十年七月 四十三歳)

九月三日ともなると快晴でも、土用波が打ち寄せるようになる。友人のM十四、私十三、妹十一の三人は、お婆様の仰しやることを聞かず、海水浴へ。妹が「兄さん来てよ……もう沈む……苦しい」と溺れているのに、(幾度も妹のゐる方へ急いで行かうかと思ひました。けれども私は悪い人間だつたと見えて、かうなると自分の命が助かりたかつたのです。)幸い妹は若者に助けられたが、(少しの間でも自分一人が助かりたいと思つた私は、心の中をそこから針でつかれるやうでした。『卑怯者』と同じ臆病を話題にしているが、主題はエゴイズムと妹を裏切つた自責の念である。)

17 「ワルト・ホキットマン」(感想) (大正十一年一月 四十四歳)

「結婚はしなかつたが、六人の子を擧げた。」彼がその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。へ男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到来するのを私は豫感せずにはゐられない。而して私としては要求せずにはゐられない。有島がホイットマンに引かれたのは、ローファー(Lodger)の生き方である。へローファーとは誓ふことをしない人間だ。宣言する有島とは逆の人である。ホイットマンの自由恋愛は、へ從來の結婚制度、家族制度に對する由々しい威脅だといはなければならない。何故なら、姦淫、裏切り、などは氣にもしない生き方であるからである。生真面目な有島にたやすく真似のできるわけがないが故に、ホイットマンの生き方と思想に魅せられ憧れたのである。

18 「星座」(大正十一年四月 四十四歳)

未完の青春長編小説。家庭教師の不良青年ガンベッタこと渡瀬作造が十九歳の清純なおぬいに、W・アーヴィング「悲戀」をテキストにしつつ、心の中で姦淫を犯している。同じ場面を十五章はおぬいの側から、十六章は渡瀬の側から描写している注目すべき文章である。へやうやく顔を上げて見ると、渡瀬さんは充血して、多少ぼんやりしたやうな顔付で、おぬいの額際をちつと見つめてゐたのだと知れた。おぬいは不思議にもそれを知ると本能的には、つと思つた。(十五)、へ彼の酷たらしい抱擁の下に、死ぬ程に苦しみ悶えながら彼女の純潔が奪はれて行く瞬間を想像すると、渡瀬は再び眩惑するやうな欲望の衝動を感じないではゐられなかつた。(十六)、教師道を裏切る心情描写である。

19 「或る施療患者」(大正十二年二月 四十五歳)

「これはその施療患者の手記ではない。彼の話さうとすると、私を私が不完全ながら筆記したのだ。」両親をなくした私こと原龜吉は三歳から十七歳まで憎むべき叔父の家で雜貨商の手伝いをして育てられた。父が土藏前の三疊で死ぬ直前、息子が一人前になったら渡すよう二百圓を叔父に託した。しかし叔父は「十七の年までお前を養ふにいくらかゝつたと思ふ。」と言つて約束を裏切つた。店には六歳上の佐太郎と言う小僧がいた。私が十の時、……。あいつは私の見てゐる前で、私が愛したいやうな年齢の小娘を強姦した。本能がわな／＼と震へた。叔父の仕打ちに耐えられず十七歳で上京、撒水夫になり過勞で倒れ、回復した時、私はたうとう女を買ふことを覺えた。手の届かない所にゐる美しい女を見ると、私はその衣裳の柄までを綿密に記憶しておく。而して汚れ切つた女を抱きにゆく。……。胸を求めれば素直にそれに巢喰はせた。二十二歳の時、龜吉は肺病患者になつてゐた。人に利己心がある限り、世の中は裏切りと弱肉強食であることを達観したやうな有島晩年の虚無的作品の一つである。

20 「斷橋」(大正十二年三月 四十五歳)

鎌倉滑川海岸橋近くで、早月葉子が同棲している倉地と一諸に来て、自分が捨てた夫・木部孤筈と遭遇する。二人になつた時、木部は釣仲間の運命論者高橋信造ことTの身内話を葉子に語る。Tの父が大病に罹つてゐる時、Tの母は他に男をこしらえて逃げ、娘を生む。赤兒であつたTは父の親友に引き取られ、やがて横浜で法律事務所をもつやうになる。へその隣の家の娘と戀に落ちて結婚。娘は父違いの妹、その母は実母であり、へ父の仇にあたる」と言う悲劇を、木部は葉子に語る。母親の裏切りと姦淫が子どもたちに悲劇をもたらししているのだが、これもエゴイズムがもたらす悲劇である。

二 有島武郎とトルストイ

以上、姦淫、裏切りを中心に、人間のエゴイズムを描出している部分を二十の著作で概観してきた。主人公の多くは神を信じているか、かつて信じていた人物ばかりである。有島自身の経験が作品に生かされている「卑怯者」「溺れかけた兄妹」には良心の呵責に悩む主人公の後悔の気持が充分に読みとれる。苦悩しているのは彼ら主人公だけではない。田鶴子、Y子、デリラ、M子、葉子、マリヤ、作品のヒロインたちは皆、強い個性と旺盛な性欲の持ち主であるが故に、苦悩も深刻なのである。有島自身もへ自分の性慾と信仰との間に始終苦しんだと書いてゐる。(『リビングストーン傳』の序) 有島の生涯が自己との葛藤の連続であるように、有島文学は葛藤文学、即ち良心とエゴイズムとの葛藤の軌跡であると言えよう。

有島の欧米文学、歴史、哲学、社会、美術に関する愛読書は多い。次に作者名だけを挙げておこう。ゴールキイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、トルストイ、イブセン、カーライル、ゲーテ、ラスキン、クロボトキン、バイロン、ウォーズワース、エマースン、ホイットマン、シェリイ、セルヴァンテス、ダンテ、バックル、ギゾー、ルソー、ミシエル、オーガスチン、ルナン、ブランデス、ニイチエ、シエクスピア、スペンサー、ジョージ・ホックス、パテン、プラトー、インガーソール、ゾラ、ホガッラー、セリグマン、ヘンリー・ゼイムス、ワイルド、ホーソン、オズワルド・スイレ、イスラエル・アブラハム、等。

この中で最も有島の心をとらえた人物を一人挙げるならば、トルストイである。作品からも全生涯からも強烈な影響を受け、トルストイを尊敬しているからである。同時に共通した資質のあることも見逃がせない。トルストイに関する記述は「観想録」だけでも五十二回に及んでいる。(一九〇三年・3・21、3・22、3・23、3・25、3・26、

3・29、4・28、5・21、7・5、7・22、9・14、一九〇四年・2・10、7・19、7・25、7・26、9・7、一九〇七年・3・9、3・10、3・11、3・12、3・13、3・15、3・16、3・18、3・19、3・23、一九〇八年・1・29、1・29、1・30、2・14、2・15、2・27、3・30、5・8、5・27、5・28、5・29、5・30、5・31、6・1、6・2、6・3、6・13、6・22、7・28、一九〇九年・2・7、一九一六年・4・10、4・17、8・1、一九一七年・1・16、一九二一年・11・9、一九二二年・6・19、傍線は重要な所。

まず一九〇三年（明治三十六年）三月二十六日、二十五歳の日記に、トルストイの『我が宗教』を読みつつ次の記述を記している。へしかも茲に唯一つ最も我が衷心よりの承認を引きし一事あり。そは彼が教理と實行の嚴格なる一致を主張せし事なり。是れ今の基督教信者と稱するものゝ陥れる最大なる缺點なり。明治三十五年、一年志願兵として軍隊生活を送ったための反動もあつて、明治三十六年は生涯で最も熱心に聖書を読んでいた一年であつた。米國留学に渡った最初の明治三十六年九月十四日の日記には、シカゴの劇場でトルストイの「復活」を観劇し、へ余は嘗て“Resurrection”を読みたる事ありしが故に、（略）余は幾度か pathetic tear に破れざる能はざりき。と一頁にもわたつて感激を記している。

原久一郎『人間トルストイ』（実業之日本社）、中野好夫「トルストイの最後の日々」（文芸読本『トルストイ』河出書房新社、トルストイ全集12『戯曲集』（河出書房新社）、等を参考に論を進めよう。まず二人に共通しているところとして、強い正義感と強い性慾の持ち主であること、良心の人として思想を必ず実行していること、持てる者として罪意識を抱えていること、などが挙げられる。十九世紀ロシアの名評論家ミハイロフスキーが「トルストイの右手と左手」と論じたのは的確な比喻であろう。右手は悪魔の世界を指向し、左手は神の世界を指向しており、左右両手の深刻な闘争史がトルストイの人生であつた。人間誰しも正義感も性欲もあるのだが、これが共に強過ぎると心に矛盾をきたす。欧米からの帰航路中、「アンナ・カレニナ」を熟読しつつ、二十九歳の有島は二元分裂的な心の矛盾を日

記に記している。へ私を憂鬱にするものは何であらう。……。恐らく、自分の内に、不思議な矛盾があるのだらう。私は、時々非常に純になり、時々非常に不純になる。或る時は、非常に同情深くなり、又或る時は、不合理な位あ利己主義になる。』（明治四十年三月十六日）この「不思議な矛盾」である心のエネルギーを、後日、有島は創作活動に昇華させるわけである。薄幸の美女アンナと青年士官ウロンスキーの道ならぬ悲恋「アンナ・カレニナ」、農村の性道德の乱れと真正面から取り組んだ「闇の力」、姦淫不貞をはたらく妻を嫉妬に狂った夫が殺してしまふ「クロイツェル・ソナタ」、若い頃のトルストイ自身が純潔な娘を誘惑し見捨てたと言う自伝的部分も含まれる「復活」、これ等の作品に共通しているエゴイズムと性の問題を有島は敏感に読み取り、後の創作に生かしているのである。

欧米からの帰路、セイロンを過ぎた船中、明治四十年三月二十三日、二十九歳の日記を見ておこう。へ私は、「アンナ」を、限りなき満足をもつて讀み了つた。ダンテの「神曲」に十分較べ得られるものである。（略）キティの一生は所謂幸福なものである。アンナの場合は異なつてゐる。彼女の生涯は嵐のやうである。否、暴風雨である。彼女は、もし弱者に會ふならば、それを打挫くであらうし、強者に會へば自ら打挫かれるであらう。而も彼女は、兩者を避けようとはしない所か、そのどれかを捉へる事を寧ろ好んでゐる。神はかゝる人類を生み出す。そして、それは、必ず苦しむ。憐れな魂よ！ 生れながらの征服者であると同時に生れながらの敗北者——この世の中の最も悲劇的な逆説である。世人をして、かゝる魂を、その常識と云ふ低級な尺度で測らしめること勿れ。世間は彼女を知つてゐないのだ。彼女はこの世に屬してゐるものではないのだ。——迷子の天使とでも云ふがよからう。可愛相な魂よ！ この日記文の「彼女」へ「アンナ」を「葉子」と置き換えて意味が通じているのに気付くであらう。有島にとって他人には思へなかつたアンナへの同情が、後日、「或る女」創作への伏線の一つとなつていたと考えられる。欧米から帰国後、明治四十一年六月二日の日記に「暗の力」讀了。とある。あら筋は次の通り。

（第一幕）金持百姓で半病人ヒョートル四十二歳の後家アニーシャ三十二歳は、下男ニキータ二十五歳と通じてお

り、彼の母マトリヨナ五十歳から夫を眠り薬で殺すよう渡される。孤児の娘マリナ二十二歳をニキータがだましたので、信心深い父アキーム五十歳は息子ニキータと結婚させようとするが、後家アニシヤと母マトリヨナは猛反対する。(第二幕、第一幕より六ヶ月たつ。)ピョートルを殺した後、アニシヤは色男ニキータを婿に迎える。(第三幕、第二幕より九ヶ月たつ。)ニキータは妻アニシヤが嫌になり、ピョートルと先妻との間の娘アクリーナ十七歳と通じてしまう。アクリーナは継母アニシヤを憎み争う。(第四幕)ニキータとアクリーナとの間に赤ん坊が生れると、母マトリヨナと妻アニシヤの二人はニキータに板で押しつぶさせ、途中でニキータが怖がると、女二人で赤ん坊を土に埋める。(第五幕)強引にアクリーナを嫁に出す婚礼の祝宴に、父親に当るニキータは納屋の藁の中で寝ていて、マトリヨナとアニシヤの二人から主人だから祝を一言だけ述べよとせがまれるが出席しようとしな。殺された赤ん坊の泣き声に苦しみ、縄で自殺をはかる時、老作男ミトリッチから人間なんて、蛆^{うじ}みてえなもんじやねえか、こわかねえだで」と諭され、覚悟を決め、祝宴ですべてを懺悔する。マトリヨナとアニシヤは大あわてだが、父アキームは「人間一匹が悔い改めてるだよ」と巡査を制止し、「神さまがおゆるしくださるだよ」と息子を抱く。

有島は「暗の力」をへ彼の倫理、宗教観はこの一篇の到る所に漲り、而も甚だ人の心に逼るものがある。」と評し、次のように男女の性格について述べている。へ特に主人公の性格は素晴らしい。彼は、無智な若い農夫の裏面を現すのみでなく、人間の眞の心理——外見は悪黨に見えるが、その心の中は臆病で良心的な、例へばニキタの様な——を現してゐる。一方女主人公の性格は女の奥底の最も恐しい性質を見せてゐる。——眞の無智が、上つ面の皮一重の智力と混合してゐて、恩樂を得、男を手玉にとりたいと言ふ最も卑しい野心に煽られて動いてゐる。男と云ふものは、甘やかされた子供の様に、あちこちで悪戯をするが、深い悪戯とまでは行かず、過ぎたらすぐ忘れようとする。然し、時々自分の氣がつかなくなつた限に自ら捕へられて、少し悪戯の度が過ぎ、それを忘れることが出来なくなり、泣きも

がく。そして、自分のしたことを見て償はない限り、抜け道を見つけ出し得ない。女と云ふものは甘やかされた子供ではないが、然し、非常に快樂的な早熟な子である。女の欲望は、不思議な魅力で、何をおいてもひた向きに突き進む事にあるのである。(略)その爲めに最も厭はしい状態に追ひやられる。——媚を賣る者、道樂者、誘惑者、魔女、そして殺人！」以上、「暗の力」登場人物に関する適格な評であると言えよう。〈「暗の力」 讀了。〉五日前の明治四十一年五月二十八日の日記には〈「クロイツェル・ソナタ」の攻撃に對するトルストイの辯解を讀み初める。彼のペソから流れ出る論は、常に、懷疑時代の現代には珍しい強い信念を持つてひびいて来る。〉と記している。有島はトルストイ作品で描写されている性にふりまわされる人間の理不尽な言動を、間接的ではあるが、例えばM子、Y子、葉子の言動描写に反映させているようだ。

〈殊にトルストイは私に眞實な人間性と、その生活とを啓示してくれた。〉(『リビンググストン傳』の序)、〈しかも茲に唯一つ最も我が衷心よりの承認を引きし一事あり。それは彼が教理と實行の嚴格なる一致を主張せし事なり。〉(明治三十六年三月二十六日)と言うように、尊敬するトルストイが、実行の人であることは、後日、狩太有島農場解放を実行する際の精神的励みとなっていた。暴力を基礎とする国家、国家に奉仕する教会を共に否定し、私有財産は罪惡であるとし、地主トルストイはヤースナヤ・ポリャーナで一百姓として働き、土地放棄実践の際、家族、特にソフィア夫人の猛反対を受け、苦悩の末に家出している経過を知る有島は、妻安子と父武が他界し、家長が自分になった時に農場を解放しているのである。

おわりに

有島の聖書の読書傾向はヨハネ伝が第一であり、本稿は、有島にとって最も関心の深い聖書の話は「姦淫の女」と「ユダの裏切り」という集計結果を元に始めた。真面目であるが故に強い性欲に悩みつづ、教会を退会し、背教を宣言した有島にとって、「姦淫」と「裏切り」は心の奥で払拭できない問題であったので、聖書の読書傾向の集計結果は納得できるわけである。姦淫と裏切り、共にエゴイズムに起因しており、この面から有島の代表作のほとんどを含む二十の著作に目を通したが、果せるかな作品の底流には良心とエゴイズムの葛藤が渦まいている。さてトルストイは、神の世界と悪魔の世界、左手と右手の深刻な生涯をかけての戦闘に、確乎たる神への信仰の勝利を遂げている。一方、有島は良心とエゴイズムの葛藤と煩悶の末、燃え盡きている。二人の死に方がこの事を象徴していると言えよう。神と悪魔と人間、良心とエゴイズムと人間、これこそ本格的な文学にとって永遠の主題なのである。トルストイ、有島、漱石、然りである。

(1) その後の調査で回数 of 若干の変動がある。明治三十六年九月二十二日の日記に、マгдаラのマリヤとユダに関する注目すべき文章があるからである。それで「観想録（日記）」とヨハネ福音書「39番は「36・9・22—12 13章—マリヤとユダ」（4）」と入り、38回が39回に増し、ヨハネ伝全体の191回が192回に増すのである。

有島武郎年譜

山田 昭夫
内田 満
共編

この年譜は、『有島武郎全集』別巻（一九八八年、筑摩書房）に収録されているものである。なお、同年譜下段（「同時代の事項」欄）の記述はすべて割愛したことをおことわりする。また、八三六ページ上段一八行目は、著者が加筆したものである。

明治十一年（一八七八）

三月四日未明、東京小石川水道町五十二番地（現・文京区水道町一丁目十二番七号）に生まれる。

父武は天保十三年（一八四二）二月十日生まれ、薩摩国平佐郷（平佐村七十二番戸）出身、島津民の一支族北郷久信に仕える有島宇兵衛兼合・曾與夫妻の長男、幼名虎之助・武吉・武記、諱行方）。宇兵衛は、「平佐崩れ」と呼ばれる北郷家のお家騒動に巻き込まれて臥蛇島遠島の処分にあり、武六歳の冬の朝、一党の人たちとともに編笠姿で連れられて行った。その後八年あまり、武はその祖父に当たる兼三らによって薫育され、安政二年、十四歳で北郷久信に召し出される。武郎はその父を、小さい時から孤独であったのとしばし人々に欺かれた経験から「人に対して寛容でない偏狭な所があつた」、真正直な、また細心な、そして激しい情熱を持つ「純粹な薩摩人」であつたと回想している。曾與は文政四年（一八二二）五月二十日生まれ、平佐の士族佐藤七藏の長女。

母幸は安政元年（一八五四）一月二日生まれ、陸中国盛岡の出身、南部藩江戸留守居役を勤めた加島英邦（のち山内姓）・靜の三女（幼名 吉）。靜は、久留米藩士今井九一郎の次女であつた。維新の際南部藩が朝敵になつたため、幸は「十二三から流離の苦を嘗めて、結婚前には東京でお針の賃仕事をしていた」という。そんな幸子の気性には「潤達な方面と共に、人を呑んでかかるやうな鋭い所」があつた。

武は、明治五年一月大蔵省租税寮に勤務、十年一月には関税局勤務・租税局兼務、権小書記官に進み、関税諸規則税目調査草案を携えて在外日本公使に説明、他日の外交交渉に備えるため米英独に出張した。同年五月十二日、新渡戸稲造の養父太田時敏の媒酌で幸と結婚、武にとっては三度目の結婚ですでに三十六歳、幸は二十四歳であつた。それぞれに苦境を生き抜いてきた気性の強さからか「二人の家庭は始終油の切れた歯車のやうに快くない軋轢方をしていた」。それが、幸の母靜が同居するようになってから家庭内の空気は目に見えて和んでいった。御嶽権現の中教正にまでなり、のち一向宗の他力信者になつたこの祖母は「一心」をモットーにして、武郎にも大きな感化を及ぼすことになる。

この年

一月二十日、母幸、小石川の萩の舎中島歌子の歌会に行く。以後、歌作を続ける。

五月二十日、大蔵卿、武に「御用有之欧州へ被差遣候事」を通達。

六月六日、東京を発つ。

七日、サンフランシスコ行きのみ国船ベルジュック号に乗船か。のち、米英独駐在の日本大使と会い、大蔵大輔松方正義とロンドンで会談した。時に武の月給は七等給八十円であつた。

明治十二年（一八七九） 一歳

二月十六日、武、従者吉井泰治とともにフランス船ボルカ号で横浜に帰着。

七月、武、関税諸規則取調御用掛となる。

この月、一家、京橋区小田原町四丁目七番地に転居。

明治十三年（一八八〇） 二歳

一月十二日、妹愛（長女）生まれる。

この年、武、議案局少書記官、関税局兼務となり、京橋区築地三丁目八番地に転居。

明治十四年（一八八一） 三歳

この年、本郷区湯島三丁目（現・文京区）の東京女子師範学校附属幼稚園に通う。体質虚弱、「殊に心臓に起る障害は父母を苦慮せしめた」という。

十一月、武、関税局権大書記官に進み、擬定税目取調べを命じられる。また「此頃時々外務省ニ出務シ取調ベニ従ヒ別ニ港則噸税領事章程等ノ取調ニ従事」した。

一家、神田区表神保町十番地（現・千代田区）に転居。

明治十五年（一八八二） 四歳

六月十五日、武、関税局長心得兼横浜税関長に赴任、一家は横浜岡町（現・西区老松町）の税関長官舎に移る。明治十七

年の火災後再建された官舎は「隠居部屋の次に八畳二間、客間十二畳、玄関、書生部屋、女中部屋」、さらに「渡り廊下で、玄関とサロン、小室二つの西洋館がつながっていた」。

また、庭の一隅に大弓場と馬小屋があったという。

十一月二十六日、弟壬生馬（次男、生馬）生まれる。

明治十六年（一八八三） 五歳

三月、英会話を学ぶため、妹愛とともにアメリカ人宣教師セオドル・W・リック、アグス夫妻の家庭（山手居留地四十八番）に通い始める。「国粹主義を奉じ通した父が、敵の刃を奪はふとする心持ちから」したことで、同時に家庭では剣法・弓・乗馬、大学や論語の素読をさせられる。父が来客と要談中に「父や客人を笑はせたり喜ばせたりする積りで、縁側で障子を隔てて踊りを跳り、とうとう糺額を起こした父に叢竹の根元に叩きつけられたことがある。灸罰や禁錮も恐ろしかった。

明治十七年（一八八四） 六歳

二月二十七日、妹シマ（次女）生まれる。シマは七歳まで近所に住む武の部下野村才次のもとで育てられた。

五月二十日、父武、二等主税官に任ぜられる。

八月、愛とともに山手居留地百二十番の横浜英和学校（明治十三年設立のブリテン英和学校、現・成美学園）に入る。同校

在学中、学校で友人の絵具を盗んだのが露見、「泣きやむやうに好きな英い女教師から葡萄棚の大房をもぎつて与へられたエクスタシー」が心に残る。また、幼少年の記憶に「叔父上ノ紫鉛筆（其頃ノ生ガ眼ニハ珍カナルモノナリキ）ノ尖端ヲ竊カニ打折リテ紫ノ絵具ニ代ヘシ事」なども「罪科」の重荷として残る。

九月九日、武、一等主税官に任ぜられる。

十一月二十四日、午前三時半ごろ官舎西北隅屋根際の羽目板より出火、焼失。

この年、本家筋の有島健助（明治元年八月十二日生）が同居した。この頃からの友人に、原久米太郎・佐山英男がいる。

明治十八年（一八八五）

七歳

七月十五日、弟隆三（三男、のち父方の祖母曾与の妹佐藤府天の養子）生まれる。

この年、同居していた有島健助、近藤義塾（のちの攻玉社）に入るため同郷の徳田卯之助方に移る。

明治十九年（一八八六）

八歳

四月十四日、武、奏任官一等に叙せられる。

六月、武、関税局長石川有幸とともに、条約改正交渉のため税目その他関税に関する事項を外務省と協議のうえ取り調べる

よう命じられる。（各国公使との条約改正会議は五月から始まり、武も英国公使らとの協議に陪席。）

明治二十年（一八八七）

九歳

三月、有島健助、武の厚遇により造士館に学ぶ。

五月、学習院入学準備のため横浜英和学校を退き、花咲町六丁目の「ある老女先生の寺小屋式の変則な学校」自牧学校（創立者、古谷傳）に通う。

九月、学習院予備科第三年級（現在の小学校四年に相当）、乙組に編入学。学習院は前年の火災のため、神田錦町の仮校舎であった。寄宿舎幼年舎に入り週末には横浜に帰宅する生活になったが、年長の学生から「恐ろしい男色の圧迫」を受ける。

明治二十一年（一八八八）

十歳

この年、皇太子明宮嘉仁殿下（明治天皇第三皇子）の学友に選ばれ、毎週土曜日、吹上御殿に伺候することとなる。父武はこれを一門の名譽とし、のち（明治二十三年か）イギリスから空気銃を取り寄せて一挺を皇太子に献上、一挺を武郎に与えて記念とした。

七月十二日、母方の叔父山内英郎（大阪府収税部検税課長、三十三歳）、任地で死去。

十四日、弟英夫（四男）生まれる。前々日に亡くなった叔父

の山内家を継ぐことになる。筆名、里見驛。

この頃、横浜の家に妹愛をよく訪ねてきた田中のお勝さんの記憶鮮明に残る。

明治二十二年（一八八九）

十一歳

二月十一日、憲法発布式の雪の朝、文相森有礼が襲われたとの報に衝撃を受ける（森は翌日絶命）。

六月二十九日、父武、松方正義に勤められて心身を瘁すため鎌倉・国府津・静岡・沼津に幸子を伴って旅行（七月九日まで）。

武郎、両親の後を追ひ、興津の宿、清見寺をたずねる。

七月、石井研堂主宰の「小国民」創刊、以後その愛読者となつて海軍思想に感化された。初め富岡永洗、のち小堀鞆音の描いた同誌の挿絵に傾倒、みずからも熱心に絵を画くようになる。

この年頃、海軍軍人になろうとする志望を捨て、農業へのおぼろげな関心を抱くようになったという。「人前に出て臆病な性格」のためであったかと回顧。

この年の武郎の学習ノート「数学帳」一冊現在。

明治二十三年（一八九〇）

十二歳

二月十二日、武、関税局兼横浜税関長に就任。また、奏任官一等に叙せられ、上給俸を下賜される。

三月十七日、武、上京して松方大蔵大臣に面会、関税局員らに

同局局長兼任となったことを披露。

七月三日、武、勅任官二等に叙せられる。

十一日、武、従四位に昇叙。

九月十一日、武、「虎列病（コレラ）」に罹りし旨其筋へ電報。

十二日（？）、旧知の高木兼寛・実吉安純両博士ら、侍医の診療に立ち会う。幸子、医師に臨終と告げられた夫の一命をとりとめようとして、家伝の秘薬「人丹」六十粒（通常は二、三粒を服用）を焼酎で溶いて武の口につき込んだという。二十日、新聞広告に武の「全治」を報じ、見舞いを謝す。

この月、学習院予備科を卒業、中等科に進む。四谷尾張町に新校舎落成、院長は三浦梧楼であった。武郎の得意科目は国漢・習字・歴史であったという。同級に、鹽谷温・松平保男・大久保利賢・長与又郎・岩倉具張・吉井仲助・徳大寺則麿らが出た。

十月十五日、皇太子より「竹馬遊之図」を賜る。

明治二十四年（一八九一）

十三歳

一月、博文館から創刊された少年文学叢書を愛読（第一篇は巖谷小波『こがね丸』）。

七月二十五日、武、国債局長に就任（総務局特別資金課長兼務）。八月七日、一家は東京麴町区（現・千代田区）永田町二丁目十二番地の官舎に移ったが、武郎はそのまま寄宿舎に留まる。

九月二十二日、現存最古の武郎日記『随意録』参号が起筆され

ている。「赤白柔道試合アリ。余ハ赤ニテ水野宜君ト試合ヲナシ引分ケトナリタリ」。

この頃、「善良な少年と不良少年との間に自分の位置を定めかねていた」という。

十一月十八日、放課後小石川の盲啞学校を参観、初めて点字を知る。

この年、有島健助、小学校代用教員を辞し、武に招かれて上京、大蔵省国債局に勤務。(月給十円。)

明治二十五年(一八九二)

十四歳

三月中旬、「探梅記」(現存原稿中最古のもの)を書く。

六月、「閨秀美譚」(『明治名流夫人』所収、文武堂刊)に母幸が紹介される。

九月十二日、和漢文の練習帳「文稿」を作成、以後、「保元の乱」「平宗盛論」「観梅の記」などを書き付ける。

この年、横浜の旧友を訪ねた時、「中年の寡婦から激しく挑みかけられた」が逃れる。寄宿舎では室長を務め、下級生をいたわった。

一家は赤坂区氷川町(現・港区赤坂)に住む。武、製鉄事業調査委員(六月)、鉄道会議議員(十月)に任ぜられる。のち八幡製鉄所開設、鉄道国有化などがそれぞれの審議によって実現。

明治二十六年(一八九三)

十五歳

五月四日、武、大蔵大臣渡邊武と「政治上の意見の衝突」のため「依願免本官」となり、鎌倉材木座に隠棲。その住まいは滑川河口に近い砂丘の傍らで「葺葺き、四間ばかりの百姓屋」に「瓦葺きの八畳、六畳、玄関を建て増ししただけ」で、「めったに他人の顔も見られないような環境」だったという。武郎は愛とともに麴町下二番町に住む母方の祖母山内静の世話になり、一心克己のしつけを受ける。

明治二十七年(一八九四)

十六歳

一月九日、弟隆三、佐藤府天(父方の祖母曾与の妹)の養子になる。

五月二十二、「学習院輔仁会雑誌」第三十一号に「鯉説」を発表(現存する武郎の文中、活字になった最初のもの)。

二十八日、祖母曾与死去(享年七十三)。

六月二十日、明治年間最大の地震に見舞われ、四谷尾張町の学習院校舎倒壊、寄宿舎が教場に当てられることになったため、牛込矢来町の白鳥庫吉の私塾に岩倉具張・具幸兄弟や八代國次らとともに起居する。

七月、武、松方正義の推挙により島津公の家扶名義で第十五国立銀行世話役に就任、やがて実業界に進出する端緒となった(翌年十一月、日本郵船監査役、日本鉄道会社専務に就任)。

九月二十九日、末弟行郎(五男)生まれる。

十二月三十一日、習作の一篇「慶長武士」を脱稿（筆名・由井ヶ浜兵六。その名は当時愛読していた村上へちぬの浦浪六にちなんで付けたという）。

明治二十八年（一八九五） 十七歳

五月上旬、「此孤墳」（筆名・勁筆生）を脱稿。白鳥塾の塾生間で回覧されたという。また、戦争画・武者絵を描き、弟妹を喜ばせた。

七月中旬から病臥、病床のつれづれに思い浮かぶことを妹愛に書き取らせ、のち「根なし草」と名付ける。

九月十二日から十月二日まで、青梅の金剛寺（真言宗豊山派の古刹、現・青梅市青梅一〇三二）に滞在して後養生に努める。その間に「斬魔剣」を書く（筆名・勁筆生）。

十月二十一日、先の筆録に加筆して「根なし草」浄書を完了。相次ぐ病気のため成績が下がり、牛込区弁天町（現・新宿区）の白鳥庫吉の私塾に入る。白鳥は学習院教授、岩倉具張らも同じ塾に学んでいた。「安徳天皇異聞」も同年の習作か。

この年、増田英一を知る。

明治二十九年（一八九六） 十八歳

一月、一家は麴町区下六番町十番地の旧旗本屋敷に移る。隣接地を併せて約一二〇坪、武が新築造園に熱中した家である。七月、学習院中等科卒業（卒業証明書の日付は八月二十五日）。

この二、三年「腸チブス、肺炎、脚気、心臓病等に罹つて幾度か死に損ねたので、東京にはゐられない程の体質になつてゐた」こと、「北海道には嫌いな蛇がゐないだらう」といふ事と、百姓の仕事がして見たかつた」のが動機で札幌農学校への進学を決めたという。

八月二十六日、激しい風雨を冒して船（酒田丸）で横浜を発ち、北海道に向かう。三十日夜、函館に入港、「二百十日之風」のため「通船等も全ク止」る。

九月、札幌農学校予科第五年級に編入。同農学校の組織は本科四年・予科五年であつたが、有島らの学年の卒業と同時に予科は廃止された。教授新渡戸稻造の官舎（札幌区北三条西一丁目一番地）に寄寓し、稻造が日曜日ごとに開くバイブルクラスに加わつた。また、同教授の「英文学の講義には非常な興味を感じ」る。新渡戸夫人エルキントンに厚遇され、同級生の森本厚吉（旧姓増山。厚吉は前年七月、予科四年級に入学の際森本活造の養子になっているが、友人間ではしばらく旧姓を名乗っていたようだ）・星野純逸・星野勇三・半澤洵・井街顯・木村徳藏らとも親しく交わるようになる。一期先輩三十二名中に、伊藤清藏・竹崎八十雄・川上滝弥・西川光三郎らがいた。

十一月三十日、*星野藻泉（純逸）、「学会雑誌」21号に『折りたく柴の記』と『政談』——文禄享保年間に於ける Action と Reaction」を發表、22号（明30・5・20）に続き。

明治三十年（一八九七）

十九歳

四月二十七日、日記『観想録』を書き始める。巻頭の「所懐」

——、「人は皆心嬌めぬ、そよかりける柳は緑花は紅」。

五月三日、外祖母、山内静の言い付けに従い、中央寺（曹洞宗、住職小松萬宗・札幌区南六条西二丁目）に参禅を始める。「参同契」、「寶鏡三昧」などを講本として読む。同寺には、級友蠣崎知次郎が寄宿。

七日、「伊太利建国傑」中のマヂニーの伝に意気を感じ、「我敢て大材を以て自ら任ぜずと雖も願くは以て農業革新の魁たらん」と、志を立てる。また、佐藤学長の演説もその決意にあずかって力があつたという。

六月十二日、新渡戸稻造の倫理の最終講義（仮題「物に驚かぬ人」）を聞き、父への畏怖心を自省。稻造は、他にも「夢みよ」（五月八日）、「今日の勉めの田の草を取る」（同二十九日）などの題で講義している。

二十六日、学期末試験終わる。

二十八日、星野・井街・早川ら級友四人と札幌を発つ。

三十日、上京の途中仙台を訪れ、学習院時代の友人に会う。

七月四日、帰京。

十一日、増田英一とともに青山南町の内村鑑三を訪問、「二点の誠心人をして虹の如くにした」と感銘。

この月、農学校農業経済科に進む。

九月五日、父とともに帰北の途に就き、仙台に一泊。松島・盛岡・弘前などを見物、十日、札幌に帰る。

二十三日、森本厚吉から信仰への苦悩を告白され、「真理に向つて（共に）歩むと云ふの交語を為せ」と迫られて承諾。森本はまた、以前から武郎を朋友にと「眼をつけてゐた」と白状する。

十月五日、新渡戸稻造、罹病転地のため札幌を去る。武郎は、その後も中江汪・木村徳藏・三吉朋十とともに新渡戸の去つた官舎に住む。

十一月三日、父の努力でマツカリベツ（狩太、現・ニセコ町）に借地のできたことを知り、「謹んで事に従はずんばある可らざるなり」と決意。

二十三日、武郎、武の出願予定のマツカリベツ原野を視察した海江田に会い、「地味地勢は其附近に於て最も好良」、「交通の便甚だ不完全なるも」「鉄道設置せらるる時は必ず大に用ゆ可き土地なり」など現地の事情を聞く。

十二月六日、妹愛、第十五銀行取締役山本直成の長男、山本直良と結婚。

二十一日、期末試験終了、武郎の成績三十八人中十四番から十一番に上がる。

明治三十一年（一八九八） 二十歳

一月三日、痔疾手術のため、関場病院に入院（二十三日退院）。

十五日、同期の俊秀星野純逸が肺結核のため死去したことを知り衝撃を受ける（享年二十三）。

二十六日、中央寺で星野純逸の追悼会、「帰途、感慨無限」。

二月二日、森本厚吉に依頼されていた遠友夜学校の校歌を作詞。

七日、参禅のため中央寺に至るが休講。以後、日記から参禅の記事消える。

三月八日、森本厚吉から、学業を廃してキリスト教信仰に励みたいという「一大秘密」を明かされる。

この月、有島武名義でマツカリベツ原野貸下げを出願。しかし、武郎には父武が農場経営をまっとうするかどうかの不安があり、それを戒める湯地の見解に共感しつつ「経過報告と意見」を父に伝える。

四月一日から六日まで、森本とともに軽川の光風館で自炊生活。

八日、母幸あて書簡に、試験成績「三十八人中之、六番」と報知。

十五日、学芸会の文芸委員を命じられ、「学芸会雑誌」の雑報欄を担当。

十七日、校内野球試合で二塁手。

二十八日、体格検査。身長一六〇・五センチメートル、体重五六・三キログラム、胸囲八二・五センチメートル。

四―五月ごろ、武、マツカリベツ原野貸下げを正式に出願。

七月十五日、「東京独立雑誌」を読み、内村鑑三の「燃ゆるが如き情火」に感嘆。

九月三日、西本願寺別院に島地黙雷師を訪ねて仏教について教えを求めたが冷淡にあしらわれ、いたく失望。

十月十日、本科第二学年修学旅行として藻岩山に登山。

二十一日、水害被災者への市民から古着集めに奉仕した人たちの慰労会に友人たちと参加。

十二月二十七日、森本厚吉と定山溪に赴き、自炊生活を始める。

二十九日、内村鑑三の「求安録」に感動、はじめて声を上げて神に祈る。同夜、森本に挑まれて「非常なる時」――男色を経験。

明治三十二年（一八九九） 二十一歳

一月六日、定山溪から帰札。その前々夜また「大なる過失」に陥り、森本の「好しからざる情」を制し得なかったと自責。

十四日、学芸会において「第二擬国会」を催し、鉄道国有化問題の是非を論議、武郎は書記官を務めた。

十五日、星野純逸の一周忌、武郎宅に諸友が集まって「故人を思ふ会合」を開く。

二月十九日、森本とともに死ぬことを決意、銃を携えて定山溪に赴くが「神は萬物にlifeを与ふるものなり」との啓示を得て翻意、キリスト教入信を決意する。ただちに書状によって家人の許しを請い、森本の勧めで「世」との交わりを断つ意思表示として二、三の友人に絶交を通知。

三月三日、両親より返信あり、父母の猛反対、祖母静の悲嘆を

知る。

十一日、絶交を告げた増田英一より来信、切々たる「哀辞」に心打たれる。

四月、武、前年出願のマツカリベツ原野貸下げ申請をいったん放棄（七月、女婿山本直良の名義で再出願、九月に許可）。

五月十一日、祖母危篤の報に札幌を発ち、十三日から約二週間その枕頭に侍して看護に専心。キリスト教入信について父母の反対は強硬であったが、祖母は穏やかに「就眠の後必ず汝を改宗せしめんことを誓ふ」と言うのみであった。

二十九日、東京を発ち帰北、三十一日、札幌着。

六月十二日、静、腹膜癌のため死去（享年七十）。あらためてその人柄を慕い、一心克己の教えを胸に刻む。

七月、夏期休暇に入るのを待ちかね、森本厚吉とともに『リビングストーン伝』執筆に着手。

九月、本科三年級に進級、森本・木村徳藏・森廣・堀崎知次郎・豊田熊二郎・田下寅治・和田恵・鈴木敦作の八名とともに農業経済演習を選択。

十二月十八日、期末試験終了、成績三十五名中六位。

二十六日、森本とともに札幌を発ち、登別温泉で越年。

この年、講演筆記「東北旅行所見」が「南鷹二郎述／有島武郎記」として『学芸会雑誌』28号に載った。

明治三十三年（一九〇〇） 二十二歳

三月四日、両親あて書簡にマツカリベツ原野未調査、起業検査の準備遅滞を報ずる。

四月二日、吉川銀之丞、小作人四家族を同地（山本農場）に引率、のち吉川自身も決意して妻ハツとともに入植。

六月、南アフリカのボーア人に思いを馳せ、日記に「南阿の国に題す」などを書く。

夏期休暇中、森本厚吉とともに『リビングストーン伝』を脱稿。

九月、本科四年に進級、特待生に選ばれる（同年度の本科四年校費生は星野勇三・半澤洵・東海林力藏ほか二名、特待生は森廣・渡邊甚作・和田恵・有島武郎の四名）。

武郎の勧めで山本農場の開墾を母方の縁者・久慈千治が請け負うことになり、吉川銀之丞は久慈雇用の現地管理人になる。

秋ごろから、遠友夜学校に向く。

十一月二日、カメラ会で講演「Three Months in Workshop by Gohrei」。

二十四日、森本・木村徳藏と三人でカーライルの『サーター・リザータス』研究会（一名「鬼の糞研究会」）、『衣裳哲学』の主人公トエフェルスドークの直訳）を始める。土曜日ごとにゼミナール形式で行ったところから土曜会と呼び、足助素一・末光績・河内完治らも参加（翌年七月、有島らの卒業まで続く）。

十二月三十日、土曜会のメンバーたちと定山溪に赴き、同地で「十九世紀最後の日」を送る。

「松村介石著『修養録』」〔書評〕（2月、「北海教報」26号）。

「人生の帰趣——独立と服従」（12月29日、「学芸会雑誌」34号巻頭に発表、森本厚吉「鬼の薨」も併載）。

明治三十四年（一九〇一） 二十三歳

一月五日、森廣宅で開かれた札幌独立基督教会入会希望者の信仰告白会に出席、参会者十三名。

十一日、帰国した新渡戸稲造を迎えるため上京。また内村鑑三を訪問し、札幌独立基督教会の洗礼晚餐廃止案に同意を得る。

二月上旬、海路帰北。途中、風雪のため大時化に遭う。

三月六日、増田英一からの書信によって増田と妹愛（三十年、山本直良に嫁す）が相愛の仲であったことを知り、「青春多望なる二人の胸を冰らしめ」たと悔いる。

三月七日、洗礼晚餐廃止決定。

十日、札幌独立基督教会総会、「洗礼ヲ受ケサルモノニ入会式ヲ施シテ入会セシムルノ件」を満場一致で議決。

二十四日、礼拝後、田島進の司会により入会式を行う。武郎、伊藤清藏・蠣崎知次郎・逢坂信忠・末光績ら十六名とともにこの日の式に加わり、同教会会員となる。また、武郎の勧め

で末光は日曜学校講師になる。

この日以前、北三条東四丁目 山崎富貴方に転居。四月二十一日、二十一歳で夭折した永野武三郎の『用無遺稿』の伝を読み感銘。

この頃、札幌農学校二十五周年記念のための校歌を作詞、大和田建樹が校閲。

二十日、「北海新報」（40号）、有島・森本共著『リビングストン伝』の〈新刊批評〉を掲載（執筆者・田島進）。

六月十六日、日曜学校のために唱歌「花がたり」を作詞。

三十日、土曜会で卒業送別会。

七月九日、札幌農学校第十九期生として本科農業経済科を三十四名中十位で卒業、農学士となる（星野勇三が首席、森廣は五位）。卒業論文は「鎌倉幕府初代の農政」。

この月、両親来道、二十三日、農場に父と同行。

有島生馬、外国語学校伊太利語科を受験、入学。

八月十日前後、森本厚吉・森廣・田島進らとともに房州千倉温泉に滞在、札幌独立基督教会歴史の執筆に当たる。同地滞在中、森廣の婚約者佐々城ノブ（信子）を知る。信子は、日本橋品川町裏河岸八番地（俗称・釘店）に開業していた医師佐々城^{もとえ}本支の長女で明治十一年七月三十日生まれ。婚約の仲立ちをしたのは宮部金吾であった。

二十日、内村鑑三、麴町平河町の寶亭で武郎・森本・森・田島の四人と会食、「（独立）教会創立当時の真事情等」を語る。

二十一日、渡米する森廣・田島進を横浜に見送る。

九月四日、佐々城信子が鎌倉丸で横浜を出帆するのを見送る。

この頃、森本厚吉、渡米の費用を得るため東北学院講師として仙台に赴任、木村徳藏も同学院に勤めていた。武郎、森本・木村を訪ねて九月三十日に東京を発ち、十月七日ころまで同地に滞在。

十一月三日、鎌倉に赴き、七日までに「行く雲」、「秋来賦」など四篇の詩を書く(『五日集』)。

三十日、入営を控え、ほとんど徹夜して「札幌独立教会」の推敲・浄写に努める。

十二月一日、一年志願兵として第一師団歩兵第三聯隊に入営。中旬、痔疾のため東京第一衛戍病院に入院。

『リビングストーン伝』(3月、警醒社刊。森本厚吉と共著、森本はその原稿料を渡米費用の一部に充てた)。

「札幌独立教会10—12月、〔聖書之研究〕」。

明治三十五年(一九〇二)

二十四歳

一月四日、*森廣・川上瀧弥共著『はな』(豪華房)刊、同書緒言に協力者の一人として有島武郎の名を挙げる。

中旬、東京第一衛戍病院を退院。十四日から伊豆方面(熱海・伊東・修善寺)をひとり旅、十八日、帰営。

二月二十日、「札幌独立教会報告」(『北海教報』60号)、「昨一

月以降講壇に起ちたる人」として留岡幸助・田村直臣・内村鑑三・森本厚吉・有島武郎・井街顯・森廣・大村益荒・川江秀雄らの名を掲げる。

七月下旬、精華女学校(角筈、もと私立女子独立女学校)で開かれた内村鑑三の第三回夏季講談会に出席。小山内薫・志賀直哉・魚住折蔵らも参加。

十一月三日、除隊、予備見習士官(曹長)となる。

十三日以降、日記に在営回想録を書き、「我れ国家を何に喻へんや。糞桶の蓋の如し」など、軍隊や国家を痛罵。

十二月三十日、森本厚吉上京、ともに「教育の事に従事」しようとして誘われて同感、留学について語りあう。

この年、吉川銀之丞、山本農場管理人となる。

「人生の帰趣」(続き)(1月、「文武会雑誌」36号)。

明治三十六年(一九〇三)

二十五歳

一月四日、ポール・サバティエの『Life of St. Francis of Assisi』を読む。

五日、森本厚吉とともに内村鑑三を訪問、「洋行反対論」を説かれて緘黙、不本意。

七日、新渡戸稻造は留学に賛成、ハヴ・フ・オード大学に入ることを勧められて進路を決める。

八日、後藤新平の意を受けた新渡戸から、皇太子明宮嘉仁の

輔導役に推挙したい旨の内談があったが辞退。

二月六日、本郷中央会堂の社会主義演説会を聴き、木下尚江の演説（「哲学館事件と倫理問題」）に感動。

三月八日、学習院輔仁会春季大会で「学習院学生諸氏に望む」と題して講演。

五月三日、新渡戸の姉河野象子の娘信子に惹かれる思いを日記に告白し、「今日偶彼女ト遭ヒテ、余ノ心ノ中ニハ嘗テ彼女ニ対シテ経験セザリシ恐シキサレド甘キ感情満チヌ」と書く。また、「願クハ余ヲ其道ヨリ引モドシ給ヘ」と祈る。

十九日、山本直良、軽井沢三笠地域一帯の二十五万坪を取得。のち、その地に三笠ホテル、浄月庵などを建てる。

二十一日、妹シマ、慈恵医大の創設者高木兼寛の長男喜寛と結婚、五台の馬車を連ねて式場の大神宮に向かう。

下旬、藤村操自殺の報に衝撃を受ける。

六月十七日から二十日まで、帰北の途次仙台に森本の寓居を訪ねて起居をとにもする。

二十二日、船で室蘭に着き、父武に託された用務を帯びて室蘭支庁に赴く。「防風林地ハ農場ノ市街地並ニ鉄道敷地返附ノ代地トシテ下附」の「談判」調う。この問題につき、父武も吉川銀之丞と相談、公設市街地不正払い下げの風聞について調査。

二十五日、視察・交渉の要務を父に託されていた農場に着く。

二十八日、札幌入り。

三十日、土曜会の末光績・足助素一、遠友夜学校生徒瀬川すえらとの再会を果たす。

七月二日、離札。

四日、仙台着、森本厚吉らに迎えらる。河内完治・末光績らとともに仙台市内を見物。

五日、帰京、十五日、新渡戸稻造から勧められた兒玉源太郎内相（文部大臣兼任）の秘書官就任を謝絶。

二十二日、森本厚吉とともに内村鑑三を訪問。

二十四日、東京府庁で旅券受給。ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』を熟読、以後、七八日に及ぶ。

二十六日、「草いきれ」脱稿。

二十八日、鎌倉に赴き、八月三日まで滞在。その間、島田三郎に面会して「毎日新聞」の海外通信員となることを了承され、また、河野信子姉妹と再三往来する。

八月二十五日、森本厚吉とともに伊豫丸に乗船、横浜を出帆して米国留学の途に就く。

九月八日、シヤトル入港。十四日、シカゴで森広と再会。翌朝、森、佐々城信子への失意を語る。

二十日、ジョン・ホプキンズ大学大学院に入る森本とバルチモアで別れ、同夜ニューヨーク着、増田英一と再会。同市滞在中「マグダラのマリア」を観劇、イスカリオテのユダに同情。

二十四日、ハヴァフォード大学大学院に入学手続き。「日本

文明史序論」をテーマに選び、英国史 (History I)・中世史 (History IV)・経済学《労働問題》(Economic III)およびドイツ語 (German II) を履修登録。

十一月二十五日、級友アーサー・クロウエルに伴われてアボンデルの家を訪ね、感謝祭の休暇を過ごす。アーサーの妹フランセス(愛称ファニー、十三歳)を知る。フランセス(一八九〇—一九七二)は、画家トマス・エイキンスの姪にあたる。

「独旅短信」(5月)、「草いきれ」(7月)、「殉教者」の一篇として書き、壬生馬に贈る。

明治三十七年(一九〇四)

二十六歳

一月十三日、母幸、愛国婦人会評議員に選任される(翌三十八年四月、再選)。

二月十日、日露開戦の報に接し、トルストイの身の上を案ずる。四月十五日、春休みに入り、バルチモアに森本厚吉を訪ねる。

十九日、アボンデルに赴き、クロウエル家に三泊。

五月十六日、修士論文「日本文明の発展——神話時代から將軍家の滅亡まで」を脱稿。

六月十日、卒業式、M・A(文学修士)の学位を得る。

二十二日、クロウエル家に至り三週間を過ごす。

七月十九日、フランクフォードにあるフレンド派の精神病院で看護夫として働き始める。二カ月間の契約で、月給十八ドル。

この月、生馬、東京外国語学校伊太利語科を卒業、藤島武二に入門。

九月十六日、病院での勤務を終えたが、「自己の精神状態にも不安を感じ」る。アーサーに伴われてアボンデルに行き、十九日までクロウエル家に憩う。

二十七日、精神病院で親しく看護したスコット博士が自殺したことを知り、衝撃を受ける。

二十九日、ハーバード大学大学院 (DIVISION, History and Political Science) に聴講手続き。「一八一五年以降のヨーロッパの拡張 (History)」 「中世およびルネッサン期の美術 (Fine Arts)」 「労働問題 (Economic)」 「宗教史概観 (History of Religion)」 を受講登録。同地に松方乙彦ら十一名の日本人留学生あり、ミス・バーマ方に下宿。

十月六日、星野勇三、ハーバード大学に有島を訪ね、その近況を「有島君は大に元気でまだ新着の事故多忙の様に御座候。今夜も歴史の演説があるとして参られ候」と書き送る(「文武会会報」44号)。

八日以前、図書館で「フォークス・ローア」誌九月号(年次不詳)。「Poet Lore」誌同年夏号であろうとも)のゴリッキーの作品に感動、翻訳を志す。また、「Poet Lore」誌同号はシモン・キウキツ作「Dwite Laki」の英訳「A Hindoo Legend」(翻案「西方古伝」の原作)も掲載。

この頃、エマースン、ブランドス、ツルゲーネフなどを耽読。ま

た、金子喜一（明治九年十月二十一日、神奈川県生）を知り、カウツキー、エンゲルスの著作にも触れる。

日露開戦後、「キリスト教の裏面」に失望し、キリスト教が「無力となりつつあるを目撃見聞」する。
この年、「文武会」の賛助会員になる。

明治三十八年（一九〇五） 二十七歳

一月一日、夜、金子喜一とともにポストンで開かれた社会主義者の集会に参加。

十日、金子の紹介の弁護士「ビーボディ」の家124 Oxford st. のアパート「The Greenacre」に移り住む。ビーボディは、一八六二年六月六日生まれ、一九三八年八月十五日没。

十三日、ビーボディがホイットマンの詩を朗読するのを聞いて、「長く長く遙かに望みつつありし一のアアシス」に巡り会った、と感じる。

二月、「露国革命党の老女ブレシコフスキイ女史」を書き、「平民新聞」に送る（同紙はすでに廃刊、島田三郎の「毎日新聞」明治38・4・5―7、9―10に掲載）。

三月、反キリスト主義者インガソルの講演集を読んで感銘、ポストスの場末の古本屋でマッケイ本『草の葉』を入手。

六月、ハーバード大学への出席を辞め、十二日から、阿部三四とともにニューハンプシャー州グリーンランドの農家F・S・ダニエル方で働く。週給四ドル、仕事は農作業・家事と苛

酷。

七月二十四日、「共に働きつつありし友の一方ならず衰弱し、殊に厭しき事誼其家との間に起り候為」予定を繰り上げて農家を去りケンブリッジに滞在。その後、アボンデールのクロウエル方で「二週間程度休養」。

八月二十五日、バルチモアに行き、森本厚吉と共同生活を始める。

この月、父母、北海道の農場を視察、管理人吉川の父、貫藏が場内宮山の丘に天照皇大神を祀っていたのを「彌照神社」と命名。農場、大部分成獣。

十一月二日、森本厚吉とともにワシントンに移る。以後、国会附属図書館に通って「歴史及文学を専修」。とくに、イブセン、トルストイ、クロポトキン、ツルゲーネフ、ゴーリキーの諸作品を耽読したほか、聖書を「読み返」す。

二十九日、自分の労働で得た金を遠友夜学校で教えた瀬川末と札幌独立基督教会に送る（五ドルと二ドル）。

十二月十五日、滞米二年のアルバムをまとめ、家族あてに送る。

明治三十九年（一九〇六） 二十八歳

一月一日、森本厚吉とともにワシントンで迎春。

三日夜、「合棒」（「かんかん虫」の前身）を脱稿。

八日、ツルゲーネフの『父と子』を読了、衝撃を受ける。
十五―二十日、ニューヨークで過ごす。一夜、金子喜一を訪

問し、その妻コンガーとも会う。

二月八日、ドストエフスキの『罪と罰』を読み、「深刻骨に徹す」のを覚える。

三月、札幌農学校佐藤校長から同校教授就任を請われたが辞退。四月、「或る恋愛事件に座し短銃を以て生命を脅かされ」神経衰弱に陥る（恋愛事件の当事者は森本厚吉と伝えられる）。

二十四日、ワシント近郊の僻村チエヴィルチエイスに逃れて農家の一室に下宿、心身の回復に努める。

五月二十三日、イブセンの訃に接し、「イブセン雑感」を執筆。七月一日、札幌農学校教授就任のため帰国する森本厚吉と別れる。

九月一日、ニューヨーク（ホボーケン埠頭）からプリンセスII アイリーン号に乗船してイタリアに出帆。船中「ファニーに捧ぐ」と題して日記を書く。

十三日、ナポリに着き生馬と再会。カプリ島、ボンペイなどを遊覧。

二十二日夜、ローマに入る。

十月三十一日、生馬とともにローマを発ち、夕刻、アシジに着く。クララの尼院、聖フランシスコ寺院などを訪ねて、二泊。

十一月一日、ミラノ着、同市で開催中の万国博を見物。ベルン、チューリヒを経て、十七日、シャフハウゼンに到着、ホテルIIシュヴァネンに泊まって宿の娘ティルダIIヘックを知る。ティルダは、一八七七年九月一日生まれ、一九七〇年没。同

地の若い芸術家の一群「富士山サークル」と親しく、ヘルマンIIヘッセとも交誼があった。二人の出会いはいく日間にも過ぎなかったが、没年まで親密な文通が続くことになる。

二十三日、チューリヒまで見送ったティルダと別れ、車中「呻吟」して眠れず。

二十四日、ミュンヘン着。

十二月一日、ベルリンに入る。ケルン、アムステルダム、ブリュッセルを経て、二十九日、パリに着き、生馬とともに越年。

明治四十年（一九〇七） 二十九歳

一月十七日、生馬と別れ、単身ロンドンに向かう。途中、車窓に「ミレーの描く絵宛らの風景」を見る。

十八日、ロンドン着、図書館通い。

二月三日（?）、同市郊外に住むクロボトキンを訪問、歓待され、幸徳秋水あての書簡を託される。

四日、パリから生馬が来て十九日まで滞在。

二十三日、日本郵船の因幡丸で帰国の途に就く。

三月十六日、インド洋を航海中の日記に、「どうか一個の人間として生きさせてくれ」と書き、懐かしい人々に思いを馳せる。「壬生馬はどうしているだらう。光案本厚吉」は、増田（英一）は、ファニーは、ティルディは、（河野）信子は、愛子は……」。

二十三日、『アンナIIカレーニナ』を共感のうちに読了。

四月十一日、神戸に帰着。父武、西下して波止場まで出迎える。
十四日、帰京。

二十五日、志賀直哉・武者小路實篤が、武郎の持ち帰った生馬の絵を見に来訪。夜半まで歓談。

五月三日、志賀直哉ら来宅、九日、志賀を訪問。

六月十八日、末光績あて書簡に「長男たるの苦痛」を漏らす。

この月、ワシントンで書いた「合棒」をもとに「かんかん虫」(草稿)とシエキウウキツチ原作「西方古伝」翻案草稿を浄書。ついで、ツルゲーネフ原作『父と子』の翻訳に着手(翌年六月二十二日、訳了)。

八月六日、父とともに狩太の農場を訪問。

九月十一日、来道した原敬内相が父武とともに留萌方面に出向いたのに同行。

十二日、五年ぶりに札幌の土を踏む。

十四日、同窓会に出席し、星野勇三・渡邊重策・半澤洵らと旧交を温める。

十五日、農学校校長佐藤昌介を訪問して一身上の相談(農学校教官就任内定か)。

十七日、母と行郎も来道、狩太で落ち合う。父母、農場に「狩太八景」の書画帖を残す。

二十日、一行農場を去り、函館着。

二十四日、一年志願兵の残余期間(三カ月)服役延期かなわず、帰京入営と決まる。

二十五日、「佐藤学長に(農学校) 就任延期の事願ひ置き」函館を發つ。

九月一日、予備見習士官として麻布の歩兵第三聯隊に入営、十一月三十日まで勤務。在営中蘆田伊人を知る。

三日、志賀直哉の恋愛問題に関し、直哉の父直温と面会、九月・二十六日と面談を重ねて調停に当たるも不調。

十日三十日、志賀を訪問。

在営期間中、みずからもまた河野信子との結婚を父に反対されて「癒す可からざる深き疵」を負う。

十二月五日、東北帝国大学農科大学英語講師に任ぜられる。年俸一千二百円。

下旬、河野信子は小柳津邦太と婚約。アーサー・クロウエル、武郎を訪ねて来日。武郎、二日間東京・横浜を案内。

明治四十一年(一九〇八) 三十歳

一月六日夜、農科大学赴任のため札幌着。北六条西一丁目の森本厚吉方に寄寓。

八日、新学期始まり出校。予科・土木科・森林科第一年度の英語(一週十一時間)を担当、また学長主事として倫理講話を委ねられる。

十一日、学芸部例会で「旅行談」と題して講演。

十九日、札幌独立基督教会会員一同の希望、さらに同教会会員であった農科大学学生大石泰藏らの懇請もだしがたく、日

曜学校校長就任を承諾。

二十二日、「一日も早く此教会の束縛より脱逸せんことを希」いつつも、終日教会の歴史執筆に当たる。*編輯委員——竹崎八十雄・有島武郎・田中稔・大久保敬。

二十三日夜、社会主義研究会に出席してラスキンを講義。

参会社——蠣崎知次郎。吹田順助・原久米太郎・逢坂信忠・

末光信三・丹羽三郎・大石泰藏・橘禮次・松尾修一。

二十六日、日曜学校に出席し、新校長として生徒七十四人に挨拶。

二十八日、札幌独立基督教会二十五周年記念会の席上、教会史を朗読。

二十九日、己が蔵書を眺めわたして「余は錨を下ろすべき港を持つて居ない」と嘆く。夜、教会で「懷疑」と題して講演。

二月一日、遠友夜学校の倫理論話で「独乙の昔話ナイルのつばめ」(原話オスカー・ワイルド「幸福な王子」)を話す。

九日、「有島校長は今日より鳩の組の一部を受け持たる。氏の信仰の異なるためか司会をねごふたれどきかれず、大久保司会す」(「日曜学校記録」)。

二十三日、河野信子の未来の夫に対する義務感から、信子に對して「交際を断たうとする宣言」を書き送る。

この月、札幌独立基督教会の役員改選で学芸部長に選ばれる。

三月六日、学生監部勤務を命ぜられる。(同月十九日より同年十月十日まで、恵迪寮に舎監として住み込む。)

八日、「有島校長全体に對し、巨人の黄金の林檎取りの話をせらる。要は吾人が或者を得るためには大いに努力せざるべからずといふにある」(「日曜学校記録」)。

十九日、評議員を務める北海道基督教中央部会に出席。

二十八日、開議社(クラーク発案の学内集会)で武郎の歓迎会開かれ、「米国の学生生活」と題して講演。この時紹介したストームがその後盛んに行われるその行事の起源になったという。

この月、狩太の農場成墾、武郎名義となる。武郎、新場主として小作人に「口演覚書」を配布。

四月十六日、河野信子が青山学院英語教員の小柳津邦太に嫁したことを知り衝撃、十七日から五日間、赤岩温泉(現・小樽市内)に滞在して傷心を癒す。

二十一日、札幌に帰着、遠友夜学校教師たちの「月次会」に出席。以後もこの会にはほとんど欠かさず出席する。

五月六日、同年度の大学予科・農学実科・林学実科・土木学科・水産学科の入学試験委員を命じられる。

六月一日、陸軍歩兵少尉(予備役)に任じられる。

四日、予科教授・高等官六等、七級俸に叙せられる。

二十五日、新任のドイツ語教師吹田順助来談、芸術・人生について語り得る唯一の知己と感じる。

二十六日、恵迪寮で「米国に於て休暇中精神病院に過せし折の話」を講演。

二十九日、武者小路實篤来札（七月十一日まで滞中）。

七月四日 卒業式。

六日、武者小路とともに上川方面を小旅行、旭川に一泊。

二十八日、成功検査（八月二日まで）立ち会いのため、狩太の農場に赴く。農場の管理経営では「いつも心に落着かないものを感じ、この仕事をするのが恐ろしく不快」、トルストイの『若い地主の朝』が想起される。

八月十日、農場を立ち、東京に向かう。

九月一日、日比谷の松本楼で陸軍中将神尾光臣の二女安子（戸籍上は「安」。明治二十二年六月十七日、東京生まれ）と見合い。

二日、神尾一家、鹽原に発つ。

三日、父母とともに同地に赴き、六日まで滞在、安子に心惹かれる。

十一日（？）、結納、十二日、神尾家に招かれて盃と指輪を取り交わす。

十四日、安子とともに新渡戸稲造を訪ねる。

十五日、東京を立ち、帰北。

二十七日、日曜学校で全員に「いらくさの話」。

この月、武郎がリーダーとなって美術団体「黒百合会」発足。

* 黒百合会のメンバー——小熊捍・丸山猪之助・鹽澤□・藍野祐之・野村龍吉・板倉勝則・入江一郎・坂村徹・原田三夫。
またこの月、吉川銀之丞出札、小作人の大部分に共同退場の意

志があるらしいと伝える。

十月一日、クロボトキンより来信。

五日、高岡熊雄教授来談、日記に「余は、官立学校で教へるのが厭になつた」と記す。同月、十五日をもって社会主義研究会消滅。十日、学生監部勤務を解かれ、恵迪寮を出て北二条東三丁目九番地（現・北二条東六丁目付近か）に移る。予科学生松尾修一、書生として同居。

十七日、恵迪寮寮生たちと定山溪に行き、一泊。安子に、同地の五剣山を描いた葉書二葉を送る。

二十五―二十七日、階樂園洋館で第一回黒百合展開く。学生原田三夫が一等から六等まで独占、有島の絵は七等であった。

十二月二十一日、開識社例会にて「ブランド」を講演。

二十八日、第十回卒業式、第十四回奨励会に出席。

この年、足助素一、市内北七条西四丁目野村氏方で貸本屋「独立社」を開業、有島はその看板を書き、資金若干を援助した。また、在札の原久米太郎・佐山英男・吹田順助と時々会合。

『イブセン雑感』（4月「文芸会々報」）、「札幌独立基督教会沿革」（12月22日「独立教会」37号附録）。

明治四十二年（一九〇九） 三十一歳

一月、足助素一に懇望されて遠友夜学校代表となる。

三十一日、吹田順助、武郎結婚までの期間寄寓することにな

り、引越して来る。のち、その生活の一斑を「半日」に書く。
二月七日、北辰教会日曜学校を参観。夕方から、『ファウスト』研究会。

三月二十日、挙式のため離札上京。

下旬、東京で神尾安子と結婚（戸籍簿の写では「神尾安ト婚姻届明治四拾貳年四月拾貳日受付」）。安子の両親は、父光臣（安政二年十一月十一日生）、母まつ（文久三年八月生）。姉と弟妹は、愛（明治二十年六月生）、毅一（同二十四年四月生）、龍子（通称けい子、同三十七年三月生）の三人。

この月発行の「札幌独立基督教会会員名簿」（「独立教会」38号附録）、同教会の評議員の一人として有島武郎の名を記載。

四月十日ごろ、帰札、豊平館に師友を招いて披露宴。

二十四日、開識社で「宗教と科学」と題して講演。

三十日、同年度大学予科・農学実科・土木工学科・林学科・水産学科の入学試験委員を命ぜられる。

五月十五日、日記に「結婚以来初めての文学作品」として「魍魎を駆ける家の中を」（詩）を書き付ける。

六月六日、自宅で月次会を開催。

八日、来札した新渡戸稻造を遠友夜学校に案内。

七月三日、日英博覧会（明治四十三年五月―十月、ロンドン）の出品委員を命ぜられる。

この月、山本直良名義で出願していた土地、北海道庁から無償貸与となる（在籍小作五十六戸）。

八月、父武、弟英夫（里見淳）・行郎とともに狩太の農場に赴く。

十月、安子を伴って農場に赴く。

十八日、大学予科二年級学級主任を命ぜられる。

二十七日、日英博覧会に出品のため、英文による「大学一覽」の編集委員を命ぜられる。

十一月七日、第二回黒百合展を北九条小学校で開く。

十三日、「北海タイムス」記者大島經男（流人）来訪。

二十四日、秋季皇霊祭、遠友夜学校の茶話会に出席。

この月印刷発行の「札幌独立基督教会日曜学校報告」に、有島武郎、女子菊之組担任と伝える。

この年、柳宗悦を知る。

吉川銀之丞、有島農場の管理人となる。

前年またはこの年、愛子の長男（甥）山本直正の病氣見舞いに絵入りの翻案童話「燕と王子」を書き与える（大正15・7―8、「婦人の国」に掲載）。

「ブランド」（6月―45年4月、「文芸会会報」八回）。

明治四十三年（一九一〇）

三十二歳

二月十五日、生馬、ヨーロッパ留学から帰国（二十五日帰宅）。

三月十九日（また二十日）、武郎、札幌を発ち上京。

二十五日、「万朝報」、「貴公子の文芸団、機関雑誌の発行」と

「白樺」創刊を報じ、同人の一人として「有島第十五銀行取締役の令息武郎」と紹介。

二十七日、組合教会を参観。

四月一日、「白樺」創刊。武郎、生馬・里見弴とともに同人参加（雑誌が出たのは三月二十八日）。同誌の題字（第一巻第二号―七号、九号、第三巻全冊）は有島が揮毫。

十一日、生馬を訪ねて志賀直哉来訪。武郎、蒲原有明・島崎藤村らも交えて歓談。中旬、帰札。

五月一日、上白石町二番地（正式表示は札幌区白石町二番地、現・白石区菊水一条一丁目）に転居。「豊平川の右岸にして豊平橋を去る三丁ばかり林檎園を切開きたる中に建てられし貸屋」であったという。

十三日、同年度大学予科農学実科・土木工学科・水産学科入学試験委員を命ぜられる。

十五日、札幌独立基督教会日曜学校校長の辞意を教員および児童一同に表明。

二十四日、前田謙あて書簡に「例の土曜会は一先散開」と報知。

この月、札幌独立基督教会を退会。

またこの月、大学案内記『東北帝国大学農科大学』（明治43・5刊）の第一章「本学の過去」を書く。同書編輯委員は、有島武郎・仲尾政太郎・伊藤静栄・大石泰藏・加藤茂雄。

二十二日、遠友夜学校倫古龍（リンコロン）会で「校歌ニ就

テ」の講演。

六月、小宮豊隆、「ホトトギス」（六月号）の「五月の評論」で「二つの道」に論及。小宮評を受け、「も一度「二の道」に就て」を書く。

三十日、自宅で遠友夜学校月次会。鈴木限三・末光績・板井傳三・高本幸三・早川直瀬・辻義一・今井伸二らが出席。

八月十六日、高等官五等に叙せられる。

二十日前後、父母来道し武郎宅に滞在。

十月六日、農科大学臨時特別調査委員を命ぜられる。

二十一日、従六位に叙せられる。

十一月十一日、生馬、原田豊吉の次女（熊雄の妹）信子と結婚。媒酌人は高木喜寛夫妻、華族会館で披露宴。

十三日、札幌女子高等尋常小学校で第三回黒百合展開く。木田金次郎、武郎の「たそがれの海」に心ひかれ、交友の機縁となる。

この展覧会に出品した武郎の「有珠の煙」は二等に入選。

十九日、「白樺」のロダン第七十回誕生紀念号を落手。

下旬、トルストイの死をめぐり、小樽新聞記者宮原晃一郎、取材のため来訪。

木田金次郎来宅、初対面。

十二月四日、生馬夫人信子の祖父原田一道（男爵）死去。

十日、狩太の農場事務所の一室で「或る女のグリンプス」の初回掲載分（一・二・三）を脱稿。

この年、結婚生活の危機を迎え、夫婦ともしばしば離婚を考えたとはいふ。

「西方古伝」(シエンキウウキツチ作・翻案、4月「白樺」)。

「二つの道」(5月、同)。「老船長の幻覚」(7月、同)。「も一度

「二の道」に就て」(8月、同)。「かかん虫」(10月、同)。

「叛逆者—ロダンに関する考察」(11月、同)。

明治四十四年(一九一二)

三十三歳

一月十三日、長男行光生まれる(のちに映画俳優森雅之)。助産婦は遠藤親佐。

二月上旬、トルストイの『戦争と平和』を読み、「感嘆斜ならず」。

三月十九日、武者小路實篤、武郎が「白樺」に送った「お目出度人」を読み、「の原稿を卒読して感激、「武郎さんに」(同誌四月号)を書く。

四月三十日、遠友夜学校の遠足に同行して円山温泉へ。

この月、「或る女のグリンプス」に触れた中島孤島(新小説)・宮本和吉(ホトトギス)らの批評が現れる。

五月四日、同年度大学予科・農学実科・土木工学科・林学実科・水産学科入学試験委員を命ぜられる。

五日、實篤、武郎を訪ねて再度札幌訪問、近くの神田金樹方に約一カ月滞在。

六月四日、すみれ会で「自然ヲ楽シメ」の講演。

十二日、大学より「學術調査ノ為上京ヲ命」ぜられる(皇太子来道に備え献上用の農科大学アルバム作製が目的か)。

十九日、着京。二十日、小川写真館で写真帳の打ち合わせ。

母幸子、「婦人之友」(6月号)に「如何なる結婚が最も幸福なりや——幸福なる結婚不幸なる結婚」を寄せる。

七月七日、「白樺」同人有志、武郎を迎えて懇親会を開く。

上旬、生馬を伴って帰北。生馬、約二週間武郎宅に滞在して絵画製作に励む。

この月以前、北八条東二丁目十二番地(現・北八条東六丁目付近)に転居。

八月四日、木村徳藏あて書簡に「当地は皇太子の北巡と云ふ訳にて準備に寧日なしと云ふ騒ぎ」、「夏休暇は此為めに全つづれ」と近況を報知。

二十二日、生馬の長女暁子生まれる。

二十五日、皇太子札幌入り、五日間滞在。

二十六日、佐藤昌介学長・宮部金吾教授とともに献上品を護して皇太子の宿泊する豊平館に伺候、「東北帝国大学農科大学予科教授陸軍歩兵少尉従六位」として拝謁。同日の拝謁者四十四名。

大学では、行啓を記念して「文武会会報」の記念号(44・10・10)を発行。

十月二十五日、不作のため、有島農場第二期小作料納付金を二

割五分減額。略奪農業の結果、既耕地の地力はなはだしく消耗。

二十九日、女子尋常小学校で第四回黒百合展。「黒百合会記」に、「子供や子供のやうな露骨な人の批評に抛れば有島先生のアンプレッションは最悪辣なものであつた。その最不評判ものが吾々の間に最迎合されるのを見ると、黒百合会員の芸術的旋毛は耳の上あたりにあるのかも知れない」とある。

十一月、農場管理人吉川銀之丞の父貫藏死去、場内北隅の共同墓地に葬る。

十二月二日、学芸部例会で「暗示」と題して講演、「智識的にして解剖的なる研究」の他に「寧ろ主情意的にして直覚的なる暗示」の大きな働きのあることを説く。

この年、有島農場の小作六十一戸のうち八戸が退場。退場者の中に農場草分けの一人で「カインの末裔」のモデルと目される広岡吉次郎もいた。

「或る女のグリーンブロン」(1月—大正2年3月「白樺」)。「泡鳴氏への返事」(2月、同)。「お目出度人」を讀みて」(4月、同)。

明治四十五・大正元年 (一九一二)

三十四歳

一月二十八日、佐藤昌介学長在職二十五年記念に森本厚吉らと肖像画を贈るため、生馬にしかるべき画家の推薦を依頼。

二月十一日、開議社第六十一回例会で人生觀を語る(演題は「無題」)。

十七日、恵迪寮に文学研究会「凍影社」発足。開議社で寮誌發刊を決議し、誌名を「辛夷」と定める。

三月二日、学長の肖像画揮毫を生馬自身が引き受けたので、詳しい觀察を書き送る。

この月、足助素一經營の貸本屋「独立社」、札幌南大通西四丁目に落ち着く。武郎、物心両面にわたり援助。

三十日、遠友夜学校卒業式(式辞有島武郎、奨励原久米太郎)。四月五日、学芸部主催通俗講演会で「今の芸術のために」と題して講演。

八日、恵迪寮開舎七周年記念祝賀会に佐藤学長・森本厚吉らとともに出席。

二十一日、子科桜星会主催の北海道学生演説大会で「雄弁」と題して講演。

五月十八日、北三条東三丁目 第二御料地内(現・北三条東五丁目)に転居。

この月、吹田順助から借りた「芸文」誌上で西田幾多郎のベルグソン紹介文を讀み「時と自由意志(“Time & Free Will”)』は「聡慧と真率の識り出したる叙情詩なり」と賛嘆。

七月十九日、次男敏行生まれる。同日午後、両親および弟英夫(里見淳) 來札、「大よろこび」する。

九月二日、志賀直哉の「大津順吉」を讀み、「強列なる主觀の

色彩夏の日の如く目を眩まし申候」と志賀あてに書き送る。

十月十一日、来札の内村鑑三と植物園角地の宮部金吾宅で「二人始ど二時間、相対して信仰の事に就て論じた」が、離教の意志を翻すに至らなかった。内村は信者に「有島は最早我等の有にあらざ」と報告。

十六日、高等官四等に叙せられる。

十九・二十日、第五回黒百合会、武郎の尽力により東京から送られたロダンの彫刻三点・デッサン二点を併せて展示。

二十八日、生馬を訪ねて来た志賀直哉に会う。

この月、中旬ないし下旬、吉川銀之丞上京か。

またこの頃、北十二条西三丁目三番地の「小さな家」に移り、新築家屋の完成を待つ。

十二月二十八日、正六位に叙せられる。

この年、有島農場の小作六十四戸、既耕地二五〇町歩に達するも地力消耗著し。

「小さい夢」(ゴルフズワージー作・模訳、3月「白樺」)。

大正二年(一九一三)

三十五歳

一月二十五日、開識社第六十六回例会で「西洋画発達に就いて」と題して講演。

二月十五日、恵迪寮学生の一人が「芸者買ひ」をして不徳漢と糾弾される。武郎、緊急学生大会に駆けつけて慰撫・説諭。

二十五日、武郎、生馬再度の外遊希望に賛成の意思表示。また、安子と二児が久留米の実家まで旅行することになった旨報告する。

三月一日、学芸部講演会でベルグソンの哲学について講演。

二十日、札幌を発ち、浜松に赴いたのち、二十四日東京入り。四月十一日、白樺版画展始まる。武郎、その展覧会を見て帰北。五月三十一日、生馬あてに「三人(武郎・安子・行光)は無事」と書き送る(敏行は東京に滞在中)。

八月十日、北十二条西三丁目三番地に新築した西欧風の家に移る。マンサード(腰折れ)屋根を載せた木造二階建、延床面積約二六〇平方メートル。隣家に上田寅次郎(石上玄一郎の父、「小さな者へ」のU氏のモデル)が住んだ。

二十三日、前日の夜行で函館に向き、春以来療養のため在京させた敏行を伴って来道した父母を出迎える。父母、武郎の新居に滞在。

二十六日、父とともに登別温泉に赴く。また、この滞在期間中父子で農場を視察。

同日、パナマ太平洋万国博覧会出品準備特別委員を命じられる。

九月八日、両親帰京。

十一日、新学年始業、大学予科第一年学級主任となり、予科・水産科の授業を担当。

三学年にはThomsonの“The Bible of Nature”を二

学年には Cooper の "Last of Mohicans" を講読。

二十日、父母に手紙を書き、凶作による小作料の一部軽減を報告。

二十四日、大石（泰藏か）訪ね、その農場経営の窮乏打開につき助言、激励。

二十五日、黒澤良平に乞われ「ブランド」の切り抜きを貸与。

二十六日、武者小路實篤から來信、「職業とぶつかりあうことがあっても、かまわずどんどん書くようにと焚きつけ」られる。

十月二十二日、足助素一に「平生心中に潜めて誰にも告げなかった一事（教職生活・農場問題を含む今後の方針か）」を語りえて「会心の一夜」を過ごす。

二十六日、補導のため自宅に預かっていた予科二年の中根幸雄が姿を消したため心痛、奔走（この事件は翌年まで持ち越された）。

二十八日、足助に求められ、長文の「人生観」を書きおくる。

十一月三日、足助來訪、武郎の「人生観」と、意中の女性の手紙によって自殺を免れたと報告。

十二月二十三日、三男行三生まれる（昭和六年十二月、母安子の弟神尾毅一に養子縁組）。

二十五日、出奔中の中根幸雄の事件に関し、小樽に赴く。

この年秋ごろ（八月以降年内）、遠友夜学校生徒であった瀬川末自殺、「お末の死」の有力な作因となる。

「ワルト・ホイットマンの一断面」（6月「文武会々報」）。「草の葉」（7月「白樺」）。

大正三年（一九一四） 三十六歳

一月一日、友人への賀状、葉書中央に朱刷の署判で太陽をかたどり、文面は「署判に凶年乃御慶あなかしこ」

五日、足助素一、貸本店独立社を遠友夜学校に寄付し、旅に出る。

十八日、出奔していた中根ようやく帰來、のち父に引き取られて退学、辞去。

二十五日、遠友夜学校の倫古竜会に出席。

二月十七日、生馬あて書簡に「四十になれば如何なる障礙も排して起ち可申候」と、生活変革の意志を伝える。

二十二日、倫古竜会に出席。

二十四日、足助素一の父群右衛門、郷里岡山で死去（享年八十三）。

有島、「マニアワズ」と打電してきた足助を慰め、また「生の不安とも云ふべき暗黒な不思議が心の中に噛み入つて來る」と書く。

三月二十日、「An Incident」脱稿、足助あて書簡に「今度のものでは生地が出てしまつた。あれを書いてしまつたら泣きたくなつた」と漏らす。

二十八日、遠友夜学校の奨励会（卒業式）に出席、「一生の中この世の中に生れた時より少しでもいいからよくして死なうではないか」と講話。

四月四日、学芸部講演会で「三様の生活傾向」と題して講演。

この月、北海道拓殖銀行より担保なかれの「旧佐村（狩太）農場」九十四町歩を七千五百円で買収、第二農場とする。有島農場総面積、四百四十四町歩（約四百四十ヘクタール）となる。

七月六日、家族とともに札幌出発、上京。

十一日、上野公園で開催中の東京大正博覧会を見物。

二十六日、両親・家族とともに九州に向かい、久留米に岳父神尾光臣を訪ねる。

八月二日、初めて父の郷里鹿兒島に赴く。妻子は久留米に滞在。「真夏に輝く白い道、暑さの上に暑さを積み乗せたやうに思はれる石垣堀や、放恣にさへ見える女の風俗など」が印象に残る。

五日から八日まで、父の郷里平佐で旧墓発掘、供養。

九日、久留米に戻り、揃って十八日帰京。神尾光臣、にかわに第十八師団を率いて山東半島に出征と決まり上京、武郎一家、帰北を延ばす。

九月上旬、帰札。新学期始まり、予科の教授を代表して新入生に歓迎の挨拶。

中旬、足助素一、相場に失敗して有島宅に転がり込む（二十

二日、足助上京か）。

下旬、安子発熱して病臥、診断は気管支炎。

十月四日、安子入院。

十七・十八日、黒百合展開催、武郎の助力によりゴヤ、レンブラント等の版画も出展。

十一日二十四日、安子のため医師に転地を勧められ、「行李を修め児輩を伴ふて」帰京。

二十八日、安子を鎌倉に転地させる。

十二月、岳父神尾光臣、山東半島より凱旋、入京。

「お末の死」（1月「白樺」）。[An Incident]（4月「白樺」）。
「内部生活の現象」（7月8日—8月4日、「小樽新聞」十四回）。「幻想」（8月「白樺」）。

大正四年（一九一五） 三十七歳

二月上旬、安子を平塚の杏雲堂病院に入院させる。

三月十一日夜、残務整理のため、札幌に向かう。

十四日、札幌着、教え子の本橋平一郎に迎えられる。住居の後片付け、知友への離別、挨拶回りなど連日多忙。

十八日、狩太に赴き、農場事務のため三泊、大雪。

二十四日、農科大学に至り辞表提出（同月二十六日、「文官分限令第十一条第四号ニ依休職」となる）。

二十五日、遠友夜学校に至り、後事を野中時雄に託して同校

代表を辞す。

二十九日、恵迪寮寮生、遠友夜学校生徒ら教え子多数に見送られて札幌を去る。恵迪寮に英・独・和の書籍五十余冊を寄贈。

三十一日朝、帰京。「愈々浪人となつた」ことを痛感。

四月に入り、二日、九日と安子を平塚に見舞うかたわら「宣言」の構想を練る。

二十四日、鎌倉、鶴沼に遊び武者小路實篤を訪問。

三十日、大船から鎌倉への帰途円覚寺に立ち寄り、寶物を見、座禪堂を訪ねる。

五月三日、母と三兄らを伴い、「家庭博」に出掛ける。

十一日、「久し振りに仕事に対する力が湧き」、鎌倉で「宣言」執筆に着手。

二十二日、伝染病研究所に古賀玄三郎博士を訪問（安子の診察と注射を要請か）。

六月十三日、平塚を訪ねて安子の病状悪化を知る。同日の吹田順助あて書簡に「もつと何かしてやりたかつた」と自責の念を伝える。

十五日以後、「宣言」（初回発表分）浄書、完稿。

七月十五日、古賀博士の注射を安子に初めて試みる。

八月十九日、三回目の注射、安子回復の兆を見せ、愁眉を開く。この月、「男女」両性間の憧憬、争闘、調和」を主題にした「サムソンとデリラ」を執筆。

九月八日、鎌倉海岸通りの住まいを引き上げて麴町の両親の許に移る。

二十七日、父と生馬、朝鮮・中国の旅行に出発。

十月二十二日、「宣言」執筆のため稲毛に行き二泊。

この頃、足助素一、渋谷道玄坂で屋台の焼き芋屋を始める。屋号は甘薯の学名「Ipomea」に因んでイポメ屋。有島、自筆の掛け行燈を贈って励ます。

十二月十六日、「洪水の前」を脱稿。

下旬、足助・吹田順助と会食した際、隣室の外人が有島の英語の発音を笑ったのに憤慨、膝語談判に及ぶ。

「宣言」（7月、10—12月「白樺」四回）。「サムソンとデリラ」（9月、同）。

大正五年（一九一六） 三十八歳

一月十一日、「或る女のグリンプス」続稿に着手。

下旬より、父の体調悪化。

二十二日、帝国ホテルでミス・ベルソンの独奏会を聴く。会場で志賀直哉・柳宗悦・小泉鉄に会う。

二月八日、安子死を覚悟し、遺書として武郎あてに長文の手記を書く。

三月十七日、古賀博士の注射、この日十七回目を以て中止。中旬、慶応大学教官に就任の議起る。

この頃、キリストをモデルにした戯曲を書くことを構想。
二十七日、ハヴェロック・エリスの『性心理学の研究』を購入。

二十八日、『性心理学の研究』第一巻を読了。「性生活における女性の心理や、ヒステリーと性本能との間の関係などいくつかの事実」を知り、「或る女のグリンプス」改作のヒントを得る。

二十九日、札幌農科大学の教え子大島豊来訪、同志社神学部で学ぶことになった大島にはなむけの言葉を贈り、在学中の学資援助を約す（月額七円）。

四月五日、雙葉幼稚園に初登園の行光に付き添い。

七日、札幌農科大学校歌集の序文を書く。

十三日、『アッシジの聖フランシスの小さき花』を購入。

中旬以降、父の健康ますます衰え、「白髪と瘦躯」が気に懸かる。

この月、橋浦泰雄、弟季雄に伴われ、初めて有島宅を訪問。

五月三日、安子を平塚の病院杏雲堂から退院させ、その近くの借家に転居、療養させる。

六日、東郷青児展を見に行き、会場で当人に会う。「若く、強く、遅し」い、「未来派の絵を描く唯一人の芸術家」と感銘。

八日、生馬の妻信子、実家に帰って帰宅せず、覚悟の家出とわかる。

以後、父に代わって信子の実家（原田）との折衝に心を砕く。
二十七日、慶応大学就任の議に齟齬のあったことが判明、鎌田学長に不快を覚えて「三田への公開状」を書くことを考える。

六月五日、「新潮」記者中村武羅夫来訪、ロンドンでのクロボトキン訪問記の執筆を求められて承諾。

八日、安子の大咯血を知る。

十二日、クロボトキンとの会見記を脱稿、「新潮」に送る。

十五日、平塚行き、さらに新しい治療（水治法か）を試みる。

十七日、「ワルト・ホイットマン伝」の資料収集にかかる。

二十一日、休職中の農科大学から入学試験委員を命じられ、

二十八日まで、東京での業務（試験監督など）に当たる。

二十四日、神尾光臣、陸軍大将に昇進（七月十四日、男爵になる）。

七月十九日、生馬が離婚問題を題材に書いた「孤鸞鏡中影」を読み、作中武郎が主人公として「少し高尚に描かれ過ぎていゝ」と恥じ入る。また生馬の娘暁子の境遇に心を痛める。

二十一日、鎌倉へ、「時事新報」から依頼を受けた「霧」に関する一文を書きに行く。二十二日、「潮霧（ガス）」を脱稿。

二十九日、生馬に勧められたミレー伝執筆を引き受ける。

八月一日夕、平塚に着くと安子の病勢除悪。三児には秘し、親族に急を報らせる。

二日、午前八時、安子死去（享年二十七）。同日夕、棺前式

を自ら司り、安子の愛誦していた「コリント前書」第十三章を読む。

七日、青山斎場で宮部金吾司式により葬儀・告別式。田島進が説教、柳兼子はアヴェ・マリアと讃美歌第七を独唱。

十日、経井沢の浄月庵に赴き安子の遺稿整理に専念。

十二日、健康の衰えた父武をいたわり、上山田温泉、別所温泉に同行してそれぞれ一泊。

九日三日、夜、壬生馬と「粘土彫塑」。武郎、壬生馬の胸像と小さな女性裸像を制作。

十四日、原稿執筆のため上田方面へひとり旅。別所温泉などに滞在した後、小諸の藤村舊居を訪ねて、十九日、軽井沢に戻る。

二十三日、安子の遺稿集（父武が「松虫」と命名、題箋を「松むし」と揮毫）軽井沢に届く。印刷部数四〇〇部、親戚・知友に配る。

十月十八日、北海道へ「孤独の旅」。この日狩太の農場に至り、二十三日まで滞在。農場で生馬離婚問題の解決を知り「ヨロコビココロオドル」と打電。

二十五日、黒百合会展覧会のため、会場の丸井（札幌）に岸田劉生の作品十二点を届ける。札幌滞在中、遠友夜学校・文武会倶楽部で講話・講演。二十九日、離札。

十一月八日、父武が胃癌にかかっていることを医師に告げられて驚愕。

二十六日、武、危篤状態に陥る。

十二月四日、武死去（享年七十四）、特使をもって従三位に叙せられる。

十三日、武十日祭。

二十三日、母と子供たちを熱海に避寒させ、ひとり越年。

この年、阪田（橋浦）泰雄・与謝野晶子を知る。

* 当時、有島家の一カ月の収支は約二千円であった。

「洪水の前」（1月「白樺」、のち補筆して「大洪水の前」）。「前途」（3月「白樺」、のち『迷路』序篇となる）。「フランセスの顔」（3月「新家庭」）。「クローポトキン」（7月「新潮」）。「潮霧」（8月「時事新報」、三回）。「聖書」の権威（10月「新潮」）。

大正六年（一九一七） 三十九歳

一月十六日夜、救世軍で「神父セルギウス」について講演。

二十二日、武五十日祭。墓参・祭典。

下旬、忌明けの挨拶廻りに諸方を奔走。有島家の家長の立場を自覚させられ、親しい友人に「人生の瀬戸際に立っているやうだ」と感慨を漏らす。

この月以降、諸方より再婚を勧められる。

二月九日、平河町に部屋を借りて事務所（仕事場）にする。

十二日、神田税務署へ遺産相続届を出す。

十三日、「ミレー礼讃」脱稿。

十五日、敏行、肺結核罹病のおそれありと診断される。

十九日、行光・敏行を熱海に伴い、静養させる。

二十三日夕、帰京。この頃、熱心にルナンの『イエスの生涯』を読む。

三月三日、妻の死を題材にした戯曲の執筆にかかる。

十二日、一高生と「草の葉」会を始める。この会には、蠟山政道・鶴見憲・八木澤善次・谷川徹三・蘆野弘・澤田鎌・原彪・藤澤親雄・北岡寿逸らが参加、のち野尻清彦（大佛次郎）・橋爪健・芦澤光治良も加わる。

谷川徹三の回想によれば、「週に一度月曜日の夜、ホイットマンの『草の葉』を先生に読んでもらい、一時間ほど先生の訳読がすんでから、先生を中心に自由な談義を楽しむ会」であった。

十三日、武百日祭。

十六日、神戸女学院に在職中の木村徳三から卒業式の講演を依頼され承諾。

十七日、ロシア革命を知る。二十三日、朝日新聞記者のインタビューに答える。

二十五日、農科大学の休職期間切れ、退職となる。

二十八日夜、神戸に向かう。

二十九日、木村徳三・原久米太郎に迎えられ、神戸（川崎ドッグ、新開地、神戸女学院・明石（人丸神社ほか）を見物。三十日、神戸女学院で「惜みなく愛は奪ふ」（未定稿）の主

旨を講演、院長、女宣教師らの機嫌を損ねる。

四月一日、大阪の文案座で「心中天の網島」を観て感嘆。

三日、京都に入り、円山、桃山御陵、黄檗山を見て宇治へ。縄手三条下ルのあかまん屋に泊まる。以後、この宿を京都での定宿とする。

五日、大島豊の案内で京都大学・同志社・嵐山などを見物、同夜の列車で帰京。

この月、行光、番町小学校に入学。

五月六日、亡父との交誼を謝し、内大臣に就任した松方侯を訪問。

八日夜、保釈中の神近市子と初対面。

十日、神近から手紙、交際始まる。

六月十三日早暁、「カインの末裔」（仮題「仁右衛門」）脱稿。

十六日、「平凡人の手紙」（仮題「或る人への手紙」）脱稿。

七月、右の二作により文名にわかに上がる。

四日、市村座で「名人長次」を見、吉右衛門の演技に感服。

十日、新潮社から著作集刊行を勧められ、同意。

十四日、神近市子を訪ねて散策、接吻、痛切な自責の念。

二十五日、滞在中の軽井沢へ神近から「最後の手紙」。

八月一日、大学病院に行き、肺結核で死亡した十八歳の女性の解剖を見る。

二日、安子一周忌、墓参。夕刻から平塚に赴き、一泊。杏雲堂病院の患者全員に花束を贈る。

十一日から十七日まで、礁氷峠に合宿中の学生の宿泊所に一
間を借りて執筆に専念。

十五日、「クララの出家」、十九日、「実験室」脱稿。

九月八日、「凱旋」を脱稿。

十四日、「芸術を生む胎」脱稿。

十五日夜、神田の救世軍で講演、中川一政に会う。

十九日、沖野岩三郎来訪、統一教会での講演を依頼される。

二十日、「奇跡の道」を脱稿し、東方時論社に送る。

十月九日、本家筋に当たたる有島健助の妻千代子、結核のため死
去。

十八日、「お末の死」「死と其前後」「平凡人の手紙」を収録
し、著作集第一輯『死』刊行。初版千三百冊、二日間で売切
れる。

二十日早曉、「迷路」脱稿。

二十二日、志賀直哉の「和解」を涙のうちに読了。

十一月五日夜、札幌に向かう。

十日午後、農科大学の文武会弁論部で愛について講演(筆録、
「自我の考察」の題で「北海タイムス」11月26日―12月2日
に載る)。

同夜、小樽に行き「白夜」同人の会に出席、ホイットマンの
生涯について語る。

十一日、狩太入り、夜吹雪になる。

十二日夕、木田金次郎来訪、一泊(七年ぶりの再会)。

十六日夕、上野に帰着。

二十三日、命尾寿六翁の祝賀会に出席、「船弁慶」の判官を
謡う。

この月、正宗白鳥・島崎藤村とともに「新愛知」懸賞小説の選
者になる。

十二月二日、青山墓地に安子納骨の際、著作集第一輯『死』を
納める。

四日、同墓地で武一年祭。母と弟妹に、遺産一部分配の意向
を伝える。

七日、「肺結核の第三期」と診断された足助素一を茅ヶ崎の
南湖院に伴い、入院させる。

八日、「小さき者へ」を執筆、深更二時、一気に脱稿。

十四日、「暁闇」(「迷路」続編)を脱稿。

十五日、足助を見舞い、鎌倉扇谷泉谷に家を借りる。

二十日夜半、ようやく「新愛知」の懸賞小説三十篇を読了、
選考を終える。

二十一日夕、朝日新聞懸賞小説に一等で入選した野村愛正を
はじめ、橋浦季雄・阪田(橋浦)泰雄来訪。中村白葉・宮原
晃一郎も加わって十一時まで話す。同夜、白葉の提供した話
題が「石にひしがれた雑草」の材料になる。

二十四日、遺産の一部を弟妹に分配。税務署に、遺産相続の
届を出す。

この月、足助の余命半年と医師に告げられ、有島、諸方から足

助の手紙を収集。察知した足助に理由を訊かれて「君を小説に書きたいからだ」と釈明。

「ミレー礼讃」（3月「新小説」）。「死と其前後」（5月「新公論」）。「惜みなく愛は奪ふ」未定稿（6月「新潮」）。「カインの末裔」（7月「新小説」）。「平凡人の手紙」（7月「新潮」）。「平凡人」の言禍（8月8—10日「読売新聞」、三回）。「アッシジの秋」（8月19—25日「時事新報」、六回）。「実験室」（9月「中央公論」）。「クララの出家」（9月「太陽」）。「凱旋」（10月「文章世界」）。「芸術を生む胎」（10月「新潮」）。「奇跡の祖」（10月「東方時論」）。「迷路」（11月「中央公論」）。「岩野泡鳴氏に」（12月26日「国民新聞」）。

有島武郎著作集第一輯『死』（10月18日、新潮社刊）。同第二輯『宣言』（12月18日、新潮社刊）。

大正七年（一九一八）

四十歳

一月四日、三児とともに鎌倉へ。「或る女」続編執筆を考へるが着手できず。

十七日、木田金次郎から「実におもしろい手紙」を受け取り、創作意欲を覚える。

二十一日、同年最初の「草の葉」会。

二十六日、野村愛正の『明けゆく路』懸賞小説一等入選を記念して、生田長江・秋田雨雀・阪田泰雄・橋浦季雄・涌島義

博らが有島邸に集まる。夜半まで論談、以後も有島・生田両家を会場に「初心会」として継続することを決める。

下旬、英夫（里見弴）ジフテリアのため東京病院に入院、一時危篤状態に陥る。

二月十二日、「死を恐れぬ男」を起筆、十四日、脱稿。

中旬、大島豊の斡旋で同志社大学に客員教授として招かれることになる。

二十八日、第一回末日会、大山郁夫・阿部次郎・田中王堂らを知る。

三月十二日、「石にひしがれた雑草」脱稿。一高で「芸術についての感想」と題して講演。

十六日、大阪毎日新聞に「生れ出る悩み」の連載始まる。東京日日新聞は十八日から掲載。

下旬より、体調不振に陥る。

この月、「新潮」に「文壇諸家年譜^⑧ 有島武郎」掲載される。四月一日、同志社大学英文科講師を委嘱される。担当科目は「近代文学」。春・秋各四週間、一週二回講演。報酬は每学期百

円・旅費二十円（翌春、報酬百二十円・旅費三十円と改定）。厨川白村も同時に英文科講師となる。

十日、肺患の疑いありと診断され驚く。翌日、誤診と判明するが体調はますます悪化。

十七日、発熱病臥。

二十一日、「生れ出る悩み」の執筆を続けられなくなり、大

阪毎日学芸部の薄田淳介（泣董）に「休掲」を懇請。

二十二日、高熱に苦しみ、東京病院に入院。

三十日、この日、大阪毎日新聞の「生れ出る悩み」連載第三十二回で中断、五月二日より芥川龍之介の「地獄変」を連載。五月八日、ようやく東京病院を退院したが、頭痛去らず。

十五日、眼科医、潜在乱視で眼鏡が必要と診断、眼鏡を掛けることになる。

十九日、退院後、初の「初心会」。

二十日、退院後、初の「草の葉」会。

二十六日、母が新築中の別荘検分と後養生を兼ねて熱海へ行く。

著作集第八輯に収録するため「首途」「迷路」「晝闇」を改稿して一本にまとめ、『迷路』として完成することも予定の一つ。

二十九日、かねて有島に関心を寄せていた櫻井鈴子来訪。

同夜、女中の竹との間に「粗暴な、怖い破壊」。

六月三日、帰京。

五日、足助素一、出版社を創めるに当たり、有島の著作集を出したいと申し出る。有島は時期尚早と反対したが足助の意志強固なことを知り、新潮社と交渉に入る。

十二日、『迷路』改稿を終え、新潮社に送る。

十三日、白樺社展覧会の準備を手伝う。

十七日、歌舞伎座で一葉の「濁り江」を観て感動。

二十日、新しい村の計画に対して「武者小路兄へ」を書く。

二十四日、新潮社の佐藤義亮来訪、申し出一切を承諾。有島深く感謝する。

七月二十三日、三児を伴って軽井沢へ。

三十日、「石にひしがれた雑草」改稿を終える。

八月二日、足助素一、東京市牛込区神楽坂二丁目十一番地に叢文閣を創業。

六日、「生れ出る悩み」新聞掲載分の改稿と結末部増補を終えて完稿。

十二日、帰京。

十六日、初心会に沖野岩三郎初参加。秋田雨雀、「死と其前後」芸術座試演を勧める。

二十一日、「死と其前後」試演の件で長田秀雄来訪。

二十五日、生馬・里見淳とともに牛込区横寺町の芸術倶楽部を訪ね、松井須磨子、島村抱月と会う。

九月中旬、藤森成吉との交友始まる。

十五日、「二科展を見て」（『読売新聞』）を書き批判。

十月三日、芸術座第三回研究劇として、「死と其前後」を芸術倶楽部で上演（七日まで）。配役は妻（松井須磨子）、死（田邊若男）、夫（高山晃）、医師（野添健）ら。

「色彩や光線等舞台装置については生馬」、「演出法に就いては里見淳」が協力、「有島一家絵出の芝居」と評される。

十八日夕、同志社講演のため東京を発つ。

二十一日、第一次同志社講演始まる。午前は英文科学生にカ

ーペンターの講義、午後はチャペルで「芸術論」。午後の講演は定刻（二時）前に、同志社・京大・三高の学生のほか東京から来た学生、女性らで満員。

二十七日夜、キリスト教青年会館ホールで、エラン・ヴィタル社主催講演会。野村愛正・有島生馬に続いて登壇し「イブセンのブランドに就て」を講演、生活改造の志向を訴える。

三十一日、清水・高台寺を散策。竹久夢二を訪ねる。

十一月四日、比叡山に登り宿院で一泊。五日、坂本に下り、インクラインで帰洛。

十三日、原久米太郎長女俊子（十七歳）の計に接し、急ぎ神戸に赴く。

十五日、俊子の葬儀に列したのち、帰洛。

十七日、大丸小劇場でエラン・ヴィタルの公演を観る。

十八日、同志社で今期最後（五回目）の講演。

二十日夜、帰京。

十二月中旬、「或る女のグリンプス」改稿に着手、没頭。

二十一日、木田金次郎から送られた来たスケッチ分譲の諾否を木田に問い合わせる。

「小さき者へ」（1月「新潮」）。「曉闇」△「迷路」続編（1月「新小説」）。「動かぬ時計」（1月「中央公論」）。「旅する心」（1月31日―2月2日「読売新聞」三回で中断）。「私の父と母」（2月「中央公論」）。「死を恐れぬ男」（3月「新時代」）。

のち、著作集第七輯に収録する際、表題を「死」を畏れぬ男」と改める。「生れ出る悩み」（3月16日―4月30日「大阪毎日新聞」ほか、三十二回で中断）。「石にひしがれた雑草」（4月「太陽」）。「武者小路兄へ」（7月「中央公論」）。「旅の心」△「旅する心」続編（8月23日―10月2日「読売新聞」三十二回）。

有島武郎著作集第三輯「カインの末裔」（2月20日、新潮社刊）。同第四輯『叛逆者』（4月18日、新潮社刊）。同第五輯『迷路』（6月28日、新潮社刊）。同第六輯『生れ出る悩み』（9月12日、叢文閣刊）。同第七輯『小さき者へ』（11月9日、叢文閣刊）。

大正八年（一九一九） 四十一歳

一月五日、芸術座の松井須磨子が島村抱月を追って自殺したとの報に驚く。

六日、風邪をおして芸術倶楽部へ弔問。

七日、青山斎場で須磨子の葬儀。

九日、木田金次郎絵画展のため、額縁を注文する。

十三日、須磨子の死を題材に「雑信一束」第一信を書く。以後、断続して執筆。

十四日、「早稲田文学」への「批評といふこと」を書く。

十五日、警醒社から『リビングストーン伝』重版の提議を受け、教会離脱の経緯を明らかにしておく必要を感じて「序」として一文を書き始める（三月二十二日脱稿）。

下旬、「或る女のグリンプス」改稿に努める。

二月五日、木田金次郎絵画展の案内状約七十通を発送。

九・十日、麴町区下六番町の邸内、佐藤隆三の室で木田金次郎素描展を開く。作品三十五点を展示、初日五十人・二日目七十五人が来会。有島、その「収益」二百余円を送金、木田はそれで油彩用品一式を調えた。

十一日、「或る女のグリンプス」改稿のため、十六日まで「旅行」に出る。

十七日、内務省図書課長を訪ね、『或る女』の描写について検閲側の意向打診、一、三箇所を訂正することになる。

二十五日、「或る女のグリンプス」を改稿し終え、二十一章までを『或る女』前編とする。

二十七日、東大新人会で講演、終了後吉野作造らと会食談話。

三月九日、「聖フランシス『完全の鏡』の序文」を書く。

三十一日、後編執筆のため鎌倉円覚寺の松嶺院に籠る。机・座布団・行李・ランプ・火鉢・小さな花瓶が一つずつ。電燈も新聞もなく、朝晩の食事は門前の旅館屋で、昼は机の傍らでパンと牛乳。

四月十四日、「沖野（岩三郎）氏がこつそり話す幸徳秋水の話」を聞くため半月ぶりに上京、黎明会に赴く。

十六日、富田碎花・百田宗治来訪、円覚寺境内を案内。富田の『草の葉』訳本に一文を寄せることを承諾。

二十二日、『或る女』（第四十章半ばまで）の原稿三百六十五

枚を書き上げて松嶺院を辞し、帰宅。

二十三日、朝日新聞社から社員として迎えたい旨の意向（年俸三千三百円、他にボーナス支給の条件）を伝えられる。

二十七日、同志社講演（第二次）のため入洛、足助素一も同行。鹿児島に帰任する吹田順助と京都で別れる。

二十九・三十両日午後、同志社で「芸術論」を講演。

五月一日、奈良県安堵村に富本憲吉・一枝夫妻を訪ねて一泊。二日夕、帰洛。朝日新聞社の上野精一來訪、入社を懇願されるが「束縛されるのを好まない」ので辞退。

六日、今次、三回目の講演以後は自選のテキスト『WHITMAN'S POETICAL WORKS』（大正8・4・16、警醒社）を用いる。

九日、同志社講演の合間を使って『或る女』完結に漕ぎつけるため、仕事場として府下紀伊郡竹田村（現・京都市伏見区竹田内畑町）安楽寿院内北向不動堂の六畳一間を借りる。

十二日、さきに帰京し、絶えず原稿を催促してくる足助に、『或る女』の原稿（第四十章から第四十三章まで八十二枚）を送る。また、足助に、「葉子は中々しぶとい」（十二日）、

「中々死なないから困る」（十三日）など訴える。

十七日、奈良の対山楼に一泊し、十八日、奈良女高師生徒兼松芳江らの案内で新薬師寺の仏像・地獄谷の石仏などを見る。成瀬無極・久保正夫が同行。

十九日、『或る女』の原稿（第四十四章から第四十七章まで

六十一枚)を足助に送る。

二十一日、今次最終講演(七回目)を終え、二十三日夜半、京都を発つ。

二十六日、結末部(第四十八・四十九章)を書き足してようやく『或る女』全編を完結する。

二十八日、女子青年会館で、高等女学校聯合同窓会のために講演(翌月四日、十一日とも三回)。のち「内部生活の現象」と題して「婦人之友」(大正9年1月号)に一括掲載。

三十一日夜、加藤一夫・川路柳虹・富田碎花・白鳥省吾の発起でホイットマン生誕百年記念会が開かれ、斎藤勇・芥川龍之介らとともに有島も出席、「リンカーン大統領葬送頌歌中の「死の讚美」を朗読。

六月中旬、有島武郎著作集第九輯として『或る女』発売。この頃しきりに「物憂い」と訴える。

十七日、疲労が昂じて箱根へ小旅行に出る。

二十四日、帰京後も憂鬱と圧迫感が去らず耳鼻科医の診察を受けるが鼻梁骨が少し膨れているだけで異常なしと診断され、「軽い神経衰弱」と自認する。

二十八日、沖野岩三郎のファーンネス女史招宴に出席。大橋房子(のち、ささきふさ)も同席。

三十日、内村鑑三を訪問して歓談。鑑三、「微温き教会のキリスト教を脱したその気分においては、われらは少しも違わない」と評する。

七月二十一日、三児、大島豊、女中を連れて北海道へ出発。

二十三日、札幌着、森本厚吉一家と再会。

八月二日、札幌を発ち農場へ。

七日、帰京。即日、軽井沢へ向かう。

十五、六両日、軽井沢の夏期大学課外講演会(通俗大学主催)でホイットマンについて講演。

十七日、渡米する弟たち(佐藤隆三夫妻と行郎)を見送るため、帰京。

二十一日、隆三夫妻・行郎を横浜埠頭に見送る。

九月五日、ロシア歌劇団のオペラを観る(再度九日にも)。

十三日、オペリン大学に留学する大島豊に「照顧脚下」の書を贈る。

二十日、東京女子大学の科外講演で「文学は如何に味ふべきか」を講演(二十七日、その二回目。筆録、11—12月「女学世界」)。

二十四日、『リビングストン伝』第五版の序文を書く。

十月一日、斎藤勇、富士見町教会で「我国最近小説の傾向

——特に有島武郎氏に就て」を講演、有島も聴く。

四日、斎藤勇来訪、親しく語る。このころ、「洪水の前」補筆に始まり聖書劇を執筆。

二十三日夕、母幸を伴って東京を発ち、同志社講演(第三次)のため西下。伊勢山田・奈良を案内し、二十五日、入洛。三十一日夜半、「聖餐」を脱稿。著作集の表題を『三部曲』と

決める。

十一月三日、「イブセンを中心とする北欧文学」の講演開始(今次は十八日まで六回)。他に、大阪十日会・京都PL会・京都第二高女同窓会などでも講演。

二十日、エラン・ヴィタル社と踏路社による「出家とその弟子」を観劇したが、期待の倉田百三は病状悪く来場せず。

二十二日、朝、京都を発ち帰京。

二十五日、『三部曲』書後(あとがき)を書く。

二十七日、東京帝国大学基督教青年会で「イブセン研究」を講演(十二月五日、十二日とも三回。筆録、翌9年2―3月「大学評論」に掲載)。

十二月四日、父武三周年記念会。

七日から九日まで、エラン・ヴィタル社、京都の学生集会所で「死と其前後」を上演。

十一日、東京帝国大学基督教青年会主催ユニヴァーシティ・イヴニングの席上、イブセンについて講演。

十六日、著作集第十輯『三部曲』を知己に送り、「これが私の旧衣を脱する最後のもの」と伝える。

「自己を描出したに外ならない『カインの末裔』」(1月「新潮」)。
「小さき影」(1月5―12日「大阪毎日新聞」八回)。「雑信一束」(2・4・10月「我等」)。「第四版序言」(6月『リビングストン伝』)。有島武郎著作集第八輯『或る女』前編(3月23日、叢

文閣刊)。同第九輯『或る女』後編(6月16日、叢文閣刊)。同第十輯『三部曲』(12月12日、叢文閣刊)。

大正九年(一九二〇) 四十二歳

一月、大阪朝日新聞の懸賞小説選読にうち込む。

十日以降、森戸辰男の筆禍事件に関連して読売新聞記者安成二郎のインタビューに答え、「クロボトキンの印象と彼の主義及び思想に就て」語る(二十五日掲載)。

二十七日、市谷基督教伝道集会以「小さき者へ」朗読か。

二月、前月に引き続き、懸賞小説の選読に悩まされる。

十四日、森戸辰男の公判を傍聴。

二十六日未明、大阪朝日の懸賞小説選読を終える(選者は他に正宗白鳥・厨川白村)。

二十七日、大庭柯公・長谷川如是閑・馬場孤蝶・生田長江・畧利彦・與謝野寛・中村星湖・中村吉藏・平塚明子・島崎藤村・土岐哀果ら十四氏とともに、著作者組合の評議員に選任される。

三月十一日、足助素一とともに、石山太柏を訪ねる。石山は、前年の帝展に「上井草附近」を出して注目された日本画家。

十五日、「惜みなく愛は奪ふ」を起筆、三十一日、脱稿。

この月、森本厚吉の「通信大学文化生活研究会」の創立を援け、吉野作造とともに顧問になる。

四月一日、末子行三の番町小学校入学に伴伴。

この頃、賀川豊彦・堺利彦と会合、大杉榮も加わって「談し合」う。

二十四日、東洋大学で講演。

二十五日、水野仙子集の跋文「水野仙子氏の作品について」を書く。

三十日夜、同志社講演（第四次）のため東京を発つ。

五月三日、同志社講演第一日、「惜みなく愛は奪ふ」の原稿（写）を朗読、また自らの内面的遍歴を語る。

八日、若王子・將軍塚などを散策、「惜みなく愛は奪ふ」書後を書く。

十日、今次三回目の講演から昨秋に続きイブセンを講ずる。

十一日、有島の誘いで秋田雨雀入浴、連れ立って石山寺へ向かう。

十二日、芭蕉の墓などを見物ののち疏水を下ってインクラインで帰洛。

十三日、秋田雨雀とともに三高生の座談会に出席。

十六日、雨雀とともに脚本を朗読する「カメリオン会」に出席、新村出・成瀬無極も参加。同夜は、チェホフの「犬」、雨雀の「二十一房」が朗読された。

十九日、同志社の最終講演、「来学期はバイロン」と予告（秋の講演は実現せず、翌春になる）。

二十日、明石に行き、静養中の倉田百三を見舞う。

二十一日、大阪の夕陽丘高女で講演。

二十二日、東京に帰着。

六月十二日、與謝野晶子を訪問、夫妻と語る。

十九日、有島の希望で上京した原久米太郎に創作の行詰りを訴え、生活改造の方策について助言を求める。この頃、再婚の話があり、「考へに考へ」る。

下旬、阿部次郎に会う。

七月一日夕、長谷川如是閑・大山郁夫・櫛田民藏・蠟山政道と三河屋で会食、歓談。

八月三日、「運命の訴へ」の取材のため、この年二月から文通の始まった粒良達二（そのモデル）を訪ねて上総一の宮に行く。

四日、睦澤村北山田に住む粒良達二に会う。

十一日、創作に着手、「少しは毛色の変つたものになりさうだ」と原に抱負を書き送る。

この頃、木田金次郎の油絵を淺井三井が二科会に出品、落選となる。

有島、自分のしたこととして木田に釈明。

九月一日、谷中の日本美術院でフランス現代美術展を見る。

ルノアール、セザンヌ、ロダンの作品に接し、讃嘆。

五日、有楽座、「劇より得たる経験」と題して講演（玄文社主催）。

六日、生田長江・大庭柯公・堺利彦・長谷川如是閑・馬場孤蝶を自邸に迎え、「著作評論」のための合評会（童話につい

て」を行う（10月同誌に掲載）。

同日、粒良あてに創作が思うにまかせぬことを伝え、その地方の年中行事などを知らせてほしいと要望。

十五日、原稿を待ち設けている足助に、「創作は出来ない出来……僕の力はもう終焉に來たのではないかと思つて淋しくさへなる」と訴える。

十七日、「運命の訴へ」執筆を断念。

十八日、次の著作集のために「旅する心」の補筆開始。

二十一日、原久米太郎らに「私には depression（落潮）が來ました」と書き送る。

十月三日、専修大学講堂で「芸術の不変性」と題して講演（能楽文芸講演会。筆録、10年2月「謡曲界」に掲載）。

十日、「旅する心」の整理を終え、「書後」を書く。

十三日夜、北海道に向かう。

十四日、山形で下車、立石寺に参詣。

十七日夜、狩太の農場に着き、農場解放の準備を進める。

二十一日、札幌で講演。

二十三日朝、離札。北海道滞在中（？）「卑怯者」を書く。

二十六・二十七日、神田一ツ橋の帝国教育会館で「ホイットマンに就いて」と題し講演（新人会主催、第二回学術講演会）。

十一月五日、京阪神で講演のため東京を発つ。

六日、森本厚吉・吉野作造とともに大阪で講演（文化生活普及会主催）。

七日、神戸・京都で講演。この秋、同志社大学での連続講演は断念。九日、帰京。

三十日、「自己の要求」を脱稿。

十二月三日、「新潮」の中村武羅夫来訪、徳田秋聲・島崎藤村と有島で明年七月号に創作特集を実現したいと懇請。

十三日、「新潮」記者中村再度来訪、徳田・島崎が創作特集に寄稿を承諾したことを伝え、重ねて有島に作品執筆を懇請。二十八日、中村あて書簡に創作執筆の不安を伝えたが、翌年、「白官舎」を書いて責めを果たすことになった。

この頃、創作の契機がつかめず、ホイットマンの詩を訳す。

「美術鑑賞の方法に就て」（1月「太陽」）。「内部生活の現象」（1月「婦人之友」）。「雑信一束」（3月「我等」）。「生活と文学」（5月—10年4月「文化生活研究」十一回）。「二房の葡萄」（8月「赤い鳥」）。「卑怯者」（11月『現代小説選集』）。

有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』（6月5日、叢文閣刊）。同第十二輯『旅する心』（11月18日、叢文閣刊）。

大正十年（一九二一） 四十三歳

一月、長男行光と二人きりで迎春、母幸子・敏行・行三は熱海に滞在。

四日頃、読売新聞記者の「今年は何を書くか」というインタビューに「作よりも先づ生活の改造」と答える（七日掲載）。二十一日、太陽座により横浜劇場で「聖餐」（三幕）の上演が

始まったが、自作を観て、「其演出に地獄の底まで失望させられ」る。二十三日まで三日間、與謝野晶子の「猫と子供」(一幕)も併せて上演。

二月六日から、同じ劇団により有楽座で上演、またしても「頭痛がする程失望」させられる。

十一日夜、「夕刊時事新報」の求めに応じ、「問に答へて」文壇の本流支流の事、小説の内容についてを書く(同月十六・十七日掲載)。

十五日、一月下旬から着手した「講演の訂正」をようやく片付け。

「明日から勢に乗じて創作にかかりたい」と意気込む。

十八日、土岐哀果を訪ね、ローマ字について聞く。

二十四日、筆禍事件で公判中の森戸辰男・大内兵衛を囲む改造社招宴に、阿部次郎・大山郁夫らとともに出席。

下旬、「一幕物」執筆を試みたが「不成功」。

三月上旬、同志社講演(第五次)のため、バイロンについて研究。

十三日、與謝野晶子・藤森成吉とともに猿楽町の能楽堂で演能例会を観る。

十五日、志賀直哉に『荒絹』の礼状を書き、「改造」に連載中の「暗夜行路」執筆を励ます。

二十四日、吹田順助あて書簡に「単独の雑誌」(個人雑誌)刊行の気持ちのあることを伝える。

二十九日、母と三児を伴い横浜から鹿島丸で神戸に向かう。四月一日夜、入浴、常宿のあかまん屋に家族で逗留し、九日までに子供達に京都見物をさせる。

十三日、同志社講演開始(五月三日まで、六回)。

十八日、母幸子を伴って、法隆寺・中宮寺を見物。

二十一日、宇治の花屋敷に泊まり、翌二十二日、成瀬無極ら呼び歓談。櫻井八重子も来る。

二十四日、大阪の演芸談話会で「イブセン劇の考察」を講演。筆録、「歌劇」第16号(同年六月)に掲載される。

二十九日、奈良博物館・法隆寺を見物。奈良への車中『回想のゴッホ』を精読。

五月五日、東京に帰着。

十四日、成瀬無極に上海への講演放行を勧められていたのを辞退。

「来秋は或は満鐵の談話会から呼ばれるかも知れない」と伝える。

二十四日、中川一政がアトリエを建てる「たし」にするため、三百円を同人あてに届けてほしいと足助に依頼。

二十八日、官憲に捕えられたエロシエノのために秋田雨雀とともに責任者を訪ね、理由を質したが要領を得なかった。

この月、中旬に三男行三がはしかにかかる。下旬、その回復と入れ代わりに二男敏行もはしかにかかり、東京病院に入院させる。

六月二日、里見淳の「新樹」が新富座で上演されるのを記念して、紅葉館で新樹の会を開く。徳田秋聲ら来会、有島も出席。

三日、エロシエンコの件で、秋田雨雀とともに内務省に行く。エロシエンコは国外退去となり、この日敦賀を発つ運びになっていたことを知る。

八日(？)、敏行、退院。

十三日、「白官舎」執筆のため千葉県稲毛の海気館に赴く。

十九日、約百枚の原稿を書いて帰京。旅行中「心打たれるもの(千葉神社境内の木彫)」に接し、のち「御柱」の題材にする。

二十六日、次男敏行、腸チフスの疑いでまた東京病院に入院。

七月五日、敏行、疑い晴れて退院、行三、扁桃腺切開のため入院。

十二日、秋田雨雀の父玄庵死去、有島弔文を寄せる。

十六日、行三も治癒、退院。

二十九日、三児を連れて熱海新浜町の別荘に行く。滞在中に「私も子供達と同様に坊主頭にならう」と決める。

八月十六日、帰京。

二十日、山本武雄・北村英一郎の招きにより、信州「草の葉」会(二十一―二十五日)出席のため野尻湖畔に着く。ホイットマンについて講演。

九月二日、木田金次郎、二科展に再度挑戦のため自作を携えて上京したが落選。

十五日、舞台協会により、有楽座で「死と其前後」上演(十七日まで三日間、さらに三十日と翌一日の二日間再演)。

十六日、「御柱」脱稿。

十月五日、中村吉右衛門主演により、新富座で「御柱」上演(二十八日まで)。

上旬、この秋の同志社講演を断念、代わって阿部次郎が講師を引き受ける。

二十二日夜、追分青年会館で開かれた「新しき村のための会」に出席、飛び入りでホイットマンの詩を朗読。

下旬、面会日を毎週金曜日と決める。

二十八日、信州「草の葉」会の招きで戸隠山など北信を小旅行。

十一月四日、「老船長の幻覚」、小劇場第一回室内劇として、牛込若松町の飯塚友一郎宅で試演される(六日まで)。

九日、読売新聞記者来訪、原首相暗殺についての感想を求められる(談話筆記「絶縁された電気の如く」十一日掲載)。また、新潮社からこの年に発表した創作についての感想を求められ、「僅かに二篇(「白官舎」「御柱」)だけ」と答える。十日、岸田劉生の個展を見、「麗子の肖像画」に目を見張る。十一日、「白官舎」の続編に取り掛かるが不首尾。このころ、「生活改造」断行の必要を痛感、談話・書簡などに繰り返し表明。

十四日夜、「草の葉」会に長谷川如是閑来会。

十九日、喜劇（「ドモ又の死」）に着手。

二十三日、藤村生誕五十年記念講演会に出席、ホイットマンの詩を朗読か。

二十七日、父武の五年祭を行う。

三十日、神戸に行き、同日帰国の末弟行郎を迎える。

十二月十二日、行郎、かねての許婚章子と結婚、「親代りとして兄弟の事の片」を付ける。その準備に心を砕く傍ら「白官舎」を「星座」と改題して構想を拡充。

十六日以前、「宣言一つ」脱稿。

十九日、「草の葉」会開く。大山郁夫も出席か。

二十一日、大阪中之島公会堂で開催予定の「露国飢饉救済募金講演会」のため、秋田雨雀・藤森成吉・宮嶋資夫らと大阪入り。同日は許可を得られず流会。

二十二日、市庁・府庁に出向き、有島自身が司会者として届け出て、ようやく公会堂の使用許可を得る。夜七時開会、有島は「文芸家としての自分の立場」を説く。

三十一日、川田順に『山海経』の礼状、文中に詩人の境遇を羨み望むと書く。

この年、北大生のために「故有島安子記念奨学金」の名で四千五百円弱を寄付、また、同協済会に五百円、同基督教青年会にも相当額を寄せる。

「自己の要求」（1月「改造」）。「生活と文学」（「つづき」）（1—

4月「文化生活研究」）。「碁石を呑だ八つちやん」（1月11—15日「読売新聞」）。「雑信一束」（2・4月「我等」）。「白官舎」（7月、「新潮」、藤村武郎二家創作号）。「溺れかけた兄妹」（7月「婦人公論」）、「御柱」（10月「白樺」）。

有島武郎著作集第十三輯『小さな灯』（4月18日、叢文閣刊）。有島武郎訳『ホイットマン詩集』第一輯（11月11日、叢文閣刊）。

大正十一年（一九二二）

四十四歳

一月五日、秋田雨雀が「五人会」（有島・秋田と足助素一・藤森成吉・中川一政）を計画したが、有島は前日から風邪発熱のため参加できなかった。

中旬、新しき村支援のための『現代三十三人集』編纂に志賀直哉とともに尽力したことが機縁となり、武者小路實篤との「友情の回復」を迎える。

十九日、「星座」の稿進まず。詩や音楽のような「端的な表現」にあこがれる。また、朝鮮・中国への旅行を志す。

この月、「宣言一つ」について、広津和郎らの批判を受ける。この月より、三児を成城小学校に転校させる。

二月上旬以降、「星座」執筆に努力。また、「実生活の改革」をいよいよ焦眉の急と感じる。

二十五日夜、三河屋で、大山郁夫・長谷川如是閑・界利彦・足助素一・橋浦（旧姓飯田、大9・9養子縁組解消）泰雄・秋田雨雀と会食。

二十六日、早稲田大学英文科主催のホイットマン没後三十年祭記念講演会に参加、ホイットマンと英国の婦人アン・ギリタリストの「愛の書簡」について詩の朗読を交えつつ一時間余り話す。講師は、有島のほか吉田紘二郎・日夏耿之介・白鳥省吾の四人。

二十八日、「創作のため客を謝して仕事」を続ける。生馬あて書簡に『星座』の原稿が「毎日十枚位づつは書ける」までに気乗りしていると報知。

三月四日、四十四歳の誕生日。子供たちにせがまれて有楽座に活動写真「大ターザン（原題・ターザンの大冒険）」を見に行く。

十九日、與謝野晶子あて書簡に「五間程の五十円前後の貸家」があれば紹介してほしいと依頼。また、近く農場解放・財産放棄のことを一族に「相談と申すより宣言」する意向であることを伝える。

二十四日、弟妹一同に財産処分意向を伝える。

二十五日から月末まで、千葉県稲毛の宿にこもって『星座』の執筆に努める。

四月十三日、『星座』の原稿を叢文閣に渡す。まだ「序曲」に過ぎず、「あと六七百枚」は必要と自認。

十七日、農場解放・財産放棄の意向を母に伝え泣き出される。幸子の意向で、二十二日にもう一度相談のために弟妹たちが集められることになったが、有島は「僕の知った事では

ない」と決心を変える意志のないことを足助素一に伝える。二十五日、農商務省陳列館で現代フランス美術展を下見、ロダンの彫刻などに感心する。

二十九日、個人雑誌発行の計画が「よみうり抄」に伝えられる。「今秋九月、牛込の叢文閣から氏の独り雑誌を『独自』或ひは『旅』と題して創刊する筈だが十八頁程度のパンフレット型」と予告（誌名はその後「泉」に落ち着く）。

五月六日、岳父神尾光臣を訪問、財産放棄の意向を伝えて「菩薩行とのおほめにあづかつた」。

六月中旬、満鐵読書会などから話のあった朝鮮・中国への旅行を断念。財産放棄の報道を見た満鐵重役などが「あんな人間を頼んではたまらない」と言うのを、四月ごろから伝え聞いていた。

十四日、大阪毎日・東京日日新聞から社員（または社友）として芥川・菊池と同じ条件で招かれたが辞退。

二十四日、早稲田高等学院で文芸部の会員に「描かれた花」の話をする。

七月一日夜、秋田雨雀・江口渙とともに、講演のため新潟へ向かう。

二日午後、新潟新聞社主催の文芸講演会で「独り行くもの」を講演。謝礼六十円をロシア飢饉救済に寄金。

三日、市内見物、医科大学参観、佐渡ヶ島を遠望する。夕七時新潟を発ち、帰京。

七日、有楽座でチェホフの「鷗」（研究座試演）を観る。

十日、個人雑誌の誌名を「泉」と決定、九月創刊を目指して準備に着手。毎号の原稿を約六十枚と見込む。

十一日夜、北海道へ出発。車中、「此十年程考へぬいてゐた事がいよいよ実現される」と思うと「淋しい気持が胸の中を氷のやうに流れる」。

十三日朝、農場着。

十四日、木田金次郎来訪。

十五日、森本厚吉、小林巳智次・松田兩助手を伴い来場。解放後の組合組織などについて協議。「なるべく制約しないで、小作人に委せ」るのが彼の希望であった。

十六日、木田とともに岩内に赴き、同夜、町会議事堂で講演、同町藤田旅館に一泊。

十七日、岩内の女子小学校（現・西小学校）で講演、木田金次郎の家などを訪ね、夕刻、木田を伴って農場に戻る。

十八日午後二時、場内の彌照神社に小作人一同を集め、農場解放（無償譲渡）を宣言。「農民達はやや不思議な面持ち」で耳を傾ける。

十九日、吉川銀之丞はじめ小作人ほとんど全員の見送りを受けて、札幌に向かう。同夜、アイヌ教化団後援会の求めに応じ時計台演武場で「独り行くもの」を講演。

二十日、森本とともに宮部金吾を訪問、同窓の知友とも再会、夕刻、離札。小樽で晚餐。

二十一日、函館から連絡船。これが北海道との離別になった。下旬（二十八日か）、婦女新聞主催、婦人文化講習会で「文芸に就て」と題し講演。

八月上旬、「ドモ又の死」を執筆。

十五・十六日、信州木崎湖畔で開催の夏期大学に出席、「新旧文芸之交渉について」と題して講演。

十七日、信州「草の葉」会出席のため野尻湖畔に赴く。

二十日午前、小学校で「草の葉」会、ホイットマンを講ずる（二十一まで）。

二十八日、「泉」創刊号の初校を終え、夜八時、上野を發つて秋田に向かう。

二十九日夜、秋田市の美術倶楽部でホイットマンについて講演。

三十日、中川一政・大橋茂三郎の案内で土崎を見物ののち、秋田市記念会堂で「惜みなく愛は奪ふ」を講演。

九月一日、軽井沢に帰着。

二日、三笠ホテルに滞在中の倉田百三を訪問、歓談。百三はい吹山直子と同伴であった。

七日、帰京。

十二日、上京した谷川徹三を伴ってアンナ・パブロワを観劇し「陶酔の気分にひたる」。

二十二日、飯塚友一郎宅の室内劇で「死と其前後」上演（二十五日まで）。

二十三日午後、仙台市公会堂の宮城県第二高等女学校・東華女学校両窓会共催の婦人講演会で山田わか子とともに講演。有島の演題は「独り行くもの」、山田は「社会の進歩と婦人の地位」。同夜、仙台文化研究会主催の文化講演会で愛について話す。

二十四日、黒澤良平・土井晩翠・早川萬一らと松島遊覧。

二十七日（または二十八日）、アンナ・パブロワを再見。

十月一日、「泉」創刊号発行（二万一千部、十二年二月号から毎号一千部ずつ増刷、五・六月は一万五千部）。

十四日、立教大学で講演。

二十二日、同志社講演のため京都へ発つ。

二十三日、「創造と芸術」、二十五・二十七日、「階級意識と芸術」をそれぞれ講演。六次三十三回にわたる同志社講演は終わりを遂げた。その間、二十四日京都大学で、二十五日夜は大阪毎日新聞社で講演（大毎の講演は同社主催文化大学講座の第六回、演題は「愛に就て」）。

二十八日、名古屋で秋田雨雀と合流、愛知県立高女で「即実」を講演。雨雀の講演は「民族意識と世界意識」について。十一月九日、唐澤秀子らの招待で鴈治郎の紙屋治兵衛を観る。

近松は「恋のふぬけ」を「英雄にまでしてあげた」と感嘆。十五日、「酒狂」脱稿、来訪した唐澤秀子に朗読して感想を求める。

十六日か、「酒狂」を叢文閣に届け、足助素一・藤森成吉に

聞かせる。

二十五日、早朝から八王子に赴き高尾山登山、午後、同地の公民大学講演会で「描かれた花」を講演。

十二月十二日、財産処分のため、邸内で書画の一部を公売。

二十二日、報知新聞社講堂で「ドモ又の死」について講演。

二十三・二十四日、新劇座により、報知新聞社講堂で「ドモ又の死」初演。時間の都合で「せりふをぬかされた」が、熱演に満足。

「宣言一つ」（1月「改造」）。「自由は与へられず」（1月「文化生活」）。「広津氏に答ふ」（1月18—21日「東京朝日新聞」四回）。「雑信一束」（3月「我等」）。「想片」（5月「新潮」）。「独り行く者」（7月21・22日「小樽新聞」）。「火事とポチ」（8月「婦人公論」）。「ドモ又の死」（10月「泉」）。「小作人への告別」（同）。「静思」を読んで倉田氏に——同時に自分の立場を明らかにするために（11・12月、「泉」）。

有島武郎著作集第十四輯『星座』（5月10日、叢文閣刊）。同第十五輯『芸術と生活』（9月12日、叢文閣刊）。『一房の葡萄』（6月17日、叢文閣刊）。

大正十二年（一九二三） 四十五歳

一月十七日、有楽座へ藤田草之助の「煩惱地獄」を観に行く。

藤田に「断橋」執筆中であることを語る。

二十一日夜、「断橋」脱稿。

二十六日、赤坂の中華料理店「もみじ」で吹田順助歓迎会、秋田雨雀・田所篤三郎・唐澤秀子も同席。唐澤、「断橋」を朗読。

二月一日ごろから、吉川銀之丞上京。森本厚吉を交え、農場規約について協議を重ねる。

八日、足助素一大学病院に入院。

十七日、売却公表の邸宅について「総坪数千百九十坪、樹木の多い荘麗な庭園を有し建坪二百坪間数は西洋間とも二五間で、外に二百七十坪ばかりの貸家その他の附属建物が付いて、時価少なくとも五十万円」（読売新聞）と報じられる。

同日、吉川銀之丞、打ち合わせを終えて帰北。

十九日、「泉」四月号の作品は小説（親子）にしたと足助に伝える。

二十日、帝劇で「断橋」上演のための顔寄せ。午後、雪の中倉田百三を訪問。

二十六日、與謝野寛五十年誕辰祝賀晩餐会に出席。

三月一日、六代目菊五郎・守田勘彌らにより「断橋」始まる（二十日まで、帝劇）。同日、高村光太郎からフロンズ「手」を贈られる。

上旬、四谷南寺町七番地に借家（家賃七十五円、仕事場として用いたが転居に至らず）。

十二日、「骨」脱稿。

十七日、帝国ホテルの大橋房子洋行送別会に出席、小山内薫・山田耕筈・三宅やす子・波多野秋子ら同席。

二十三日、下六番町の家に武郎・生馬をはじめ兄妹七人が集まって「財産放棄の件に就て具体案を議」する。

四月二日夜、「三幕位の劇」を執筆のため借家に籠る。

十日、足助に「書けないで苦しんでいる」と訴える。

十二日払曉、「親子」を脱稿。

十四日、単身渡米する森本厚吉の妻久子への餞別に「高価な船酔いの薬」などを届ける。土産物の希望を問われ、「食食用シルバー（ホーク、ナイフ）一揃ひ」を所望。

二十五日夜、水派社の招きによる山陰講演のため、秋田雨雀・橋浦泰雄とともに東京を発つ。波多野秋子も見送りに現れ、巨大なシュークリーム一個を入れた菓子折りを有島に贈る。

二十七日、午後六時から米子公会堂で講演、狩太共生農団に託した夢の破れたことを切々と語る（演題未詳）。

二十八日、清水寺・出雲大社に参詣、午後七時から松江高等女学校で「文化の末路」を講演。

二十九日、午後一時、鳥取県本庄小学校の岩美郡教育会春季総会でホイットマンについて講演。午後七時、鳥取市遷喬小学校で水脈社自由講座のため「独り行くもの」を講演。

三十日午前、鳥取高農で教職員と懇談し、午後、鳥取砂丘を見物。同夜半、単身城崎に至り湯筒屋に三泊、「独断者の会

話」を書き始める。宿の女中に乞われ、「浜坂の遠き砂丘の中にして忙しき我れを見出でつるかな」の一首を書き与える。

五月三日、神戸に至り基督教青年会館で講演（演題未詳）。

五日、京都に河上肇を訪ね、遺産を河上の手で労働運動に役立ててほしいと懇請（のち書面で断られる）。

六日夕、帰宅。

七日夜、中央仏教会館の『クラルテ』出版記念会で「唯物史観と芸術」を講演。「壇上の黒板に図解したりしながら、太学で講義でもするような穏やかな調子で」、「時間余り語る」。

十二日、「独断者の会話」を脱稿。

十三日、慶応大学で開かれた「女性改造」の文芸講演会に出席して講演。終了後、芥川龍之介・菊池寛・久米正雄・厨川白村らと会食、懇談。

六月四日、足助素一の縁談のため千葉に赴き、帰途、波多野秋子とともに船橋の放館に泊まる。

六日、秋子の夫春房に呼ばれ、海上ビル内の波多野の事務所で見え。「告訴する」、「二万円ほしい」など波多野の主張転々として物別れに終わる。

七日夕、入院中の足助素一を訪ね、一部始終を語る。

八日午前、足助、病院を抜け出し、南寺町の借家に有島を訪ねて死を鎮めるが、「一期の頼みだ……邪魔をして呉れるな」と繰り返す。足助を帰した後いったん下六番町の本邸に戻り、午後三時ごろ、母に挨拶して和服で家を出る。新橋駅構内で

待ち合わせた秋子と落ち合い、午後七時上野発金沢行の急行列車で、深更、雨の軽井沢に着く。

九日未明、ともに縊死。

七月六日、遺体発見。

七日、末弟行郎・山本直正・足助素一・末光績ら軽井沢に急行、同夜、遺体を茶毘に付する。

九日、午前十時から下六番町の本邸で告別式。遺骨を青山墓地に埋葬した（のち、多磨霊園十区一種三側に改葬）。

「酒狂」（1月「泉」）。「文化の末路」（同）。「或る施療患者」（2月「泉」）。「断橋」（3月「泉」）。「骨」（4月「泉」）。「瞳なき眼」（4・5月「泉」）。「親子」（5月「泉」）。「独断者の会話」（6月「泉」）。

有島武郎著作集第十六輯『ドモ又の死』（11月20日、叢文閣刊）。有島武郎訳『ホキットマン詩集』第二輯（2月13日、叢文閣刊）。

この年譜は、山田昭夫編年譜（『近代文学資料10 有島武郎下』所収、昭和50年6月、桜楓社刊）、内田満編年譜（『鑑賞日本現代文学10 有島武郎』所収、昭和58年7月、角川書店刊）をもとに作成した。作成に当たっては、叢文閣・新潮社・筑摩書房の各版全集をはじめ諸氏による研究成果を参照し、主として明治期を山田、大正期を内田が担当、文体の統一をはかるため内田が記述した。また、井上理恵・上杉省和・江頭太助・太

田正紀・門川正雄・神尾行三・川上美那子・栗田広美・紅野敏郎・佐々木靖章・品川力・鈴木鎮平・瀬沼茂樹・高原二郎・高山亮二・遠山正瑛・橋浦泰雄・橋浦雄太郎・波多野茂弥嘉子夫妻・堀部功夫・前川公美夫・水上勲・宮野光男・森下金二郎・山田俊治・安川定男諸氏からのご教示または受贈資料に負うた箇所がある。

(山田昭夫・内田 満編)

参考文献

キリスト教

- 菅 圓吉譯『バルト 神學の根本問題』三笠書房 一九四〇年
- 菅 支那編『バルト神學研究』菅 円吉論文集 新教出版社 一九七六年
- K・バルト(川名 勇訳)『ローマ書新解』新教出版社 一九六六年
- K・バルト(川名 勇訳)『イスカリオテのユダ』新教出版社 一九六九年
- J・フアングマイアー(加藤常昭、蘇 光正共訳)『神學者カール・バルト』日本基督教団出版局 一九七一年
- K・バルト(吉村善夫訳)『ローマ書』バルト著作集14 新教出版社 一九七四年
- 山谷省吾『パウロの神學』長崎書店 一九三六年
- 山谷省吾『基督教の愛について』基督教思想叢書刊行會 一九三七年
- 山谷省吾『新約聖書解題』新教出版社 一九四八年
- 渡辺善太『「出エジプト」以前』日本基督教団出版局 一九七二年
- 小嶋 潤『福音書物語選釈』全四卷 創文社 一九七四年

有賀鐵太郎『オリゲネス研究』長崎書店 一九四三年

竹内 寛『教理史』上 Y M C A同盟出版部 一九六九年

中沢洽樹『苦難の僕』山本書店 一九七五年

オリゲネス(小高 毅訳)『諸原理について』創文社 一九七八年

フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書』原文校訂による口語訳 中央出版社 一九五八年～一九八三年

バルバローデル・コル『旧約新約 聖書』ドン・ボスコ社 一九六八年

P・ネメシエギ『父と子と聖霊』南窓社 一九七六年

カルロス・メステルス(佐々木治夫訳)『地上の樂園』南窓社 一九七七年

マリア・ワルトルタ(フェデリコ・バルバロ訳編)『聖母マリアの詩』上下、『マгдаラのマリア』あかし書房 一九

八五年～一九八九年

和田幹男『聖書年表 聖書地図』女子パウロ会 一九八九年

日本正教会翻訳『新約』正教本会版 一九六一年

唐沢光太郎編『聖書図解』日本基督正教会宗務局 一九六一年

武岡武夫編『正教の信條』日本ハリストス正教会 一九七〇年

デ・ソコロフ(藤平重信訳)『イイススの生涯』日本ハリストス正教会 一九七四年

牛丸康夫『日本正教史』日本ハリストス正教会教団府主教庁 一九七八年

日本ハリストス正教会教団編『正教要理』日本ハリストス正教会 一九八〇年

大木英夫『終末論的考察』中央公論社 一九七〇年

カイバー(中村妙子訳)『聖書の女性』旧約篇 新約篇 新教出版社 一九七一年

参考文献

- 佐波 亘編『齋村正久と其の時代』全五卷 教文館 一九七三年～一九七六年
武田清子編『思想史の方法と対象』創文社 一九七五年
砂川萬里『内村鑑三・新渡戸稲造』東海大学出版会 一九七六年
内村鑑三『聖書注解全集』全十七卷 教文館 一九六〇年～一九七三年
信徒のための聖書講解『旧約聖書』全二〇卷 聖文舎 一九五九年～一九七九年
信徒のための聖書講解『新約聖書』全十六卷 聖文舎 一九五九年～一九七九年
日本基督教協議会文書事業部編『キリスト教大事典』教文館 一九六八年
日本基督教協議会文書事業部編『聖書語句大辞典』教文館 一九六九年
馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社 一九七一年
竹内 均『旧約聖書』地球物理学 同文書院 一九八八年

有島武郎

- 鍵田研一『日本の文學者』全國書房 一九四六年
片岡良一『有島武郎と夏目漱石』學友社 一九四七年
本多秋五『「白樺」派の文学』新潮社 一九六三年
瀬沼茂樹『留学前後の有島武郎』上下(『文学』岩波書店) 一九六四年十月 十二月
瀬沼茂樹『結婚前後の有島武郎』上下(『文学』岩波書店) 一九六六年九月 十一月
山田昭夫『有島武郎』明治書院 一九六六年
安川定男『有島武郎論』明治書院 一九六七年

- 本多秋五『白樺』派の作家と作品』未来社 一九六八年
- 笹淵友一『明治大正文学の分析』明治書院 一九七〇年
- 西垣 勤『有島武郎論』有精堂 一九七一年
- 瀬沼茂樹 本多秋五編『有島武郎研究』右文書院 一九七二年
- 山田昭夫『有島武郎・姿勢と軌跡』右文書院 一九七三年
- 宮野光男『有島武郎の文学』桜楓社 一九七四年
- 佐々木靖章『有島武郎著作目録・著作解題』萬葉堂 一九七八年
- 渡邊凱一『晩年の有島武郎』渡辺出版 一九七八年
- 小坂 晋『有島武郎文学の心理的考察』桜楓社 一九七九年
- ポール・アンドラ（植松みどり 荒このみ訳）『異質の世界 有島武郎論』冬樹社 一九八二年
- 井東 憲『有島武郎の芸術と生涯』日本図書センター 一九八三年
- 上杉省和『有島武郎』明治書院 一九八五年
- パウル・サバティエ（中山昌樹譯）『アッシジの聖フランチェスコ』洛陽堂 一九一五年
- カール・ヤスパース（村上仁訳）『ストリンデルベルヒとファン・ゴッホ』山口書店 一九四六年
- 特集『芸術と精神分析』（『解釈と鑑賞』至文堂）一九六三年 十月
- 松枝茂夫 竹内 好編『魯迅選集』第十三卷 岩波書店 一九六四年
- 増田 涉訳『魯迅選集』第六卷 岩波書店 一九六六年
- アンリ・ベルクソン（中村雄二郎 訳）『時間と自由』世界の思想23 河出書房 一九六六年
- 福田清人 滑川道夫 鳥越 信編『児童文学概論』牧書店 一九六八年

- O・ワイルド（小倉多加志訳）『幸福な王子』南雲堂 一九六八年
H・マルクーゼ（南 博訳）『エロスの文明』紀伊國屋書店 一九七〇年
高橋義孝 江野専次郎訳『ユング著作集』123 日本教文社 一九七〇年
河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 一九七〇年
日本児童文学学会編『日本児童文学概論』東京書籍 一九七六年

以上の参考文献目録は、キリスト教と近代文学を研究しようとする方々のために目安となるものを記載した。細部にわたる研究論文、資料解説等は割愛し、外国文献も翻訳のあるものに限定した。

収録論文初出一覧

第一編 有島武郎とキリスト教

- 「札幌独立教会脱会前と聖書 二重決定論的思考 聖書誤解」(『解釈』教育出版センター 昭和52年10月号)
- 「パウロよりヨハネ」(『解釈』教育出版センター 昭和57年5月号)
- 「自由主義神学との関係」(『キリスト教学』第23号 立教大学キリスト教学会 昭和56年12月)
- 「裏切者意識と潜在信仰」第一、二、三章(『解釈』教育出版センター 昭和50年4月号)
- 「有島武郎とヨハネ伝」(『キリスト教学』第26号 立教大学キリスト教学会 昭和59年12月)
- 「有島武郎―イスカリオテのユダ観―」(『解釈』教育出版センター 昭和62年7月号)
- 「有島武郎が使用した新約聖書」(『解釈』教育出版センター 昭和58年9月号)
- 「悲運、有島武郎」(『文学論藻』第二十五号 東洋大学国語国文学会 昭和38年9月)

第二編 作品研究

「『三部曲』序論」(『解釈』教育出版センター 昭和47年12月号、昭和48年2月号)

- 「有島武郎の問題提起―「大洪水の前」において―」(『解釈』教育出版センター 昭和48年11月号)
- 「「大洪水の前」と他の作品との関連」(『解釈』教育出版センター 昭和48年7月号)
- 「有島武郎の児童文学 序論 本論 第一部 有島童話と児童観 第一章 童話鑑賞一」(『児童文学研究』第6号 日本児童文学学会 一九七六年)
- 「有島武郎の児童文学 童話鑑賞 二、三」(『児童文学研究』第7号 日本児童文学学会 一九七六年秋季号)
- 「有島武郎の児童文学 児童観一、二」(『児童文学研究』第8号 日本児童文学学会 一九七八年夏季号)
- 「有島武郎の児童文学 第二部 童話成立過程とその前後 第一章 翻案・翻訳童話とその前後 第二章 深層心理学と童話成立過程」(『児童文学研究』第二号 日本児童文学学会 一九七二年秋季号)
- 「有島武郎の児童文学 第三章 有島童話と他の作品」(『児童文学研究』第18号 日本児童文学学会 一九八七年春季号)
- 「「片輪者」原典、有島童話の特徴―ユング心理学の立場から―」(『児童文学研究』第12号 一九八一年夏季号)
- 「「迷路」について―有島武郎の棄教への一考察―」(『江北文苑』都立江北高校定時制文芸部 昭和42年3月)
- 「「老船長の幻覚」試論」(『解釈』教育出版センター 昭和47年7月号)
- 「有島武郎の「実験室」について」(『キリスト教と文学』会報第7号 日本キリスト教文学会 昭和51年9月10日)

あとがき

昭和三十三年七月、南アルプス白根三山縦走のため赤薙沢から広河原へと歩いた。都立千歳丘高校以来の親友大川宏君（現在、ケンブリッジリサーチ専務取締役）と一緒だった。その頃、私は、電気工学科の原子力発電を夢見る学部学生で、卒論は電気材料物理研究とフローリヒ著「誘電体論」を翻訳することであった。革新政治、哲学、文学を激論、チャイコフスキー音楽を愛し、ロシア民謡を声高に歌い、毎年失恋していた。大学暴力事件とクラスの人間関係対立から将来の不安と死に悩む。悩みを言外せずであったが様子を察知したか、キリスト教会を奨めたのは父・桑原己代治であった。（私が渋谷国民学校三年から、疎開先、千葉県山武郡豊成国民学校五年の時、実父・増子愷祇は昭和二十年三月二十四日、フィリピン、ルソン島ベイタンガン山にて部隊は玉砕、三十三歳にて戦死。後日、群馬県榛名少年院赤城道場（大胡町）、法務省教官桑原己代治は私を戦友の遺児に思えたという。昭和二十三年、母・八重子と結婚。）

かくして昭和三十三年八月二十五日嵐の夜、湯河原の藤波勝正君（中央大学土木工学科学生、現在は基督兄弟団小田原教会牧師）の家で神にとらえられた。ホーリネス系基督兄弟団大久保教会の若い牧師・田中主悦氏の「時近ければなり」（黙示1・3）の言葉であった。昭和三十三年十一月三日、大久保教会田中敬止牧師司式により二子多摩川の水中に受洗。昭和三十三年十二月、神田三省堂で毎日ライブラリー『宗教』を発見。立教大学の菅 円吉教授が担当する

「キリスト教」に吸い寄せられた。「分りやすい。是非この先生に就いてキリスト教を勉強したい」一心で物理科卒論指導教授秋元和雄先生に立教大学松下正寿総長、菅 岡吉文学部長への推薦書を書いてもらった。大学院文学研究科組織神学専攻修士課程二年を三年やること、学部キリスト教学科で、ヘブル語、ギリシア語、宗教哲学、神学概論、旧約聖書概論、等を聴講し単位を取る条件で異例の入学許可となった。

一八〇度の方向転換。昭和三十四年四月、二十四歳。就職断念、大学院への進学を父は精神的経済的に応援してくれた。学部「神学概論」の講義で菅先生が言う「人間は皆ユダのようだ」には立腹していたが、「人間は皆気違いだ」には感激した。最初に課せられたリポートは、シュライエルマッヘル『宗教論』であった。古典的名著であり既に翻訳もあるので、「神への直観、絶対依存感情」をリポートした。大学院では先生の研究室でカール・バルト『教会教義学』(DIE KIRCHLICHE DOGMATIK)の一「子なる神」講義。一つの文が長く、翻訳しても日本語の意味がよく分らない。張り切っている先生の解説でやっと理解できた。聖書の言葉を神の声として聞く、そして考えるという神学の基本姿勢は身に付いた。そして神学が哲学と違い、礼拝のためにあることをたたき込まれた。大正時代に建築された瓦屋根、蔦のからまる赤煉瓦二階建て研究棟に菅研究室は書籍にうもれていた。窓から緑の芝生と八重桜、青空に聳える赤色のタッカーホールが眺められた。小嶋 潤先生はルドルフ・ブルトマン『新約聖書神学』(THEOLOGIE DES NEUEN TESTAMENTS)「ヨハネ伝」をテキストに順番に翻訳させる。最後の演習後、小嶋先生から「君が一番成長した」とほめられる。私がやっと入手した博友社、相良守峯『大独和辞典』見返しに「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」とマルコ伝一章十五節を独語でサインして下さり「一生使えるよ」と励まされた。当時の学生には福音ルーテル教会牧師吉永正義兄がいた。(現在、兄は菅先生の意志を継いで、バルト『教会教義学』全巻を新教出版社から翻訳中。)兄にはドイツ語だけでなくギリシア語、ヘブライ語まで助けられた。三浦アンナ先生には『聖フランシスコ』(FRANZISKUS)を、鈴木光武先生には「世界教会運動」を、竹内寛先

生にはE・シユタウフアー『イエスの使信』(DIE BOTSCHAFT JESU)を、セロ・パウルス先生にはE・L・マスカル『教会一致回復』(THE RECOVERY OF UNITY A Theological Approach)を、学部で中沢治樹先生にはR・H・フアイファー『旧約聖書緒論』(An Introduction to the old Testament)を、それぞれ演習を通して教えられた。博士課程の渡辺善太先生には「聖書正典の研究」聴講以外に、同じホーリネス系教会出身ということで講演会の紹介、「何故カイン族はエホバの憎しみを受けるのか」等の質問に答えて下さった。特に教理学特殊講義は鈴木光武先生が他界されセロ・パウルス司祭が代行。「St. Justin 時代のキリスト教と宣教百年の日本のキリスト教」との比較と題したりポートを提出。「大変興味あるリポートです。心から感謝します。最後の Dogma と言う語は適当であるか一寸問題であるが全体から見て大いに頑張って貰い度い！」等多くのコメントをいただきやる気を出していた。次のようなりポート内容である。ジャスティンの二世紀、ローマ迫害時代、殉教的福音宣教と外国からの受動的思想布教との相異、ジャステン時代のキリスト者は社会と対立する実生活問題を積極的に解決していた。今日の日本のキリスト者は伝統的な日本の社会思想、特に仏教を研究せずして布教しても福音宣教は伸びない、等の内容である。

神学とはキリスト論であり、キリスト論とは終末論であるというわけで神学修士論文の題は『勝利』、副題は「歴史の最後と死の研究」として二百二十枚書いた。次の五章から成っている。第一章末法、第二章再臨、第三章復活、第四章審判、第五章勝利(神の国)。そして参考書は次の通り。

The New testament Doctrine of the 'Last things' A Study of Eschatology by H. A. GUY (小嶋 潤 先生紹介)

Theologische Studien Eschatologie Versuch eines Dogmatischen Grundrisses HEINRICH OTT (菅 円吉先生紹介)

O・クルマン『キリストと時』前田護郎訳 岩波書店

R・ブルトマン『歴史と終末論』中川秀恭訳 岩波書店

W・E・ブラックストン『キリストの再臨』森 溪川訳 基督教文書伝道会

立教時代の学友に佐藤義助兄がいる。兄は当時、聖ルカ国際病院チャブレンであった。兄は昭和四十六年、聖公会からカトリック教会フランススコ修道会で永久誓願を立て入会した。私は兄から信仰について強い影響を受けていた。昭和三十四年四月、理科教員免許を得る目的もあり、立教大学理学部で好きな「地学」を受講していた。石島 渉先生が全国を歩き回って採石したご自慢の岩石を教室に持ってきて、次々に学生に触れさせる。地学は実物主義であると得意顔。三十四年と言えば、私が北穂高岳安山岩溶結凝灰岩のキレットでバテた年である。情熱を打ち込む名物教授・石島 渉先生の授業も忘れられない。先生は名前からして地学的である。しかしまさか自分が二十年後、都立三鷹高校で地学教育に没頭しているとは、夢にも思わなかった。昭和三十六年十二月、神学修士論文を脱稿する頃、進路について新しい悩みが生じていた。待望の神学は勉強してきているが聖職者になる自信はない。どこか就職のあてもない。熟考の末、キリスト教と文学をテーマに人間研究しようと決めた。指導教授である菅先生の了承を得、推薦書を書いてもらい東洋大学大学院国文学専攻博士課程に進学した。昭和三十七年四月、二十七歳。妹と親しい野溝七生子教授が森 鷗外を、伊東一夫教授が島崎藤村を研究していた。

人間研究のため神学から文学に転向したのに、語学の佐久間 鼎先生が喜んで下さった。名著の一つ『日本の表現の言語科学』（厚生閣版）を下さった。ヨハネ伝一章一節「太初に言があった。言は神とともにあった。言は神であった。」をギリシア語からラテン語を経てドイツ語、英語、フランス語、そして日本語と対比してある。日本語ではロゴスが神だと断定表現するのに対し、ヨーロッパ諸語では同じ「存在」の動詞のかげにかくれてしまうという指摘、「親が子に死なれた」という利害の受身は日本語特有の受身であるという指摘、などに興味をわき「こそあど」の名

付け親・佐久間　鼎先生に弟子入りしようかと思ったほどである。博学な先生の授業は、白水社クセジュ文庫ビエール・ギロー著『意味論』『文法』をテキストにはしていたが、いつも脱線していた。それが又楽しかった。中世文学第一个人者・斉藤清衛先生は友人である矢野峰人著『新・文学概論』（大明堂）をテキストに、文芸創作に於ては $N+N=4+X$ である、 $I(nention)+E(xecution)=I+E+X=W(ork)$ となる、という方程式を興味深く講義された。先生も脱線が多かった。斉藤清衛先生の国文学演習で、私は島崎藤村「破戒」を研究発表。部落解放闘士猪子蓮太郎が叫ぶ「我は部落の民を恥とせず」（二〇節）は、パウロが叫ぶ「我は福音を恥とせず」（ロマ書一・一六）という伝道精神を受け継いでいると、聖書影響論を若々しく発表する。私が自分で言うのもおこがましいが、昭和四十九年頃、自動車公害阻止地域実践と調布市役所に働きかけた戦闘エネルギーは、パウロの伝道精神と車の犠牲になった渡辺章夫君の遺志を受け継いでいたのかも知れない『月刊ホームルーム』昭和五十三年四月号、学事出版。吉田幸一先生は『古典一周』（神田秀夫、明治書院）をテキストに学生に自由な意見を述べさせていた。市村　宏先生の「万葉集」は学部学生で超満員。昭和三十六年暮、笹淵友一先生は『「文学界」とその時代』『浪漫主義文学の誕生』研究で学士院恩賜賞を受けられた。是非この先生に教えを受けたいと思ったが東京女子大学なので女装するしかない。一年後の昭和三十七年暮、東洋大学助手の谷岡たつさんが「笹淵友一先生を増子さんのために吉田先生が呼んで下さったそうですよ」と知らせてくれた。昭和三十八年四月から一年間、『透谷全集』（岩波書店）をテキストに笹淵先生から一対一の授業を受けた。私は幸運な学生である。笹淵先生が教える長男となった。一週間前に先生が指示した評論を中心に読んできて問題疑問点を出す先生が答えて下さる。意見を自由に述べるという形式の授業である。感激は忘れられないので一部を記しておこう。〈戀愛は人世の秘鑰なり〉（厭世詩家と女性）、〈わが内には、和らがぬ兩つの性のあるらし、ひとつは神性、ひとつは人性〉（蓬萊曲）、〈嗚呼何ぞ穢なき此の獄舎の中に、汝の清浄なる魂が暫時も居らん！〉（「禁囚之詩」、〈詩人哲學者の高上なる事業は、實に此の内部の生命を語るより外に出づること能はざるなり。〉（「内部生命

論」へ心が基督の水に浴したる時、パウロの所謂火の洗禮に遭ひたる時こそ、基督の弟子となりたるなれ」(各人心宮内の秘宮)、「天地愛好すべき者多し、尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな」(處女の純潔を論ず)、「人間は戰ふ爲に生れたるを」(人生に相渉るとは何の謂ぞ)。透谷は何んと勇ましい戦士であらうか。当時詩作を続けていた私は、自分も透谷研究をやらうとまず「透谷の自殺」(『みなかみ』18 都立松原高校定時制 昭和四十三年)なる論文を書いた。自殺原因の第一、明治二十年代に襲った近代自由主義神学によつて伝統のない日本のプロテスタント教会の信仰は動搖させられた。透谷はクエーカーリズムに接近するにつれ実社会から離れ、西洋と東洋の両文化綜合の中で挫折し自身を引き裂いてしまった。第二、母親から享けた神経質ヒステリックな性格は、その詩人的直感と鋭い感受性に生かされているが病的であつた。鋭い洞察力で徹底するまで考える。過激な思索を続け少年時代からの脳病を悪化させてしまった。健康を害し体力思考力も衰えた。第三、『鬼心非鬼心』などに見られるように経済的生活の不安定が考えられる。現実生活と彼の高踏主義的理想生活との間のはなはだしい矛盾を体験、自分に絶望し虚無に落ちて行く。正に近代理想家の壮烈な戦死である。

以上のような論文に対して笹淵先生も「まず題が面白い」と評して下さる。それでも先生の「透谷研究」を読むととても及ばない。これだけ研究されては新しい研究成果は出ないのではないかと思つた。今思えば若気の至りである。透谷と関連して藤村にするか、野溝七生子先生が推す鷗外にするか、夏目漱石、国木田独步、芥川龍之介、太宰治、迷つた末、有島武郎研究に決めた。高校時代、友人に奨められ「惜みなく愛は奪ふ」を読んだがよく理解できず、「小説家でなく思想家だろう。自分を一番大切にするのは当り前だから正直なんだ。でもどうしてこんなにキリスト教を攻撃するのだろうか」と不思議に思つたことがある。文学と関係のない道に進学したが、大学時代、キリスト信仰にとられ、再び有島を思い出していた次第である。昭和三十八年六月九日、東洋大学国語国文学会で「悲運、有島武郎」(『文學論叢』二十五号)と題し研究発表。野溝七生子、吉田幸一、両先生から「その調子で頑張つて下さい」と励

まされていたので、私の有島武郎研究は昭和三十八年頃から始まっていたことになる。

昭和三十六年四月、住居は、父の転勤で練馬区東京少年鑑別所官舎から千葉市作草部、千葉少年鑑別所官舎に移転していた。両地域ともまだ畠と緑の残る自然環境に恵まれていた。昭和三十七年四月から、いつまでも親の脛かじりではいけないと、江東区深川第五中学校で理科の時間講師を始めた。生徒が可愛い。自分の研究と同様、子どもたちが気になった。当時、理科の先生不足のため偶然始めた仕事である。金網の堀によじ登って「オーイ、先生」と私の来るのを待っている男子生徒。結局この気持が教師道の道に進む切っ掛けになる。それで昭和三十八年四月から千葉県立八街高校^{やちまた}定時制理科教諭として二十八歳の青春を燃焼させることにつながる。

透谷が「處女の純潔を論」じたように、純潔な乙女たちは皆、自分の宝に思え、次々に抒情詩を創作していた頃である。昭和三十九年度、笹淵先生の演習は横光利一だった。新感覺派「物それ自体をそのまま写生する」という芸術運動の旗手・横光利一は没主観にして虚無的唯物的客観小説を書いた。「碑文」「蠅」「靜かなる羅列」「ナポレオンと田蟲」「幸福の散布」「頭ならびに腹」等の作品がそれである。横光の分身が登場せず記録映画の撮影文である。伝統的に抒情的で感傷的な日本文学のマンネリズムを打開し、大正十年代のプロレタリア文学と自然主義文学と素朴な自分の資質とに反抗し、新しい文学創造のためあえて横光は没主観的小説を書いたのである。題の付け方がユニークでユーモアがある。馬車がへ崖の下へ墜落しへ人馬の悲鳴、……へ沈黙したまま動かなかった。が、眼の大きな蠅は、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。という「蠅」の最後の文章は今だに覚えている。昭和四十年三月、東洋大学大学院文学研究科博士課程修了。昭和三十年から十年間の学生生活は終った。

昭和四十年四月、父の転勤で千葉市から横須賀市、久里浜少年院官舎に転居と同時に、都立江北高校定時制に就任した。教員免許は理科なので入都検定は物理であったが、国語（古典、現代国語）も担当した記念すべき年である。指導教授笹淵友一先生の推薦書を勇んで都に提出。以後十二年間の国語教師の経験を有するに至る。江北の生徒に渡

辺章夫君がいた。十六歳の文学青年は常にポケットに国語辞典を持っている。「夜明け前」の授業後、「先生、今日の授業よかったよ」と評してくれる。藤村文学全体に触れ、歴史小説として藤村がどのように資料を準備したかを調べた授業だったかららしい。しかし彼が部長である文芸部で私が研究発表したことがある。朝日新聞連載小説『氷点』の作者三浦綾子は漱石山脈の一部を受け継ぐ可能性があると評した時、そのような作家ではなく家庭小説家だと反論してきた。反論するだけの研究資料の一つ松本鶴雄氏の「氷点論」を持ってきた。照明ライトの天庭でキャッチボールをしながら渡辺は、「今、小説書いてんだ。でも作家研究も続けたい」と夢を語る。『江北文苑』（昭和四十二年三月）に「有島武郎『迷路』について」を載せたのは渡辺である。渡辺章夫が二年A組文集『若い友 初霜』（昭和四十年）に書いた「青年の理想と現状」と題する最初の文章を紹介しておこう。「人間における内部統一の問題は、広く社会統一までの問題に波及する。人間の数十年の生涯のうち、自己内部の感情を最も濃艶に露呈する時代、無意識から偽善者の性格にかける過渡的な自我の覚醒、何でも吸収しがちなこの世代は、やがて社会風潮を自己の内面に象徴する」。十六歳の高校生のものである文章である。昭和四十一年一月四日、久里浜少年院官舎近くのグラウンドで私が弟たちと野球をやっていると、「先生」という声。かねてからの新潮社『有島武郎全集』全十巻を持って来てくれた。新宿古本屋西田書店で八千円であると言う。一万円渡した。自転車でペリー公園、燈明崎へ。浦賀水道から遠く房総の鋸山を眺望しながら創作と研究の明日を語り続けた。三十一歳と十七歳の師弟というより、文学青年同志の友情とライバル心が燃える雰囲気になっている。

私の本格的有島武郎研究はこの全集を得て始まる。昭和四十一年二月七日、アメリカのアリントンへ日本文学の客員教授として渡った笹淵先生から、「ベトナム戦争反対デモは日本のように熱狂的でない。学生が直接政治にタッチしないのは民主主義の長い歴史があるからでしょう」と手紙。昭和四十二年四月、都立松原高校定時制へ転勤、住居も久里浜少年院官舎から調布の現住所へ。

昭和四十五年五月十日、松戸市古ヶ崎路上で渡辺章夫が轢き逃げされたと、江北高同僚の柿沼 広、滝沢宏光、両氏から連絡。若干二十一歳。この悔しさは忘れられず、以後一貫してマイカーを持つなど生徒に訴え続けている。心まで減じるからである。私は時々、渡辺章夫の笑顔に励まされている。教育現場の人間だ、常に充実した授業に全力を尽そう、余暇のみを自己研鑽のため有島武郎研究を続けようとして決めた。

昭和四十五年四月、都立三鷹高校全日制に転勤、現在の勤務校である。全日制では三年間、三鷹高校定時制講師として五年間、合計十二年間国語担当。検定が物理であったので、昭和三十八年から五十二年まで十五年間物理担当。一貫する山好きのため、昭和三十八年から平成七年の退職まで、二十年間地学担当という経験になる。昭和四十六年頃だったか、突然菅 円吉先生から葉書をいただく。くしゃくしゃの字で読みづらい。誰かなとよく見ると菅 円吉とある。「今、ルーテル神学大学で講義している。少し体調は良くないが」とある。まさか先生が葉書下さるなんて、嬉しかった。例によってご自分のことを書いておられるが、その文面だけで「研究頑張りなさい」と意味を解した。脾臓癌のため七十七歳で亡くなられたのは昭和四十七年だから、その一年前のことだ。

高校理科では地学は広範囲な自然を対象にしているので教師に敬遠されがちである。古生物と化石、地質鉱物岩石以上に、天文、宇宙、気象、地震と地球物理、海洋の方が占める範囲が大きい。後者は物理専門の人の方が、地質専門の人より授業担当に適している。幸い私は十五年間の物理授業経験が生かされた。前者である古生物と化石、地質鉱物岩石学には、四十年間の登山歴によって集取された岩石鉱物化石の実物が決定的に役立った。都立教育研究所、日本地学教育学会、東京学芸大学、東京都地学教育研究会、地学団体研究会等の組織機関を通して多くの先生方から鉱物岩石化石鑑定を学習できた。ふと学生時代の授業で石島 渉先生に自分が似てきているのに気付かされる。地学教育の原点は、天体気象観測、野外実習（多摩川、長瀬、五日市、大月、城ヶ島、日本アルプス）、岩石プレパラート作りである。十三年間にわたって三鷹高校の全生徒は、一人最少一枚の岩石プレパラートを永久保存することにな

る。延べ人数約五千八百人になる。多摩川の閃緑岩、長瀬の結晶片岩などを岩石プレパラートにして写真撮影する。石英、斜長石、正長石、黒雲母、カオリン、白雲母、普通輝石、角閃石、褐鉄鉱、磁鉄鉱、陽起石、緑泥石、ペニン、緑簾石、紅簾石、脆雲母、石墨、滑石、屑石、燐灰石、赤鉄鉱、海緑石、紫蘇輝石、等の鉱物を鑑定する。山岳部顧問として日本アルプスなどから採石した約五百の岩石鉱物化石は「増子コレクション」として廊下陳列ケースに展示。その岩石プレパラート写真も教材として活用。全生徒が岩石プレパラートを作り、流域観察と動植物研究を含む「多摩川研究」リポートを提出する（「自主的に学ぶ楽しさ知った」高橋一郎『毎日新聞』一九九四年一月二十八日）。全生徒が岩石プレパラートを作るのは都立では三鷹高校だけであるので、この方式は地学の「増子方式」と言えるだろう（岩石プレパラート作り実践指導——「多摩川研究」リポートと授業全般——『地学教育』第43巻 第5号 日本地学教育学会 一九九〇年九月 参照）。私が書いた教科書指導書は、透明方解石と複屈折、光と偏光、鉱物の調べ方、等基礎実験実習を中心としており（『最新理科1 運動と地球 教授資料』教育出版 平成三年）、地学問題集では、偏光顕微鏡と鉱物鑑定、剣岳と穂高岳の岩石、糸魚川・静岡構造線とアルプス、城ヶ島、長瀬、多摩川、等での実習が中心である（『理科1 演習ノート』教育出版 平成三年、『地学演習』教育出版 平成六年）。

有島武郎研究で直接間接お世話になった先生方と著書に触れておきたい。最初に研究心を起こさせてくれた本は、本多秋五著『白樺派の作家と作品』（未来社）である。本多先生は戦後、有島武郎研究のパイオニアと言われる。「だが、あの地蔵眉毛や紳士の風貌にだまされてはいけない。彼のなかには見かけによらぬもの、ある荒々しいものが潜んでいる。私はまだ有島武郎がよくわかったとは思えない」というくだりを読んで、本多先生でさえ「まだよくわかったとは思えない」のだから研究のやりがいがあると思った。次に瀬沼茂樹氏の「留学前後の有島武郎」（『文学』昭和三十九年十、十二月号）、「結婚前後の有島武郎」（『文学』昭和四十一年九、十一月号）なる論文である。有島研究者の嬉

びの一つに「觀想錄」なる日記が充実していることが挙げられる。しかし「留学前後」「結婚前後」には日記が少ない。日記空白部分を有島に代って書いたような綿密な調査が瀬沼論文である。ワシントン国会図書館、ハアヴァド大学図書館、アヴォンデールにあるファニーの農家、『北大恵迪寮史』、『北海道帝国大学沿革史』、『文武会報』等、丹念に実踏し、資料を集めてからの実証的論文である。この研究方法に学ぶ所が多い。戦後、一冊として最初の研究書は安川定男著『有島武郎論』（明治書院）である。「觀想錄」を中心に有島の作家前史と思想的側面が資料に当って正確に論じられている。「惜しみなく愛は奪ふ」にある本能的、生活とベルクソン哲学『創造的進化』『時間と自由意志』にある純粹、純統との思考方法の類似性、フロイト心理学を導入して有島の「聖書と性慾」二元対立を分析説明する方法等、安川論文にも多いに学ぶところがあつた。次に山田昭夫著『有島武郎』（明治書院）、『有島武郎・姿と軌跡』（右文書院）、『有島武郎の世界』（北海道新聞社）である。山田論文で始めて作品論全体を具体的に勉強させてもらった。有島農場解放問題、木田金次郎交流、札幌遠友夜学校、等、地元北海道と有島との関係論文にも勉強させられた。山田先生に答える長男・森 雅行氏の父親誹謗の凄まじさは当然であるがショックではある。

私の有島武郎研究においても指導教授笹淵友一先生から教えられた所が大きい。授業以外で直接指導を受けた最初は、有島童話にユング心理学を導入し、創作過程を説明する方法である。無意識層に蓄積された心的エネルギーが、意識され発散される過程で童話創作がなされる。人に知られたくない影、影の発散としての創作、生活童話と言われる有島童話も太陽神話類型に属している、等。この方法で書いた論文が、「童話成立過程とその前後」である。大学院終了後、直接指導を受けた二度目は昭和五十一年四月十日、ICUで「実験室」について研究発表した時である。〈涙ぐましいまでになつかしい大きな人〉がキリストというのは思い付きになる。前後の文脈からそれを論証しなければ。バルトやキリスト教を出さず作品そのものを文脈を丁寧に読みつつ、自分の強調したい点を紹介する。その際、先行説も参考として取り入れつつ自説を打ち立てる。先行説を全部信用してしまつたら単に紹介だけで論文は書けな

い。学校の生徒にはまず読みに注意して教えないといけない、と。会場の十五人ぐらいの人は皆黙っていた。帰りかけ先生は「私の遺言として今日のことは聞いておきなさい、私も長くないのだから」と言われた。昭和五十一年五月一日、先生から「藤村「嵐」の考察」(ノートルダム清心女子大学、紀要九号)の技刷と手紙をいただいた。「研究発表はこれまでの研究に一步前進するものを見出だしたときに初めて意味があります。拙稿でも三好、平野両氏の説を引用していますが、私説を展開する舞台として役立てているので、単なる紹介のためではありません。更に私説は両氏の説に異見を結論的に持出しただけではなく、作品の文脈の正しい把握の上に立ってその必然性を論証したつもりです。これまでの近代文学研究にあきたりないことは単なる思いつきの新しさを競って実証性に乏しいものが多いことです。どうか「後生恐るべし」と感歎させる様な研究を出して下さい。」以上の手紙は文学研究するすべての後輩に必要とされる内容なので紹介した。先生の著書『明治大正文学の分析』(明治書院)中の「惜みなく愛は奪ふ」論では、有島が主張する理論構造の矛盾指摘、思想的達成ではなく有島の自己確立の努力という指摘、「クララの出家」主題論では、小坂晋氏との論争でフロイト心理学に立つかキリスト教に立つかで、作品評価、クララ評も変わってくることを、等を学んだ。「有島武郎とキリスト教」をめぐる諸問題」の最後に「彼の信仰は失われていなかったといわねばならない」とあるのには勇気付けられた。拙論「有島武郎とヨハネ伝」(『キリスト教学』26 一九八四年)を読まれた後、調査統計一覧表作りは理科系出身者らしい、キリスト教学としては良いが、文学としては全然だめ。再びICUの廊下で笹淵先生から「本当に文学にほれ込んでいるのか。それでも国語の先生か」と叱られた。昭和六十年だったが、その時の気持ちをバネとしている。自他共に認める天下の不肖長男弟子である。

第一編「有島武郎とキリスト教」は神学の立場で書いた論文である。中心論文は「増子方式」から「増子方式の成果」までである。「札幌独立教会脱会前と聖書」第一章「二重決定論的思考」、第六章「自由主義神学との関係」は私としても精々自負している論文である。第二編「作品研究」は文学研究として作品論も少ない。内容も満足していな

い。「大洪水の前」思想的考察」「ノアの息子達と思潮」論は、有島武郎が思想的作家の力量を発揮していることを論証する結果にもなっている。「有島武郎の児童文学」では第一部「童話成立過程とその前後」第二章「深層心理学と童話成立過程」は「影の発散」と共にご覧願いたい。「迷路」については昭和四十年、三十歳の時に書いた。「卑怯者」「老船長の幻覺」も三十代前半のもの。今読んでみると表現が勢い込んで自分だけで分っている様子。今だに表現下手であるが当時の幼い文章で恥しくも懐しい。芸術家が若き日の習作を慈しむように、私としてはこれら拙論が愛すべき論文である。本格的作品論は私の著書を上梓後にしたい。「有島武郎と聖書」も上位第三位「ヨハネ伝」「創世記」「マタイ伝」までであるので、他の聖書についても調査統計表は記録されているのでいずれ発表したい。尚、「増子方式」に賛同する若い研究仲間と漱石、独歩、芥川、……に関する聖書一覧表作りを計画している。

有島武郎研究では次の諸先生方から著書、論文を通して教えられている。鏈田研一、井東憲、片岡良一、紅野敏郎、福田準之輔、佐々木靖章、小玉晃一、遠藤 祐、小坂 晋、佐渡谷重信。更に次の諸氏に対しても著書、論文を通して啓発させていただいているので感謝したい。内田 満、西垣 勤、宮野光男、江頭太助、川 鎮郎、上杉省和、植栗 彌、高原二郎、渡邊凱一、ポール・アンドラ、石丸晶子、江種満子。有島武郎全集中、聖書の章節調査で協力いただいた日本基督教団西大井教会牧師斉藤一男氏、全集中の英文翻訳、論文英語表記で協力いただいた都立三鷹高校教諭斉藤 博氏、現都立狛江高校教諭望月国光氏、共に山岳部顧問で現都立国分寺高校教諭重光哲郎氏、共に山岳部顧問で出版について協力下さった現都立南多摩高校教諭速水博司氏、共に都立千歳丘高校在学中から一貫して応援してくれた大川 宏氏、諸氏に対し心から感謝を申し上げます。日本キリスト教文学会の伊東一夫先生、神田重幸氏、西谷博之氏、ニコライ堂山口義人司祭、上智大学ベトロ・ネメシエギ教授、以上の先生方に心からお礼を申し上げます。

背教し自殺の武郎を我らも又永遠の罪だと葬らんか

我ら又「カインの末裔」そのものなり良心ある程この世は地獄

私は将来、「創作活動の地域と気象」との関係を、作品構想と創作時の心的状況とを関連させて調べてみようと考えている。

最後に本著の出版を受諾された新教出版社社長森岡巖氏、東京河北印刷の方々には心からお礼を申し上げたい。写植印刷の現在、活字印刷を、特に旧漢字、旧仮名印刷のご苦勞に対する感謝の思いは生涯忘れられるものではない。

平成六年（一九九四年）六月三十日

〈追記〉

本書（八二五―八七三ページ）掲載の「有島武郎年譜」は、山田昭夫、内田満両先生編により、『有島武郎全集』別巻（一九八八年、筑摩書房発行）に収録されたものである。（但し、年譜の内、〈同時代の事項〉の部分は割愛させていただいたことをお断わりしておく。なお、八三六ページ上段一八行目は、著者の加筆である。）

転載にあたり、編者の山田、内田両先生、並びに筑摩書房の御許可をいただいた。特に、両先生には、著者からの連絡が印刷完了後であったため、御迷惑をおかけしたが、転載を御承諾下さったことを感謝する。

目次の後（xvi―xvページ）の関係地図、1 北海道、2 札幌は、『有島武郎集』（一九七〇年、角川書店発行）から、角川書店の御許可をいただいて、掲載した。

『良婦之友』 644, 690, 720

理(理法) 43, 44

倫 理(感) 247, 587

倫理的禁欲主義 32, 34

る

ルネッサンス 510, 670

「ルベックとイリーネのその後」 658

れ

靈 7, 22, 23, 29, 47, 56, 58, 58, 305, 308, 360

靈 界 58

靈 感 44, 71

靈 魂 29, 47, 59, 66, 191, 201, 202, 284, 295

靈 的 41, 42, 43, 44, 45, 47, 116, 248, 359

礼 典 739, **740**

礼 拝(儀式) 739, 762

歴 史(思潮) 263, 797, 818

『歴史と終末論』 886

「歴史の最後と死の研究」 885

レビデムの幕張り 354

「レメクの剣の歌」 532, 533

戀 愛 275, 284, 587, 588, 590, 591, 683, 691, **762**

錬金術 509

煉 獄 92

連帯責任(の理) 665

ろ

樓 閣 237, 248, 252, 280, **285, 292, 744**

老賢者 677

「老船長の幻覺」 540, 587, 669, 759~772, **809**

勞 働(問題, 運動, 思想, 賃金, 組合) 139, 135, 148, 249, 250, 263, 282, 378, 401,

474, 523, 618, 676, 678, 690, 731, 757, 775

労働者階級 80, 643, 651, 689, 721, 731

『浪漫主義文學の誕生』 443, 668, 887

「露國革命黨の老女」 97, 98, 113, 210, 236, 240, 381

ロゴス(λόγος) 22, 51, 54, 56, 57, 58, 59, 109, 115, 136, 138, 411, 683, **886**

ロシア(露西亞, 露國, 革命) 80, 523, 642, 650, 676, 698, 731, 753, **767, 883**

ローファー(Loafer, 獨り行くもの, 放浪人) 151, 152, 303, 412, **416, 455, 468, 671, 816**

羅馬(ローマ人, 軍, 官憲迫害) 129, 151, 221, 325, 397, 885

ローマ信条 35

羅馬の衰亡 502

「ローマ政治史」 501

羅馬の士卒(兵士) 214, 242

ローマ法王 262

ロマンティズム(未來) 508, 510, 803

論 語 33, 665

ロンドン 138, 142, 354, 523, 663

わ

「若き友に」 658, 675

『我が宗教』 55, 819

『若菜集』 443

別 れ 246

災 ひ 219, 245, **334**

ワシントン 134, 734, 893

「私の父と母」 564, 589, 626, 769

「私の母」 564, 648

「ワルト・ホキットマン」 **816**

「ワルト・ホキットマンの一斷面」 670

我 244, 248, 250, 263, 293, **291**

ヨセフの話 201, 202, 206
 予知夢 693, 695
 欲求不満 682, 684
 ヨッパ 356
 予定説 5, 8, 12, 16, 17, **18**, 27, 31, 55, 62,
 123, **203**, 205, 299, 302, 303, **304**, 323, 481
 ~489, 728, 734, 745
 夜鳴鳥(Nightingale) 321, 426
 「予に對する公開狀の答」 779, 782
 ヨハネ神学 22, 24, 27
 『ヨハネ伝註釋』 58, 60
 ヨハネ文書(=約翰書)(ヨハネ伝, 第一,
 第二, 第三の手紙, 默示録) 26, 68,
 123, 146, 147, 269, 274, 369, 427
 予備見習士官 703
 『讀賣新聞』 688, 781
 夜 402, 696, 697, **697**, 712, 713, 736
 ヨルダン河 218, 245, 599
 「夜の海の航海」 696
 夜の苦しみ朝の平安 695, 697
 〈夜の宗教〉 696, 697
 喜 び 252, 406, 406, 474
 ヨーロッパ(人) 204, 247, 260, 413, 645
 弱き者(弱さ) 251, 264, 302, 304, 305, 399,
 424, 761
 四大教会 89, 257, 260
 四段階(背信, 圧迫, 悔改, 救済) 541

ら

來世(未來世) 750, 751
 癩病人 101, 144, 388
 ライン河 619, 713
 樂園 171, 172, 185, 192, **203**, 295, 297,
334
 駱駝(駄) 222, 229, 240, 273, 282, 308,
 328
 落第點 800
 ラザロ復活 114, 123, 126, 127, 377
 “LOVE THE PLUNDERER” 228,
 234
 54

ラテンアメリカ 155
 ラテン民族(語) 508, 679

り

リアリズム(現在, 文学) 510, 803
 離縁狀 149
 利害の受身 886
 利己主義(的) 751, 752
 リズム(調和, リズミカル) 647, 658
 理性 58, 152, 201
 理想(像, 的) 76, 150, 410, 440, 442, **455**,
 594
 理想(家)主義(者) 5, 7, 20, 28, 143, 148,
 151, **467**, **505**, 612, 651, 688
 理想主義文学 **521**
 律法(学者) 67, 83, 221, 239, 245, 287,
 300, 305, 343, 415, 417, 466, 474
 リビドー(心的エネルギー, 性的本能エ
 ネルギー) 63, 76, 78, 128, 565, **585**, 587,
 613, **677**, 678, **681**, 682, 703, 704, 893
 リビドー(Libido)発散(放射, 投射, 退
 行) 128, 565, 585, 587, 589, **677**, 684,
 703, 712
 「リビドー変遷理論」 614, **681**, 682, 683
 684
 リビヤ(レハビ) 470
 「リビングストン傳」 92, 95, 97, 118, 119,
 128, 141, 159, 191, 194, 197, 208, 235, 237,
 237, 240, 242, **244**, **250**, 372, 377, 380, 663
 『「リビングストン傳」の序』 9, 11, 13, 14,
 19, 20, 30, 75, 78, 79, 95, 100, 116, 124, 125,
 128, 135, 142, 205, 273, **385**, 472, **489**, 665,
 669, 704, **705**, 707, 726, 735, 741, 743, 750,
 757, 761, 764, 818
 掠奪者 158
 留学(中, 時代, 遊学) 77, 129, 138, 139
 「留学前後の有島武郎」 732, 892
 漁師 261
 良心 622, 651, 680, 682, 683, 692, 698, 735,
 818, **819**

153, 268, 271, 276
 盲 目(瞽盲, めくら) 99, 102, 119, 136,
 139, 150, 383, 388, 640, 721
 黙示録的終末論的社会 523
 目的至上主義 803
 モーセ五書 469
 モーセの歌 354
 モーセの願い 404
 モーセの律法 387, 389, 390, 383
 持てる者 80, 82, 128, 263, 622, **819**
 求めよ 240
 模範的婦人 360
 森戸事件 687
 問題提起 471~476
 モンロー主義 752, 754

や

ヤーウェ(ヤハウェ) 404, 407
 「八木沢善次氏宛書簡」 790
 野 獣 730, 776, 779
 野性的豪快 766
 「耶 蘇」 443
 宿 243
 谷(やと)部落 815
 八幡製鉄スト 80, 642, 690
 「闇の力」 820, 820~822
 鎗 349
 槍の一撃 316

ゆ

唯物論(唯物主義) 505, 731
 唯物(論)的客観小説 480, 802
 有 爲 334
 憂 鬱 363, 364
 「夕暮海邊に立ちて」 655
 有限性 480
 有産階級 80, 128, 151, 614, 622, 712, 731,
 757
 優柔不断 75, 611, 637, 671, 702, 756
 『誘電体論』 883

誘 惑(荒野の誘惑, 誠練) 58, 228, 245,
 247, 251, 295, 306, 309, 310
 ユ ダ(の荒野) 389, 390, 599
 ユダヤ(人) 203, 204, 223, 250, **253**, 302,
 304, 324, 412, 415, 752
 ユダヤ教 16, 22, 304, 313
 ゆだねる(任せん) 317, 320
 ユニテリアン教会 50
 夢(分析) 614, 622, 624, 637, **677**, 693, 694
 『夢判断』 693
 ユーモア 480, 699, 889
 百合の花 220, 249
 許 し(赦し, 宥恕) 249, 272, 288, **291**,
 293, 296, **309**, 417, 594
 ユング心理学 585, 614, 637, 676~680, 693,
 694, 711~717, 893
 『ユング心理学入門』 684
 『ユング著作集』 585, 685

よ

世 76, 98, 100, 108, 109, 116, 118, 119, **144**,
 146, 212, 235, 248, 248, 272, 280, 284, **296**,
406, 736, 754
 「夜明け前」 890
 妖艶 766, 771
 幼少体験 678, 697, 698, 708
 幼児的・原始的 703, 704
 『幼年の友』 619
 『用無全集』『用無遺稿』 8, 320, **351**, 426
 要約主題(「三部曲」神論, 男女論, 生命
 論) 577~579, 601, 604
 抑 圧 **680**, 682, 683, 684, 693, 702, 703,
 768
 抑圧鬱憤 586, 587, 678
 慾 情(渴慾) 58, 59, 766
 豫 言(予告) 182, 223, 245, 246, 278
 豫言者 97, 118
 横 浜 7, 34, 633, 765
 横浜英和学校 7, 683, 756
 横浜バンド 50

松江聖公会 351

「松 蟲」 171, 192

「眞夏の夢(頃)」 214, 238, 252, 610, 613,
622, **624**, 625, 626, 642, 671, 679, 713

マナの下賜 354

招 く 289

幻 251

毒蛇(まむしの裔) 229

迷える羊 126, 149, 235, 248, 250, 252, 279,
280, 282, **287**, 283, 285, 288, 290, 291, 293,
369

マンネリズム 480, 889

マンハッタン座 314

み

ミイラ 388

見える(see) 136, **271**, 276

右の手 244

御 心 248, 248, **252**, 252, **263**, 288, 290,
310

御子従位論 57, 58, 69, 69

ミ サ 119, 120, 153, 154, 257, 258, 259,
260

水 97, 98, 100, 115, 117, 120, 138, 142, 143,
153, 243, **250**, 280, 285, 322, 380, **382**, 655,
736

道 108, 109, 115, 137, 141, 151, 199, 307,
411, 404, **464**

ミツライム(エジプト) 470

御 手 291, 294, **296**, 297, 318, 320, 335,
346

御名, 御国 248, **252**, 263, 332

南アメリカ 253

南アルプス白根三山 883

御 旨 248

未來觀(→終末)

「ミレエ禮讃」 171, 190, 191, 192, 194, 203,
215

民 衆(大衆) 151, 397, 413, 508, 611, 642

民族的英雄物語 544

む

無意識(層, 個人的, 集合的, 普遍的)

78, 79, 442, 565, 571, 585, 587, 589, 590,
655, 671, 676, **677**, **678**, **679**, 680, 682, 687,
694, 695, 696, **698**, 703, 704, 893

無教会主義 25, 30, 739

麥(畑)の穂(一粒) 139, 223, 229, 242, 250,
397, 398, 423, 746

無 限 284

虫 290, 808

「蝕まれた友情」 611, 635

結ばれぬ男女愛 440

無政府主義者 741

無 智 289

無抵抗 310

胸 349

め

目(眼) 220, 222, 243, **250**, **387**, 619

明治人 757

『明治大正文学の分析』 6, 74, 707, 894

迷 信 776

「迷 路」 15, 31, 68, 99, 113, 173, 195, 216,
238, 260, 384, 540, 610, 660, 701, 702, 704,
725~754, **812**, 890

恵 み(→恩寵)

メシア(ヤ) 118, 148, 392

メ ス(刀) 777, 802

美普(メソジスト)教会(美以教会) 7, 10,
29, 739

メソポタミア 204

滅 亡(滅び) 690

メラの水 354

メルキセデク 358

も

「も一度「二つの道」に就いて」 162, 189,
191, 669, 759, 782

盲 人 114, 115, 120, 135, 136, 139, 142,

ベテスダ(ベトザタ)の池 101,115,20,123
 139, 387, 388
 ベドーウィン族 532
 ベトロの離反 241
 ベネ・ハエロヒーム(b^enē ha^elōhim)
 470
 蛇(毒蛇) 106, 119, 209, 215, 237, 248, 280,
 284, 284, **295**, 397, 422, 452
 ヘブライズム 138
 ヘブル語 389, 470, 544, 884
 謙遜る(へりくだる)もの 221
 ヘリコプター 480
 ヘルモン山 479
 ヘレニズム 138
 ベルギー 354
 ペリンテ人 441, 543, 594, 810
 ベルソナ(外的表情) 613, **677**, 678, 679,
704
 変容(輝かしい現れ) 202, 203
 弁証法(神学) 83, 86
 ペンシルバ(ペ)ニア州 733
 偏靈主義 20, 142, 385

ほ

「ホイットマン詩集」 95
 「ホキットマンに就いて」 110, 118, 185,
 192, 194, 412, 726
 封建(的)制度 506, 686, 776
 奉仕 402
 『報知新聞』 690
 放蕩(息子, 者) 248, **252**, 288, 289, 290,
 292
 葬り 116, 226, 248, 282, **292**, 313, 328,
 401, 410, 776
 「蓬萊曲」 887
 法律的罪(crime) 744, 749
 頬 243, 281, 288, 289
 忘恩 575
 房総(上總國) 686, 815, 890
 北欧文学 5, 14, 134, **767**

「北欧文学が興ふる教訓」 162, 190, 194,
 203
 『北大恵迪寮史』 893
 北方の血 769
 牧者(牧人, ひつじかひ) 176, 211, 213,
 218, 225, 285, 292, 317, 320
 「僕の帽子のお話」 611, 637, 676
 ホザナ 225, 226, 244, 398
 星(星座) 282, 313, 336
 補償 **677**, 678, 702
 ボストン 729, 730, 732, 734
 『北海道帝國大學沿革史』 893
 ホテル・シュヴァネン 701
 施し 244, 282, **667**
 没主親の小説 889
 ボテンシャルエネルギー蓄積 677
 「骨」 699
 捕縛 312, 313
 ホーリネス教会 90, 883, 885
 減び 246, 332
 本郷教会 50, 62, 64, 260, 358
 北郷氏の平佐郷士 584
 本能(的, 的生活) 81, 127, 510, 587,
 622, 680, 682, 683, 688, 702, 703, 768, 893

ま

埋葬 312, 316
 枕 210, 220, 228, 235, 249, 251, 280, 285,
 289, 292
 マグダラの町 251, 597, **598**, 599
 誠の教会(ἐκκλησία エクレシア) 499
 マサチューセツ州 729
 増子方式 89, **257**, 892, 895
 呪符(まじなひ) 720
 魔女 771
 魔酔 802
 貧しい人々(貧乏な人々) 148, 155, 221,
 226, 282, 289, 613
 馬太傳第一章系圖 196
 待つ **293**

『福音新報』 68
復 讐 234, 761, **761**
服 従 663
父系家族 250
不公平(なる神) 16, 17, 18, 191, 202, 205,
260, 297, **304**
武 器(剣, 槍) 158, 165, 169, 177, 178
不治病肺結核 438
富士見町教会 50
不信仰の罪 **342, 479**
『婦人の友』 675
婦人問題 618, 678
武 士(道, 的, 風) 30, 32, 33, 589, 684
「二つの道」 98, 113, 162, 194, 381, **669**,
759, 782
普通の人 152
復 活(甦る, 祭) 9, 26, 77, 104, 106, 114,
118, 127, 144, 149, **152**, 246, 247, 258, 264,
265, 277, 312, **314**, 316, 384, **394, 396**, 407,
597, 749
「復 活」 443, 819, 820
仏 教(的) 38, 44, 248, 613 656, 667, 669,
735, **750**, 753, 885
物 理 883, 884, 889, 891
ぶどう園 244
葡萄酒 100, 153, 260, 385, 573
ぶどうの木(房) 118, 355
普遍的(性) 348, 677, 678
フョールド(峽湾) 621
フランクフォード 135, 146, 286, 346, 701,
733, 741
フランシスコ会 273, 408, 606, 886
フランス 354, 611, 640
「フランスの顔」 15, 81, **439**, 540, 610,
613, **672**, 701, 704
古い草袋 246
「古川光太郎宛書簡」 **629**
フレンド派(クェーカリズム, クェーカー)
5, 25, 30, 42, 43, 58, 91, 135, 146, 286, 346,
665, 703, 727, 741, 742, 888

フロイト精神分析理論(フロイト心理学)
680~684, 768, 893, 894
「ブランド」(初稿) 98, 114, 116, 117, 150,
162, 194, 212, 236, 237, 238, 241, 242, 372,
377, 381, 382
「ブランド」 95, 100, 114, 116, 117, 135, 173,
194, 217, 218, 236, 237, 238, 241, 242, 248,
252, 263, 373, 377, 386, 387, 663
ブリテン女学校 7
ブルジョア 611, 614, 643, 676, 690, 698
ブラトニッククラブ 284, 422, 700, 701
プロテスタント教(徒)会 35, 43, 67, 90,
92, 95, 119, 133, 137, 154, 253, 257, 260,
369, 740, **753**
プロレタリア(文学) 480, 643, 676, 889
文 学(作品) 247, 258, **602**, 797, 798
『「文藝界」とその時代』 43, 887
『文 学』 42, 74, 77, 501, 732, 753, 764, 892
『文藝界』 13, 75, 590
文学者(→作家)
「文學は如何に味ふべきか」 508, 510
『文学論藻』 15, 888
『文化生活』 690
『文化生活研究』 688
文化的生の破局 **481**
「文化の末路」 690
『文 芸』 5
文芸復興 502, 508, 670
『文章俱樂部』 691
『文章世界』 674, 692, 726, 781
『文武会報』 893
文 明 463, **464**
『文明史』 501

へ

閉鎖的農村 776
「平凡人の手紙」 789, 793
米國(→アメリカ)
ベタニヤで香油を注がれる **144, 251**, 401
ベタニヤ村 225, 251, **599**

670, 759

反キリスト教 613, 671, 722, **814**

反キリスト論 587, 814

燔 祭 167, 179, 195

汎神論 39, 42, 50, 57, 61, 65, 67, 68

「半日」 29, 95, 98, 113, 212, 292, 381, 442,

670, 702, 756万人救済(万物復興) **17, 203**ペ ン 118, 153, 153, 171, 208, 209, 210,
226, 260, 309

ひ

火(火焰) 766, 773, 780, 784, 785

「悲運, 有島武郎」 429, 888

光 118, 174, 209, 212, 235, 248, 282, 393,
439, 594, 778

挽 春(ひきうす) 245

「卑怯者」 75, 611, 613, 634, 647, 673, 687,
755~758, **814**悲 劇(的, 描写, 悲哀) 406, 442, 444,
479, 480, 610, 667, **686, 692, 699**

非国家的思想 734

「久助君の話」 709

悲 惨 335, 422

ヒステリック 888

秘 蹟(秘跡, 機密, ミサ) 119, 120, 258,
260, 407

悲愴的優美 673

美 術 352, 818

「美術鑑賞の方法に就いて」 674

美人教師 679, 680, 683, 684, 704

ピストル 362, 363, 472, 700, 702, 729, 734,
760, 761, 767

左の手 244

羊 177, 183, 211, 213, 218, 225, **252, 272,**
320, 474

一粒の麥 106, 117, 149

人の子(→子)

「一房の葡萄」 78, 610, **628, 631, 641, 643,**
649, 674, 676, **679, 682~684, 704, 712,**

756, 769

「瞳なき眼」 612, 655, **656**「獨り行く者」 110, 117, 151, 228, 235, 249,
416

独り子(→子)

火の洗礼 773, 780, 784, 785, 803

「日の村」 623, 624, 625, 713

批判的懐疑的態度 506, 512

批判的機能 505

日々の糧(→日用の糧)

批評的科学精神 795

「碑 文」 477, 889

ヒマラヤ高峰(原産植物甘松香) 326, 383

ヒューマニズム 304, 644, **668**ピュリタン(清教徒) 6, 25, 30, 30, 32, 34,
80, 95, 153, 665, 682, 703, 740

氷河期直後洪水 469

「氷 点」 444, 892

日和見主義者 466, 507

病 人(を治す) 245, 640

病理学研究室 790

平佐崩れ 584

平塚杏雲堂病院 437, 441, 565

疲 勞 683, 686

ヒロイン 272, 560, 571, 591, 793

牝鶏(ひんけい)のその雛 210, 214, 242

貧民窟 320, 426, 664, 665, 732

貧乏人(→貧しい人々)

ふ

「ファウスト」 137, 138

ファンダメンタリスト 253

フィラデルフィア(費府) 753

フィン人 752

笛 224, 225, 242, **250, 280, 284, 288, 291**

フェミニスト 756

不可能 306, 309

服(裳, 衣) 245, 307, 310, **425**福 音 83, 272, 273, 299, 303, 305, 313,
327, 337, **392, 596**

ネピリム(絶世美女, 勇士巨人, 墮落漢)
158, 168, 178, **195, 204, 259**, 458, **459**, 463,
465, **470**, 534, 591, **592**, 811

の

ノアの洪水(J 典, P 典) **469~470, 481**,
529

農 学 797

農 業(農村) 6, 10, 643, 797, 815

農場解放 274, 614

「農場開放顛末」 80, 81

農 夫 244, 464

農 民(百姓) 211, 413, 686

ノド定住 529

野の花 253, 287

野蜜と蝗 213

呪 い 169, 205, 215, 227, 260, 334, 454,
463

は

齒 220, 250

ハヴァード大学 733, 892

灰 296, 333, 334

背 教(宣言, 者) 5, 42, 76, 79, 385, 613,
705, 707, 721

背信イスラエル 440

排他性, 偏狭性 12, 26, 338, 482

肺病(→結核)

「蠅」 480, 802, **889**

パーソナリティ(人格基本的構造形成)
680, 681, 684

「パーソナリティの三分説」(→「人格論の
三分説」)

バイブル講義(座) 735, 736

「バイロン」(“Lord Broron”) 185, 192,
195, 196

パウロ支持 **365**

パウロ書簡 21, 26, 27, 56, 123, 427

パウロ神学 22, 24, 25, 27, 38

「破戒」 443, **887**

博 士 240

博愛主義者(精神) 450, 456, 475, 523

迫 害 32, 237, 247, 251, 263, 307, 309,
351, 427

迫真性 802

激しい川 147

箱 舟(方舟) 449, 454, 456, 523

方 舟 175, 176, 184, **197**, 199

馬鹿正直 701, 702, 729, 731

爆発的 678, 683, 768

幕末・安政年間 688

元初(はじめ) 341

太初(はじめ) 109, 115, 137, 138, 374, 411,
814

裸 158, 163, 167, 178, 185, **195, 204**

働 く 101, 110, 115, 139, 194, **378**, 388,
414

初 恋 762, 763

鴿(はと) 237, 284, 422

罰 202, 227, **296**

「花語り」 655

花 嫁(小羊の花嫁, 新しいエルサレム)
352

母親(母性) 385

ハヴァフォード(大学, 院) 381, 733, 742,
752

バビロニア(バビロン) 161, 193, 203, 501

バベルの塔 161, 163, 171, 173, 185, 193,
481

刃物武器 158, 164, 176, **462**

破 門 247

針の孔(目) 229, 240, 274, 308

「春」 363, 668, 762

破廉恥 703, 704

『バルト 神学の根本問題』 18

ペ リ 354

パリサイ人 37, 76, 135, 136, 148, 239, 245,
247, 250, 251, 258, 263, 343, 387, **392**

反逆(叛逆者) 416, 575, 651, **670**

「叛逆者」(ロダンに關する考察) 213, 238,

ナジル人 542, 594
 ナチュラリズム(自然主義) 509, 510
 七十七倍 174, 182, **195**, 215, 215, 227, 295,
 297, 451, 457
 七つの悪霊 251, 597
 「ナポレオンと田蟲」 480, 889
 涙 35, 36, 41, 104, 126, 210, 273, **292**, 301,
 329, 335, 351, **395**, 594, 619, **626**, 664, 665,
778, **789**
 滑川海岸 817
 ナルドの香油 99, 100, 145, 226, 227, 326,
 401, **410**, 383, 776
 繩 110, 111, 116, 140, 142, 148, 153, 223,
 230, 241, 249, 412
 汝 244, 249, 250, 251, 293
 南部藩 33, 584
 南方の血 647, 769

に

ニカイア信条 35
 苦き杯 213, 218, **248**, 263
 肉(體, 体) 7, 22, 23, 29, 120, 153, 258,
260, 299, **300**, **305**, 308, 338, 358, 425, 703
 憎む 108, 119, 145, **304**, 406, 475, 807,
 823
 二元性(的) 540, 569, 593, 772, 783
 二元対立 10, 22, 23, 29, 614, 677, 679, **682**,
 775, 783, 893
 二元分裂(的性格) 5, 6, 7, 11, 12, 15, 34,
 59, 61, 65, 75, 134, 671, 756, 782, 819
 ニコライ堂(→東方正教会→日本ハリス
 トス正教会→東京復活大聖堂) 25, 91,
 119, 120, 133, 156, 201, 207, 369
 二重決定論(二重予定) 5, 12, 21, 27, 31,
 123, 133, 338, 482, 485, 488
 二重決定論的思考 5, 8, 10, 11, 12, 15, 21,
 21, 27, 31
 二重存在 463
 日用(日々の)糧 212, 217, 238, 248, 252,
 263

日曜学校 34, 39, 290, 320, 663, 764
 『日曜講演』 339
 日露戦争 8, 137, 205, 669, 691, 728, 731,
 734, **743**, 751, 776, 815
 日本(人, 民族) 249, **250**, 304
 日本共産党 80, 643
 『日本基督教史』 32, 49
 日本基督教団 90
 『日本の表現の言語科学』 886
 日本鉄道会社専務 584
 日本農民組合 80, 642
 「日本文明の發展」 97, 118, 160, 189, 190,
 193, 195, 204, 210, 236, 381
 日本郵船監査役 584
 ニューハンプシャー州(グリーンランド)
 734
 ニューヨーク 129
 柔和 220, 228
 柔和恬靜 359, 360
 二律背反(二者択一) 300, 302, 798
 人間(人, 人類) 19, 180, 181, **191**, 201,
 203, 204, 248, **252**, 253, 260, 261, **263**, 264,
 269, 276, 286, **295**, 735, **740**, **749**
 「人間失格」 668
 人間性の徹底的否定 **668**
 『人間トルストイ』 819
 「人間は誇大する動物である」 **795**
 忍耐(忍ぶ, 耐える) 32, 309, 334, 349,
 351, **426**, **575**

ぬ

盗人(盗み) 293, 678, 683

ね

妬み(嫉妬) **145**, **296**, 339, 353, 558, 567,
 570, 689, 756, **807**~**823**
 熱狂的情熱 687, 756, 787
 熱し易い頭 647
 熱心党(ゼロテ) 315
 熱力学エントロピー(状態変化) 560

天 国 11, 58, 59, 133, 181, 214, 217, 219,
223, 227, 228, 229, 239, 240, 245, 246, 249,
273, 281, 287, 290, 362, 403, 625
天 災 296
天 使 168, 177, 179, 181, 183, 195, **204**
天 賜 201
天真爛漫 701, 704
天体氣象観測 891
天 地(天地創造) 297, 317, 318, 319
「天地初発」 443
天地の間 244, **250**
天の父(神) 57, 106, 141, 211, 252, 281,
288, 588
「転落する石」 642
典 礼(聖礼典, サクラメント) 22, 25,
153, 154
電気材料物理研究 883
「電車の眼が見た」 655
伝染病研究所 791
伝 道(家) 8, 263, 338, 427, 593, 624, 664,
887

と

ドイツ 354, 619
ドイツ普及福音教会 50
東京カトリック神学院 92, 95, 202, 207
『東京獨立雑誌』 339, 533
統 計 156, 157
『透谷全集』 887
「透谷の自殺」 888
『闘士サムソン』 594
東方正教会(ギリシア正教会, ロシア正
教会) 25, 35, 89, 90, 95, 119, 120, 133,
153, 202, 257, 369, 740, **753**
東方博士 279, 282
到来すべき思潮 454, 498, 513~524
トウロンの町(トウル, トウレーヌ) 640,
641, 697, 720, 721
「同級生」 214
憧 憬(憧れ) 468, 472, 473, 647, 651, 658,

671, 688

同 情(者) 5, 8, 11, 13, 17, 64, 66, 126, 128,
129, 130, 134, 140, 191, 205, 302, 313, 357,
358, 416, 594, 621, 624, 626, 665, **669**, 704,
748, 753, **766**, 776
童 心(重視) 624, 646, 654, **655**, 702, 708
童心主義的児童観 629
童 貞 704, 771
道 徳(的) 28, 201, 275, 680, 682, 740
動 揺 36, 37, 38, 48, 57, 68, 206, 263, 363,
651
童 話(表現) 644, 662, **678**, **696**, **698**, 708
時 108, 118, 119, 225, 277, 292, **381**, **382**,
394, 407
独占資本 721
「獨断者の會話」 679
毒 麦 250, 259
隣(人) 210, 221, 241, 369
友 118, 129, 133, 405
「ドモ父の死」 699, 760
富山米騒動 80
豊平河 13, 319, 320
鳥(鶏) 220, 228, 262, 336
『トルストイ』河出書房新社 819
トルストイ全集12『戯曲集』 819
「トルストイの右手と左手」 819
奴 隷 354, 400
富んだ者(富める者) 222, 228, 240, 692

な

内向型熱血漢 594, **769**
「内部生活の現象」 98, 116, 142, 163, 193,
214, 227, 234, 239, 240, 248, 249, **253**, 263,
382, **675**, 783
「内部生命論」 887
ナイル川(河) 619, 621, 713
長崎造船所スト 80, 698
泣 く 253, 262, 281, 352
慰 め 365, 399
ナザレ 218, 245, 281, 412, **546**

地上の教会 499
 『地上の楽園』 204
 『痴人の告白』 627
 父(父なる神, 天の父) 40, 57, 69, 69, 106,
 108, 115, 118, 120, 141, 142, 143, 152, 252,
 275, 277, 283, 291, **293**, **405**, 605
 乳(乳ぶさ) 355, 359
 父 母 244, 307
 地中海 354
 智的生活 510, 683, 796
 地の鹽 209, 212, 235, 248
 「地方の青年諸君に」 186, 192
 中央寺 735
 『中央公論』 725, 779, 784
 注射液 791
 中世暗黒時代 498, 504
 躊躇 162, 173
 チュートン人種 510
 超自我(superego) 614, **680**, 681, 682,
 683, 684
 超自然 43, 44, 397
 長子の特権 17, 297
 「長寿時代」 157
 超体験 41, 42, 45, 46, 47
 長 男 6, 17, 33, 191, 202, 205, 260, 589,
 677, 797
 長 老 247, 258
 直接行動 110, 139, 140, 142, 143, **414**
 直感力 657
 塵 243, 294, **296**
 跛 者(跛足) 388, 640, 721
 『沈 黙』 248, 444

つ

杖 317, 320
 仕える 322, 324
 月 736, 737
 創 る(造る) 172, 174, 185, 203, 295, 296
 頭蓋骨 787
 土(粘土, 土塊, 地) 167, 170, 172, 173,

174, 179, 189, 194, 196, 204, **295**, 296, 298,
 353, 361, **474**
 綴 方 644
 唾 242
 「燕と王子」 610, 613, 618, 621, 622, 642,
 651, **666**, 688, 713
 「粒良達二氏宛書簡」 77, 705
 蹟 き 301, 306
 罪(sin. 罪意識) 19, 22, 23, 24, 26, 36, 52,
 64, 83, 84, 98, 103, 110, 111, 113, 114, 122,
 125, 136, 145, 179, 197, 245, 249, 262, 263,
271, 273, 276, **284**, 299, **320**, 322, 341, 665,
 668, 712, **735**, 742, 819
 罪なき肉(キリスト) 305
 罪の女 144, **251**, 289, **292**, 597, 599
 罪 人 251, 264, 275, 284, 299, 341, **465**
 罪人の首 346, 347
 聾者(つんぼ) 119

て

「手」 655
 『帝國大學新聞』 692
 『帝國文學』 781
 底 辺 690, 757
 ティベリア 598
 ディサイブル派教会 65
 敵 226, 245, 250, 259, 307
 出来事 24, 138
 デカダンス 699
 弟 子(の覚悟) 235, 245, 246, 248
 弟子の足を洗う 106, 115, 123, 140
 鉄 **462**
 哲 学 500, 501, 651, 818
 哲 学(書) 66, 67, 89
 デナリ 272, **282**, 326, 401
 “Development of Japanese Civiliza-
 tion” 97, 118, 236, 381
 テムナ(テムナテ) 548, 810
 天 106, 109, 118, 141, 174, 252, 275, 298,
 317, 318, **412**

602, 603, 606, 707
大学派 791
大逆事件 670, 757
大工 218, 219, 245
「大洪水の前」 96, 101, 114, 174, 185, 192,
193, 195, 196, 227, 241, 243, 263, 387, **410**,
478, 687, 707, **811**
第三歩兵聯隊 583, 740
代償行為(作用) 585, 589, 590, 593, 615,
702, 704
代償的(死, 代贖) 334, 474
大千世界 656, 656
代贖思想(旧約の愛) **575**
第二主題(男女愛) **440**, 479, 578, 602, 603,
707
大日本帝國 741
代用 158
第四階級(台頭) 80, 82, 614, 689
大理石 683, 684
ダーウィン主義 505
耐える(→忍耐)
「宝島」 609
「竹崎八十雄牧師宛書簡」 605, 626, 706
ダゴンの神 441, **543**, 810
多産者 197
助け 248
『太宰治と罪の問題』 668
譬話 250, 259
退会(届) 128, 130, 205, 669, 678
脱出 354
「旅する心」 95, 216, 645
「「旅する心」書後」 683, 686
旅人(旅客, stranger) 243, 250, 253,
280, 281, 286, 293
ダーバール(dābār 言葉) 138
ダビデの(牧羊)歌 317, 318, 321, 426
魂 43, 58, 59, 70, 224, 248, 331, 362, 679,
783, 793
「魂は私に告げる」 173, 193, 217, 239
ダマスコ塗上 705

墮落 58, 148, 159, 190, 201, 294, 295,
459, 722
タルシンの船 331
誕生 236
「斷橋」 472, 760, 767, **817**
男根期 681
断罪 302
断食 246
男女愛最強本能 586, 587, 765, 767
男女関係 201, 258, 259, **260**, 354, **410**
男色 6, 7, 703, 756
男性的 412, 414, 417
ダン族ナザレ人 441, 810
男尊女卑 626, 704, 756
断末魔 787, 788, 792

ち

血 69, 120, 153, 169, 179, 184, 258, **260**,
299, 301, 308, **341**, **457**, 773
地 235, 248, 252, 297, 592
智慧 162, 167, 173, 178, 179, 192, 198,
203, 294, 295, 296, 297, 335, 424
「小さい夢」(The Little Dream) 613,
672, 760
「小さき影」 648
「小さき貧しき人」 720
「小さき者へ」 565, 612, 646, 648, 651, 658,
755, **799**
権力(ちから, 力) 229, 244, 250
地学 886, 891
『地学教育』 892
地球物理 891
蓄積体験 565
蓄積リビドー 585, 586, 704, 712, 797, 893
智識 54, 55, 146
地質 800, 891
『地上』 668
智情意 794, 795
地上王国(この世的神政王国, 地上) 129,
315, 324

絶対的権威存在 587, 588, 589, 590, 591, 594
 絶 望 334, 575, 618, 624, 690
 窄き門(狭き門) 243, 281, 288, 289
 セラビム 329, 331
 宣教百年 885
 「宣 言」(初出) 99, 115, 137, 163, 172, 191, 192, 215, 236
 「宣 言」 99, 115, 172, 192, 216, 236, 260, 384, **439**, 587, 590, 766, **809**
 「宣言一つ」 80, 81, **263**, 523, 614, **622**, 649, 658, 676, **689**
 繊 細, 清 純 704, 762, 763, 771
 潜 在(意識) 677, 678, 791, 797
 潜在信仰 74, 78, 79, 86, 590, 593, 594, 655, 773, 785, 786
 戦 士 888
 戦 争 504
 センティメンタリズム(過去) 510
 先天的性質 701
 潜伏期 681
 選 民(思想, 意識) 203, 204, 253, 279, 281
 専門家 789, 794, 796
 洗 礼(受洗, バプテスマ) 11, 65, 81, 154, 328, 737, 738
 禪(道, 宗) 42, 43, 44, 47, 61, 63, 91, 735, 750
 善(人) 299, 303, 740
 善 惡 296, 736, 782
 「善悪二子の裔」 157
 善 行 350, 357, 751
 全 能(大能の御手) 198, 294, 296, 297, 335, 366, 367

そ

相 愛 275, 277
 躁鬱病質(気質) 768, 769
 層構造説 680, 681
 相互内在 153, 258

創 作(活動) 691
 装 飾 158, 462
 創 造(者) 99, 99, 115, 137, 184, 185, **191**, **194**, 201, 202, **295**, 298, 335, 384, **574**, 644, 749
 『創造的進化』 587, 893
 相統権 55, 205
 相対論(相対界) 669
 相場師 776
 像(神の像) 201, 668
 「続西方の人」 443
 即實主義(者) 120, 140, 142, 143, 148, **378**, **385**, **414**
 「即實の生活」 110, 111, 116, 117, 143, 148, 261, **263**, 375, 377, 416
 「即實の生活と宗教」 110, 114, 415
 族 長(族の首長) 202, 203
 粟粒結核 776, 778, 786
 組織神学 90, 884
 「楚囚之詩」 919
 ソドムとゴモラ 162, **194**, 294, **296**
 供 物 358, 474, 592
 ソレクの谷 543
 ソロモンの榮華 220, **249**, 279, 282, 288, 290
 存 在 138

た

大正期童話童心主義 78, 611, 708
 「大正期の童話」 **643**, 645
 大正児童文学 632, 642, 708
 大正十年代 480, 642, **643**, 651, 889
 大正人 757
 大正デモクラシー 757
 逮 捕 246
 太 母 677
 太陽神話(類型) 544, 615, 614, 624, 625, 644, 696, 697, **712**, 893
 対 話 335
 第一主題(神と人との愛) **440**, 478, 575,

清教徒(→ピューリタン)
『正教の信条』 264, 265
世紀末イギリス文学 627
正弦波曲線 671, 675
聖公会(監督教会, 英国教会) 29, 35, 89,
90, 257, 483, 728, 739, 886
「星座」 15, 228, 238, 260, 406, 540, 610,
673, 676, **691**, 798, **816**
「聖餐」 9, 24, 24, 77, 101~109, 114, 115,
116, 117~118, 128, 130, 134, 141, 140, 144,
174, 218, 234, 237, 238, 239, 240, 241, 242,
244, 245, 248, 249, 375~377, 387~410,
410, 596, 605, 707, **771**, **813**
聖餐 153, 154, 154, 260, 739
「『聖餐』に就いて」 109, 114, 185, 193,
195, 411, **442**, **600**, 707
政治(運動, 的) 151, 397
製絲工女 665
青春 691, 702, 703, 704
聖書 7, 11, 13, 14, 18, 21, 47, 95, 204,
369, 703, 707
聖書学 459, 471, 475, 532, 592
「聖書正典の研究」 885
「『聖書』の權威」 95, 171, 192, 194
『聖書之研究』 55, 95, 142, 157, 206, **339**,
340, 360, 364, **413**, 534, **606**
『聖書の女性』 538, 560
「『静思』を讀んで倉田氏に」 110, 115,
116, 117, 139, 143, 150, 228, 235, 238, 239,
240, 241, 242, 249, 374, 377, **414**
「『静思』を讀んで倉田氏に」(草稿) 110,
115, 116, 229, 235, 239, 240, 241, 242, 374,
377, **412**, **413**
精神 136, 138, 151, 152, 241, 251, 334,
362, 390, 612, 651
精神的盲目 100, 269, 271, 276, 387, 390
精神病院(癲癲病院) 7, 26, 30, 135, 147,
286, 344, 701, 727, 728, 733, 741
精神分析学 676
性的動因 676

製度(化) 25, 151, 152, 416
正統信仰(正統的神学) 35, 36, 39, 47, 49,
68
青銅 462
『青年文壇』 781
生の苦痛 796, 797, 800
『聖フランシスコ』 884
「『聖フランシスコの完全の鏡』序」 95
聖母(聖處女, 乙女マリア) 282
「西方古傳」 613, 669, 672, 759
西方淨土 624
「西方の人」 443
聖マルティン 614, 641, 641
「生命によって書かれた文章」 658
性欲 7, 30, 124, 263, 355, 422, 677, **704**,
769, 819
「聖ヨハネ」 670
税吏 140, 209, 210, 211, 242, 276, 442
精力家 704, 769
聖靈 14, 40, 45, 47, 79, 86, 118, 153, 216,
236, 300, 304, 305, **322**, 343, 385, **399**, 737,
740
聖靈降臨(ペンテコステ) 81, 343
「世界教会運動」 884
『世界史概観』 501
『世界少年文学叢書』 622
『世界少女文学叢書』 222
『世界歴史事典』 512
赤道収束帯 204
「石炭のかげら」 655
世間体 764, 773, 786
説教 8, 10, 11, 29, 36, 40, 50, 51, 52, 53,
61, 62, 64, **66**, **67**, 68, 141, 154, 245, 290,
358, 647
セツ族 455, 456, 475
接吻(口づけ, キス) 292, 348, 355, 586,
701, 704
攝理 77, 163, 172, 248, 294, 296, 335, 386,
454, 615, 745
絶対主權 473, 486

人種差別 753
 『新聖書大辞典』 22, 152, 355, 369, 389,
 404, 597, 599
 新生物語 785, 786, 799, 803
 人 性 119, 257
 「人 生」 655
 人生戦争 657
 「人生相渉論」 29
 「人生に相渉るとは何の謂ぞ」 888
 「人生の歸趣」 97, 117, 150, 380, 663, **664**
 深層構造 481
 深層心理学 610, 674~684
 身 體(体) 191, 201, 202, 300
 『新 潮』 385, 674, 782, 789
 神 殿(→宮殿)
 神 道 38, 61, 753
 新富座 688
 人道主義(者, 精神) 450, 648, 657, 660,
 664, **668**, 671, 673, **688**
 人道主義的理想家 516, 520, 622
 審 判 284, 296, 352
 神秘思想 61
 神秘主義 45, 46
 神秘的(性) 41, 42, 44, 45, 47, 147, 153,
 153, 258
 『新・文学概論』 887
 新プラトン学派 52
 新約聖書 21, 24, 26, 54, 55, 56, 85, 95, 119,
 122, 369, 736
 『新約聖書神学』 884
 『新約全書』 419~428
 新約的革新的 513
 真 理 46, 53, 54, 56, 60, 98, 100, 110, 117,
 133, 138, **150**, 151, 209, 253, 270, 380, 382,
 386, 404, **414**
 心 理(描写, 演技) 155, 278, 445, 644,
 692
 人 類 295, 296, 305, **456**, 593, 625, 673,
 773
 人類救拯論 **303**

人 類(学)史 158, 444, 454, **456**, 470, **481**,
 524, 593
 心靈的(告白) 286
 新郎新婦 382
 神 話(的, 類型) 204, 481, 613, 677, 678,
 678, **679**, 695

す

スイス 354, 701
 「吹田順助氏宛書簡」 **520**, **601**, 755, 790
 永平社 80
 スエズ(運河) 354
 「末光 續宛書簡」 111, 210, 237, 239
 渝越節(すぎこしいはひ) 106, 225, 246
 救 い 248, 253, 272, 300, 302, 305, 322,
 380, 599, 796
 救 主 223
 捨てられ(見捨てられ) 284, 285, 289, 293,
 322, 328
 棄てられた者 84, 85, 86
 捨てる **342**
 ストア哲学(Stoic school) 53, 56, 67
 ストライキ 690, 698
 『ストリンデルベルクとフェン・ゴッホ』 626
 砂 217
 素直(な心) 245
 スバルタ(風, 教育) 589, 756
 諏訪彫刻師 688

せ

生, 生命, Life (→命)
 聖 化 300
 生 活(改造) 676, 689, 692
 「生活と文學」 184, 189, 191, 508, 510, 658,
 687
 生活童話 611, 622, 638, 639, 644, 661, 893
 性器期 681
 正 義(感) 221, 222, 669, **819**
 「正義派」 611, 634, 756
 『聖 經』 418

十二支族父祖(ヤコブ) 574
十二人(使徒) 242, 243, 261, 315, 369,
389, 403, 404
十八世紀以前の思潮 454, 497, 498, 499~
504
自由平等 513, 523
自由奔放 764
儒教 6, 30, 32, 33, 38, 61
十戒 353, 574
受難 76, 403, 407, 408
殉教(者) 251, 572, 690
純粹持続 893
肖 201
裳(もすそ) 219
昇華 613, 682, 683, 684, 698
少女(愛, 趣味) 305, 610, 656, 700, 730
『少女の友』 619
少女偏愛 586, 614, 700~704
象徴(説) 24, 147, 382, 385, 400, 402,
456, 470, 481, 641, 667, 690, 708, 712, 789
衝動 680, 682, 692, 702
「小児の癡顔」 612, 656, 657, 658
小児問題 678
商人 110, 111, 116, 120, 140, 142, 143,
148, 153, 230, 241, 249, 378, 412
『少年俱樂部』 620
『少年の友』 619
『少年文庫』 619
娼婦 211, 381, 442
小黙示録 322, 325
勝利(→勝った)
昭和思想史起点 689
贖罪論 5, 8, 9, 10, 11, 23, 24, 37, 50, 58, 60,
61, 69, 76, 78, 472, 742, 744, 745, 749
食事(食堂, 食物) 246, 290
処女作 759
「處女の純潔を論ず」 888, 889
定山溪 11, 14, 15, 39, 74, 79, 135, 307, 318,
334, 668, 705, 708, 735, 736, 743
浄土真宗 253, 334, 750

情熱 152
情熱的 766, 771
『白樺』 383, 437, 669, 688, 759
『『白樺』派の作家と作品』 7, 700, 892
『『白樺』派の文学』 64, 75, 444, 478, 647,
725, 757
しるし(サイン) 24, 119
試練 252, 333, 334
シロアムの池 274
「白官舎」 676, 688, 689
「死を」 655, 656
「死」を畏れぬ男 610
『新英米文学評伝叢書ミルトン』(「闘士サ
ムソン」) 538, 559, 594
「神学概論」 884
『神学大全』 500
神学的基盤 68, 154, 206
新感覺派 480, 889
「神曲」 820
神義論 37, 42
神經質(衰弱) 702, 761, 888
「神經病時代」 642
信仰(者, 体験, 告白, 信ず) 7, 8, 11,
12, 15, 24, 25, 28, 31, 35, 37, 38, 49, 78, 86,
99, 104, 108, 117, 146, 151, 185, 210, 224,
239, 248, 249, 252, 279, 280, 285, 292, 299,
301, 308, 334, 349, 351, 357, 408, 427, 454,
465, 610, 624, 655, 667, 705, 706, 708, 735,
750, 764, 773, 765
新興宗教 250
信仰の父アブラハムの歴史 201, 202, 258,
259, 260
「人格論の三分説」(イド, 自我, 超自我)
614, 680, 681
『新少年』 622
心中(肯定論) 517, 702, 814
心身 300
『新人』 41, 49, 51, 54, 62, 69
神性 119, 257
「新生」 725

死の杯 216, 225
 忍ぶ(→忍耐)
 支配階級 148
 四福音書 93, 94, 96, 247, 254, 605, 707
 至福千年王国 523
 「詩への逸脱」 612, 647, 654, 656
 資本主義(階級, 経済, 家, 社会) 137,
 413, 642, 643, 676, 698, 721, 743
 自分 251, 259, 262, 677
 自分(自己)中心(利己的, エゴイズム)
 248, 252, 295, 466, 475, 592, 594, 613, 633,
 671, 678, 687, 703, 712, 730, 745, **807~823**
 『姉妹』 619
 島律家の陪臣 33, 756
 使命 305
 下総妙見神社 689
 シモンの家 144, 225
 社会(革命, 制度) 378, 690, 691, 698
 社会学(的背景) 475
 社会主義(者, 学者, 運動) 5, 80, 81, 120,
 136, 138, 139, 142, 143, 148, 155, 249, 263,
 282, 327, 698, 733, 743
 『社会主義共和国』 138
 社会主義研究会 523, 613, 663, 664, 670,
 763
 社会主義思想 523, 621, 690, 757
 社会主義同盟 687
 社会主義文学 521
 社会的責任感 30, 32, 34
 社会風刺(童話) 641, 690, 691
 「写實主義」 512
 シャフハウゼン 701
 シヤロン(の野薔薇) 355, 356
 主 106, 108, 118, 139, 141, 142, 152, 210,
 214, 216, 217, 221, 222, 223, 224, 236, 237,
 239, 241, 244, **245, 252, 253**, 273, 277, 280,
 282, **291**, 337
 「終焉日記」 149, 277, 321, 340
 『宗教』 883
 宗教(哲学) 352, 416, 475, 884

宗教改革 500, 503, 753
 宗教社会的環境 540, 570, 571
 宗教的有頂天(エクスタシー, 恍惚) 11,
 13, 14, 668, 705, 737, 739, 743
 『宗教論』 884
 私有財産 80, 692, **821**
 『秀才文壇』 675
 修士論文 381, 885
 「私有農場から共生農園へ」 523, 692
 終末(論, 終りの日, 末日, 未来観) 118,
 270, 277, 352, **743, 749, 751**, 885
 終末論的祈り 83
 終末論的完成者 **520**
 『終末論の考察』 481
 終末論的再臨信仰 20, 351, 425, 426, 427,
 749, 751
 「酒狂」 676, 699
 祝福 246, 285, 362, 613, 713
 宿命(的, 論, 説) 440, 442, 483, 509,
 511, 594
 手術 802
 主の祈り 238, **248, 252**, 263
 須彌山 656
 棕櫚(しゆろ) 106, 119, 393
 自由 8, 9, 9, 52, 67, 71, 201, 383, 384,
 587, 642, 677, 683, 756, **762**
 自由意志 8, 9, 52, 67, 71, 201, 472, 483,
 728, **745, 748**
 自由詩 644
 十九世紀 794
 十字架 11, 15, 23, 24, 35, 36, 37, 50, 58, 60,
 69, 75, 76, 97, 118, 127, 144, 149, 210, 247,
 248, 258, 263, 270, 277, 288, **291**, 304, 312,
 314, **320, 398, 408**, 409, **381**, 382, 597, **745**
 十字軍 500
 自由主義神学 32, 39, 41, **49**, 65, 68, 68, 69,
 83, 888
 柔順(従順) 290, 299
 従属主義 40
 十二歳 423

死(死者) 11, 22, 36, 66, 98, 100, 104, 106,
116, 117, 118, 126, 127, 149, 204, 224, 236,
237, 241, 246, **248**, 268, 271, 277, 281, 288,
290, 299, **300**, 310, 342, **395**, 397, 571, 573,
626, 656, **682**, 702, 713, 735, 736, 751, **793**
詩 歌 647, 653, 654, 655, 658, 688
虐(しいた)げる 245
自慰行為(自瀆) 7, 703
寺院建築 729, 734
鹽(地の塩, 世の塩) 280, 284, 307, 310
「潮 霧」(ガス) **438**, 441, 570, 590, 687
鹽の柱 162, 296
シオン 290, 362
『死海のほとり』 539
シカゴ 754
死 刑 417
『時間と自由意志』("Time & Free Will")
587, 893
自 我(主義, ego) 311, 443, 614, **676**,
680, 683, 684
示現流 33, 589, 756
自 己 363, 651, 655, 667, 675, **676**, 677,
678, **704**, 764, 783, **797**
地 獄(篇) 11, 296, 299, 300, 302, 304,
316, 727, 776
自己肯定 667, 668
「自(我)己の考察」 99, 114, 118, 134, 216,
244, 384
自己否定 **668**
「自己を描出したに外ならない「カインの
末裔」」 99, 114, 173, 196, 385, **568**, 594,
766
資 質 797, 798, **818**, 889
私小説 646, 650, 755
詩人(的資質, 的直感) 626, **654**
詩人肌の女性(Poetic woman) 326, 327
四十日 309, 310
「静かなる羅列」 480, 802, 889
「死線を越えて」 443
自 然(Nature) 43, 46, **204**, 318, 319,

653, 737, 739
自然科学(主義, 観) 505, 509, **795**, 793,
795, 798
自然現象 333, 335, 480
自然主義の思潮 454, 498, 512
自然主義文学 480, 889
自然神学 5
自然的生の破局 481
自然認識への楽天的信頼 505
自然法 67
思想(的, 家) 123, 137, 152, 676, 689, 692,
743, 757, 819
思想的神学的 278, 803
自 殺 8, 66, 67, 68, 80, 82, 86, 205, 275,
323, 364, **472**, 485, 676, 702, **735**, 757
事實及び法則 509
舌 355
七里ヶ濱 360
叱 咤(叱責) 348, 365
嫉 妬(→妬み)
史的イエス 95
使 徒(弟子) 133, 140, 151, 154, 210, 269,
272, 276, 277
使徒信条 35
「死と其の前後」 99, 117, 124, 152, 172,
215, 216, 238, 244, 383, 441, **442**, 674, 760,
762, **763**, 792, **811**
死と対決(の恐怖, 圧力) 438, 442, 613,
678, 687, 712
使徒伝承 154
『實業少年』 619
「實驗室」 610, 775~803, 803
「實驗室」(初出作) 773~774, 803, 893
実 行(践) 251, 757, **819**, 822
実証主義 505
実 存 49
児童観 646~658
支 那 752
シナイ山(シナイの荒野, 半島) 353, 354
死にし者(死者) 223, **248**

御用学説 776
 懲らしめ 575
 御利益 252
 殺す 99, 102, 105, 109, 117, 127, 149, 165,
 169, 173, 174, 176, 183, **195**, 196, 202, 244,
 291, 294, **296**, 383, 422

衣(→服)

婚 宴 352

コンコード 729

コンプレックス(劣等感) 613, 677, 678,
 681, 687, **694**, 698, 757

さ

最高法院 246

「最後の歌」 655, 656

最後の教訓(新しい掟) 147

最後の審判 325, 352

最後の晩餐 127, 153, 278, 312, **315**, 604

祭司(大祭司) 224, 357, 358

祭司長 105, 107

最重要な掟(神を愛す, 隣人愛) 241, 307,
 309

幸福(幸いなり) 230, 233, 263, 357

再臨(再来) 110, 117, 151, 292, 324, 325
 365, 403, 416

在宮回想録 35, 533, 741

財 産 334

榮 146, 147, 149, 268, 269, 272, 274, 276

杯 218, 236, **248**, 386, **382**

搾 取 611, 643, 644, 676, 690, 712, 721

酒 97, 139, 142, 143, 153, 224, 246, 380

砂 上 208, 210, 212, 237, 248, 252, 280,
 285, 289, 292

流離人(子) 167, 173, **196**

撮影文 480

作家(文学者, 小説家) 252, 258, 259, 260

薩長政府 584, 756

殺伐的牧畜業 158

札幌獨立教會 11, 29, 36, 39, 62, 74, 205,
 260, 303, 336, 738, 740

「札幌獨立教會」 95, 97, 115, 142, 157, 159,
 189, 209, 235, 235, 236, 238, 240, 242, 248,
 263, 380, 533

「札幌獨立基督教會沿革」 10, 25, 29, 81,
 210, 211, 212, 234, 235, 238, 239, 241, 252,
 739

札幌農学校 6, 7, 10, 12, 20, 34, 39, 45, 364,
589, 688, 691, 735, 739

「札幌農学校校歌」 655

札幌バンド 6, 25, 29, 30, 96, 153

薩摩藩(島津氏) 33, 205, 584, 589, 626,
 638, 704, 756

サディスティク 406, 610, 692, 699, 777,
 787

サドカイ人 148

裁き(裁判) 222, 243, 246, 253, 273

鏽落し勞務者 761, 809

差別(不公平) 16, 17, 18, 26, 149, 202

サマリヤの女(人) 98, 100, 111, 117, **147**,
 269, 276, 289, 293, 310, 382, 385, 417

「サムソンとデリラ」 15, 96, 100, 115, 116,
 145, 173, 218, 387, **410**, 594

「サムソンとデリラ」(未定稿) 99, 115,
 116, 136, 163, 215, 383, **810**

「サロメ」 627

懺 悔 821

“懺悔録” **331**

三十八年 387, 388

山上の垂訓 89, **233**, **247**, **251**, 263, 274, 279,
 281, 283

「三四郎」 443

三 人(博士) 240, 244, 251

讚美歌 10, 29, 622

『三部曲』 77, 96, 128, 136, 260, 410, **437**,
 520, 606, 610, **707**, 760

「散文芸術論争」 689

三位一体(三一の神) 35, 40, 46, 57, 69,
 305, 411, 605

し

「荇石を呑んだ八つちやん」 611, 632, 676,
687, 712
膏 282, 313, 326, 327
行為(おこない) 239, 251, 263, 281, 287,
334, **335**, 348, **349**
行為義認 28, 34, 37, 76, **349**
「校歌」 655
後悔 **440**, 450, 457, 571, **573**, 789
航海(船中) 269, 276, 314, 765
紅海 354
「交響曲第六番」 673
考古学 470
『興國史談』 339, 501
恍惚(→宗教的宇頂天)
口唇期 681
麴町 63
洪水 203, 204
「洪水以前記」 157, 534
「洪水の前」 99, 113, 164, 169, 195, 215,
241, 243, 383, 565
甦生 773, 784
降誕 218
後天的性向 701, **703**
強盗 312, 316
「幸福な王子」 618, 627, **666**, 713
「幸福の散布」 480, 889
肛門期 681
神戸 765
傲慢(高慢) 12, 67, 300, 337, 575, 667
荒野(で誘惑) 228, 234, **247**, **251**, 280, 283
香油(ベタニヤでの香油注ぎ香膏) 99, 100,
107, 116, **144**, **233**, 247, 251, 268, 272, 279,
282, 312, 322, 326
合理的科学精神 506, 512
聲 335, 351
故郷 118, 303
護教文学 522
『国語と国文学』 768
国際性 660
黒人問題 753

国賊 345
「獄中記」 667
「国文学」 13, 708, 738
獄吏 344
心(こころ) 360, 362, 363, 383, **387**, **417**,
676, **679**, 690, **787**
「こころ」 587
心の弱(まず 貧)しき者 215, 216, 217,
219, 280, 286
試練(こころみ) 222, 223, 248
「小作人への告別」 692
「五重塔」 689
乞食ラザロ 80
ゴシック芸術 670
ゴシック文明 510
個人主義(個人革命) 657, 690
個性 311, **606**, 622, 657, **670**, **675**, 690,
764, 767, 783
〈こそあど〉 886
「小憎の神様」 611, 635, 756
古代教会 203
『古代史』 501
誇大妄想狂 702
国家權力(国家) 757, 776
骨肉 300, 304
古典 247
琴と笛 158, 164, 169, 176, 177, **460**
言(ことば)(dābār) 24, 46, 83, 109, 109,
136, **138**, 146, 252, 261, 269, 273, 276, **320**,
325, 359, 374, 411, 594, 814
固着 682
国家主義(思想) 33, 611, 642, 643
『古典一周』 887
孤独 363, 407, 700
子供(祝福された幼な子, 幼な子) 220,
222, 223, 245, 246, 286, 306, 309, 702, 708
「子供の世界」 612, 618, 652
「子供の素朴さ」 652
『子供之友』 622
小羔(こひつじ) 225, 351, 352

796

口(から出る) 261
 苦難の僕(第二イザヤ) **575**
 苦悩(苦しみ) 363, 364, 406, 407, 575
 首(減, くびき) 215, 226, 244, 245
 熊本バンド 50
 組合教会 68, 69
 クムラン(宗団) 313
 「くもの糸」 633
 クランシズム 508, 509, 510, 670
 「クララの出家」 77, 216, 260, 442, 478,
 610, 660, 707, 793, **894**
 「繰り返しの生活を憎む」 657, 690
 久留米藩 33
 クレタ(カフトリ) 470
 クレッチメル体質類型学 768
 「クロイツエル・ソナタ」 820, 822
 「クロウエル夫妻宛書簡」 111
 黒百合会 645

け

啓示 46, 86, 385
 刑罰 306
 契約 17, 574, 575
 芸術家 258, 259, 460, 610, **674**, 676, 688,
 689, 691, 698, **761**
 「藝術家の生活に就いて」 691
 「藝術教育私見」 612, 652
 「芸術作品と精神分裂病との関連の哲学的
 考察」 626
 「藝術製作の解放」 **674**
 「藝術と革命の関係」 657, 690
 「「藝術と生活」書後」 630, 674
 「芸術と精神分析(論)」 614, **685**, **682**
 「藝術について思ふこと」 658
 芸術(の対象, 創造) 260, 263, 264, 471,
 476, 510, **654**, 675, **682**, 743, 795, 797
 「藝術論」 173, 193, 217, 236, 237, 239, 241,
 248, 252
 「藝術を生む胎」 652, 658, **674**, 783, **794**

「藝術を培ふ科学精神」 795
 「外科室」 **802**
 解脱 77, 706
 結核(肺患) 571, 587, 648, 674, 732, 762,
 776, 790, 791, 792, 817
 結婚 363, **762**
 「結婚前後の有島武郎」 892
 血漏 220
 結論 250, 251, 259
 ゲツセマネ(の園) 109, 116, 145, 213, 218,
 226, **236**, **248**, **252**, 261, 263, 306, **308**, **310**,
 409, 602, 604
 ケデロン(河, 谷) 145, 409, 604
 「ゲーテ」 137
 ケルビム 331
 剣 224, 246, **463**, 532
 顕栄 202
 顕身 159, 201
 権利義務 474
 権力 229, 324, 413, 415
 「弦楽セレナーデ」 673
 元型 677, 678
 原罪 204, 488, 744, 749
 原始教会 343
 原始キリスト教 25
 原子力発電 883
 現実原則 680, 682, 683
 現実(重視, 主義) 417, 505, 612, 651
 現世 750, 751
 「幻想」 613, **672**
 敵父(父, 武) 6, 34, 310, 587, 588, 590, 618,
 677, 683, 756
 『原理論』 58, 60, 69, 71
 「原歴史」 **481**
 言論の自由 757

こ

子(獨り子, 人の子) 40, 114, 119, 210, 220,
 228, 235, 249, 277, 289, 292, 380
 恋(→戀愛)

休 徴 119
宮殿(神殿) 110, 116, 127, 132, 140, 143,
223, 230, 241, 249, 282, 290, 362, 397, **412**,
572, 594
求道者 736, 738
旧約聖書 7, 54, 55, 56, 95, 204
『旧約聖書緒論』 885
「曉 闇」 725
「驚 異」 186, 192, 612, **653**
「教育ペパ」 698
杏雲堂病院 762, 790
教会一致運動(合同, the Ecumenical
Movement) 154, 740
『教会一致回復』 885
『教会教義学』 83, 84, 884
教会(生活) 154, 204, 259, 260, 290
教会創設時代 365
教会脱会 74, 76, 79, 253
教会(批判) 247, 249, 253, 258, **323**, 412,
605, 706, 722
共観福音書 26, 93, 94, 123, 133, 134, 151,
155, **254**, 369, 597, 708
教 義 25
教義問答 7
教皇権の発達(法王権の擴張) 500, 502
恐黄病 753
共產主義(党员) 669
教師(道) 239, 249, 280, 286, 816, 889
兄 弟 243, 244, 286, 341, 342, 422
『兄 弟』 619
「恐怖の面紗」 655
凶 暴 765, 766
教 理 49, 50, 57, 819
教理学特殊講義 885
強烈自意識 637
漁 夫 140, 209, 210, 211, 242, 276, 442
虚 無 612, 618, 656, 676, 699
義より愛への推移 **521**, 605
ギリシア(人, 語, 風) 117, 149, 508, 509,
510, 670, 679, 884

ギリシア古典芸術 670
「ギリシア史」 501
ギリシア哲学 500
基督(キリスト, 論) 15, 23, 24, 35, 37, 38,
43, 49, 69, 75, 76, 77, 82, 83, 98, 100, 110,
111, 116, 117, 120, 127, 129, 133, 135, 147,
148, 213, 218, 228, 230, 239, 241, 242, 242,
249, 258, **286**, 293, 299, 326, 412, 413, 605,
706, 773, 785, 885
基督教國民の真面 743, 751~754
『キリスト教大事典』 500, 504, 668
キリスト教的社会主義社会 498, 523
キリスト教反発作品 439, 669
キリスト教文学 521
『基督信徒の慰め』 55, **339**, 739
キリスト者(基督教徒, 信徒) 248, 249,
253, **263**, **287**, **284**, 303, 305, **332**, 426, 615,
651, 669, 734, 736, 740, **753**
『キリストと時』 885
『キリストの再臨』 886
記録映画 480, 889
近親殺戮 530
『近代日本とキリスト教』 32, 39, 49, 744
禁斷の木の實 162, 173, 190, 201, 203, **295**,
529, 766
金曜日 316
北穂高岳 886

く

悔改め(悔悛) 213, 228, 238, 288, 293, 299,
301, 302, 335, 415
「空気入れ」 709
『空想から科学のへ社会主義の発展』 138
空想的假定排斥 508, 509, 512
クエーカーイズム(→フレンド派)
“Quo Vadis” 8, 55
偶像崇拜(禁止) 361, 594
軍隊生活 7, 363, 819
「草いきれ」 160, 194
「草の葉」 214, 242, 260, 670, 783, 790, **793**,

398, 655
 神(の)子 213, 218, 223, 246
 神の恵みの選び 83, 84, 85, 86, 316
 カヤファの家 598, 604
 「唐澤秀子宛書簡」 235
 芥子粒(種) 210, 211, 239, 249, 280, 285,
 289, 292, 306, 307, 308, 311, 739
 燕 麦 731
 「カラマーゾフの兄弟」 209
 カリスマ 542
 ガリラヤ(湖) 412, 597, 598
 カルケドン信条 35
 ガルタン 479
 カルヴァリの丘 381
 カルヴィニズム 6, 7, 17, 30, 32, 80
 カルメル山 357
 川崎造船スト 80, 690
 革 袋 224
 姦淫(姦通, 密通) 24, 30, 36, 51, 66, 149,
 216, 222, 244, **247**, 273, 417, 450, 458, 669,
 748, 761, 763, **807~823**
 姦淫の女(此婦) 89, 99, 101, 102, 113, 120,
 122, 123, **124**, 128, 145, 148, 216, 218, 234,
 268, 269, 272, 273, 275, 277, 278, 377, 381,
 596, 814
 「考える人」 670
 「かかん蟲」 522, 635, **669**, 759, **761**, 809
 環境重視 508, 512
 感 激 38, 41, 42, 45, 116, 125, 146, 245,
 274, 302, 304, 341, 392, 722, 737
 看護婦 777, 787, 802
 看護夫(人) 286, 701, 728, 733, 741
 感 情 8, 37, 38, 41, **395**, 737, 744
 寛恕問答 213, 217, 241, 249, 261, 262
 感 謝 300, 303, 305
 感傷性(的) 665, 667, **671**, 673, 702, 704,
 756, 771
 勸善懲惡 247, 642, 644
 完全徹底主義 5, 20, 37, 76, 323
 岩石鉱物学 891

岩石プレバラー ト 890
 「觀想録」(日記) 7, 13, 23, 37, 52, 76, 113,
 114~116, 115, 116~117, 117~118, 124,
 136, 143, 146, 189, 233, 235, 237, **239**, **240**,
 818, 893
 監督教会(エピスコパルチャーチ→聖公会)
 冠 12, 337, 338
 官立大学教授 797, 800
 乾酪性肺炎 777, 786

き

饑餓文学 686, 776
 棄教(者) 75, 78, 683, 704, 725, 757
 聞く(聞かず) 146, 148, 252
 騎士的気質 502
 「鬼心非鬼心」 888
 儀 式 25, 30, 120, 153, 739
 義(人) 208, 218, 244, 251, 263, 264, 287,
 299, 301, **302**, 333, 336
 「婦 省」 443
 奇蹟(跡) 100, 115, 140, 142, 143, 151, 380,
 382, 385, 388, 438, 720, 722, 792
 「奇蹟の詛い」 613, 672, 722, 760
 犠牲(者) 31, 68, 197, 206, 270, 352, 358,
474, 475, 592, 620, 678, 757, 786, 794, **799**
 偽善(者) 10, 11, 25, 28, 29, 31, 40, 219,
 224, 245, 263, 292, 669
 北里派 791
 祈禱(→祈り)
 歸納法 509
 希 望 334, 357
 ギボールハイール 459
 偽 齒 784
 機密(ミサ, 秘蹟) 119, 153, 154, 257, 260
 逆方面(反対) 797, 798
 逆補償 614, 637, **693~694**
 『求安録』 8, 55, **339**, 533, 736, **749**
 究極的不和 481
 救済精神(新約精神) 593
 九十九匹の羊 208, 235, 252

海難描写 687
懐妊 173, 198, 573
解放神学 155, 143, 253
解剖 776, 777, 781, 786, 790, 802
快樂原則 680, 682, 683
カイン族レメクの家族 196
カインの族 449, 454, 455, **464**, 475, **532**,
811
「カインの末裔」 15, 82, 443, 478, 540, 610,
660, 667, 766, 811
カインの末裔意識 565
科学(者, 研究, 學術) 776, 777, 778, 784,
787, 788, 793, 794
『科学画報』 795
科學的研究法 509
限り無き命(永達の命) 221
革新的 414, 415, 651
「各人心宮内の秘宮」 888
覚醒者 612, 650
革命(家) **465**, 508, 691, 732
学問 797
学者 76, 239, 240, 247, 251, 258, 263, 281,
287, 392
学習院 6, 284, 703, 704, 756
「駈込み訴へ」 315, 444
影(体験) 78, 158, 462
影(の発散) 613, 614, 677, 678, **679**
「過去」 772
ガザ 542, 543
賢い人 252
「火事とポチ」 611, 639, 676, **695**, 698, 712,
713
下層港湾労働者(錯落し労働者) 669, 761
仮想自己 774, 788, **797**
家族 304
加速度 647, 803
「傾く時代の生める悲劇」 230
隻眼(かため) 777, 782, **789**, 800
片輪者 640, 789, 795
「片輪者」 611, 640, 643, **676**, **690**, 698, 712,

713, **719**～**722**, 760
家畜(牧畜) 459, 464
喀血 777, 778, 787, 792
勝った(勝利) 77, 98, 100, 109, 116, 123,
127, **144**, 246, 303, 351, 352, 381, 382, 408,
409, 426, **440**, 602, **605**, 707, **777**, 802, 885
「嘗てない多作をした年」 777
葛藤文学 805, 818, 823
割禮 425
カトリック(西方公会, ローマ・カトリ
ック教会) 25, 35, 67, 89, 90, 92, 119,
133, 137, 153, 251, 258, **260**, 262, 369, **500**,
720, 740
「首途」 438, 439, 472, 481～489, 669, 725,
727, **728**
「首途」(初出) 171, 194, 215, 812
哀(悲)しむ(者) 219, 220, 230, 243, 285,
300, 304, 400
カナの婚宴(筵) 97, 98, 100, 115, 120, 123,
142, 143, 269, 276, 380, 382, 385
カナン(定住, 約束の地) 357, 541, 575
金持ち(富める青年) 128, 136, 147, 240,
249, 253, 273, 288, 307, 310
可能(性) 292, 759, 760
家父長家族制度 205, 589
鎌倉 817
「鎌倉幕府初代の農政」 797
神 8, 10, 11, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 20, 23,
27, 28, 31, 35, 36, 37, 38, 46, 47, 55, 67, 69,
78, 83, 86, 98, 99, 100, 101, 105, 108, 109,
110, 114, 115, 116, 119, 137, 138, 152, 184,
189, 191, 201, 202, 210, 218, 224, **239**, **241**,
248, 249, 250, **252**, **253**, 260, **263**, 277, 279,
282, 283, **284**, **295**, **303**, **322**, **328**, 368, 369,
735, 773, 819, 823
髪 99, 100, 145, 292, 383, 572
神がかり的表現 41, 42, 45, 47
神との破れ **331**
神と等しき身體 294, **295**
神の国 106, 149, 213, 238, 280, 285, 291,

エビグラム 565
 エホバ 99, 165, 166, 168, 174, 176, 179, 183,
 197, 199, 215, 218, 223, 317, 329, 331, 332,
 333, 336, 471, 472, 473, 474, 475, **485**, 495,
 496, 499, 500, 511, 517, 518, 540, 548, 549,
550, 551, 553, 570, 575, **576**, 577, 588, 590,
 591, 592, 594, 601, 602, 604, 605
 エリムのなつめやしの林 354
 エルゴイニース蠻族 696
 エルサレム 106, 119 210, 225, 226, 242,
 244, 278, 310, 324, 325, **397**, **412**, **603**, 604
 エロス(人間愛) 77, 683
 『エロスの文明』 685
 厭世 66
 『厭世詩家と女性』 886
 遠友夜学校 30, 74, 82, 320, 349, 426, 618,
 622, 663, 688, 690
 「遠友夜学校校歌」 655, 663

お

王国滅亡 575
 欧米文学 818
 「大なる健全性へ」 173, 190, 674
 大蔵省国債局長 33, 584
 大津海岸(横須賀) 635
 大原社会問題研究所 642
 岡の上的市 216
 臆病 75, 611, 614, 637, **676**, 679, 687, 703,
756, 815
 行爲(行う) 109, 115, 137, 138, 142, **252**,
385, 411, 748, 814
 幼な子(→子供)
 「惜しみなく愛は奪ふ」 13, 75, 76, 79, 81,
 82, 95, 109, 115, 134, 137, 138, 185, 192,
 193, 227, 234, 239, 241, **249**, 261, **263**, 374,
 377, 411, **385**, 468, 587, 609, **622**, 651, 660,
 675, 707, 743, 767, 783, 784, 789, **794**, 796,
 808, **814**, 893, 894
 「お末の死」 15, 81, 406, 540, 610, 613, 658,
 664, 669, **671**, 673, 688

「オセロ」 457, 530
 恐れる(懼る) 288, 291
 夫 417, 441
 男 **821**, **822**
 「己れを主とするもの」 657, 690
 「弱れかけた兄妹」 611, 622, 632, 635, 636,
 649, 676, 687, 698, 712, 757, 808, **815**
 「思ひ」 655, 656
 嬖妾(おもひもの) 178
 憂ひ慮ふな 240, 287
 重荷 220, 273, 332, 333, 622, **679**
 親石 244, 739
 「親子」 478, 612, 647, 650
 『オリゲネス研究』 53, 70
 オリーブ山 598, 599
 愚か(者) 424, 440
 音楽 181, 183, 647, 650, **654**, 658, 673,
 688
 「御嶽教の中教正となった祖母」 217, 564,
 749
 恩寵(恵み, 恩恵) 13, 19, 202, 203, 205,
 260, 352, **465**, 481, 705
 女 244, 245, 295, **390**, 417, 684, 750, **822**
 「御柱」 676, **688**, 760
 「「御柱」劇余談」 688
 「「御柱」上演に就いて」 688
 「御身」 756

か

海員組合 80
 懷疑 76, 151, 669
 階級闘争 690
 會計(係, 役, 財布) 102, 114, 127, 389,
 390, 395, 761
 悔恨(悔悛) 349, 788, 789
 外向的態度 703
 『解釈と鑑賞』 685, 682, 690
 改心(回心) 683, 705
 『改造』 689, 794
 「凱旋」 776, 776

149, 209, 238, 244, **248, 252**, 239, 302, 304,
380, **664, 736**
荊棘の冠 98, 100, 116, 213, 218, 382, 387
「イプセン研究」 95, 109, 114, 134, 135, 410
「イプセン雑感」 663, **767**
「イプセンの仕事振り」 658
誠(戒め) 275
『意味論』 887
いやさき, いやはて 329, 331, 333, 336
伊豫丸 129, 137, 314
岩手南部藩 583
岩(の上) 252, 259, 261, 262
因果応報 613, 667, 668, 750
インド 383
インド・ヨーロッパ族 593

う

ヴァン湖畔 296
『植村正久と其の時代』 40, 49, 51, 67
ウオトメ 702
「動かぬ時計」 610, 776
牛込教会 62, 65
亡(失)はれた小羊 215, 243, 250
失 ふ 246
疑 う 241, 262
宴(酒宴) 288, 289
「歌時計」 709
内なるキリスト 258
内なる光(Inner Light) 43
「哀なる人の叫べる」 163, 190
『内村鑑三聖書注解全集』 55, 158, 298,
355, 532, 596
宇 宙 294, 296, 318, 381, 742, 891
鬱 憤(エネルギー発散) 585, 586, 589,
614, 679, 761
「生れ出づる悩み」 15, 82, 610, 645, 660,
687, 765, 798
海(の目) 147, 245
生 む 174, 175
裏切者(意識, 裏切り) 74, 80, 82, 85, 114,

116, 123, 128, **134, 145**, 155, 245, 246, 262,
278, 312, 402, 458, 571, 571, 573, **807~823**
恨 み **807, 809**
憂 ひ 406
運 命(論者) 454, 471, 472, 674, 676, 728,
817
「運命と人」 216, 236, 248, 252
「運命の訴へ」 406, 472, 610, 686, **686, 776**,
815
運命の狂ひ 520

え

永 遠(永久, Everlasting) 11, 12, 23,
24, 43, 44, 60, 135, 138, 172, 226, 275, 305,
381, 667, **823**
永遠の女性 **439**, 679, 701
「永遠の叛逆」 657, 690, **691**
栄 光 149, 277, 337, **338**, 381
英 雄 696
「描かれた花」 **794**
エキゾティズム 443
えこひいきの神 17, 197, 202, 203, 205,
260, 473
エゴイズム(→自分自己中心)
エジプト(ミツライム) 160, 353, 388, 470,
619
繪島丸 386, 809
エス(es) 680
ES を Er と直感 696
エデンの園 160, 167, 171, 178, **192, 203**,
296, 625
エデンの東のノド 167, 174, 175, **196**, 198,
448, 529
エディプス・コンプレックス 565, 681
江戸表留守居役 33
江戸の堂宮大工 689
エネルギー(→リビドー)
エノク 450, 451
エバの創造(イブの誕生) **191**, 201, 202,
295, **295, 297**

644, 649, 651, **676**, 690, 692, 757, 822
 「或る女」 15, 29, 82, 100, 116, 117, 144,
 148, 217, 236, 241, 260, 385, 478, 540, 610,
 660, 756, 765, **766**, 767, **813**, 820
 「或る女のグリンプス」 98, 116, 117, 144,
 148, 213, 382, 670, 765, **809**
 アルコール漬け 778, 779, 780
 「或る施療患者」 472, 610, 676, 699, 776,
816
 アルメニアの南部 296
 アレクサンドリア(学派) 40, 51, 56
 「哀れな人々」 642
 哀れなる Kingdom の子 242, **281**
 憐れむ 299, 303
 「An Incident」 647, 648, 755, 757
 「暗」から「明」 679, 687, 713
 暗黒時代 501
 暗黒の千年 501
 安息 158, 465
 安息日 101, 120, 135, 139, 223, 229, 242,
 249, 290, **388**, **414**
 安息日問答 101, 115, 139, 143
 「アンナ・カレニナ」 817
 安山岩溶結凝灰岩 886

い

「言ひたい事二つ」 674, 676
 イエズス会 63
 イエスの系図 243, **250**, 280, 283, 297, 369
 『イエスの使信』 885
 「イエスの生涯」(“Life of Jesus”) 336,
 707
 家と土台 237, 248, 252
 医学専門用語 802
 医学界の大論戦 790
 怒り(憤り) 197, 202, 417, 574, 575
 胃癌 674, 792
 異郷人 243, 285, 322
 「イギリス史」 501
 生きる(生への意志) 341, **425**, **518**

イサク、ヤコブの事蹟 **191**, 196, 202, **203**,
 205, 300, 302, **304**
 石 98, 101, 102, 103, 105, 97, 98, 99, 109,
 113, 122, 127, 149, 209, 210, 211, 277, 309,
 381, 387, 395, 408, 776
 意識 676, 677, 678, 680, 682, 684, 687,
 698, 893
 意識と無意識との相補性(相互作用, 補
 償的) 585, 613, **676**, 693, 703
 「石坂義平氏宛書簡」 796
 「石にひしがれた雑草」 478, 540, 610, 765,
767, **812**
 医師の娘 540, 586, 679, 765, 772, **809**
 衣裳哲学(サータ・リザータス) 42, 43,
 44, 47, 61
 異常心理 760
 維新(明治) 584, 757
 イスカリオテ(カリオテ) 389
 『イスカリオテのユダ』 316
 『泉』 478, 650, 654, 655, **674**, 676, 679, 690,
 692, 699
 イスラエル(の民) 17, 249, 300, **305**, **331**,
 353, 354, 358, 470, **575**
 イタリヤ 354, 510
 一元論(的, 観) 505, 782, 783
 一番町教会(富士見町教会) 65, 66, 260
 『一葉舟』 443
 「五日集」 655
 一家即一流派 674, 676, 699
 「一切か無か」 100, 114, 117, 151, 217, 236,
 373, 377, 386
 一心 735
 イド(id) 641, **680**, 682, 683, 684
 因幡丸 354
 命(生, 生命, Life) 11, 22, 23, 24, 40, 62,
 103, 104, 106, 108, 118, 127, 145, 201, 224,
 246, 247, 263, 288, 290, 341, **397**, 404, 381,
 521, 594, **736**, 751, 796, 800
 命の息 201, 202, **295**, 526, 679
 祈り(祈禱) 8, 10, 29, 36, 41, 47, 57, **145**,

事項索引

あ

- 愛 22, 23, 24, 27, 36, 39, 51, 56, 76, 77, 81,
98, 100, 104, 108, 109, 114, 117, 118, 123,
134, 145, **147**, 210, 217, 221, **241**, 244, 249,
250, 259, 268, **272**, 275, 278, 286, 292, **293**,
299, 300, 301, 303, 326, 337, **342**, 349, 386,
405, 408, 422, 424, 427, **575**, 594, 599, **664**,
682, 683, 707, 708, 783, 786, **799**, 810, 814
- 愛 嬌 158, 463
- 愛己主義 675
- 愛他精神 621, 622, 651
- outer darkness 242, 249, 253, 744
- 『赤い鳥』 610, **628**, **642**, **644**, 686, **698**, 708
- 赤岩温泉 764
- 『秋田魁新報』 795
- 悪(人、靈) 19, 144, 223, 248, 251, 252,
263, 293, 299, 303, 331, 740
- 悪人正機 251
- 悪魔(サタン) 58, 85, 133, 154, 174, 180,
214, 230, 234, 352, 381, 402, 736, 819, 823
- 朝 696, **697**, **712**, 713
- 『朝日新聞』 444, 753, 762, 890
- 麻布 333, 334, 396
- 欺く 337, 339, 349
- 脚(足を洗う) 107, 115, 140, 269, 276, 278,
292, 399, **400**, 402
- 跛者(あしなへ) 219
- 「足助素一氏宛書簡」 164, 170, 172, 193,
519, 792
- 汗 145, 162, 171, 194, 301, 308, **335**
- 「頭ならびに腹」 480, 889
- 「新しい畫派からの暗示」 214, 234
- 新しく(造られた者) 299, 301, 426
- 「アダム」 670
- アダム(の創造) 89, **189**, 294, 295, 297
- アッシジ 91, 720
- 『アッシジの聖フランチェスコ』(“Life
of St. Francis of Assisi”) 615, 720
- アッシリヤ滅亡 501
- アニメ(女性神話類型) 613, 677, 678, **679**,
698
- アニメス 677, 679, 698
- アネモネ 249
- あばら骨 295
- アフリカ 141, 696
- 虻田郡狩太村(狩太有島農場) 650, 700, 755
- アベル殺害 529
- アボンデール 346, 701, 741, 893
- 「天草雅歌」 443
- アメリカ(米国) 204, 722, 731
- 『アメリカ合衆國史』 501
- 嵐 336
- 荒野(ユダの荒野、彷徨) 313, 354
- アラム語 328
- アララット山の麗 164, 169, 175, 184, 197,
296, **449**
- アーリア人 161, 204
- 「有島先生の講話を聴きて」 620
- 『有島武郎・姿勢と軌跡』 779
- 『有島武郎滞欧画帖』 645
- 『有島武郎と夏目漱石』 641
- 『有島武郎における虚無への転落』 668, 705
- 有島農場解放 80, 128, 310, 523, 586, 621,

ワーズワース 65, 818

渡瀬作造 692, 816

渡辺章夫 889~891

渡辺善太 475, 885

渡辺凱一 800

ワルトルタ(マリア・ワルトルタ) 251

ゆ

湯浅半月 443
 ユスティノス 56
 ユダ(イスカリオテ) 83, 84, 85, 101, 102,
 105, 107, 114, 123, **127**, 128, 129, 130, 132,
133, 134, 140, 155, 245, 262, 268, 270, **272**,
278, 314, 316, 367, 389, 390, 400, 401, **402**,
 571, 572, 603, 604
 ユダ(ヤコブの子) 297
 ユバル 158, 168, 181, 182, 184, 196, **451**,
452, 460, 461, 462
 ユング(Jung, Carl Gustav スイス1875
 ~1961) 585, 676, 677, 695, 696, 698, 703

よ

横井時雄 50, 68
 横光利一 478, **480**, 658, 688, 756, 802, **889**
 ヨシュア 358, 541
 吉田絃二郎 628
 吉田幸一 **887**, 888
 吉永正義 884
 吉村善夫 18, 19
 ヨセフ 173, **197**, 201, 202, 205, 215, 216,
 258, 259, 260, 296
 ヨハネ 9, **23**, 25, 50, 51, 56, 97, 116, 123,
 130, 134, **146**, 155, 268, **278**, **304**, 369,
 412
 ヨブ **333~337, 349**

ら

ラザロ 103~106, 107, 114, 118, 123, 126,
 127, 131, 145, 392, 393, 395, **396**, 398
 ラザロ(乞食) 128, 288, 290
 ラスキン 818
 ラスト(Eric C. Rust) 542, 544
 ラート(→Gerhard von Rad) 470
 ラドラム博士 727, 733
 ラビ・アキバ(Akiba) 355
 ラファエル 166, 178

り

リッチル 32, 50
 リビングストン 78, 141, 263, 664
 リベカ 17, 328
 リリィー 8, 479, 700, 701, 704, 704, 727,
 728, 733

る

ルーズベルト大統領 731, 751, 752
 ルソー 505, 818
 ルター 6, 22, 25, 63, 83, 85, 486, 705
 ルツ(ボアズの妻) 360
 ルドルフ・キッテル(Rudolf Kittel)
 470
 ルナン 336, 707, 818
 ルフィヌス 69
 ルーベンス(Rubens) 317

れ

レア(ヤコブの妻) 297
 レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo
 da Vinci) 316
 レオニダス 52
 レメク 158, 164, 169, 176, 181, 182, **196**,
 296, **451, 457**, 529~532, 811

ろ

魯迅(Lu Hsün 中1881~1936) 612,
 650, 658
 ロダン **670**
 ロトの妻 162, **194**, 296
 ロバーツ 30, 727, 733
 ロマン・ローラン 521
 ローランド宣教師 39, 290

わ

Y 子 385, 587, 590, **793**, 810, 822
 ワーグナー 673
 ワシントン・アーヴィング 816

マリヤ(キリストの母) 360
 マルクス 89, 505
 マルタ 126, 130, 145, 251, 394, 395

み

三浦綾子 444, 890
 三浦アンナ 884
 三上秀吉 647
 三木羅風 628
 ミシエル 818
 水野仙子 311
 三谷医師 774, 777
 三谷Y子 777
 ミートリッチ 821
 南 博 685, 683
 ミハイロフスキー 819
 宮川経輝 50
 宮崎湖處子 8, 64, 65, 358, 443
 宮沢賢治 643, 645
 宮野光男 14, 74, 538, 555, 565, 577, 605, 895
 宮部金吾 6, 326
 三好郁男 894
 ミルトン 317, 538, 559, 594

む

武者小路実篤 76, 443, 668, 671

め

メフィストフェレス(Mephistopheles)
 319

も

モーア博士(M教授) 733
 茂木由子 586
 モーゼ 95, 106, 119, 203, 317, 321, 353, 354, 358, 368, 387, 404, 543
 モーツァルト 673
 元田修一 685
 モーパッサン 509, 510

森 有礼 6, 756, 797
 森 鷗外 886, 888
 森 廣 754
 森本厚吉 5, 6, 9, 10, 11, 12, 13, 36, 46, 62, 78, 141, 157, 322, 343, 664, 665, 735, 753
 森山重雄 81
 モレスコット 505

や

ヤコブ(イスラエル) 16, 16, 16, 17, 18, 55, 130, (イエスの十二弟子), 159, 191, 197, 202, 203, 205, 260, 281, 295, 297, 299, 300, 302, 304, 357
 安川定男 13, 74, 81, 587, 626, 649, 665, 672, 673, 680, 690, 691, 764, 768, 775, 893
 彌 助 815
 ヤスパーズ(Jaspers, karl) 626, 627, 628
 ヤバル 158, 181, 184, 196, 450, 451, 452, 459, 460
 ヤベテ 158, 170, 183, 193, 203, 204, 440, 450, 453, 467, 468, 513~524, 593, 811
 山内幸子(有島幸子) 33, 583, 584
 山内 静(母方の祖母) 33, 125, 249, 253, 281, 334, 589, 631, 638, 735, 750
 山極勝三郎教授 790
 山口義人 91, 119, 122, 125, 128, 133, 147, 150, 152, 154, 156, 201, 202, 207, 247, 257, 263, 265, 895
 山崎 亨 574
 山路愛山 51, 63
 山田昭夫 13, 25, 74, 76, 126, 621, 626, 668, 673, 686, 725, 775, 783, 790, 792, 794, 795, 798, 893
 山田耕作 628
 山谷省吾 20, 20, 22, 23, 24, 27, 46, 273, 369
 山本 鼎 628
 山本 和 486
 山本直良 284, 361
 鍵田研一 520, 521, 522, 538, 578, 594, 792

ブラックストーン(W. E. Blackstone)
 886
 プラトー 53, 59, 67, 818
 フランチェスコ(フランス) 8, 91, 707,
 720
 ブランドス 818
 ブランド 134, 135
 ブルタース 316
 ブルトマン(Rudolf Bultmann 独1884
 ~1976) 86, 884, 886
 ブルーノ 505
 フルベッキ(Verbeck, Guido Herman
 Fridolin) 32
 古谷綱武 648
 ブルンナー(Emil Brunner スイス1889
 ~1966) 86, 668
 ブレイキー 141
 プレシコフスキイ女史 372, 381
 フロイト 565, 676, 680~684
 フローベル 509, 510
 フロラ 15, 540, 729, 730, 732, 734, 735,
 771, 812

へ

ベタニヤのマリヤ 126, 127, 130, 132, 140,
 144, 214, 233, 247, 251, 268, **272**, 282, **292**,
 314, 315, 322, **326**, 360, 409, 598, 599
 ヘッケル 505
 ヘッダ・ガブラー 767
 ペテロ(ペトロ) 84, 117, 130, 140, 142,
 213, 217, 241, 247, 249, 250, 258, 259, **261**,
 399, **400**, **404**, 604
 ヘボン(Hepburn, James Curtis) 32
 ヘラクレス 544
 ベルグソン(Henri Bergson) 587, 893
 ヘロデ王 244
 ヘルベルト・マルクーゼ(Herbert Marc-
 use) 685
 ヘルムート・ティーリケ 284
 ペルリ提督 731, 752

ヘンリー・ゼイムス 818

ほ

ホイットマン 5, 151, 263, 521, 654, 663,
 670, **671**, 729, 764, 783, **816**, 818
 ホガツラー 818
 星野純逸 688
 星野清逸 688
 星野勇三 798
 ホセア **575**
 ホーソン 818
 ボーランド人 731
 堀本克三 781
 ホール(Mr. Hall) 286, 727, 728, 733
 本多秋五 7, 13, 36, 64, 75, 444, **456**, 471,
478, 611, 634, 647, 651, 660, 677, 691, 700,
 701, 725, 756, **767**, **772**, 775, 792, 795, 892
 ボンペイウス 397

ま

マイヤー(Myer) 501
 間垣洋助 23, 24, 141, 597, 606
 マグダラのマリヤ 24, 24, 98, 99, 102, 116,
 127, 129, 130, 132, **144**, 145, 212, 214, 216,
 233, 247, 251, 268, 270, **273** **278**, 282, 313,
314, 315, **384**, 390, **408**, 410, 440, 522, 552,
597, 603, 679, 772, 776, 813
 マークトウェイン 699
 マーグレット(マァギイ) 729, 731, 733
 マザー・テレサ 253
 増子愷祇 883
 マスカル(Mascall, Eric Lionel) 885
 増田英一 284, 422
 松崎牧師 670
 松本鶴雄 890
 マックス・ウエーバー 89
 マトリョーナ 821
 マネー 670
 マノア(サムソンの父) 542, 544
 マリーナ 821

は

ハインリヒ・オット(Heinrich ott) 885
 バイロン 818
 バウル 50
 バウル・サバティエ(Paul Sabatier)
 720
 バウロ(ポーロ, 保羅) 5, 9, 12, 16, 17, 20,
 22, 23, 24, 25, 26, 27, 31, 55, 63, 68, 99, 123,
 124, 134, 146, 191, 203, **300**, 302, 303, **304**,
 331, 338, 346, 347, 364, 365, 384, 385, 705,
 740, 749, 887, 888
 芳賀イシオ博士 791
 ハガル 17
 橋本教授令嬢縫子, 秀子 700, 704
 バックストン 352
 バックル 818
 バテン 818
 波多野秋子 82, 585, 586, **586**, 775
 母マリヤ 142, 215, 216, 236
 バプテスマのヨハネ 115, 136, 213, 226,
 238, 242, 244, 250, 268, 272, 280
 ハム 170, 184, 383, 453, **466**, **505**~**512**
 速水敏彦 122, 157
 原 亀吉 776, 817
 原 久一郎 819
 原 久米太郎 590
 原 子郎 643
 原田三夫 645
 原田義人 42, 45
 バリサイ人 131, 132, 135, 136, 219, 245,
 247, 250, 251, 258, 270, **271**, 287
 バルト(Barth, Karl スイス1886~1968)
 17, 18, 19, 31, 32, 67, 83, 84, 86, 133, 203,
 316, 624, **668**, 680, **884**
 ハルナック 32, 50, 83
 バルバロ(デル・コル) 23
 パロの妻 173, **197**
 ハンナ(サムエルの母) 360

ひ

ピイボディ(P) 5, 671, **733**, 764
 ビエール 640, 690, 697, 721
 ヒエロニムス 71
 光 小太郎 321
 ビタゴラス 53
 ビーチャー(Beecher) 426
 秀 子 700, 704
 ひとりの女(香油) 144
 比屋根安定 32, 49
 檜山京子 567
 平出 享 486
 ビラト 98, 110, 117, **150**, **151**, 386, 414, 480
 ビリボ 141, 404, 423
 ヒレル 343
 廣岡仁右衛門 15, 540, 567, 594, **670**, 766,
 811
 広津和郎 642, 689
 ビョートル 820
 平野 謙 894

ふ

ファイファー(Robert H. Pfeiffer 米
 1892~1958) 469, 885
 フェニー(フランセス) 15, 346, 439, 479,
 540, 672, 679, 700, 701, 704, **734**, 735, 771
 ファン・ゴッホ(Gogh, Vincent van)
 626, 627
 ファングマイアー 86
 フィヒテ 42
 フォックス 43
 福田清人 632
 福田準之輔 708
 藤枝静男 636
 藤田圭雄 645
 藤波勝正 883
 藤村 操 66
 船水衛司 574
 ブラウン 32

田中主悦 883
ダニエル(E.S.ダニエル, 大地主) 732,
734
ダビデ 317, 318, 321
タマル(ユダの長子エルの妻) 297
ダルクマン神父 126
ダンテ 727, 818, 821

ち

チャイコフスキー 673, 883
チラ 158, 169, 180, 182, **450, 462**, 811

つ

粒良達二 77, 705
罪の女(香油注ぎの女・マリヤ) 144, 314,
315, 327
ツルゲェネフ 767, 818

て

ティベリウス皇帝 151
ティルダ・ヘック 479, 583, 700, 701
デビッドソン(B. Davidson) 592
テムナテの処女 547, 548, 549, 554
デメトリウス 52
デリラ 145, 522, 546~573, 590, 594, 679,
810
天使サミアサ 463

と

東郷平八郎 752
ドストエフスキー 767, 818
トバルカイン 158, 158, 166, 169, **450, 462**
トマス 110, 117, 131, 142, 151, 152, **386**,
393, **403, 416**
トルストイ 8, 25, 55, 77, 81, 247, 303, 521,
670, 675, 734, **753**, 754, 767, 818, 823
トレルチ 50
ドン・ジュアン 679

な

ナアマ 158, 166, 178, 180, 181, **195**, 440,
450, **451, 452, 463**, 522, 590, 593, 679, 771,
810
中沢洽樹 466, 544, 574, 885
長須正文 708
中野好夫 819
永野武三郎 320, 351, 426
長野博士 792
中村吉右衛門 688
中村孤月 781
中山昌樹 720
夏目漱石 443, 587, 823, 888, 890
ナップ 50

に

新美南吉 708
ニーチェ 505, 818
ニキータ 820, 821
ニコデモ 119, 123
西垣 勤 13, 651
西川 勉 781
新渡戸稲造 6, 6, 8, 10, 11, 25, 27, 30, 33,
44, 52, 58, 260, 364, 583, 665, 735, 750, 797
新渡戸マリ 286, 665
ニーバー(Reinhold Niebuhr) 481

ね

ネメジェギ 57, 68, 71, 92, 95, 120, 122,
126, 128, 133, 136, 147, 148, 150, 153, 154,
156, 202, 207, 250, 258, 263, 265, 895

の

ノア 164, 175, 178, 182, 193, **196**, 197,
453, **464**, 525~529, 811
ノアの妻 **468**
野口雨情 628
野島秀勝 13, 75, 590
野溝七生子 886, 888
野村教授(動物学) 798

島崎藤村 26, 123, 364, 443, 668, 671, 755,
886, 887, 890
清水良雄 628
シモン 127, 130, 140, 145, 251
釋 尊 359
ジャスティン(St. Justin) 885
ジャン 640, 690, 697, 721
ジュゼッペ・キャラ(ロドリゴ神父) 444
シュタウファー(Stauffer, Ethelbert
独1902~1979) 885
シュニッツラー 509
シュライエルマッヘル 39, 41, 50, 83, 884
ジュリア 729, 730, 812
ジョージ・ホックス 818
ジョセフ・エルギントン 286, 665
ショーペンハウアー 505
ジョンソン 368
ンラス 344
進藤純孝 611, 634, 635, 636
親 鸞 251, 740

す

吹田順助 155, 577, 670, 790
スウィントン(Swinton) 501
スウェーデンボルグ(Swedenborg, Ema-
nuel スエーデン1688~1772) 626
スコット(Dr. J. B. Scott) 8, 323, 439,
472, 484, 727, 728, 733, 745
鈴木三重吉 628, 643
鈴木光武 884
ストリンドベルヒ(Strindberg, August)
521, 610, 613, 622, 626, 627, 671
スピネル 50
スペンサー 818
スメタナ 650

せ

聖マルティン 640, 720, 721
瀬川 末 349, 671
関根正雄 25, 32, 574

セザンヌ 670
セシル・B・デミル監督 594
セ ツ 158, 165, 167, 179, 193, 196
瀬沼茂樹 5, 7, 33, 36, 74, 360, 442, 444,
611, 634, 639, 665, 732, 756, 761, 764, 775,
794, 797, 892
ゼノー 53
ゼベダイ 369
セ ム 164, 168, 184, 204, 383, 453, 466,
499~504
セリグマン 818
セルヴァンテス 818
セロ・パウルス 885
仙 吉(「小僧の神様」) 635

そ

ソクラテス 18
園 540, 594, 798
ソフィア夫人 822
ゾ ラ 510, 818
ソロモン 279, 282, 288, 290, 362

た

高橋信造 817
高橋義孝 677, 682, 685
高原二郎 13, 648
高峰医師 802
高山亮二 81
田川夫人 813
武井静夫 651
竹内 寛 40, 56, 884
武岡武夫司祭 264, 369
竹崎八十雄 77, 128, 155, 605, 670, 762
竹 園 420
武田清子 33
竹森満佐一 22, 23
太宰 治 315, 444, 668, 888
田 島 413
龍川平四郎 688
田中敬止 883

グリム兄弟 627, 672
クルマン(Cullmann, Oscar) 885
クレメント 53
黒澤良平 568
クロボトキン 81, 138, 142, 523, 663, 670,
692, 767, 818
桑島昌一 13, 738
久和蔵 689
桑田秀延 49, 86
桑原己代治 883
グンケル(Gunkel, H) 470

け

ゲーテ(Goethe) 137, 315, 818
ゲルハルト・フォン・ラート(Gerhard
von Rad) 470, **481**

こ

小泉一郎 14, 74
幸徳秋水 523, 670
河野愛子 361
河野象子 583
河野信子 62, 82, 360, 363, 583, 762, **763**,
811
幸田露伴 689
興梠正敏 355
古賀博士 **791**
ゴーガルテン 86
小坂 晋 707, 765, 768
小崎弘道 50
小島信夫 611, 635
小玉晃一 14, 74
古 藤 540, 594
小林愛子(実妹) 584
小松耕輔 628
ゴリキー(ゴールキー) 767, 818
ゴールズワージー(Galsworthy, John)
613, 760
ゴンチャロフ 509, 818

さ

西郷隆盛 756, 797
西條八十 628
斉藤清衛 **887**
坂本 浩 438, 587, 627, 631, 638, 695, 713
佐久間 鼎 **886**
佐古 純一郎 13, 74, 78, 631, 649, 668,
705, 738, 739
左近義慈 559
笹淵友一 6, 10, 13, 20, 37, 43, 65, 74, 76,
77, 78, **443**, 668, **887**, 889, 890, **893**, **894**
定 子 813
早月愛子 813
早月田鶴子 144, 382, 555, **809**
早月葉子 144, 145, 385, 386, 442, 522, 540,
552, 567, 593, **670**, 679, 763
サックアス 53
佐藤義助 886
佐藤春夫 628, 689
佐藤與十の妻 568, 679, 771, 811
佐間田信次 686, 815
サムエル 541, 546
サムエル・テリエン 453
サムソン 15, 99, 136, 145, 383, 387, 440,
522, **542**, 594, 810
サムソンの侍童(脇役少年) 551, 563
サムソンの母 563
サ ラ 17, 360
サロメ 226, 244
サン・シモン 729

し

シェクスピア 457, **508**, 818
シェリオ 818
シェンケーヴィッチ 55, 669
志賀匠平 782
志賀直哉 76, 611, 634, 635, **636**, 668, 671,
756, 772
シベリウス 650

おせい 406

小柳津(おせいづ)邦太 360

小高 毅 69,71

小田切 進 645

織田正信 639

お 照 815

おぬい 15,540,679,691,704,771,816

オリゲネス 40,50,54,55,56,57,60,63,
68,120,202,203

か

ガイ(H. A. GUY) 885

カイパー(Abraham Kuyper オランダ
1837~1920) 538,560,594,597カイン 165,167,173,176,179,183,195,
198,215,296,474,475,811

カウツキー 81,138,522

賀川豊彦 443,522

柿 江 688

蛸崎知二郎 688

笠井の娘 568

柏井 園 276,321,352

嘉 助 689

片岡良一 611,624,641,642

カチヤ 809

勝本清一郎 669

加 藤 812

加藤常昭 49,83

金子喜一(K) 5,136,138,142,522,733

金森通倫 50,68

カーペンター 521

ガマリエル 338,343

神尾光臣 585,762

神尾安子 363,420,423,425,427,585,762

神近市子 586

亀井勝一郎 33

カヤバ 105,397

カーライル 42,42,44,66,654,818

唐木順三 648

唐澤秀子 154,586

カール・バルト→バルト

カルヴィン 483,486

カルロス・メステルス 204

カロライン 673

川 鎮郎 14,36,37,42,74

河合隼雄 585,678,684

川名 勇 18,19,31,83,133

菅 門吉 18,32,883,885,886,891

カンダタ 633

カント 42,83,86

カンナ(醜男) 479

ガンベ(ガンベッタ) 692,816

き

菊田義孝 668

菊池 寛 628

ギゾオ(Guizot) 501,502,818

木田金次郎 798

北原白秋 443,628

北村透谷 42,43,686,762,887,888,889

北森嘉蔵 574

キティ 820

木下順治 152,315,597

木部孤筈 385,817

木 村 809,813

ギルガメシュ(Gilgamesh) 544

キルケゴール 86,89

く

Quinten Matsys 316

草川 信 628

国木田独步 888

熊沢義宣 46

久山 康 744

クラーク 6,25,30,30,32,33,34,80,91,
124,142,260,739,797

倉田百三 150,414

倉地三吉 15,540,765,809,813

クララ 679,704,707,771

グリゴリー・ペトニコフ 809

石井 巖 157
石井良博 469
石坂養平 568, 726
石島 渉 **886**, 891
イシマエル 17, 18, 191, 202, 205, 260
石丸晶子 68
泉 鏡花 802
イスラエル・アブラハム 818
板倉勝正 544
市川和四郎 688
市川厚一教授 790
市村 宏 887
伊東一夫 26, 886
伊藤 進 469
伊藤 整 612, 648, 798
猪熊葉子 627, 643
イブセン(Ibsen, Henrik ノルウェー
1828~1906) 89, 150, 263, 521, 627, 670,
767, 818
イフヒム 761, 809
今田 恵 685
巖谷小波 629
インガーソール 818
インノセント三世 720

う

ウィリアムズ(Williams, Channing Mo-
ore 米1829~1910) 32
上杉省和 14, 36, 74
ウエスターマン(Westermman, C) 470
上田 敏 443
植村正久 49, 61, 66, 67, 68, 260
ヴェルテル(Werther) 275, 276
内田傳道師(牧師) 385, 442, 813
内田 満 25, 336
内村鑑三 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 20, 25, 30,
32, 45, 55, 62, 74, 77, 80, 86, 95, 142, 157,
205, 260, 273, 284, 325, 336, 345, 353, 360,
365, 412, **469**, **473**, 501, 596, 602, 665, 720,
736, 739, 749, **750**, 813, 814

ウロンスキー 820

え

江口 渙 726, 781, 783
エサウ 17, 18, 191, 202, 205, 260, 297, **304**
エステル女王 360
エゼキエル 575
エディス 701
エノク 184, **198**
江野専次郎 685
江原小弥太 443
海老名弾正 33, 40, 41, 49, 51, 54, 57, 62,
68, 69, 260
エフタの娘 360
エフ・パーロット 423
エホバ 99
エマースン 67, 818
エミール・シェーリング(Emil Schering)
624, 627
M 子 540, 679, 771, 812, 822
エルンスト・ミヒェル 680
エンゲルス 81, 138, 505, 522
遠藤周作 248, 444, 539

お

大川 宏 883, 895
大木英夫 **481**, 482
大久保利通 756, 797
逢坂元吉郎 154
大島経男 155
大島 豊 336
太田時敏 583
大山定一 138
岡 813
小倉多加志 627, 665
小嶋 潤 **884**, 885
お 末 15, 540, 679, 704, 771
オスカー・ワイルド(Wilde, Oscar 英
1856~1900) 613, 618, **627**, 665, 713, 818
オズワルド・スイレン 818

人名索引

あ

相島雪雄 442, **670**, 702, 756
 アインシュタイン 84
 アウグスチヌス(オーガスチン) 25, 56,
 63, 486, 487, 818
 青木(「春」) 364, 762
 アキーム 821
 秋元和雄 883
 芥川龍之介 443, 628, 633, 887
 アクリーナ 821
 アーサー・クロオウェル 346, 701
 足助素一 630, 646
 アダ 158, 169, 182, 196, **450, 458**
 アダム 159, 163, 164, 167, 171, 172, 174,
 185, **189**, 192, 194, 195, 197, 199, **201, 202**,
 203, 294, 295, 297, 766
 アニーシャ 820
 アブラハム 16, **17**, 18, 31, 159, **197**, 201,
 202, **205**, 208, 249, 250, 253, 258, 259, 260,
 281, 301, 357
 アブラム 297
 阿部三四 732, 761
 アペル 158, 165, 167, 174, 179, **195**, 199,
 296, **474**, 475
 アモス 575
 荒 正人 13
 有賀鉄太郎 53, 57, 60, 71
 有島愛子 284, 360, 422
 有島曉子 420
 有島生馬(壬生馬) 420, 632, 635, 636, 645,
 653, 790

有島宇兵衛 33, 584
 有島 武 33, 583, **584**, 589, 612, 618, 631,
 638, 646, 674, 792
 有島行三(三男) 618, 629
 有島敏行(二男) 618, 629
 有島行光(森 雅之) 421, 618, 629
 有島安子 149, 277, 321, 340, 437, 571, 590,
 646, 674, 793
 アリストテレス 53, 67
 アルミニウス 17
 アロン 358
 アンデルセン(Andersen, Hans Christi-
 an デンマーク1805~1875) 627
 アンデレ 423
 アンナ・カレーニナ 767, 820
 アンモニウス 53

い

イアーゴー 530
 イヴ(エバ、イブ) 160, 163, 167, 171, 172,
 174, 191, 192, 195, 198, 199, 203, 204, 294,
 295, 296, 297, 766
 イエス(イエスス、イエズス) 102, 103,
 104, 105, 106, 109, 114, 115, 116, 117, 118,
 119, 126, 130, 132, 135, 139, 140, 142, **145**,
 203, 204, 219, 225, 233, 242, 245, 246, 250,
 252, 257, 258, 268, **272**, 280, **284**, 369, **393**,
395, 408, 440, 655, 707, 776, 813
 イオアン(→ヨハネ) 119
 イサク 16, **17**, 18, 55, 191, **197, 202, 203**,
205, 260, 281, 295, **297**, 299, 302, 304, 357
 イザヤ **575**

21 : 12, 13 415, 416, 417
22 : 34~40 307, 309
26 : 36~46 306, 308
39 307, 310
27 : 45 307, 310

マ ル コ

1 : 12, 13 309, 310
2 : 1~12 309
23~28 414
4 : 30, 31, 32 308
31 213
5 : 25~34 310
6 : 4 412
9 : 19 308
50 310
10 : 13~16 308, 309, 708
17~31 310
23~27 308, 309
11 : 15, 16, 17 415, 416,
417
12 : 28~34 309
13 : 12 307
13 309
14 : 32~42 308
36 310
15 : 33 310

ル カ

4 : 1~13 309, 310
24 412
5 : 17~26 309
6 : 1~5 414
8 : 43~48 310
9 : 41 308
10 : 25~28 309
13 : 18~21 308
19 311
14 : 34 310
18 : 15, 16, 17 308, 309,

708

18~30 310
24~27 308, 309
19 : 45, 46 415, 416, 417
21 : 16 307
19 309
22 : 40~46 308
42 310
23 : 44 310

四 福 音 書

マ タ イ

3 : 1~12 312, 313
10 : 24 312, 313
26 : 6~13 312 314
10~13 312
14, 15, 16 312, 316
20~29 312, 315, 316
36 604
47~50 312, 313
27 : 38 312, 316
56 312, 315, 598
56~28 : 7 312, 314
57~61 312, 316
59 312, 316
28 : 1 597
1~15 312, 316

マ ル コ

1 : 1~8 313
14 : 3~9 314
6~9 313
10, 11 314, 316
17~25 315, 316
32 604
43~50 313
15 : 27 316
40 598
40~16 : 11 314

42~47 316

46 316
16 : 1 597
1~8 316
9 315

ル カ

3 : 1~17 313
6 : 40 313
7 : 36~50 313, 314
21 : 19 349
22 : 14~23 315, 316
39 604
47~54 313
23 : 3~6 314, 316
33 316
50~56 316
53 316
55 598
24 : 1~12 316
10 314, 315, 597

ヨ ハ ネ

1 : 19~28 313
7 : 53~8 : 11 315
12 : 1~8 314
4, 5, 6 315, 316
7, 8 313
13 : 21~30 315, 316
18 : 1 604
2~13 313
19 : 18 316
25~20 : 18 314
26 598
34 316
38~42 316
40 316
20 : 1~18 316
16 315
17 597

2 : 8 370

コ ロ サ イ

94, 256

I テ サ ロ ニ ケ

8, 26, 27, 94, 255

1 : 1~5 : 28 364, **365**

4 : 13~5 : 11 365

14~17 403

II テ サ ロ ニ ケ

8, 26, 27, 94, 255

1 : 1~3 : 18 356

3 : 13 356

I テ モ テ

93, 255

1 : 4 370

15 346, 347

2 : 4 253

5 370

6 : 15 370

II テ モ テ

3 : 16 370

テ ト ス

3 : 9 370

ヘ ブ ル

8, 93, 255

2 : 17, 18 370

4 : 15, 16 370

5 : 1~10 357, 358

2 358

9 : 5 366

10 : 22 400

10 : 38 301, 357

11 357

11 : 13 301, 357

31 370

12 : 2 370

ヤ コ ブ

8, 28, 31, 93, 255, **348**

1 : 1~5 : 20 348

1 : 22 348, 349

2 : 14 28

17 **240**

26 348, **349**

5 : 11 309, 349

I ペ テ ロ

93, 254

2 : 2 359

8 94, 368

3 : 1~6 360

4 359, 360

8 65

II ペ テ ロ

3 : 9 487

I ヨ ハ ネ

8, 23, 26, **94**, 123, **254**,
369

1 : 1 123, 146

1, 2 369, 341

7 301, 341

2 : 13, 14 408, 409

28 404

3 : 16 341, **342**, 384

4 : 7~10 386, 410

8 123, 134, 424

8, 16 23

11~19 341, **342**

16 **574**

5 : 16 341, 342

黙 示 録

8, 26, 93, 119, 123, 255, 369

1~22 350

1 : 3 883

5 : 6 352

7 : 9 398

17 331, 350, **351**

11 : 19 367

13 : 10 350, 351, **426**, 428

14 : 1 366

19 : 7 350, 352

20 **523**

21 : 2 350, 352

4 331, 350, **352**

14 368

22 : 10 352

16 370

17 352

21 421

共観福音書

マ タ イ

4 : 1~11 306, 309, 310

5 : 13 307, 310

9 : 1~8 307, 309, 349

9 : 20, 21 307, 310

10 : 21 306, 307

22 307, 309

12 : 1~8 414

13 : 31 307, 311

31, 32 306, 308

57 412

17 : 17 308

18 : 1~5 708

19 : 13, 14, 15 306, 307,

308, 309, 708

16~22 307, 310

23~26 307, 309

16 : 30 343, 344

17 : 29~34 421

18 : 14~19 421

22 : 3 343

24 : 5 546

ロ

8, 16, 18, 22, 26, 27,

32, 55, 93, 123, **254**

1 : 3, 4 370

16 299, 300, 303, 305,

887

17 299, 301, 357

2 : 4, 5 299, 302

3 : 10 299, 302

10~18 331

25 575

28 31, 370

31 31

5 : 7, 8 384

8, 9 299, 301, 341

6 : 4, 10 398

4~11 299, 302

5 299, 301

6~11 299, 300

15~23 299, 300

17 300, 305, 345

7 16, 300, 305

7 : 14 299, 302

14~23 299, 300

19, 24 749

25 300, 305, 345

8 16, 300, 305

8 : 1~9 300, 305

26 300, 304

32 384

35~39 299, **301**

9 16, 17, 19, 21, 205, 299,

300, 302, 303, 305,

365

9 : 1~5 299, 302

3 300, 304

7, 8 370

11, 12 **487**

11~14 18, 300, **304**

15 473

16 473

19 19

20 19, 473

21 473

32 94, 368

10 17, 19, 205, 303

11 16, 17, 19, 205, 303

365

11 : 32 19, 27, 299, 303,

304

33 299, 303

36 19, 303

12 : 8 384

21 299, 303

13 16, 365

13 : 8 300, 303, 304

14 : 9 398

13 368

I コリント

8, 22, 26, 93, **254**

1 : 21 424, 427

27 424

3 : 18 337, **339**, 340

4 : 5 403

6 : 19, 20 337, 338

7 : 1, 2, 8, 9, 36, 37, 38 20

8, 9 22, 21, 124, 273

26, 29 20

9 : 16 337, 338

24~27 12, 21, 146,

337, 338

11 : 3 203

8 203

23, 24, 25 153

13 149, **340**, 420, 421, 422,

425, 426, 427

13 : 1~13 337, 340, **424**,

427

15 : 25 370

28 337

36 398

II コリント

8, 22, 26, 93, 254

2 : 14 305, 344, 345

5 : 4 425, 426, 428

17 301

19 370

6 : 1~10 345

3~9 344, 345

10 407

7 : 4 407

12 : 9 344, 345, 346

ガラテヤ

22, 93, 255

2 : 19, 20, 21 425, 428

3 : 6, 8, 16 370

11 301

28 203

5 : 6 422, 425, 428

14 422, 425, 428

エペソ

93, 254

2 : 12 370

16 341

5 : 22 203

25, 26 400

6 : 9 367

ピリピ

94, 255

3, 4, 5 106, 399
 6 106, 400
 8 107, 400, 604
 9 107, 400, 604
 10 107, 114, 400
 14, 15 107, 140, 402
 21~30 107, 107, 127,
 153, 402, 571, 807
 26 101, 102, 105, 114,
 378, 389, 390, 396, 402
 27 114, 133, 402, 603
 28 114, 403
 29 102, 105, 114, 89,
 390, 395, 403
 30 114, 402
 31~35 269, 277
 31~37 106, 113, 117,
 147
 34 112, 123, 134, 147,
 269, 275
 36, 37, 38 399
 37 399
 14 141
 14 : 1, 2, 3 108, 403
 1~14 115, 141, 377,
 399, 403
 5 108, 151, 152, 403,
 404
 6 108, 123, 141, 142,
 404
 8 108, 113, 141, 149,
 270, 277, 404
 9 404, 604
 9, 10 108, 405
 9, 10, 11 153
 10, 11 399
 12 118
 12, 16 399
 12~26 399
 13, 14 97, 141, 380

15~20 118
 18~20 113, 277
 26 399
 31 308, 409
 15 141
 15 : 1~17 405
 9 108, 118, 405
 9~14 118
 12, 13, 14 108, 118,
 405
 13 99, 384
 18, 19 108, 119, 378,
 406
 18~27 406
 26 399
 16 141
 16 : 5, 6, 7 401
 7 399
 16~24 406
 21 406
 21, 22 108, 118
 22 407
 25~33 144, 377, 407
 29, 30 108, 407
 29~33 116
 31, 32 108, 152, 407
 33 98, 100, 109, 144,
 408, 409, 382, 386,
602, 606
 17 120, 258
 17 : 12 133
 21 120, 123, 153, 258,
 265
 18 : 1 109, 116, 145, 308,
 409, 604
 1~40 116
 1~19 : 16 116, 145
 11 98, 100, 116, 382,
 386
 28~38 150

38 97, 98, 100, 110,
 117, 380, 382, 386,
 378, **414**
 19 : 2 382, 387
 5 98, 100, 116, 282,
 387
 5~16 116
 25 144, 384
 26 598
 30 97, 113, 118, 270,
 277, 381
 40 396
 20 : 1, 18 144
 1~18 384
 5, 7 396
 11~18 605
 17 597
 24~28 403
 24~29 110, 117, 151,
416
 25 100, 151, 386, 416
 27 152
 28 152, 416
 29 99, 106, 383, 397
 21 : 2 151, 403
 9~13 97, 380
 12, 13 119

使徒行伝

93, 255
 1 : 6, 7, 8 399
 16 367
 2 : 1~4 399
 1~13 **343**
 22 368
 30 370
 44, 45 81
 6 : 2 368
 8 : 16 343
 15 : 12 368

10 393	35~38 271	49, 50 397
31 398	39 271	53, 54 105, 397
53~8 : 11 127, 275, 315, 596, 807	41 102, 113, 114, 123, 135, 136, 269, 276, 390	57 105, 397
8 : 1~11 24, 30, 51, 56, 98, 99, 102, 109, 110, 111, 112, 113, 122, 268, 269, 272, 273, 275, 276, 377, 384, 381, 390, 411 , 416, 596 , 814	10 : 11 321, 426	12 113, 270, 278
3 98, 102, 381, 390	18 402	12 : 1~11 278
4 102, 390	11 598	1, 2 106, 116, 398
5 99, 101, 102, 383, 383, 387, 389, 390	11 : 1, 2 144	1, 2, 3 144
6 103, 391	1~44 114, 127, 377, 409, 807	1~8 116, 144, 282, 377, 401
7 97, 98, 99, 103, 113, 122, 270, 277, 381, 385, 391	5 104, 393	3 99, 100, 116, 383, 387, 598, 599
8 391	6 103, 392	4, 5 111, 114, 268, 272, 282, 401
8~11 103	8 103, 393	5 603
9 391	9 104, 393	6 102, 105, 114, 389, 390, 396
10 391	10 104, 393	7 401
11 392, 417	11 103, 392	7, 8 107, 116
20 105, 118, 396	16 104, 151, 152, 393, 403	8 401
32 273	21 393	10, 11 106, 107, 118, 398, 402
41 370	21~24 104	12, 13 106, 119, 398
9 112, 112, 114, 135, 136, 269, 274, 276	22 104, 393	12~19 278
9 : 1~15 112, 114, 268, 274	23 393	18 398
1~41 100, 99, 111, 114, 135, 383, 387	24 394	20, 21, 22 404
2~41 114, 268, 271	25 104, 123, 126	20~36 149
2 270	26 104, 126	23 113, 149, 270, 277
3 270	27 104, 394	23~28 106, 117, 149, 277, 423, 427
4 111	32~36 104	24 149, 397, 398
14 135	32 394	27 308, 409
16 135	33, 34, 35 395	28 277
25 271	35 126	37~50 278
27 271	36 395	13 113, 140, 270, 278
	38~44 109, 409	13 : 1 111, 268, 272
	39 105, 395	1~20 113, 115, 140, 269, 276, 377, 399
	40 105, 395	1~30 278
	43, 44 105, 396	2 101, 102, 105, 114, 133, 389, 390, 378, 396
	45, 46 398	
	45~57 117, 378	
	46 105, 396	
	48~50 105	
	48 397	

聖句索引

31 398
 17 : 6 285, 289, 292
 26~35 325
 33 288, 290
 18 : 8 289, 292
 15~17 78, 308
 16 655
 24~27 308
 25 128, 274
 42 368
 19 128
 19 : 41 126
 21 325
 21 : 5~36 325
 16 307
 19 349
 22 : 3 133
 14~23 153
 21, 22, 23 153, 402
 24, 25, 26 402
 27 140
 31, 32 404
 39 604
 40~46 308
 49 598
 23 : 8 368
 34 288, 291
 34~38 289, 293
 46 288, 289, 291, 292,
 320
 49 144
 55 597, 598
 24 : 10 144, 597
 30, 31, 41, 42, 43 380

 ヨ ハ ネ
 8, 22, 22, 24, 26, 26, 60,
 90, 92, 96, 111, 112, 113,
 116, 119, 119, 146, 147,
 155, **254**, 257, 258, 269,

269, 276, 276, **278**, 369,
372~379, 605, 884
 1 111, 112, 115, 136, 137,
 138, 269, 274, 276
 1 : 1 109, 115, 374, 411,
 814, 886
 1~5 115, 377
 3 99, 99, 115, 137, 383,
 384
 6~8 283
 19~27 283
 19~34 115
 27 111, 115, 136, 268,
 272
 43~46 404
 2 112, 269, 276
 2 : 1~11 97, 98, 100, 112,
 115, 269, 276, 380,
 382, 385
 1~12 115, 142
 3 393
 4 102, 105, 142, 389,
 393, 396
 5 142, 393
 13~17 110, 111, 116,
 377, **412**, 413, 414,
 415, 416, 417
 13~22 143
 15 143
 16 143, 378
 23 114
 23~3 : 21 127, 807
 3 : 14 106, 119, 377, 398
 16 23, 98, 99, 100, 109,
 111, 114, 123, 134,
 268, 270, 272, 277,
 377, 381, 384, 386,
 410
 18 113, 114, 270, 277
 4 : 1~18~42 98, 100,

112, 117, 147, 276,
 310
 5~42 382, 385
 8 123
 16, 17, 18 111, 117,
 123, 148, 417
 18 148
 18, 19, 20 270
 25 148
 44 110, 118, 412
 52 368
 5 : 1~9 101, 377, 387
 1~18 115, 139
 3 101, 388
 4 101, 388
 5 101, 139, 388
 6 101, 388
 7 101, 388
 8 101, 388
 9 101, 368, 388
 16 101, 388
 17 101, 110, 378, 388,
 414, 415
 30~47 146
 44 111, 112, 116, 123,
 146, 147, 268, 269,
 272, 274, 276
 6 : 5 404
 37 97, 380
 38, 39, 45 112, 269,
 275
 38 412
 37~45 118
 53~57 120, 153, 258,
 265
 56 120, 258
 71 101, 102, 105, 114,
 367, 378, 389, 390, 396
 7 : 3 393
 6, 8, 30 105, 118, 396

32~44 210, 236
 45 307, 310
 46 94, 209, 210, 213,
 218, **237**, 280, 284, 328
 56 144, 212, 216, 234,
 384, 598
 61 212, 216, 234, 384
 28 : 1 144, 212, 216, 234,
 384, 597
 18, 19, 20 208, 244,
 250, 251, 259, 265

マ ル コ

8, 93, 95, 251, 254
 1 : 1~9 283
 12, 13 283
 15 884
 2 : 11, 12 367
 28 139
 3 : 19 368
 29 322
 4 : 10 368
 30, 31, 32 308
 35~41 368
 5 : 34 368
 6 : 14~29 325
 49 368
 8 : 26~36 421
 9 : 1~9 421
 9 421
 35 368
 41 285, 322, 328
 50 284
 10 : 13~16 78, 308
 23~27 308
 25 128, 274
 35~45 322, **324**
 37 324
 43 324
 11 : 11 368

12 : 28~34 369
 13 322, **324**
 13 : 1~37 325
 13 349
 32 282, 283, 322, 324
 14 : 3 140, 144, 326, 383,
 387, 598, 599
 14 : 4, 5 272, 282
 3~9 322, **327**
 4~9 140
 6~9 282
 7 401
 17 368
 17~21 153, 402
 18~26 153
 21 133
 32 366, 604
 32~42 308
 36 382, 386
 15 : 17 382, 387
 34 94, 284, 322, 328
 40 144, 384, 598
 41 598
 47 384, 597
 16 : 1 597
 9 144, 597
 15 325
 16 322, 328

ル 力

8, 92, 252, **254**
 1 : 32, 33, 51, 52, 53, 69
 370
 68 366
 2 : 39 546
 41~52 423
 49 423, 427
 3 : 1~18 283
 23~38 283
 37 370

4 : 1~13 283
 34 546
 6 : 16 367
 29 143, 281, 288, 289
 49 285, 289, 292
 7 : 13 65
 32 284, 288, 292
 36, 37 144
 36, 37, 38 370
 36~50 289, 292
 37 314, 597, 599
 47 408, 560, 599
 8 : 2 144, 597
 55 368
 9 : 58 285, 289, 292
 60 281, 288, 290
 10 : 22 285, 289, 293
 25~37 289, 293, 369
 33~42 598
 39 144, 384
 40 144
 42 384
 11 : 13 367
 12 : 4 288, 291
 10 322
 27 282, 288, 290, 362
 31 288, 291
 13 : 18~21 308
 24 281, 288, 289
 28 281
 14 : 12~24 288, 289
 34 285
 15 : 1~7 293
 3~7 282, 283, 285,
 287, 288, 289, 291,
 290, 293, 369
 11~22 248
 11~32 288, 289, 290,
 292
 16 : 19~31 80, 288, 290

- 25 224, 246
 17 : 1~8 261
 12~19 421
 17 306, 308
 20 210, 211, **239**, 280,
 285, 292
 24, 25, 26 261
 18 : 1~5 78, 223, 245
 4 223
 6 222, **245**
 9 222, 244, 245
 10 211, 212, 235, 238
 12, 13, 14 208, 235,
 280, 281, 282, 287, 283,
 285, 290, 291, 293, 369
 19 211, 212, 238
 20 215, 218, 244
 21, 22 215, 215, 227,
 241, 261
 21~35 213, 217, 241,
 262
 35 211, 212, 238
 19 : 13, 14, 15 78, 220, 246,
 306, 307, 308, 309
 16 221, 240
 16~22 307
 17 221, 240
 18 221, 240
 19 217, 221, 240, 241
 20 221, 240
 21 148, 221, 228, 236,
 240
 22 148, 222, 240
 23~26 306, 307, 308
 24 128, 222, 229, 240,
 274
 27 261
 20 : 17 368
 28 140
 21 : 9 225, 226, 244
 10 225, 226, 244
 11 226, 245
 12 223, 230, 241
 13 223, 230, 241
 31 211, 212, 234, 370
 32 211, 212, 234
 42 211, 244
 22 : 30 **459**
 34~40 307, 369
 37, 38, 39 210, 241
 39 217, 227, **241**
 23 : 10 **239**, 245, 280, 286
 11 402
 12 223, 245
 13, 14, 15, 23, 25, 27, 29,
 219, 224, 245
 33 229, 239, 414
 37 210, 214, 242
 24 325
 24 : 1~44 325
 36 239, 279, 280, 282,
 283, 324
 25 : 35 243, 253, 280, 286
 40 253
 26 : 2 225
 6 144, 225, 227, **233**
 6~13 214, 227, 228,
 234
 7 225, 227, **233**, **234**
 8 226, 234, 279, 282
 8, 9 272
 9 226, 234, 279, 282
 10 226, 234, 279, 282
 11 226, 234, 279, 282,
 401
 12 226, 234, 279, 282
 13 218, 226, 234, 279,
 282
 14 368, 571
 15 84
 17 225, 246
 18 225, 236, 246
 19 225, 246
 20 226, 245
 20~25 153, 402
 21 226, 245
 21~30 153
 22 226, 245
 23 226, 245
 24 133
 31 211, 213, 218, 225,
 241
 35 224, **241**, 261
 36 226, 236, 366, 604
 36~46 306, 308
 37 261
 38 224, 236
 39 213, 216, 218, 224,
 236, 248, 252, 307
 39, 42 209
 40 261
 42 225, 236, 248, 252
 45 225
 45, 46 213, 218, 236
 50 129, 133
 52 224, 246
 58 261
 63, 64 223, 246
 69 262
 70 262
 71 262
 72 262
 73 262
 74 262
 75 262
 27 : 3, 4, 5 572
 4, 5 85
 29 213, 218, 242, 387,
 382
 30 214, 242

- 4 219, 220, 230, **233**, 626
- 6 208, 209, 222, **233**
- 7 251
- 8 216, **233**, 280, 285
- 9 220, **233**
- 10 214, **233**, 247, 251
- 13 209, 212, **233**, 235, 280, 284, 307
- 14 209, 212, 216, **235**
- 16 211, 235, 238
- 17 370
- 19 219, 239
- 20 **239**, 251, 264, 281, 287
- 28 124, 216, 219, 222, 244, 273, 478, 811
- 29 219, 222, 244, 245
- 34 369
- 38 220, **243**
- 39 143, 243, 279, 281, 289
- 43~48 250, 259, 265
- 45 211, 238
- 46 211, 233
- 48 211, 238
- 6 : 1 221, 244
- 3 216, 244
- 9 211, 214, 238, 252, 252, 367
- 10 252
- 11 212, 217, **238**, 248, 252
- 13 222, 223, 238, 248, 252
- 14 211, 238
- 26 2, 211, 238
- 28 280, 287
- 28, 29, 30 220, 240
- 29 279, 282, 290
- 32 211, 238
- 33 291
- 33, 34 220, 240
- 34 280, 287
- 7 : 1 222, 228, 243
- 3 222, 243
- 7 209, **240**
- 9 209, 210, 240
- 12 227, 240
- 13 243, 279, 281, 289
- 21 142, 211, 214, 217, 221, 223, 227, 238, **239**, 253
- 24 252
- 26 208, 210, 212, 217, **237**, 252, 280, 285, 292
- 8 : 11, 12 208, 242, 279, 281, 370
- 14 261
- 20 210, 220, 228, **235**, 280, 285, 293
- 21 217, 236
- 22 209, 223, 228, **235**, 281, 290
- 9 : 1~8 307
- 9 228, 236
- 10 211, 212, 234
- 11 211, 212, 234
- 17 224, 246
- 20 220, 245
- 20, 21 219, 245, 307
- 22 224, 245
- 36 211, 213, 218, 241
- 10 : 1 368
- 2 261, 368
- 3 209, 210, 211, 212, 234, 242
- 4 367
- 6 215, 227, 243
- 16 209, 215, 228, 237, 280, 284, 422, 427
- 21 238, 307, 422, 427
- 22 307, 309, 349
- 27 299
- 28 291
- 32 211, 212, 238
- 33 211, 212, 238
- 37, 38 208, 244
- 42 243, 280, 285, 328
- 11 : 1 368
- 2~5 219, 242
- 10, 11 216, 238
- 17 224, 225, **242**, 280, 284, 292
- 25~12 : 7 421
- 27 280, 285, 293
- 28 273, 280, 285
- 28, 29 220, 243
- 12 : 1 223
- 1~8 229, 242
- 31, 32 322
- 34 229, 239, 414
- 45~49 421
- 50 211, 212, 238
- 13 250, 259, 265
- 13 : 31 211, 239, 307
- 31, 32 306, 308
- 55 218, 219, 245
- 14 : 1~12 215, 226, 244
- 28~33 261
- 15 : 13 211, 238
- 15~18 261
- 24 215, 243
- 16 : 13~20 261
- 17 211, 212, 238
- 17, 18, 19 404
- 18 250, 259, **262**, 265
- 23 154, 230, 234, 235, 261
- 24 228, 236

雅 歌

93, 255
1 : 1~8 : 14 355
1 : 12 383, 387
2 : 1 355, 356
4 : 11 355
4 : 13 387
4 : 14 383
5 : 15 355
7 : 8 355
8 : 7 355

イザヤ書

8, 93, 255
5 : 22 459
6 : 2, 6 329, 331
5 329, 332
9 : 6 370
14 : 32 366
25 : 1 329, 332
8 329, 331, 351
26 : 2 368
41 : 8 405
51 : 3 366
53 **334, 575**
53 : 6 369
59 : 1~4 329, 330, **331**
60 : 9 329, 331
63 : 15 65

エレミヤ書

17, 94, 256
1 : 5 17
6 : 21 94, 368
50 : 6 369

エゼキエル書

93, 255
9 : 3 367

16 : 38, 40 387, 389, 391
28 : 13 366
34 : 11~16 369

ダニエル書

3 : 28 366

ホセア書

575

ヨエル書

2 : 3 366

ヨナ書

351

ミカ書

94, 256

ナホム書

255

1 : 2 94, 367

ハバクク書

2 : 4 301, 368

ゼカリヤ書

94, 255

マカベ後書

93, 255

2 : 46 92

II 新約聖書

マタイ

8, 92, 247, **254**, 258, 259
1 : 1~17 243, 280, 283,
369

1~17, 21 370
16~25 215, 236
18 215, 236
18~25 210, 213, 218,
236
19 216, 236
20 216, **236**
23 217
2 : 1, 2 240
1~6 223, 240
1~12 240, 279, 282
19~23 546
23 546
3 : 1~15 **238**
1~17 283
2 228, 238
1, 2, 3 213
1~6, 11, 12 216
1~4~15 213
1~17 280
9 370
14 213
4 : 1~11 212, 227, 228,
229, **234**, 280, 283,
306, 307, 309, 310
4 208
8~11 229, 235
10 154, 214, 230, 234,
235, 367
17 219, 228, 238
18 211, 212, **233**
18~22 227, 228, 234,
261
19 211, 212, **233**
25 218, 245
5 : 1~7 : 28 280, 283
3 214, 215, 216, 217,
219, 221, **233**, 280,
286, 626
3~10 279, 281, 283

2 549, 561
6 549
18, 19 543
16 544, 572, 573
16 : 1 561
1~3 563
4, 5 548
4~20 561, **572**
4~31 563
5 557, 560, 571
15 562
15, 16 557
17 550
18~21 550
19 572
23, 24, 25 550
26 551, 559, 563
28 572, 573
28~30 551
30 563, 571, 572
17~21 541

ル ツ 記

94, 255, 360

サムエル上

255, 541

1 360
1 : 11 546
2 360
11 : 2 558
23 : 21 65

サムエル下

255, 541

7 : 11~16 369
11 369
23 : 11, 12 543

列王上

94, 255, 541, 575
5 : 1~7 : 51 290, 361
8 : 13 366

列王下

541

2 : 12 369
19 : 31 366
21 : 2 369
22 : 2 370
25 : 7 558

歴代上

255

歴代下

20 : 7 405

エステル記

360

ヨブ記

8, 77, 93, 255, 274, 349, 706
1 333, **334**
2 333, **334**
3~42 : 6 335
19 334, **334**
19 : 25 334
20~29 333, 335
28 : 3 333, 336
30 335
30 : 1~42 : 6 333
38 333, **335**
38 : 1~40 : 2 335
38 : 1~42 : 6 335
38 : 1, 2, 3 336
4~11 336
12~15 336
16, 17, 18 336
19, 20, 21 336

22~30 336
31~38 336
39~41 336
42 : 7~42 : 17 335

詩篇

93, 95, 203, **254**

2 : 6 366
12 370
9 : 11 366
14 : 1~3 302
19 : 1~4 **318**
1~14 317, 318
22 : 1 284, **328**
23 149, 317, 321 **426**, 428
23 : 4 317, **320**, 426
28 : 6 366
31 : 5 291, 292, 317, 320
33 : 6 202
51 : 3, 4, 5 370
17 **317**

69 : 20 65
90 317, 321
104 : 1~11 317, 319
1~30 317
28, 29, 30 319
28~35 318
31~35 317, **319**
118 : 25, 26 399
119 : 176 369
139 : 4 407

箴言

256

9 : 10 **654**
14 : 10 363, **364**
25 : 21, 22 303

伝道の書

94, 255

1~32 184, 193, 200
 6~20 160
 6~31 170
 21~31 161
 32 456
 11 : 1~9 161, 163, 171,
 173, 185, 193
 10~32 455
 12 360
 12 : 1, 2, 3 196, 294, 297
 13 360
 16 16, 205
 17 16
 17 : 5 455
 19 : 1~17, 24, 25, 26, 28,
 162, **194**
 24 294, 296
 25 294, 296
 26 162, 162, 173, 194,
 296
 21 16, 191
 21 : 1~7 297
 21 : 1~25 : 11 191, 295
 21 : 1~36 : 43 295
 22 16, 191
 22 : 1~14 159, 197
 1~19 297
 24 16
 24 : 1~25 : 11 297
 15~21 328
 25 16, 191
 25 : 19~36 : 43 297
 25 : 19~36 : 43 191, 295
 25 : 24~34 191, 295, 297
 26 16, 191
 27 16, 191, 205
 29 : 35 196, 294, 297, 389
 32 : 28 455
 30 164, **199**
 38 : 1~30 196, 294, 297

39 : 6~23 173, 197
 49 : 22, 23, 24, 25, 26 198,
 294, 296
 24, 25 198, 294, 296,
 297
 出エジプト記
 93, **254**
 3 : 1~10 368
 13 : 3~14 : 30 368
 13 : 17~22 354
 17~19 : 2 353, **354**
 14 354
 15 354
 15 : 22~18 : 27 354
 17 543
 19 : 2 354
 16~20 : 17 353
 20 575
 20 : 1~17 368
 4 298, 353, 361
 5 94, 369, 367
 6 369
 8, 9, 10 388
 14 **814**
 25 : 18 367
 31 : 12~17 388
 33 : 18 404
 19~23 404
 34 : 6~9 404
 14 94, 367
 レビ記
 19 : 18 **309**
 20 : 10 417
 10~21 387, 389, 391,
 383
 民数記
 13 : 33 459, 592

21 : 4~9 398
 申命記
 93, 254
 4 : 24 94, 367
 5 : 6~21 368
 8 369, 354, 361
 9 94, 367
 6 : 15 94, 367
 7 : 3 369
 6~10 574
 17 : 7 391
 22 : 1 287, 369
 22, 23, 24 417
 24 383, 389, 391
 23 : 3 369
 34 : 1~7 368
 ヨシュア記
 255, 541
 2 369
 6 369
 24 : 14 367
 19 94
 士師記
 92, 96, **254**, 559, 575, 707
 1 : 1~2 : 5 541
 2 : 6~16 : 541
 3 : 31 543
 11 360
 11 : 1 459
 13 542, 563
 13~16 539, 541, 545, 563,
 572, 594
 13 : 4, 7, 14 551
 14 543, 563, 573
 14 : 11~17 548
 15 543, 563, 573
 15 : 1, 2 558

177, 183, 186, 191,
 192, 527
 10 527
 10, 11 527
 12 196, 527
 12, 16 167, **196**, 528
 14 173, 196
 16~ 5 : 32 157
 16 164, 175, 185, 186,
 189, 191, 192, 197, 528
 16, 17 174, 196, 198
 17, 18 184, 196
 17~24 592
 18~21 164, 196, 455
 18 176, 198
 19 165, 176, 177, 183,
 185, 186, 189, 191,
 192, 526, 811
 19, 22 166, 168, 176,
 178, 180, 195
 19~22 181, 196, 455,
 458, 534, 592
 19~24 174, 195, 196
 20 458
 20, 21 165, 169, 176,
 177, 181, 184
 20, 22 182
 21 168, 169, 177, 181,
 182, 183, 197, 458,
 460
 22 169, 170, 177, 178,
 180, 181, 182, 185,
 193, 195, 458
 23 457
 23, 24 169, 183, **195**,
451, 457, 529, 531, **532**
 24 169, 182, 294, 296,
 297
 25 165, 167, 177, 179,
 196, 528, 529

5 : 1, 2 159, 191
 2 159
 1~32 164, 175, 199
 3 165, 174, 177
 1, 3~29 167, 196
 3~9 : 28 196
 3, 6, 9, 12, 15, 18, 21, 25,
 28, 29 528
 6~28 455
 28~32 164, 175, 193
 32 161, 166, 170, 175,
 182, 183, 193, 592
 6 444, 574
 6~10 494
 6 : 1~18 479
 1, 2, 4 166, 166, 168,
 175, 178, 178, 179,
 180, **195**
 1~4 458
 1~8 : 14 158
 2 181, 204, **470**, 494,
 528
 2~4 592
 4 168, 180, 181, 195,
 444, 459, 462, 494,
 528, 534, 592, 811
 5 177, 179, 494, 528
 5, 6 177, 478
 5, 6, 7 167, **197**, 475
 5~13 592
 6 525, 811
 6, 7 168, 180
 8 465, 482, 494, 811
 9 465, 482
 9~14 166, 182, **197**
 9, 10 164, 175, **193**
 10 161, 166, 170, 175,
 178, 182, 183, 185,
193, 195, 455
 11~14 175

11~9 : 17 164, 172,
 185, 193
 13 178, 475, 479, 494,
 526, 529
 18 175, 199
 18, 19 165, 176, 198
 20 176, 200, 459
 7 448, 574
 7 : 1 175, 182, 199, 494
 2 176, 200
 3 176, 200
 4 175, 177
 4, 6, 10, 11 165, 169,
 176, 196
 4, 11 165, 168
 6 165, 176
 10 177, 197
 11 177, 197
 12 177, 196, 197
 13 164, 175, 185, 193,
 195, 199, 494, 496, 592
 8 574
 8 : 4 164, 169, 170, 175,
 176, 177, 183, 184,
 193, 196, 197, 526
 21 456
 9 : 1 171, 197
 6 457
 7 171, 197
 18 166, 175, 182
 18, 19 184, 199, 456
 18~27 161, 164, 170,
 175, 183, 185, **193**,
 195, 593
 21~27 593
 26 366
 27 158, 184, 198, 468,
520
 10 448, 470
 10 : 1~5 161, 170, 183

聖句索引

I 旧約聖書(付外典)

創世記

- 8, 16, 55, 92, 96, 205, **254**,
257, 259, 297
1 295, 298, 448
1~11 201, 258
1: 1, 2, 3 163, 174
1~2:4 159, 185, 194,
295
1~31 298
6~30 319
24~31 186, 191, 192
26, 27 159, 162, 180,
184, 189, **191**, 192,
201
27 185, 189, 191, 192,
201, 294, 295
2 190, 295, 297
2~6 494, 529
2: 1~ 4 298
4~15 163, 174, **189**
7 159, 160, 162, 185,
186, 189, 191, 192,
195, 196, 201, 294,
295, 296, 298, 526
7, 18~22 184, 189,
191, 192, 294, 296
7~24 168, **192**, 193,
294
8 183, 186, 191, 192,
193, 366
8~15 159, 171, 192
16, 17 159, 162, 162,
163, 167, 172, 173,
178, 190
17 196, 294, 295, 296,
573
18 191
18~23 **191**
18~25 297
21 189, 191, 295
22 189, **191**, 192, 295,
526
23 163, 172, **191**, 192
25 185, 191, 192
3 190, 295, 297, 456, 749
3: 1~5 180
1~6, 13, 20 174, 190
1~13, 17, 23 182, 192
1~6 162, 171, 190
1~7 173, 190
1~13 159, 163, 171,
172, 190
1, 2, 3 162, 173, 190,
4~7 527
4~7, 13, 23 167, 178,
190, 196
6 180, **190**, 192, 294, 295
7 160, 163, 172, 192,
195
13 294, 295, 527
16 173, 198, 541, 565,
573
16~19 160, 194
17, 18, 19, 23 162, **194**
17, 19 167, 171
17 171, 172, 179, 190,
194
19 170, 171, 179, **194**,
528
20 186, 189, 190, 191,
192, 195, 196, 294,
296, 526
22 168, 198
23 167, 171, 172, 179,
181, 186, 189, 190,
192, 195, 196, 294,
295, 527, 528
24 171, 190, 367
4 444, **473~475**
4~9 193
4~10 170
4: 1 165, 176, 185, 186,
198
1, 2 174, 186, 189, 191,
192, 199
1~5 527, 592
1~8, 13, 14 165, 173,
195
1~8~19 195, 196
1~11, 12 167, 267,
195, 294, 296
8 165, 169, 174, 176,

凡 例

- 1 「聖句索引」項目数1318（旧約392，新約926）。研究者の便宜を計るため「共観福音書」「四福音書」の聖句を加えた。
- 2 次の項目は「事項索引」（項目数1673）を参照されたい。聖書，旧約聖書，新約聖書，共観福音書，四福音書，パウロ書簡，ヨハネ文書。
- 3 「人名索引」579名（聖書人物88，外国人名216，日本人名275）。
- 4 『 』書籍，雑誌，新聞，「 」作品名，〈 〉特殊用語，ゴチック体，数字は重要箇所。

聖句索引

人名索引

事項索引

著者 増子 正一（ましこ まさかず）
1934年（昭和9年），東京渋谷に生まれる。
現在，東京都立三鷹高等学校教諭。
現住所 東京都調布市小島町2-12-9。
所属学会 日本基督教学会，日本キリスト
教文学会，日本地学教育学会。

有島武郎研究

©1994

1994年8月5日 第1版第1刷発行

著者 増子 正一
発行者 森 岡 巖
印刷所 東京河北印刷株式会社

発行所 株式会社 新 教 出 版 社

東京都新宿区新小川町9の1
振替00180-1-9991 電話03-3260-6148

ISBN 4-400-61470-0（日キ販）